

是は彼の導引によりて遇る 是は彼の命するところを盡く世界の表面に爲んがためなり 二  
 まふは或は懲罰のためあるひはその地のため 或は恩恵のためなり 一  
 工作を考がへよ 神いかに是等に命を傳へその雲の光明をして輝やかさせたまふか 汝これを知るや 二  
 雲の平衡知識の全たき者の奇妙き工作を知るや 南風によりて地の穩かになる時なんちの衣服は熱くなるなり 一  
 なんち彼とともに彼の堅くして歸たる鏡のごとくなる蒼穹を張ることを能せんや 二  
 事を我らに教へよ 我らは暗昧して言詞を列ぬること能はざるなり 一  
 われ語ることありと彼に告ぐべけんや 人  
 あに滅ぼさるゝことを望まんや 人いまは雲帯にて輝やく光明を見ることが能はず 然れど風きたりて之を  
 吹清む 北より黄金いできたる 神には畏るべき威光あり 全能者はわれら測りきはむることを得ず 彼は能  
 おほいなる者にいまし審判をも公義をも枉たまはざるなり 二  
 この故に人々かれを畏る 彼はみづから心に有智  
 とする者をかへりみたまはざるなり 一

第三十八章

茲にエホバ大風の中よりヨブに答へて宜まはく 無知の言詞をもて道を暗からしむる此者は誰  
 ぞや 二  
 なんち腰ひきからけて丈夫のごとくせよ 我なんちに問ん 汝われに答へよ 一  
 地の基を我  
 が置たりし時なんちは何處にありしや 汝もし頼信あらば言へ 二  
 なんち若知んには誰が度量を定めたりしや 誰  
 が準繩を地の上に張りたりしや 一  
 その基は何の上に奠れたりしや 二  
 その隅石は誰が置たりしや 一  
 かの時には  
 晨星あひともに歌ひ 神の子等みな歡びて呼はりぬ 二  
 海の水ながれ出て 胎内より滂いでし時誰が戸をもて  
 之を閉こめたりしや 一  
 かの時我雲をもて之が衣服となし 黒暗をもてこれが襪線となし 二  
 これに我法度を  
 定め關および門を設けて 二  
 曰く此までは来るべし 此を越べからず 汝の高浪こゝに止まるべしと 一  
 なん  
 ち生れし日より以來朝にむかひて命を下せし事ありや 二  
 また黎明にその所を知しめ 一  
 これをして地の縁を取へ  
 て悪き者をその上より振落さしめたりしや 一  
 地は變りて土に印したることくに成り 諸の物は美はしき衣服の

ごとくに顯る 二  
 また悪人はその光明を奪はれ 高く擧たる手は折らる 一  
 なんち海の泉源にいたりしこと  
 ありや 淵の底を歩みしことありや 二  
 死の門なんちのために開けたりしや 汝死蔭の門を見たりしや 一  
 なんち  
 地の廣を看きはめしや 若これを盡く知ば言へ 二  
 光明の在る所に往く路は孰ぞや 黒暗の在る處は何處ぞや 一  
 なんち之をその境に導びき得るや 二  
 その家の路を知るや 一  
 なんち之を知らん 汝はかの時すでに生れをり  
 また汝の經たる日の數も多ければなり 二  
 なんち雪の庫にいりしや 雹の庫を見しや 一  
 これ我が艱難の時の  
 ために善はへ 戰爭および闘争の日のために善はへ 置くものなり 二  
 光明の發散る道 東風の地に吹わたる所の路  
 は何處ぞや 一  
 誰が大雨を流く水路を開き 雷聲の光の過る道を開き 二  
 人なき地にも人なき荒野にも雨を  
 降し 荒かつ廢れたる處々を潤はし かつ若菜蔬を生出しむるや 二  
 雨に父ありや 露の珠は誰が生る者なるや 一  
 氷は誰が胎より出るや 二  
 空の霜は誰が産む ところなるや 一  
 水かたまりて石のごとくに成り 淵の面こぼ  
 る 二  
 なんち罪宿の鍵束を結びうるや 參宿の繫繩を解うるや 一  
 なんち十二宮をその時にしたがひて引  
 いだし得るや 二  
 また北斗とその子星を導びき得るや 一  
 なんち天の常經を知るや 天をして其權力を地に施さし  
 むるや 二  
 なんち聲を雲に擧げ 滂沛の水をして汝を掩はしむるを得るや 一  
 なんち閃電を遣はして往しめ  
 なんちに答へて我儕は此にありと言しめ得るや 二  
 胸の中の智慧は誰が與へし者ぞ 二  
 心の内の聰明は誰が授けし  
 者ぞ 一  
 たれか能く智慧をもて雲を數へんや 二  
 たれか能く天の瓶を傾むけ 一  
 塵をして一塊に流れあはしめ 土塊  
 をしてあひかたまらしめんや 二  
 なんち牝獅子のために食物を獵や 一  
 また小獅子の食氣を滿すや 二  
 その洞穴  
 に伏し森の中に隠れ何がふ時 二  
 なんちこの事を爲うるや 一  
 また鴉の子神にむかひて呼はり食物なくして徘徊る  
 時 鴉に餌を與ふる者は誰ぞや 一

第三十九章

なんち岩間の山羊が子を産む時をしるや 二  
 また鹿の産に臨むを見しや 一  
 なんち是等の在胎の  
 月を數へうるや 二  
 また是等が産む時を知るや 一  
 これらは身を鞠めて子を産みその痛苦を出す







非ずや。何人も之を激する勇氣あるなし。然ば誰かわが前に立うる者あらんや。誰か先に我に與へしところありて我をして之に酬いしめんとする者あらん。普天の下にある者はことごとく我有なり。我また彼者の肢體とその著るしき力とその美はしき身の構造とを言では指し。誰かその外甲を剝ん。誰かその雙蹄の間に入ん。誰かその面の戸を開きえんや。その周囲の齒は長るべし。その並列る鱗甲は之が誇るところ。その相闘たる様は堅く封じたるがごとく。此と彼とあひ接きて風もその中間に在るべからず。一々あひ連なり堅く膠て離すことを得ず。噓すれば即ち光發す。その目は曙光の眼瞼(を開く)に似たり。その口よりは炬火いで火花發し。その鼻の孔よりは煙いできたりて。宛然蓋を焚く蓋のごとし。その氣息は炭火を蒸し。火鏡その口より出づ。氣力その頸に宿る。懼る者その前に彷彿まよふ。その肉の片は密に相連なり。堅く身に著て動かす可らず。その心の堅硬こと石のごとく。その堅硬こと下磨のごとし。その身を興す時は勇士も戦慄き。恐怖によりて狼狽まどふ。劍をもて之を擊とも利す。鎗も矢も漁叉も用ふるころ無し。是は鐵を見ること稿のごとくし。鋼を見ること朽木のごとくす。弓箭もこれを逃しむること能はず。投石機(の石も)稿屑と見做る。棒も是に稿屑と見ゆ。鎗の閃めくを是は笑ふ。その下腹には瓦礫の碎片を連ね。泥の上に麥打車を引く。淵をして淵のごとく沸かへらしめ。海をして香油の釜のごとくならしめ。己が後に光る道を遣せば。淵は白髪をいたゞけるかと疑がはる。地の上には是と並ぶ者なし。是は恐怖なき身に造られたり。是は一切の高大なる者を輕視す。誠に諸の誇り高ぶる者の王たるなり。

第四章

ヨブ是に於てエホバに答へて曰く。我知る汝は一切の事をなすを得たまふ。また如何なる意志知ざる測り難き事を述たり。請ふ聽たまへ。我言ふところあらん。我なんちに問まつらん。我に答へたまへ。われ汝の事を耳にて聞わたりしが。今は目をもて汝を見たてまつる。是をもて我みづから恨み。塵灰の中に悔ゆ。

エホバ是等の言語をヨブに語りたまひて後。エホバ、テマン人エリバズに言たまひけるは。我なんちと汝の二人の友を怒る。其はなんちらが我に關て言述べたるところは。わが僕ヨブの言たることごとく正當からざればなり。然ば汝ら牡牛七頭。牡羊七頭を取てわが僕ヨブに至り。汝らの身のために燔祭を獻げよ。わが僕ヨブなんちらのために祈らん。われかれを嘉納べければ。之によりて汝らの愚を罰せざらん。汝らの我について言述べたるところは。我僕ヨブの言たることごとく正當からざればなり。是においてテマン人エリバズ、シユヒヒルダデ、ナアマ人ゾバル往てエホバの自己に宣まひしごとく爲ければ。エホバすなはちヨブを嘉納たまへり。

ヨブその友のために祈れる時。エホバ、ヨブの艱難をときて舊に復し。しかしてエホバつひにヨブの所有物を二倍に増たまへり。是において彼の諸の兄弟諸の姉妹およびその舊相識る者等ことごとく來りて彼とともにその家にて飲食を爲し。かつエホバの彼に降したまひし一切の災難につきて彼をいたはり慰さめ。また各金一ケセタと金の環一箇を之に贈れり。エホバかくのごとくヨブをめぐみて。その終を初よりも善したまへり。即ち彼は綿羊一萬四千匹。駱駝六千匹。牛一千頭。牡驢馬一千匹を有り。また男子七人。女子三人ありき。かれその第一の女をエミマと名け。第二をケジアと名け。第三をケレンハツプクと名けたり。全國の中にてヨブの女子等ほど美しき婦人は見えざりき。その父之にその兄弟等とおなじく産業をあたへたり。この後ヨブは百四十年いきながら。へてその子その孫と四代までを見たり。かくヨブは年老い日滿て死たりき。

ヨブ 記 をはり



詩八〇

第一篇

一 悪きものの謀略にあゆまず つみびとの途にたゞす 嘲るものの座にすわらぬ者はさいはひなり  
 二 かゝる人はエホバの法をよるこびて日も夜もこれをおもふ 三 かゝる人は水流のほとりにうゑし  
 樹の期にいたりて實をむすび 葉もまた凋まざるごとく その作ところ皆さかえん 四 あしき人はしからず 風の  
 ふきさる糞のごとし 然ばあしきものは審判にたへず 罪人は義きものの會にたつことを得ざるなり 五 そは  
 エホバはたゞしきもの途をしりたまふ されど悪きもの途はほろびん

第二篇

一 何なればもろもろの國人はさわざたし 諸民はむなしきことを謀るや 二 地のもろもろの王はたち  
 かまへ群伯はともに譲り エホバとその受膏者とにさからひていふ 三 われらその械をこぼち その  
 繩をすてんと 四 天に坐するもの笑ひたまはん 主かれらを嘲りたまふべし 五 かくて主は忿怒をもてのいひ  
 大なる怒をもてかれらを怖まどはしめて宣給ふ 六 しかれども我わが王をわがきよきシオンの山にたてたりと  
 われ詔命をのべん エホバわれに直まへり なんちはわが子なり 今日われなんちを生り 七 われに求めよ さらば  
 汝にもろもろの國を嗣業としてあたへ地の極をなんちの有としてあたへん 八 汝くろがねの杖をもて 彼等をうち  
 やぶり 陶工のうつはものごとくに打碎かん 九 されば汝等もろもろの王よ さとかれ地の審士職をしへ  
 をうけよ 十 長をもてエホバにつかへ 戦慄をもてよろこべ 十一 子にくちつけよ おそらくはかれ怒をはなち  
 なんちら途にほろびん その忿怒はすみやかに燃べければなり すべてかれに依頼むものは隔ひなり

第三篇

一 エホバよ我にあたる者のいかに蔓延れるや 我にさからひて起りたつもの多し 二 わが靈魂を  
 あげつらひて かれは神にすくはるゝことなしといふ者ぞおほき 三 されどエホバよ なんちは我をかこめる

第四篇

一 わが首をもたげ給ふものなり 二 われ聲をあげて エホバによばれば その聖山より 我にこたへたま  
 盾わが榮 三 わが首をもたげ給ふものなり 四 われ聲をあげて エホバによばれば その聖山より 我にこたへたま  
 千萬の人をも我はおそれし 五 エホバよねがはくは起たまへ わが神よわれを救ひたまへ なんち曩にわがすべて  
 の仇の頬骨をうち 悪きもの齒をりたまへり 六 救はエホバにあり ねがはくは恩恵なんちの民のうへに在ん  
 ことをセ

第五篇

一 エホバよねがはくは我がことばに耳をかたむけ わが思にみこゝろを注たまへ 二 わが王よわが  
 神よ わが號呼のこゑをきゝたまへ われ汝にいのればなり 三 エホバよ朝になんちわが聲をきゝたまはん 我あ  
 したになんちの爲にそなへして俟望むべし 四 なんちは悪きことをよろこびたまふ神にあらず 悪人はなんちの  
 賓客たるを得ざるなり 五 たかぶる者はなんちの目前にたつをえず なんちはすべて邪曲をおこなふものを憎み  
 第六篇 一 エホバよねがはくは我がことばに耳をかたむけ わが思にみこゝろを注たまへ 二 わが王よわが  
 神よ わが號呼のこゑをきゝたまへ われ汝にいのればなり 三 エホバよ朝になんちわが聲をきゝたまはん 我あ  
 したになんちの爲にそなへして俟望むべし 四 なんちは悪きことをよろこびたまふ神にあらず 悪人はなんちの  
 賓客たるを得ざるなり 五 たかぶる者はなんちの目前にたつをえず なんちはすべて邪曲をおこなふものを憎み

第六篇

一 エホバよねがはくは我がことばに耳をかたむけ わが思にみこゝろを注たまへ 二 わが王よわが  
 神よ わが號呼のこゑをきゝたまへ われ汝にいのればなり 三 エホバよ朝になんちわが聲をきゝたまはん 我あ  
 したになんちの爲にそなへして俟望むべし 四 なんちは悪きことをよろこびたまふ神にあらず 悪人はなんちの  
 賓客たるを得ざるなり 五 たかぶる者はなんちの目前にたつをえず なんちはすべて邪曲をおこなふものを憎み







八七 へり すべて羊うしまた野の獸 八 その鳥うみの魚もろもろの海路をかよふものをまで皆しかなせり  
九 われらの主エホバよなんちの名は地にあまねくして尊きかな

第九篇

一 われ心をつくしてエホバに感謝しそのもろもろの奇しき事跡をのべつたへん 二 われ汝により  
三 てたのしみ且よろこばん 四 至上者よなんちの名をほめうたはん 五 わが仇しりぞくとどき 六 踏きたふれて御前にほろ  
七 ぶ 八 なんぢわが義とわが訟とをまもりたまへばなりなんぢはたゞしき審判をしつゝ 九 寶座にすわりたまへり  
一〇 またもろもろの國をせめ惡きものをほろぼし 一一 世々かぎりなくがれらが名をけしたまへり 一二 仇はたえはて  
一三 世々あれすたり 汝のくつがへしたまへるもろもろの邑はうせてその跡だにもなし 一四 エホバはとこしへに  
一五 聖位にすわりたまふ 審判のためにその寶座をまうけたまひたり 一六 エホバは公義をもて世をさばき直をもて  
一七 ろもろの民に審判をおこなひたまはん 一八 エホバは虐げらるゝもの城また難みのときの城なり 一九 聖名をしる  
二〇 ものはなんちに依頼んそはエホバよなんちを尋るもの 二一 棄られしこと 断てなければなり 二二 シオンに住たまふ  
二三 エホバに對ひてほめうたへ 二四 その事跡をもろもろの國のなかたのべつたへよ 二五 血を問亂したまふものは苦しむ  
二六 ものを心にとめてその號呼をわすれたまはず 二七 エホバよ我をあはれみたまへ われを死の門よりすくひいだし  
二八 たまへる者よ ねがはくは仇人のわれを難むるを視たまへ 二九 さらに我なんちのすべての頌美をのぶるを得また  
三〇 シオンのむすめの門にてなんちの救をよるこばん 三一 もろもろの國民はおのがつくれる阱におちいり 二  
三二 しかうけたる網におのが足をとらへらる 三三 エホバは己をしらしめ審判をおこなひたまへり 三四 あしき人はおのが  
三五 手のわざなる網にかゝれり 三六 ヒガイオン セラ 三七 あしき人は陰府にかへるべし 神をわするゝもろもろの國民も  
三八 またしからん 三九 貧者はつねに忘らるゝにあらす 苦しむもの望はとこしへに滅ぶるにあらす 四〇 エホバよ  
四一 たまへねがはくは勝を人にえしめたまふな 四二 御前にてもろもろのくにびとに審判をうけしめたまへ 四三 エホバよ

四四 願くはかれらに懼をおこさしめたまへ 四五 もろもろの國民に おのれたゞ人なることを知しめたまへ 四六  
四七 第一〇篇 四八 あゝエホバよ何ぞはるかに立たまふや 四九 なんぞ患難のときに匿れたまふや 五〇 あしき人はたかぶ  
五一 りて苦しむものを甚だしくせむ 五二 かれらをそのくはだての謀略にとらはれしめたまへ 五三 あしきひ  
五四 とは己がこゝろの欲望をほこり 五五 食るものを祝してエホバをかるしむ 五六 あしき人はほこりかにいふ 神はさぐり  
五七 もとむることをせざるなりと 五八 凡てそのおもひに神なしとせり 五九 かれの途はつねに堅く 六〇 なんちの審判はその眼  
六一 よりはなれてたかし 六二 彼はそのもろもろの敵をくちさきらにて吹く 六三 かくて己がこゝろの中にいふ 我うごかさ  
六四 るゝことなく 六五 世々われに禍害なかるべしと 六六 その口にはのろひと虚偽としへたげとみち 六七 その舌のしたには  
六八 殘害とよこしまとあり 六九 かれは村里のかくれたる處にをり 七〇 隠やかなるところにて罪なきものをころす 七一  
七二 眼はひそかに倚仗なきものをうかうひ 七三 窟にをる獅のごとく 七四 潜みまぢ 七五 苦しむものをとらへん 七六 ために伏ねらひ  
七七 負しきものをその網にひきいれてとらふ 七八 また身をかいめて 七九 躍まる 八〇 その強勁によりて 八一 依仗なきものは仆る  
八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇  
一〇一 一〇二 一〇三 一〇四 一〇五 一〇六 一〇七 一〇八 一〇九 一一〇 一一一 一一二 一一三 一一四 一一五 一一六 一一七 一一八 一一九 一二〇  
一二一 一二二 一二三 一二四 一二五 一二六 一二七 一二八 一二九 一三〇 一三一 一三二 一三三 一三四 一三五 一三六 一三七 一三八 一三九 一四〇  
一四一 一四二 一四三 一四四 一四五 一四六 一四七 一四八 一四九 一五〇 一五一 一五二 一五三 一五四 一五五 一五六 一五七 一五八 一五九 一六〇  
一六一 一六二 一六三 一六四 一六五 一六六 一六七 一六八 一六九 一七〇 一七一 一七二 一七三 一七四 一七五 一七六 一七七 一七八 一七九 一八〇  
一八一 一八二 一八三 一八四 一八五 一八六 一八七 一八八 一八九 一九〇 一九一 一九二 一九三 一九四 一九五 一九六 一九七 一九八 一九九 二〇〇

願くはかれらに懼をおこさしめたまへ 二 もろもろの國民に おのれたゞ人なることを知しめたまへ 三  
四 第一〇篇 五 あゝエホバよ何ぞはるかに立たまふや 六 なんぞ患難のときに匿れたまふや 七 あしき人はたかぶ  
八 りて苦しむものを甚だしくせむ 九 かれらをそのくはだての謀略にとらはれしめたまへ 一〇 あしきひ  
一一 とは己がこゝろの欲望をほこり 一二 食るものを祝してエホバをかるしむ 一三 あしき人はほこりかにいふ 神はさぐり  
一四 もとむることをせざるなりと 一五 凡てそのおもひに神なしとせり 一六 かれの途はつねに堅く 一七 なんちの審判はその眼  
一八 よりはなれてたかし 一九 彼はそのもろもろの敵をくちさきらにて吹く 二〇 かくて己がこゝろの中にいふ 我うごかさ  
二一 るゝことなく 二二 世々われに禍害なかるべしと 二三 その口にはのろひと虚偽としへたげとみち 二四 その舌のしたには  
二五 殘害とよこしまとあり 二六 かれは村里のかくれたる處にをり 二七 隠やかなるところにて罪なきものをころす 二八  
二九 眼はひそかに倚仗なきものをうかうひ 三〇 窟にをる獅のごとく 三一 潜みまぢ 三二 苦しむものをとらへん 三三 ために伏ねらひ  
三四 負しきものをその網にひきいれてとらふ 三五 また身をかいめて 三六 躍まる 三七 その強勁によりて 三八 依仗なきものは仆る  
三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇  
六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇  
八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇  
一〇一 一〇二 一〇三 一〇四 一〇五 一〇六 一〇七 一〇八 一〇九 一一〇 一一一 一一二 一一三 一一四 一一五 一一六 一一七 一一八 一一九 一二〇  
一二一 一二二 一二三 一二四 一二五 一二六 一二七 一二八 一二九 一三〇 一三一 一三二 一三三 一三四 一三五 一三六 一三七 一三八 一三九 一四〇  
一四一 一四二 一四三 一四四 一四五 一四六 一四七 一四八 一四九 一五〇 一五一 一五二 一五三 一五四 一五五 一五六 一五七 一五八 一五九 一六〇  
一六一 一六二 一六三 一六四 一六五 一六六 一六七 一六八 一六九 一七〇 一七一 一七二 一七三 一七四 一七五 一七六 一七七 一七八 一七九 一八〇  
一八一 一八二 一八三 一八四 一八五 一八六 一八七 一八八 一八九 一九〇 一九一 一九二 一九三 一九四 一九五 一九六 一九七 一九八 一九九 二〇〇



第一一篇

うたのかみに酬はしめたるダビデのうた  
 われエホバに依頼めりなんちら何ぞわが靈魂にむかひて鳥のごとくなんちの山にのがれよといふや 視よあしきものは暗處にかくれ心なほきものを射んとて弓をはり絃に矢をつがふ 基みやぶれたらんには義者なにをなさんや エホバはその聖宮にいます エホバの寶座は天にありその目はひとのこを鑿その眼瞼はかれらをこゝろみたまふ エホバは義者をこゝろむそのみこゝろは悪きものと強暴をこのむ者とをにくみ 網をあしきものうへに降したまはん 火と硫黄ともゆる風とはかれらの酒杯にうくべきものなり エホバはたゞしき者にして義きことを愛したまへばなり 直きものはその聖顔をあふぎみん

第二一篇

八番にあはせて伶長にうたはしめたるダビデのうた  
 あゝエホバよ助けたまへそは神をうやまふ人はたえ誠あるものは人の子のなかより消失るなり人はみな虚偽をもてその隣とあひかたり滑かなるくちびると一心とをもてものいふ エホバはすべての滑かなるくちびると大なる言をかたる舌とをほろぼし給はん かれらはいふわれら舌をもて勝をえんこの口唇はわがものなり誰かわれらに主たらんやと エホバのたまはく苦しむもの掠められ貧しきもの歎くがゆゑに我いま起てこれをその慕ひもとむる平安におかん エホバの言はきよきことばなり地にまうけたる爐にてねり七次きよめたる白銀のごとし エホバよ汝はかれらをまもり之をたすけてとこしへにこの類より免れしめたまはん 人の子のなかに穢しきことの崇めらるゝときは悪者をゝやかしこにあるくなり

第三一篇

伶長にうたはしめたるダビデのうた  
 あゝエホバよかくて幾何時をへたまふや 汝とこしへに我をわすれたまふや 聖顔をかくしていくそのときを歴たまふや われ心のうちに終日かなしみをいだき 雲書をたましひに用ひて幾何時をふべきかわが仇はわがうへに崇められて幾何時をふべきか わが神エホバよ我をかへりみて答をなしたまへわが目

をあきらかにしたまへ 恐らくはわれ死の睡につかん おそらくはわが仇いはん 我かれに勝りとおそらくはわが敵わがうごかざるゝによりて喜ばん されど我はなんちの憐憫によりたのみ わが心はなんちの救によりてよろこばん エホバはゆたかに我をあしらひたまひたれば われエホバに對ひてうたはん

第四一篇

うたのかみに酬はしめたるダビデのうた  
 愚なるものは心のうちに神なしといへり かれらは腐れたり かれらは憎むべき事をなせり 善をおこなふ者なし エホバ天より人の子をのぞみみて悟るもの神をたづぬる者ありやと見たまひしに みな逆きいでてことごとく腐れたり 善をなすものなし一人だになし 不義をおこなふ者はみな智覺なきかかれらは物くふごとくわが民をくらひまたエホバをよぶことをせざるなり 視よかゝる時かれらは大におそれたり 神はたゞしきものの類のなかに在せばなり なんぢらは苦しめるものの謀略をあなどり辱かしむされどエホバはその避所なり ねがはくはシオンよりイスラエルの救のいでんことを エホバその民のとははれたるを返し たまふときヤコブはよろこびイスラエルは樂まん

第五一篇

ダビデのうた  
 エホバよなんちの帷幄のうちにやどらん者はたれぞ なんちの聖山にすまはんものは誰ぞ 直くあゆみ義をおこなひそのこゝろに眞實をいふものぞその人なる かゝる人は舌をもてそしらすその友をそこなはずまたその隣をばしむる言をあげもちひす 惡にしづめるものを見ていとひかるしめ エホバをおそるゝものをたふとび誓ひしことはおのれに禍害となるも變ることなし 貨をかして過たる利をむさぼらす 賄賂をいれて無辜をそこなはざるなり 斯ることどもを行ふものは永遠にうごかざるゝことなるべし

第六一篇

ダビデがミクダムの歌  
 神よねがはくは我を護りたまへ 我なんちに依頼む われエホバにいへらくなんちはわが主



なりなんちのほかにわが福祉はなしと 地にある聖徒はわが極めてよろこぶ勝れしものなり エホバにかへて他神をとるもの悲哀はいやまさん 我かれらがさぐる血の御酒をそがすその名を口にとふることをせじ エホバはわが嗣業またわが酒杯にうくべき有なりなんちはわが所領をまもりたまはん 準備はわがために樂しき地におちたり 宜われよき嗣業をえたるかな われは訓諭をさづけたまふエホバをほめまつらん 夜はわが心われをしふ われ常にエホバをわが前におけり エホバわが右にいませばわれ動かさるることなかるべし このゆゑにわが心はたのしみわが榮はよろこぶわが身もまた平安にをらん そは汝わがたましひを陰府にすておきたまはずなんちの聖者を墓のなかに朽しめたまはざる可ければなり なんち生命の道をわれに示したまはんなんちの前には充足るよろこびありなんちの右にはもろもろの快樂とこしへにあり

第一七篇

ダビデの新詩

あゝエホバよ公義をきゝたまへ わが哭聲にみこころをとめたまへ いつはりなき口唇よりいづる我がいのりに耳をかたぶけたまへ ねがはくはわが宣告みまへよりいでてなんちの目公平をみたまはんことを なんちわが心をこゝろみ また夜われにのぞみたまへり 斯てわれを糺したまへど我になにの惡念あるをも見出たまはざりき わが口はつみを犯すことなからん 人の行爲のことをいはゞ我なんちのくちびるの言によりて暴るもの途をさけたり わが歩はかたくなんちの途にたち わが足はよろめくことなかりき 神よなんち我にこたへたまふ我なんちをよべり ねがはくは汝の耳をかたぶけてわが陳るところをきゝたまへ なんちに依頼むものを右手をもて仇するものより救ひたまふ者よ ねがはくはなんちの妙なる仁 慈をあらはしたまへ 願くはわれを腫のごとくにまもり 汝のつばさの蔭にかくし 我をなやむるあしき者また我をかこみてわが命をそこなはんとする仇よりのがれしめ給へ かれらはおのが心をよさぎ その口をもて詩かにものいへり いづこにまれ往ところにてわれらを打圍み われらを地にたふさんと目をとむ かれは抓裂んといらだつ

獅のごとく隠やかなるところに潜みまつ壯獅のごとし エホバよ起たまへ ねがはくはかれに立對ひてこれをたふし御剣をもて惡きものよりわが靈魂をすくひたまへ エホバよ手をもて人より我をたすけいだしたまへ おのがうくべき有をこの世にてうけ 汝のたからにてその腹をみたさるゝ世人より我をたすけいだし給へ かれらはおほくの子にあきたりその富ををさなごに遺す されどわれは義にありて聖顔のみ目さむるとき容光をもて飽足ることをえん

第一八篇

俗長にうたはしめたるエホバの僕ダビデの歌、このうたの詞はもろもろの仇およびサウルの手より

エホバわれの力よ われ切になんちを愛しむ エホバはわが城 われをすくふ者 わがよりのむ神わが堅固なるいはほ わが盾 わがすくひの角 わがたかき構なり われ讚稱ふべきエホバをよびて仇人よりすくはるゝことをえん 死のつな我をめぐり惡のみなざる流われをおそれしめたり 陰間のなは我をかこみ死のわな我にたちむかへり われ窮苦のうちにありてエホバをよび 又わが神にさけびたり エホバはその宮よりわが聲をきゝたまふ その前にてわがよびし聲はその耳にいれり このときエホバ怒りたまひたれば地はふるひうごき山の基はゆるぎうごきたり 烟その鼻よりたち火その口よりいでてやきつくし炭はこれがために燃あがり 埃は天をたれて臨りたまふ その足の下はくらきこと甚だし かくてケルブに乗りてとび風のつばさにて翔り 闇をおほひとなし水のくらきとそらの密雲とをそのまはりの幕となしたまへり しみまへの光輝よりくろくもをへて 燭ともえたる炭とふりきたれり エホバは天に雷鳴をとどろかせたまへり 至上者のこゑいでて 燭ともえたる炭とふりきたり エホバ矢をとばせてかれらを打ちらし 數しげき電光をはなちてかれらをうち敗りたまへり エホバよ斯るときになんちの叱咤となんちの鼻のいぶきとによりて水の底みえ地の基あらはれいでたり エホバはたかきより手をのべ我をとりて大水よりひきあげ わがつよき仇と



一八 われを憎むものより我をたすけいだしたまへり かれらは我にまさりて最強かりき 一八 かれらはわが災害の日  
 一九 にせまりきたれり 然どエホバはわが支柱となりたまひき 一九 エホバはわれを悦びたまふがゆゑにわれをたづさ  
 二〇 へ廣處にいでして助けたまへり 二〇 エホバはわが正義にしたがひて恩賜をたまひわが手のきよきにしがひて  
 二一 報賞をたれたまへり 二一 われエホバの道をまもり悪をなしてわが神よりはなれしことなければなり 二一 そのすべ  
 二二 ての審判はわがまへにありて われその律法をすてしことなければなり 二二 われ神にむかひて缺るところなく己  
 二三 をまもりて不義をはなれたり 二三 この故にエホバはわがたゞしきと その目前にわが手のきよきとにしたがひて  
 二四 我にむくいをなし給へり 二四 なんぢ憐憫あるものには憐みあるものとなり完全ものには全きものとなり 二五 きよ  
 二五 きものには潔きものとなり僻むものにはひがむ者となりたまふ 二五 そは汝くるしめる民をすくひたまへど高ぶる  
 二六 目をひくゝしたまふ可ければなり 二六 なんぢわが燈火をともし給ふべければなり わが神エホバわが暗をてらした  
 二七 まはん 二七 我なんぢによりて軍の中をばせとほり わが神によりて垣ををどりこゆ 二七 神はしもその途またくエ  
 二八 ホバの言はきよし エホバはすべて依頼むもの盾なり 二八 そはエホバのほかに神はたれぞや われらの神のほか  
 二九 に巖はたれぞや 二九 神はちからをわれに帯しめ わが途を全きものとなしたまふ 二九 神はわが足を鷹のあしの  
 三〇 ごとくし我をわが高處にたゝせたまふ 三〇 神はわが手をたゝかひにならはせてわが臂に鋼弓をひくことを得し  
 三一 めたまふ 三一 又なんぢの救の盾をわれにあたへたまへり なんぢの右手われをさゝへなんぢの謙卑われを大なら  
 三二 しめたまへり 三二 なんぢわが歩むところを寛闊ならしめたまひたればわが足ふるはざりき 三二 われ仇をおひて  
 三三 これに追及かれらのほろぶるまでは歸ることをせし 三三 われかれらを撃てたつことを得ざらしめん かれらは  
 三四 わが足の下にたふるべし 三四 そはなんぢ戦争のために力をわれに帯しめ われにさからひておこりたつ者をわが  
 三五 下にかゞませたまひたればなり 三五 我にくむ者をわが滅しえんがために汝またわが仇の背をわれにむけしめ  
 三六 給へり 三六 かれら叫びたれども救ふものなく エホバに對ひてさげびたれども答へたまはざりき 三六 我かれらを

一 風のまへの塵のごとくに揚散きちまたの泥のごとくに打棄たり 一 なんぢわれを民のあらそひより助けいだし  
 二 我をたててもろもろの國の長となしたまへり わがしらざる民われにつかへん 二 かれらわが事をきゝて立刻  
 三 われにしたがひ異邦人はきたりて佞りつかへん 三 ことくにびとは衰へてその城よりのまきいでん 四 エホバ  
 四 は活ていませり わが勢はほむべきかな わがすくひの神はあがむべきかな 四 わがために驢をむくい 異邦人を  
 五 われに服はせたまふはこの神なり 五 神はわれを仇よりすくひたまふ實になんぢは我にさからひて起りたつ者の  
 六 うへに我をあげあらぶる人より我をたすけいだし給ふ 六 この故にエホバよ われもろもろの國人のなかにて  
 七 なんぢに感謝しなんぢの名をほめうたはん 七 エホバはおほいなる救をその王にあたへ その受膏者ダビデと  
 八 その裔とに世々かぎりなく憐憫をたれたまふ 八  
 九 第一九篇 九 うたのかみに囀はしめたるダビデのうた  
 一〇 もろもろの天は神のえいくわをあらはし 穹蒼はその手のわざをしめす 一〇 この日ことばをか  
 一一 日につたへこのよ知識をか夜におくる 一一 語らずいはすその聲きこえざるに 一一 そのひびきは全地にあまなく  
 一二 そのことばは地のはてにまでおよぶ 神はかしこに帷帳を日のためにまうけたまへり 一二 日は新郎がいはひの殿  
 一三 をいづることく勇士がきそひはしるをよるこぶに似たり 一三 そのいでたつや天の涯よりしその運びゆくや天の  
 一四 はてにいたる物としてその和胸をかうぶらざるはなし 一四 エホバの法はまたたくして靈魂をいきかへらしめ  
 一五 エホバの證詞はかたくして愚なるものを智からしむ 一五 エホバの訓諭はなほくして心をよるこばしめ エホバの  
 一六 誠命はきよくして眼をあきらかならしむ 一六 エホバを惶みおそるゝ道はきよくして世々にたゆることなく エホ  
 一七 バのさばきは眞實にしてことごとく正し 一七 これを黄金にくらぶるもおほくの純精金にくらぶるも彌増りて  
 一八 したふべくこれを蜜にくらぶるも蜂のすの滴漉にくらぶるもいやまさりて甘し 一八 なんぢの僕はこれらにより  
 一九 て儆戒をうくこれらをまもらば大なる報賞あらん 一九 たれかおのれの過失をしりえんや ねがはくは我をかくれ



二 たる愆より解放ちたまへ 願くはなんぢの僕をひきとめて故意なる罪をかさしめずそれをわが主たらしめ  
 三 給ふなかれさればわれ玷なきものとなりて大なる愆をまぬかるゝをえん エホバわが贖主よわが  
 四 くの言わがこゝろの思念なんぢのまへに悦ばるゝことを得しめたまへ

第二〇篇

伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 ねがはくはエホバなやみの日になんぢにこたへヤコブのかみの名なんぢを高にあげ 聖所より  
 二 援助をなんぢにおくりシオンより能力をなんぢにあたへ 汝のもろもろの獻物をみこゝろにとめ なんぢの  
 三 燔祭をうけたまはんことを セラ ねがはくはなんぢがこゝろの願望をゆるしなんぢの謀略をことごとく遮し  
 四 めたまはんことを 我儕なんぢの救によりて歡びうたひわれらの神の名によりて旗をたてんねがはくはエホ  
 五 バ汝のもろもろの求をとげしめたまはんことを われ今エホバその受膏者をすくひたまふを知る エホバその  
 六 きよき天より右手なるすくひの力にてかれに應へたまはん あるひは車をたのみあるひは馬をたのみとする  
 七 者ありされどわれらはわが神エホバの名をとなへん かれらは屈みまた仆る われらは起てかたくたてり  
 八 エホバよ王をすくひたまへ われらがよぶとき應へたまへ

第二一篇

伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 エホバよ王はなんぢの力によりてたのしみ汝のすくひによりて奈何におほいなる歡喜をなさん  
 二 なんぢ彼がこゝろの願望をゆるしそのくちびるの求をいなみ給はざりき セラ そはよきたまもの恵をも  
 三 てかれを迎へまじりなきこがねの冕弁をもてかれの首にいたしかせ給ひたり かれ生命をもとめしに汝これ  
 四 をあたへてその齡の日を世々かぎりなからしめ給へり なんぢの救によりてその榮光おほいなりなんぢは尊貴  
 五 と稜威とをかれに衣せたまふ そは之をとこしへに福ひなるものとなし聖顔のまへの歡喜をもて樂しませたま  
 六 へばなり 王はエホバに依頼みいとたかき者のいつくしみを蒙るがゆゑに動かさるゝことなからん なん

一 ぢの手はそのもろもろの仇をたづねいだし汝のみぎの手はおのれを憎むものを探ねいだすべし なんぢ怒る  
 二 ときは彼等をもゆるさることとせん エホバはけしき怒りによりてかれらを奪たまはん 汝はかれらを食つくさん  
 三 汝かれらの畜を地よりほろぼしかれらの種を人の子のなかよりほろぼさん かれらは汝にむかひて悪事を  
 四 くはだて遂がたき謀略をおもひまはせばなり 汝かれらをして背をむけしめその面にむかひて弓絃をひかん  
 五 エホバよ能力をあらはしてみづから高くしたまへ 我儕はなんぢの稜威をうたひ且ほめたゝへん

第二二篇

あけぼのの鹿の側にあはせて伶長にうたはしめたるダビデの歌

一 わが神わが神なんぞ我をすてたまふや 何なれば遠くはなれて我をすくはず わが歡喜のこゑを  
 二 き給はざるか 我わが神われをよばねども汝をへたまはず 我よばねどもわれを安をえず 然は  
 三 あれイスラエルの讚美のなかに住たまふものよ汝はきよし われらの列祖はなんぢに依頼めり かれら依頼み  
 四 たらばこれを助けたまへり かれら汝をよびて援をえ汝によりたのみて恥をおへることなかりき 然はあれ  
 五 どわれは強にして人にあらず世にそしられ民にいやしめらる すべてわれを見るものはわれをあさみわらひ  
 六 口唇をそらし首をふりていふ かれはエホバによりたのめりエホバ助くべし エホバかれを悦びたまふが故に  
 七 たすくべしと されど汝はわれを胎内よりいだし給へるものなりわが母のふところでありしとき既になんぢ  
 八 に依頼ましめたまへり 我うまれいでしより汝にゆだねられたり わが母われを生しときより汝はわが神なり  
 九 われに遠ざかりたまふなかれ 患難ちかづき又すくふものなればなり おほくの牡牛われをめぐりベシヤン  
 一〇 の力つよき牡牛われをかこめり かれらは口をあけて我にむかひ物をかきさき吼うたぐ獅のごとし われ水  
 一一 のごとくそよぎいだされわがもろもろの骨ははづれわが心は蠟のごとなりて腹のうちに溶たり わが力は  
 一二 かわきて陶器のくだけのごとくわが舌は鋸にひたつけりなんぢわれを死の塵にふさせたまへり そは犬われ  
 一三 をめぐり悪きもの群われをかこみてわが手およびわが足をさしつらぬけり わが骨はことごとく數ふるばかり



二八 になりぬ 悪きもの目をとめて我をみる 一八 かれらたがひにわが衣をわかち我がしたぎを鬮にす 一九 エホバよ  
 二九 遠くはなれ居たまふなかれわが力よねがはくは速きたりてわれを援けたまへ 二〇 わがたましひを剣より助けいだ  
 三〇 しわが生命を犬のたけいきほひより脱れしめたまへ 二一 われを獅の口また野牛のつより救ひいだしたまへ  
 三一 なんぢ我にこたへたまへり 二二 われなんぢの名をわが兄弟にのべつたへ なんぢを會のなかにて讃たへん  
 三二 エホバを懼るゝものよエホバをほめたへよヤコブのもろもろの裔よエホバをあがめよイスラエルのもろ  
 三三 もろのするよエホバを畏め 三四 エホバはなやむもの辛苦をかるしめ棄たまはずこれに聖顔をおほふことなく  
 三五 してその叫ぶときにきゝたまへばなり 三六 大なる會のなかにてわが汝をほめたふるは汝よりいづるなりわが  
 三六 誓ひしことはエホバをおそるゝ者のまへにてことごとく償はん 三七 謙遜者はくらひて飽ことをえエホバをた  
 三七 づねもとむるものはエホバをほめたへん 願くはなんぢらの心とこしへに生んことを 三九 地のはては皆おもひ  
 三八 いだしてエホバに歸りもろもろの國の族はみな前にふしをがむべし 三九 國はエホバのものなればなり エホバは  
 三九 もろもろの國人をすべをさめたまふ 四〇 地のこえたるものは皆くらひてエホバををがみ塵にくだるものと己が  
 四〇 たましひを存ふること能はざるものと皆そのみまへに拜跪かん 四一 たみの裔のうちエホバにつかふる者あらん  
 四一 主のことは代々にかたりつたへらるべし 四二 かれら來りて此はエホバの行爲なりとてその義を後にうまるゝ民に  
 四二 のべつたへん

第二三篇

ダビデのうた

一 エホバはわが牧者なりわれ乏しきことあらじ 二 エホバは我をみどりの野にふさせいこひの  
 水濱にとまひたまふ 三 エホバはわが靈魂をいかし名のゆゑをもて我をたゞしき路にみちびき給ふ 四 たとひ  
 われ死のかけの谷をあゆむとも禍害をおそれなんぢ我とともに在せばなりなんぢの苦なんぢの杖われを  
 慰む 五 なんぢわが仇のまへに我がために筵をまうけわが首にあぶらをそぎたまふわが酒杯はあふるゝなり

第二四篇

ダビデのうた

一 わが世にあらん限りはかならず恩恵と憐憫とわれにそひきたらん 我はとこしへにエホバの宮にすまん  
 二 地とそれに充るもの世界とその中にすむものとは皆エホバのものなり 三 エホバはそのもとむを  
 大海のうへに置これを大川のうへに定めたまへり 四 エホバの山ののぼるべきものは誰ぞ その聖所にたつべき  
 者はたれぞ 五 手きよく心いさぎよき者そのたましひ虚きことを仰ぎのぞます偽りの誓をせざるものぞその人  
 なる 六 かゝる人はエホバより福社をうけそのすくひの神より義をうけん 七 斯のごとき者は神をしたふもの  
 の族類なりヤコブの神よなんぢの聖顔をもとむる者なり 八 門よなんぢらの首をあげよとこしへの  
 戸よあがれ榮光の王いりたまはん 九 えいくわうの王はたれなるかちからをもちたまふ猛きエホバなり 一〇  
 にたけきエホバなり 一一 門よなんぢらの首をあげよとこしへの戸よあがれ榮光の王いりたまはん 一二 この榮光  
 の王はたれなるか 萬軍のエホバ是ぞえいくわうの王なる 一三

第二五篇

ダビデのうた

一 あゝエホバよわがたましひは汝をあふぎ望む 二 わが神よわれなんぢに依頼めりねがはくは  
 われに愧をおはしめたまふなかれわが仇のわれに勝誇ることなからしめたまへ 三 實になんぢを俟望むものは  
 はぢしめられず 故なくして信をうしなふものは愧をうけん 四 エホバよなんぢの大路をわれにしめしなんぢの  
 徑をわれにしへたまへ 五 我をなんぢの眞理にみちびき我をしへたまへ 汝はわがすくひの神なり われ終日  
 なんぢを俟望む 六 なんぢのあはれみと仁慈とはいにしへより絶すありエホバよこれを思ひいだしたまへ わ  
 がわかきときの罪とわが愆とはおもひいでたまふなかれ エホバよ汝のめぐみの故になんぢの仁慈にしたがひて  
 我をおもひいでたまへ 七 エホバはめぐみ深くして直くまませり 斯るがゆゑに道をつみびとにをしへ 八  
 だるものを正義にみちびきたまはん その道をへりくだる者にしめしたまはん 九 エホバのもろもろの道はその



けいやくと證詞とをまもるものには仁慈なり眞理なり 一  
 わが不義はおほいなり エホバよ名のために之をゆる  
 したまへ 二  
 エホバをおそるゝ者はたれなるか之にそのえらぶべき道をしめたまはん 三  
 かゝる人のたまし  
 ひは平安にすまひその裔はくにつぐべし 四  
 エホバの親愛はエホバをおそるゝ者とともにあり エホバはその  
 契約をかれらに示したまはん 五  
 わが目はつねにエホバにむかふ エホバわがあしを網よりとりいだしたまふ可  
 ればなり 六  
 ねがはくは歸りきたりて我をあはれみたまへ われ獨わびしくまた苦しみをるなり 七  
 願くはわが  
 心のうれへをゆるめ我をわざはひより脱かれしめたまへ 八  
 わが患難わが辛苦をかへりみ わがすべての罪を  
 ゆるしたまへ 九  
 わが仇をみたまへ かれらの數はおほし情なき憾をもてわれをにくめり 一〇  
 わがたましひを  
 まもり我をたすけたまへ われに愧をおはしめたまふなかれ 我なんちに依頼めばなり 一一  
 われなんちを俟望む  
 ねがはくは完全と正直とわれをまもれかし 一二  
 神よすべての愛よりイスラエルを顧ひいだしたまへ

第二六篇

ダビデの歌

エホバよねがはくはわれを鞠きたまへ われわが完全によりてあゆみたり 然のみならず我たゆた  
 はすエホバに依頼めり 二  
 エホバよわれを糺しました試みたまへ わが腎とこゝろとを鑑きよめたまへ 三  
 その波  
 のいつくしみわが眼前にあり 我はなんちの眞理によりてあゆめり 四  
 われは虚しき人とともに坐らざりき 惡を  
 いつはりかざる者とともににはゆかし 五  
 惡をなすものの會をにくみ惡者とともにすわることせじ 六  
 われ手を  
 あらひて罪なきをあらはす エホバよ斯てなんちの祭壇をめぐり 七  
 感謝のこゑを聞えしめ すべてなんちの奇し  
 き事をのべつたへん 八  
 エホバよ我なんちのまします家となんちが榮光のときまる處とをいつくしむ 九  
 願くは  
 わがたましひを罪人とともに わが生命を血をながす者とともに取收めたまふなかれ 一〇  
 かゝる人の手にはあし  
 きくはだてあり その右の手は賄賂にてみつ 一一  
 されどわれはわが完全によりてあゆまん 願くはわれをあがなひ  
 我をあはれみたまへ 一二  
 わがあしは平坦なるところにたつ われもろもろの會のなかにてエホバを讃まつらん

第二七篇

ダビデの歌

エホバはわが光わが救なり われ誰をかおそれん エホバはわが生命のちからなり わが懼るべき  
 ものはたれぞや 二  
 われの敵われの仇なるあしきもの襲ひきたりてわが肉をくらはんとせしが 願きかつ侍れたり  
 縦ひいくさびと聲をつらねて我をせむるともわが心おそれじたとひ戦ひおこりて我をせむるとも我になほ侍  
 あり 三  
 われ一事をエホバにこへり我これをもとむ われエホバの美しきを仰ぎその宮をみんがためにわが世に  
 あらん限りはエホバの家にすまんとこそ願ふなれ 四  
 エホバはなやみの日にその行宮のうちに我をひそませ  
 その幕屋のおくにわれをかくし 敵のうへに我をたく置たまふべければなり 五  
 今わが首はわれをめぐれる仇の  
 うへに高くあげらるべしこの故にわれエホバのまぐやにて歡喜のそなへものを獻ん われうたひてエホバをほめ  
 たへん 六  
 わが聲をあげてさけぶときエホバよきく給へ 七  
 また憐みてわれに應へたまへ 八  
 なんぢらわが  
 面をたづねもとめよと斯る聖言のありしとき 九  
 わが心なんちにむかひてエホバよ我なんちの聖顔をたづねんと  
 いへり 一〇  
 ねがはくは聖顔をかくしたまふなかれ 怒りてなんちの僕をとほざけたまふなかれ 汝はわれの助なり  
 噫わがすくひの神よ われをおひいだし我をすてたまふなかれ 一  
 わが父母われをすつるともエホバわれを迎へ  
 たまはん 二  
 エホバよなんちの途をわれにしへ わが仇のゆゑに我をたひらかなる途にみちびきたまへ 三  
 いつ  
 はりの證をなすもの暴厲を吐もの我にさからひて起りたり 願くはわれを仇にわたしてその心のまゝに爲しめ  
 たまふなかれ 四  
 われもしエホバの恩寵をいけるものの地にて見るの特なからましかば奈何ぞや 五  
 エホバを  
 俟望ぞめ雄々しかれ汝のこゝろを堅うせよ 必ずやエホバをまちのぞめ 六

第二八篇

ダビデの歌

あゝエホバよわれ汝をよばん わが磐よねがはくは我にむかひて暗暈となりたまふなかれ なんち  
 黙したまはくは恐らくはわれ墓にいるものとひとしからん 二  
 われ汝にむかひてさけび聖所の奥にむかひて手を



あぐるときわが懇求のこゑをきゝたまへ 〓 あしき人また邪曲をおこなふ者ととも我をとらへてひきゆき給ふ  
なかれかれらはその隣にやはらぎをかたれども心には殘害をいだけり 〓 その事にしたがひそのなす惡に  
したがひて彼等にあたへ 〓 その手の行爲にしたがひて與へこれにその受べきものを報いたまへ 〓 かれらは  
エホバのもろもろの事とその手のなしわざとをかへりみすこの故にエホバかれらを毀ちて建たまふことなから  
ん 〓 エホバは讃べきかなわが祈のこゑをきゝたまひたり 〓 エホバはわが力わが盾なりわがこゝろこれ  
に依頼みたれば我たすけをえたり 〓 然るゆゑにわが心いたくよろこぶ 〓 われ歌をもてほめまつらん 〓 エホバは  
その民のちからなり 〓 その受膏者のすくひの城なり 〓 なんちの民をすくひなんちの嗣業をさきはひ且これを  
やしなひ之をとこしなへに懷きたすけたまへ

第二九篇

ダビデの歌

なんちら神の子らよ エホバに獻げまつれ榮と能とをエホバにさゝげまつれ 〓 その名にふさは  
しき榮光をエホバにさゝげ奉れきよき衣をつけてエホバを拜みまつれ 〓 エホバのみこゑは水のうへに  
ありえいくわうの神は雷をとどろかせたまふ エホバは大水のうへにいませり 〓 エホバの聲はちからなり  
エホバのみこゑは後威あり 〓 エホバのみこゑは香柏ををりくだく エホバ、レバノンのかうはくを折くだき  
たまふ 〓 これを憤のごとくをどらせレバノンとシリオンとをわかき野牛のごとくをどらせたまふ 〓 エホバの  
みこゑは火焰をわかす 〓 エホバのみこゑは野をふるはせエホバはカデシの野をふるはせたまふ 〓 エホバの  
みこゑは鹿に子をうませまた林木をはだかにすその宮にあるすべてのもの呼はりて榮光なるかなといふ  
〓 エホバは洪水のうへに坐したまへり 〓 エホバは寶座にさして永遠に王なり 〓 エホバはその民にちからをあた  
へたまふ平安をもてその民をさきはひたまはん

第三〇篇

殿をさぐるときに詠へるダビデのうた

エホバよわれ汝をあがめん なんち我をおこしてわが仇のわがことによりて喜ぶをゆるし給は  
ざればなり 〓 わが神エホバよわれ汝によはれば汝われをいやしたまへり 〓 エホバよ汝わがたましひを陰府  
よりあげ我をながらへしめて墓にくだらせたまはざりき 〓 エホバの聖徒よ エホバをほめうたへ奉れきよき名  
に感謝せよ 〓 その怒はたゞしにしてその恵はいのちとともにながし夜はよもすがら泣かなしむとも朝には  
よろこびうたはん 〓 われ安けかりしときに謂くとしへに動かさるゝことなからんと 〓 エホバよなんち事  
をもてわが山をかたく立たせたまひき 〓 然はあれどなんち面をかくしたまひたれば我おちまどひたり 〓 エホバよ  
われ汝によははれり 〓 我ひたすらエホバにねがへり 〓 われ墓にくだらばわが血なにの益あらん 〓 塵はなんちを讃  
たへんや なんちの眞理をのべつたへんや 〓 エホバよ聴たまへ われを憐みたまへ 〓 エホバよ願くはわが助と  
なりたまへ 〓 なんち踴躍をもてわが哀哭にかへわが鹿服をとき歡喜をもてわが帯としたまへり 〓 われ榮を  
もてほめうたひつゝ黙すことなからんためなり 〓 わが神エホバよ われ永遠になんちに感謝せん

第三一篇

伶長にうたはしめたるダビデのうた

エホバよわれ汝によりたのむ 願くはいづれの日までも愧をおはしめたまふなかれなんちの義を  
もてわれを助けたまへ 〓 なんちの耳をかたぶけて速かにわれをすくひたまへ 〓 願くはわがためにかたき磐となり  
我をすくふ保障の家となりたまへ 〓 なんちはわが磐わが城なり 〓 されば名のゆゑをもてわれを引われを導きた  
まへ 〓 なんち我をかれらが密かにまうけたる網よりひきいだしたまへ 〓 なんちはわが保磐なり 〓 われ靈魂を  
なんちの手にゆだね 〓 エホバまことの神よ なんちはわれを贖ひたまへり 〓 われはいつはりの虚きことに心を  
よする者をにくむわれは獨エホバによりたのむなり 〓 我はなんちの憐憫をよろこびたのしまん なんちわが  
艱難をかへりみわがたましひの禍害をしり 〓 われを仇の手にとちこめしめたまはずわが足をひろきところに



九 立たまへばなり われ迫りくるしめり エホバよ我をあはれみたまへ わが目はうれひによりておとろふ靈魂  
 八 も身もまた衰へぬ わが生命はかなしみによりて消えゆき わが年華はなげきによりて消ゆけばなり わが力は  
 七 わが不義によりておとろへ わが骨はかれはてたり われもろもろの仇ゆゑにそしらる わが隣にはわけて甚だ  
 六 し相識ものには憚られ憚りにてわれを見るもの避てのがる われは死たるものごとく忘れられて人のこゝろに  
 五 置れず われはやぶれたる器ものごとくなれり 二一 二二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇  
 一 我にさからひて互にはかりしが わが生命をさへたらんと企てたり 二 されどエホバよわれ汝によりたのめり  
 二 また汝はわが神なりといへり 三 わが時はすべてなんぢの手にあり ねがはくはわれを仇の手よりたすけ われに  
 三 追迫るものより助けいだしたまへ 四 なんぢの僕のうちへに聖顔をかゝりやかせ なんぢの仁慈をもて我をすくひ  
 四 たまへ 五 エホバよわれに愧をおはしめ給ふなかれ 六 そは我なんぢをよべばなり 願くはあしきものに恥をうけし  
 五 め陰府にありて口をつぐましめ給へ 六 傲慢と輕侮をもて義きものにむかひ交りにのしるいつはりの口唇を  
 六 つぐましめたまへ 七 汝をおそるゝ者のためにたくはへ なんぢに依頼むもののために人の子のまへにてほどこ  
 七 したまへる汝のいつくしみは大なるかな 八 汝かれらを御前なるひそかなる所にかくして人の謀略よりまぬかれ  
 八 しめ また行宮のうちひそませて舌のあらそひをさけしめたまはん 九 謙べきかなエホバは堅固なる城のなか  
 九 にて奇しまるゝばかりの仁慈をわれに顯したまへり 一〇 われ驚きあわてゝいへらくなんぢの目のまへより絶れ  
 一〇 たりと 然どわれ汝によびもとめしとき 汝わがねがひの聲をききたまへり 一一 なんぢらもろもろの聖徒よエホバ  
 一一 をいつくしめ エホバは眞實あるものをまもり 傲慢者におもく報をほどこしたまふ 一二 すべてエホバを俟望む  
 一二 ものよ雄々しかれ なんぢら心をかたうせよ

第三二篇

一 その愆をゆるされその罪をおほはれしものは福ひなり 二 不義をエホバに負せられざるもの心に  
 三 マビチの調諭のうた

一 一 つはりなき者はさいはひなり 二 我いひあらはさざりしときは終日かなしみさげびたるが故にわが骨ふるびお  
 二 とろへたり 三 なんぢの手はよるも晝もわがうへにありて重し わが身の潤澤はかはりて夏の旱のごとくなれり  
 三 セラ 斯てわれなんぢの前にわが罪をあらはしわが不義をおほはざりき 四 我いへらくわが愆をエホバにいひあ  
 四 らはさんと 斯るときしも汝わがつみの邪曲をゆるしたまへり セラ されば神をうやまふ者はなんぢに遇こと  
 五 をうべき間になんぢに祈らん 大水あふれ流るゝともかならずその身におよばじ 六 汝はわがかくるべき所なり  
 六 なんぢ患難をふせきて我をまもり救のうたをもて我をかこみたまはん セラ 七 われ汝ををしへ汝をあゆむべき  
 七 途にみちびきわが目をなんぢに注てさとさん 八 汝等わきまへなき馬のごとく驢馬のごとくなるなかれ 九 され  
 九 は鏡たづなのごとき具をもてひきとめずば近づききたることなし 一〇 悪者はかなしみ多かれどエホバに依頼む  
 一〇 ものは憐憫にてかこまれん 一一 たゞしき者よエホバを喜びたのしめ 凡てこゝろの直きものよ喜びよばよべし  
 一一 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇  
 一 第三三篇 感謝せよ十絃のことをもてエホバをほめうたへ 二 あたらしき歌をエホバにむかひてうたひ歌  
 二 の聲をあげてたくみに琴をかきならせ 三 エホバのみことばは直くそのすべて行ひたまふところ眞實なれば  
 三 なり 四 エホバは義と公平とをこのみたまふその仁慈はあまねく地にみつ 五 もろもろの天はエホバのみこと  
 四 ばによりて成りてんの萬軍はエホバの口の氣によりてつくられたり 六 エホバはうみの水をあつめてうづだか  
 五 くし深淵を庫にをさめたまふ 七 全地はエホバをおそれ世にすめるもろもろの人はエホバをおぢかしこむべし  
 六 そはエホバ言たまへば成りおほせたまへば立るがゆゑなり 七 エホバはもろもろの國のはかりごとを虚くし  
 七 もろもろの民のおもひを徒勞にしたまふ 八 エホバの謀略はとこしへに立ちそのみこゝろのおもひは世々にたつ  
 八 二 エホバをおのが神とする國はさいはひなり 三 エホバ嗣業にせんとて撰びたまへるその民はさいはひなり 四 エ  
 三 ホバ天よりうかいひてすべての人の子を見 五 その在すところより地にすむもろもろの人をみたまふ 六 エホバは



一六 すべてかれらの心をつくり、その作ところをことごとく鑿みたまふ。王者いくさびと多をもて救をえず勇士  
 一七 ちから大なるをもて助をえざるなり。馬はすくひに益なく、その大なるちからも人をたすくることなからん  
 一八 視よエホバの目はエホバをおそるゝもの並その憐憫をのぞむものうへにあり。此はかれらのたましひを  
 一九 死よりすくひ饑餓たるときにも世にながらへしめんがためなり。われらのたましひはエホバを俟望めり、エホ  
 二〇 バはわれらの援われらの盾なり。われらはきよき名によりたのめり、斯てぞわれらの心はエホバにありてよろ  
 二一 こばん。エホバよわれら汝をまちのぞめり、これに循ひて憐憫をわれらのうへに垂たまへ。

第三四篇

一 われつねにエホバを祝ひまつらん、その頌詞はわが口にたえじ。わがたましひはエホバにより  
 二 て誇らん、謙だるものは之をきよてよろこばん。われとともにエホバを崇めよ、われらともにその名をあげた  
 三 へん。われエホバを尋ねればエホバわれにこたへ我をもろもろの畏懼よりたすけいだしたまへり。かれら  
 四 エホバを仰ぎのぞみて、光をかうぶれり、かれらの面ははちあからむことなし。この苦しむもの叫びたればエホ  
 五 バこれをきよ、そのすべての患難よりすくひいだしたまへり。エホバの使者はエホバをおそるゝ者のまはり  
 六 營をつらねてこれを援く。なんぢらエホバの恩恵ふかきを嘗ひしれ、エホバによりたのむ者はさいはひなり  
 七 エホバの聖徒よ、エホバを畏れよ、エホバをおそるゝものには乏しきことなければなり。わかき獅はともしくし  
 八 て憐ることあり、されどエホバをたづぬるものは嘉物にかくることあらじ。子よきたりて我にきけ、われエホバ  
 九 を畏るべきことを汝等にをしへん。福祉をみんがために生命をしたひ存へんことをこのむ者はたれぞや。な  
 一〇 んぢの舌をおさへて悪につかしめず、なんぢの口唇をおさへて虚偽をいはざらしめよ。悪をはなれて善をおこ  
 一一 なひ和睦をもとめて切にこのことを勉めよ。エホバの目はたゞしきものをかへりみ、その耳はかれらの號呼に  
 一二 かたぶく。エホバの聖顔はあくをなす者にむかひて、その跡を地より断滅したまふ。義者さげびたればエホバ

一八 之をきよてそのすべての患難よりたすけいだしたまへり。エホバは心のいたみかなしめる者にちかく在して  
 一九 たましひの悔類れたるものをすくひたまふ。たゞしきものは患難おほしされどエホバはみなその中よりたす  
 二〇 けいだしたまふ。エホバはかれがすべての骨をまもりたまふ、その一つだに折らるゝことなし。悪はあしき  
 二一 ものをころさん、義人をにくむものは刑なはるべし。エホバはその僕等のたましひを贖ひたまふ。エホバに  
 二二 依頼むものは一人だにのみなはるゝことなからん。

第三五篇

一 エホバよ、ねがはくは我にあらそふ者とあらそひ我とたゝかふものと戦ひたまへ。干と大盾とを  
 二 とりてわが援にたぢいでたまへ。戦をぬきいだしたまひて我におひせまるもの途をふさぎ、且わが靈魂にわれ  
 三 はなんぢの救なりといひたまへ。願くはわが靈魂をたづぬるもの恥をえていやしめられ、我をそこなはんと  
 四 謀るもの退けられて、憤てふためかんと。ねがはくはかれらが風のまへなる樹のてとくなり、エホバの  
 五 使者におひやられんことを。願くはかれらの途をくらくし滑らかにし、エホバの使者にかれらを追ゆかしめたま  
 六 はんことを。かれらは故なく我をとらへんとて網をあなにくせ、故なくわが靈魂をそこなはんとて阱をうがちた  
 七 ればなり。願くはかれらが思ひよらぬ間にほろびきたり、己がふせたる網にとらへられ、自らその滅におちいらん  
 八 ことを。然ときわが靈魂はエホバによりてよろこび、その救をもて樂しまん。わがすべての骨はいはん。エホ  
 九 バよ、汝はくるしむものを之にまさりて力つよきものより並くるしむもの貧しきものを掠めうばふ者よりたすけい  
 一〇 だし給ふ。誰かなんちに比ぶべき者あらんと。こゝろあしき證人おこりてわが知ざること語りとふ。かれ  
 一一 らは悪をもてわが善にむくい我がたましひを依仗なきものとせり。然どわれかれらが病しときは、友が兄弟に  
 一二 糧をたちてわが靈魂をくるしめたり、わが祈はふところにかへり。わがかれに作ることはわが友が兄弟に  
 一三 ことならず、母の喪にありて痛哭がごとく、哀しみうなれたり。然どかれらはわが倒れんとせしとき、喜びつどひ



二六 わが知ざりしとき匪類あつまりきたりて我をせめ われを裂てやめざりき 一六 かれらは酒宴にて穢きことをぶ  
 二七 る嘲笑者のごとく我にむかひて齒をかみならせり 一七 主よいたづらに見るのみにして幾何時をへたまふや 願く  
 二八 はわがたましひの彼等にほろぼさるゝを脱れしめ わが生命をわかき獅よりまぬかれしめたまへ 一八 われ大なる  
 二九 會にありてなんちに感謝し おほくの民のなかにて汝をほめたへん 一九 虚偽をもてわれに仇するものわが故  
 三〇 によるごぶことを容したまふなかれ故なくして我をにくむ者のたがひに胸せすることなからしめたまへ 二〇 かれ  
 三一 らは平安をかたらずあざむきの言をつくりまうけて國內におだやかにすまふ者をそこなはんと謀る 二一 然のみ  
 三二 ならず我にむかひて口をあけひろげ あゝ視よや視よやわれらの眼これをみたりといへり 二二 エホバよ汝すでに  
 三三 これを觀たまへり ねがはくは黙したまふなかれ主よわれに遠ざかりたまふなかれ 二三 わが神よわが主よおきた  
 三四 まへ醒たまへ ねがはくはわがために審判をなし わが訟をさめたまへ 二四 わが神エホバよなんぢの義にした  
 三五 がひて我をさばきたまへ わが事によりてかれらに歡喜をえしめたまふなかれ 二五 かれらにその心裡にてあゝ  
 三六 こゝちよきかな視よこれわが願ひしところなりといはしめたまふなかれ 又われらかれを香つくせりといはしめ  
 三七 たまふなかれ 願くはわが害なはるゝを喜ぶもの皆はちて惶てふためき 我にむかひてほりかに高ぶるもの  
 三八 の愧とはづかしめとを衣んことを 二七 わが義をよみする者をばよろこび謳はしめ大なるかなエホバその僕のさい  
 二九 はひを悦びたまふと恒にいはいしめたまへ 二八 わが舌は終日なんぢの義となんぢの譽とをかたらん

第三六篇

一 伶長にうたはしめたるエホバの僕ダビデのうた

一 あしきものの愆はわが心のうちにかたりて その目のまへに神をおそるゝの畏あることなしとい  
 二 ふ 二 かれはおのが邪曲のあらはるゝことなく憎まるゝことなからんとて自からその目にて語る 三 その口のこ  
 四 とばは邪曲と虚偽となり 智をこばみ善をおこなふことを息たり 五 かつその寢床にてよこしまなる事をはかり  
 六 よからぬ途にたちとまりて悪をきはらず 七 エホバよなんぢの仁慈は天にあり なんぢの眞實は雲にまでおよ

八 ぶ 九 汝のたゞしきは神の山のごとく なんぢの審判はおほいなる淵なり エホバよなんぢは人とけものとのを護り  
 一〇 たまふ 一一 神よなんぢの仁慈はたふときかな 人の子なんぢの翼の蔭にさけどころを得 一二 なんぢの屋のゆた  
 一三 かなるによりてことごとく飽くことをえん なんぢはその歡樂のかはの水をかれらに飲しめたまはん 一四 そはいの  
 一五 ちの泉はなんぢに在り われらはなんぢの光によりて光をみん 一六 ねがはくはなんぢを知るものにあらず憐憫を  
 一七 ほどこし心なほき者にたえず正義をほどこしたまへ 一八 たかぶるもの足われをふみ悪きもの手われを逐去ふ  
 一九 をゆるし給ふなかれ 二〇 邪曲をおこなふ者はかしこに仆れたり かれら打伏られてまた起ことあたはざるべし

第三七篇

一 伶長にうたはしめたるエホバの僕ダビデのうた

一 悪をなすもの故をもて心をなやめ 不義をおこなふ者にむかひて嫉をおこなすなかれ 二 かれらは  
 二 やがて草のごとくかりとられ青菜のごとく打萎るべければなり 三 エホバによりたのみて善をおこなへこの國  
 四 にとしまり眞實をもて糧とせよ 五 エホバによりて歡喜をなせ エホバはなんぢが心のねがひを汝にあたへたま  
 六 はん 七 なんぢの途をエホバにゆだねよ 彼によりたのまば之をなしとげ 八 光のごとくなんぢの義をあきらか  
 九 にし午日のごとくなんぢの訟をあきらかにしたまはん 一〇 なんぢエホバのまへに口をつぐみ忍びてこれを俟望め  
 一一 おのが途をあゆみて榮るもの故をもて あしき謀略をとぐる人の故をもて心をなやむるなかれ 一二 怒をやめ  
 一三 忿恚をすてよ 心をなやむるなかれこれ悪をおこなふ方にうつらん 一四 そは悪をおこなふものは斷滅され エホ  
 一五 バを俟望むものは國をつぐべければなり 一六 あしきものは久しからずしてうせん なんぢ細密にその處をおもひ  
 一七 みるともあることなからん 一八 されど謙だるものは國をつぎまた平安のゆたかなるを樂まん 一九 悪きものは義  
 二〇 きものにさからはんとて謀略をめぐらし之にむかひて切齒す 二一 主はあしきものを笑ひたまはん かが日のき  
 二二 たるを見たまへばなり 二三 あしきものは劍をぬき弓をはりて苦しむものと貧しきものとをたふし行ひなほきもの  
 二四 を殺さんとせり 二五 されどその劍はおのが胸をさしその弓はをらるべし 二六 義人のもてるものすくなきは



一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇

多くの悪きもの豊かなるにまされり。そは悪きものの臂はをらるれど、エホバは義きものを扶持たまへばなり。  
 一八 エホバは完全ものもろもろの日をしりたまふ。かれらの嗣業はかぎりなく久しからん。かれらは禍害にあふとき、愧をおはす。饑饉の日にもあくことを得ん。あしき者はほろび、エホバのあはは牧場のさかえの枯るがごとく、うせ烟のごとく消ゆかん。あしき者はものかりて償はず。義きものは恵ありて施し、あたふ。神のことほぎたまふ人は、國をつぎ、神ののろひたまふ人は、斷滅さるべし。人のあゆみはエホバによりて定めらる。そのゆく途を、エホバよろこびたまへり。縦ひその人たふるゝことありとも、全くうちふせらるゝことなし。エホバかれが手をたすけ支へたまへばなり。われむかし年わかして、今おいたれど、義者のすてられ、或はその裔の糲こひありくを見しことなし。たゞしきものは終日めぐみありて、貸あたふ。その裔はさいはひなり。悪をはなれて善をなせ。然ばなんぢの住居とこしへならん。エホバは公平をこのみ、その聖徒をすてたまはさればなり。かれらは永遠にまもりたすけらるれど、悪きものすゑは斷滅さるべし。たゞしきものは國をつぎ、その中にすまひてとこしへに及ばん。たゞしきものの口は智慧をかたり、その舌は公平をのぶ。かれが神の法はそのこゝろにあり、そのあゆみは一步だにすべることあらじ。あしきものは、義者をひそみうかゞひて之をころさんとしかる。エホバは義者をあしきもの手にのこしおきたまはず。審判のときに罰ひたまふことなし。エホバを俟望みて、その途をまもれ。さらば汝をあげて國をつがせたまはん。なんぢ悪者のたちほろぼさるゝ時に、これをみん。我あしきもの狂くしてはびこれるを見るに、生立たる地にさかえしげれる樹のごとし。然れどもかれは逝ゆけり。視よ、たちまちに無なりぬ。われ之をたづねしかど、遇ことをえざりき。完人に目をそゝぎ、直人をみよ。和平なる人には後あれど、罪をかすものらは共にほろぼされ、悪きもの後はかならず斷るべければなり。たゞしきもの救はエホバよりいづ。エホバはかれらが辛苦のときの保岩なり。エホバはかれらを助け、かれらを解脫したまふ。エホバはかれらを悪者よりときはなちて救ひたまふ。かれらはエホバをその避所とすればなり。

第三八篇

記念のためにつくられるダビデのうた

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇

矢われにあたり、なんぢの手わがうへを壓へたり。なんぢの怒によりて、わが肉には全きところなく、わが罪によりて、わが骨には健かなるところなし。わが不義は首をすぎて、たかく重荷のごとく、負がたければなり。われ愚なるによりて、わが傷あしき臭をはなちて腐れたるなり。われ折屈みて、いたくなげきうなれたり。われ終日かなしみありく。わが腰はことごとく焼るがごとく、肉に全きところなければなり。我おとろへはて甚きすつけられ、わが心のやすからざるによりて、歎歎さけべり。あゝ主よ、わがすべての願望はなんぢの前にあり。わが嘆息はなんぢに隠るゝことなし。わが胸をどりわが力おとろへ。わが眼のひかりも亦われをはなれたり。わが友わが親めるものは、わが瘻をみて、遠にたちわが隣もまた遠かりてたり。わが生命をたづぬるものは、綱をまうけ我をそこなはんとするものは、悪言をいひ、また終日ばかりを謀る。然はあれど、われは聖者のごとくきかず。われは口をひらかぬ。啞者のごとし。如此われはきかざる人のごとく、口のことあげせぬ人のごときなり。エホバよ、我なんぢを俟望めり。主わが神よ、なんぢかならず答へたまふべければなり。われ糞にいふおそらくは、かれらわが事によりて喜び。わが足のすべらんと、我にむかひて誇りにたかぶらんと。われ作るゝばかりになりぬ。わが悲哀はたえず、わが前にあり。そは我みづから不義をいひ、あらはし、わが罪のためになしめばなり。わが仇はいきはたらきて、たけく。故なくして我をうらむるものおほし。悪をもて善にむくゆるものは、われ善事にしたがふが故に、わが仇となれり。エホバよ、ねがはくは我をはなれたまふなかれ。わが神よ、われに遠かりたまふなかれ。主わがすくひよ、速きたりて我をたすけたまへ。

第三九篇

伶長エドトンにうたはしめたるダビデのうた

われ糞にいへり、われ舌をもて罪をかざらん。ために我すべての途をつつしみ、悪者のわがまへ



に在るあひだはわが口に銜をかけんと 二 われ黙して嘔となり善言すらことばにいださず わが憂なほおこれり  
 ■ わが心わがうちに熱し おもひつゞくるほどに火もえぬればわれ舌をもていへらく ■ エホバよ願くはわが終と  
 わが日の敷のいくばくなるを知しめたまへ わが無常をしらしめたまへ 視よなんぢわがすべての目を一掌に  
 すぎさらしめたまふ わがいのち主前にてはなきにことならず 實にすべての人は皆その盛時だにもむなしから  
 ざるはなしセラ 人の世にあるは影にことならず その思ひなやむことはむなしからざるなし その積蓄ふる  
 ものはたが手にをさまるをしらす 主よわれ今なにかまたん わが望はなんぢにあり ねがはくは我を  
 すべてに懲より助けいだしたまへ 愚なるものに誹らるることなからしめたまへ われは黙して口をひらかず  
 此はなんぢの成したまふ者なればなり 願くはなんぢの責をわれよりはなちたまへ 我なんぢの手にうちこら  
 ざるによりて亡ぶるばかりになりぬ 二 なんぢ罪をせめて人をこらしその慕ひよるところのものゝを還の  
 くらふがごとく消うせしめたまふ 實にもろもろの人はむなしからざるなしセラ 三 あゝエホバよねがはくは  
 わが祈をきゝ わが號呼に耳をかたぶけたまへ わが涙をみて黙したまふなかれ われはなんぢに寄る旅客すべて  
 わが列祖のごとく宿れるものなり 二 我こゝを去てうせざる先になんぢ面をそむけてわれを爽快ならしめたまへ

第四〇篇

一 我たへしのびてエホバを俟望みたり エホバ我にむかひてわが號呼をきゝたまへり 二 また我を  
 ほろびの阱より泥のなかりとりいだしてわが足を磐のうへにおきわが歩をかたくしたまへり 三 エホバはあた  
 らしき歌をわが口にいれたたまへり 此はわれしの神にさぐる讚美なり おほくの人はこれを見ておそれかつエホ  
 バによりたまへん 四 エホバをおのが頼となし高るものによらず虚偽にかたぶく者によらざる人はさいはひなり  
 ■ わが神エホバよなんぢの作たまへる奇しき迹とわれらにむかふ念とは甚おほくして汝のみまへにつらぬいふ  
 ことあたはず 我これをいひのべんとすれどその數かぞふることあたはず 五 なんぢ犠牲と祭物とをよるこびたま

はす汝わが耳をひらきたまへり 六 なんぢ燔祭と罪祭とをもとめたまはず 七 そのとき我いへらく 視よわれきた  
 らんわがことを書の巻にしるしたり 八 わが神よわれは聖意にしたがふことを樂む なんぢの法はわが心のうち  
 にありと 九 われ大なる會にて義をつけしめせり 視よわれ口唇をとぢす エホバよなんぢ之をしりたまふ 一〇 わ  
 れなんぢの義をわが心のうちにひめおかす なんぢの眞實となんぢの拯救とをのべつたへたり 我なんぢの仁慈と  
 なんぢの眞理とをおほいなる會にかくさじりき 二 エホバよなんぢ憐憫をわれにをしまたまふなかれ 仁慈と  
 眞理とをもて恒にわれをまもりたまへ 三 そはかぞへがたき禍害われをかこみ わが不義われに追及てあふぎみ  
 ること能はぬまでになりぬ その多きことわが首の髪にもまさり わが心きえうするばかりなればなり 四 エホバ  
 よ願くはわれをすくひたまへ エホバよ急ぎきたりて我をたすけたまへ 五 願くはわが靈魂をたづねほろぼさん  
 とするもの皆はちあわてんことを わが害はるゝをよるこぶもののみな後にしりぞきて恥をおはんことを  
 ■ われにむかひて 六 視よ視よ視よといふ者おのが恥によりておどろきおそれんことを 七 願くはなんぢを  
 尋求するもの皆なんぢによりて樂みよるこばんことを なんぢの救をしたふもの恒にエホバは大なるかなと  
 となへんことを 八 われはくるしみ且ともし 主われをねんごろに念ひたまふなんぢはわが助なり われをすく  
 ひたまふ者なり 九 わが神よねがはくはためらひたまふなかれ

第四一篇

一 我たへしのびてエホバを俟望みたり エホバ我にむかひてわが號呼をきゝたまへり 二 また我を  
 ほろびの阱より泥のなかりとりいだしてわが足を磐のうへにおきわが歩をかたくしたまへり 三 エホバはあた  
 らしき歌をわが口にいれたたまへり 此はわれしの神にさぐる讚美なり おほくの人はこれを見ておそれかつエホ  
 バによりたまへん 四 エホバをおのが頼となし高るものによらず虚偽にかたぶく者によらざる人はさいはひなり  
 ■ わが神エホバよなんぢの作たまへる奇しき迹とわれらにむかふ念とは甚おほくして汝のみまへにつらぬいふ  
 ことあたはず 我これをいひのべんとすれどその數かぞふることあたはず 五 なんぢ犠牲と祭物とをよるこびたま



又われを見んとてきたるときは虚偽をかたり邪曲をその心にあつめ外にいではこれを述ぶ すべてわれを  
 にくむもの互ひにさゝやき我をそこなはんとて相謀る かつ云ふ かれに一のわざはひつきまといたればわれ  
 ふしてふたゝび起ることなからんと わが待みしところ わが糧をくらひしところのわが親しき友さへも我に  
 そむきてその踵をあげたり 然はあれどエホバよ 汝ねがはくは我をあはれみ我をたすけて起したまへされば  
 我かれらに報ることをえん わが仇われに打勝てよろこぶこと能はざるをもて汝がわれを愛いつくしみ  
 たまふを我しりぬ わが事をいはじなんぢ我をわが完全うちにてたもち我をとこしへに面のまへに置たまふ  
 イスラエルの神エホバはとこしへより永遠までほむべきかなアーメンアーメン

第四二篇

伶長にうたはしめたるコラの子のをしへの歌

あゝ神よ しかの溪水をしたひ喘ぐごとく わが靈魂もなんぢをしたひあへぐなり わがたま  
 しひは渴けるごとくに神をしたふ 活神をぞしたふ 何れのと看にか我ゆきて神のみまへにいでん かれらが  
 終日われにむかひてなんぢの神はいづくにありやとのしる間はたゞわが涙のみ晝夜そゞぎてわが糧なりき  
 われむかし群をなして祭日をまもる衆人とともにゆき歡喜と讚美のこゑをあげてかれらを神の家にともなへ  
 り今これらのことを追想してわが衷よりたましひを注ぎいだすなり あゝわが靈魂よなんぢ何ぞうなたる  
 やなんぞわが衷におもひみだるゝやなんぢ神をまぢのぞめわれに聖顔のたすけありて我なほわが神をほめ  
 たゝふべければなり わが神よわがたましひはわが衷にうなたる 然はわれヨルダンの地よりヘルモン  
 よりミザルの山より汝をおもひいつ なんぢの大瀑のひゞきによりて淵々よびこたへなんぢの波なんぢの  
 猛浪ことごとくわが上をこえゆけり 然はあれど晝はエホバその憐憫をほどこしたまふ 夜はその歌われと  
 ともにあり 此うたはわがいのちの神にさゝぐる祈なり われわが誓なる神にいはんなんぞわれを忘れたまひ  
 しやなんぞわれは仇のしへたげによりて悲しみありくや わが骨もくだくるばかりにわがてきはひねもす

我にむかひてなんぢの神はいづくにありやといひのしりつゝ我をそしれり あゝわがたましひよ 汝なんぞ  
 うなたるゝや 何ぞわがうちに思ひみだるゝや なんぢ神をまぢのぞめわれ尙わがかほの助なるわが神をほめ  
 たゝふべければなり

第四三篇

神よねがはくは我をさばき情しらぬ民にむかひてわが訟をあげつらひ 讒詐おほきよこしまなる  
 人より我をたすけいだし給へ なんぢはわが力の神なり なんぞ我をすてたまひしや 何ぞわれは

仇の暴虐によりてかなしみありくや 願くはなんぢの光となんぢの眞理とをばなち我をみちびきてその聖山と  
 その帷幄とにゆかしめたまへ さらばわれ神の祭壇にゆき又わがよるこぶ神にゆかん あゝ神よわが  
 神よわれ琴をもてなんぢを讃たゝへん あゝわが靈魂よなんぢなんぞうなたるゝやなんぞわが衷におもひみ  
 だるゝやなんぢ神によりて望をいだけ 我なほわが面のたすけなるわが神をほめたゝふべければなり

第四四篇

伶長にうたはしめたるコラの子のをしへの歌

あゝ神よむかしわれらの列祖の日になんぢがなしたまひし事迹をわれら耳にきけり 列祖われら  
 に語れり なんぢ手をもてもろもろの國人をおひしりぞけわれらの列祖をうゑ並もろもろの民をなやまして  
 われらの列祖をはびこせたまひき かれらはおのが劔によりて國をえしにあらす おのが臂によりて勝をえ  
 しにあらす 只なんぢの右の手なんぢの臂なんぢの面のひかりによりれ 汝かれらを恵みたまひたればなり 神  
 よなんぢはわが王なり ねがはくはヤコブのために救をほどこしたまへ われらは汝によりて敵をたふしまた  
 我儕にさからひて起りたつものをなんぢの名によりて踐壓ふべし そはわれわが弓によりたのますわが劔も  
 また我をすくふことあたはざればなり なんぢわれらを敵よりすくひまたわれらを惡むものを辱かしめたま  
 へり われらはひねもす神によりてほこりわれらは永遠になんぢの名に感謝せん しかるに今は  
 われらをすてゝ恥をおはせたまへり われらの軍人とともに出ゆきたまはず われらを敵のまへより退かしめ



二 たまへりわれらを悪むものその任意にわれらを掠めうばへり 二 うちわれらを食にそなへらる羊のごとく  
 三 にあたへ斯てわれらをもろもろの國人のなかにちらし 二 得るところなくしてうちをうりその價により  
 四 てうちを富をましたまはざりき 二 汝われらを隣人にせらしめわれらを環るものにあなどらしめ嘲けらし  
 五 めたまへり 二 又もろもろの國のなかにわれらを談柄となしもろもろの民のなかにわれらを頭ふるる者とな  
 六 したまへり 二 わが凌辱ひねもす我がまへにありわが加ほの恥われをおほへり 二 我をそしり我をのし  
 七 るもの聲により我にあたし我にうらみを報るもの故によるなり 二 これらのこと皆われらに臨みきつれどわ  
 八 れらなほ汝をわすれずうちを契約をいつはりまらざりき 二 われらの心しりぞかずわれらの步履うちを  
 九 道をはなれず 二 然どうちを野犬のすみかにてわれらをきすつけ死蔭をもてわれらをおほひ給へり 二 われら  
 一〇 もしおのれの神の名をわすれ或はわれらの手を異神にのべしことあらんには 二 神はこれを糺したまはざらん  
 一一 や神はこゝろの隠れたることをも知たまふ 二 われらは終日うちのために死にわたされ居られんとする羊の  
 一二 如くせられたり 二 主よさめたまへ何なればねぶりたまふやや起たまへわれらをとこしへに棄たまふなかれ  
 一三 いかなれば聖顔をかくしてわれらがうくる苦難と虐待とをわすれたまふや 二 われらのたましひはかゞみて  
 一四 塵にふしわれらの腹は土につきたり 二 ねがはくは起てわれらをたすけたまへ 二 うちを仁慈のゆゑをもて  
 一五 われらを贖ひたまへ

第四五篇

一 わが心はうるはしき事にてあふる われは王のために詠たるものをいひいでんわが舌はすみやけ  
 二 く寫字人の筆なり 二 うちは人の子輩にまさりて美しく文雅そのくちびるにそゝがるこのゆゑに神はとこし  
 三 へに汝をさいはひしたまへり 二 英雄ようちをその劍その榮その威をこしに佩べし 二 うちを眞理と柔和とたゞ  
 四 しきとのために威をたくましくし勝をえて乗すゝめ うちを右手うちを左手に畏るべきことををしへん 二 うち

六 矢は鋭して王のあたる胸をつらぬきもろもろの民はうちの下にたふる 二 神ようちの寶座はいやとほ永  
 七 くなちの國のつゑは公平のつゑなり 二 うちを義をいつくしみ悪をにくむこのゆゑに神はうちを神はよる  
 八 こびの膏をうちを倍よりまさりて汝にそゝぎたまへり 二 うちを衣はみな淡菜 蘆薈肉桂のかをりあり 二 香  
 九 の香さうげの諸殿よりいでて汝をよるこばしめたり 二 うちがたふとき練のなかにほもろもろの王のむすめ  
 一〇 あり皇后はオフルの金をかさりてうちを右にたつ 二 女よきけ目をそゝげ うちを耳をかたぶけよ うち  
 一一 の民とうちが父の家とをわすれよ 二 さらば王はうちを美麗にしたはん 王はうちを主なりこれを伏拜め  
 一二 ツロの女は贈物をもてきたり民間のとめるものも亦うちを恵をこほとめん 二 王のむすめは殿のうちを  
 一三 ていと榮えかゞやき そのころもは金をもて織なせり 二 かれは絨繡せる衣をきて王のもとにいなはる 二 之に  
 一四 ともなへる處女もそのあとにしたがひて汝のもとにみちびかれゆかん 二 かれらは歡喜と快樂とをもていなは  
 一五 れ斯して王の殿にいらん 二 うちの子らは列祖にかはりてたち うちをこれに全地に君となさん 二 我なん  
 一六 ちの名をよろづ代にしらしめん この故にもろもろの民はいやとほ永くうちを感謝すべし

第四六篇

一 神はわれらの避所また力なり なやめるとき最ちかき助なり 二 さればたとひ地はかはり山は  
 二 うみの中央にうつるとも我は神はおそれじ 二 よしその水はなりとどろきてさわぐとも その溢れきたるによりて  
 三 山はゆるぐとも何かあらん セラ 二 河ありそのながれは神のみやこをよるこばしめ至上者のすみたまふ  
 四 聖所をよるこばしむ 二 神そのなかにいませば都はうごかじ 神は朝つとにこれを助けたまはん 二 もろもろの  
 五 民はさわぎたちもろもろの國はうごきたり 神その聲をいだしたまへば地はやがてとけぬ 二 萬軍のエホバは  
 六 われらともなりヤコブの神はわれらのたかき楯なり セラ 二 きたりてエホバの事跡をみよ 二 エホバは  
 七 おほくの懼るべきことを地になしたまへり 二 エホバは地のはてまでも戦闘をやめしめ弓ををり戈をたち戰車を



火にてやきたまふ 一〇 汝等しづまりて我の神たるをしれ われはもろもろの國の ちに崇められ全地にあがめ  
 らるべし 二二 萬軍のエホバはわれらと偕なり ヤコブの神はわれらの高きやくらなり セラ

第四七篇

一 俗長にうたはしめたるコラの子のうた

もろもろのたみよ手をうち歡喜のこゑをあげ神にむかひてさけべ 一〇 いとたかきエホバはおそる  
 べくまた地をあまねく治しめす大なる王にてましませばなり 一一 エホバはもろもろの民をわれらに服はせもろ  
 もろの國をわれらの足下にまつろはせたまふ 一二 又そのいつくしみたまふヤコブが譽とする嗣業をわれらのため  
 に選びたまはん セラ 神はよろこびさけぶ聲とともにのぼり エホバはラッパの聲とともにのぼりたまへり  
 \* ほめうたへ神をほめうたへ 頌歌へわれらの王をほめうたへ 一三 しみは地にあまねく王なればなり 教訓の  
 うたをうたひてほめよ 一四 神はもろもろの國をすべをさめたまふ 神はそのきよき寶座にすわりたまふ  
 \* 一五 もろもろのたみの諸侯はつどひきたりてアブラハムの神の民となれり 地のもろもろの肩は神のものなり 神は  
 いとたふとし

第四八篇

一 コラの子のうたなり 讚美なり

エホバは大なり われらの神の都 そのきよき山のうへにて甚くほめたへられたまふべし 一  
 オンノ山はまたの端たかくしてうるはしく喜悅を地にあまねくあたふこゝは大なる王のみやこなり 二  
 もろもろの殿のうち神はおのれをたかき權としてあらはしたまへり 三 一王等はつどひあつまりて偕にすぎ  
 ゆきぬ 四 かれらは都をみてあやしみ且おそれて忽ちのがれされり 五 戰慄はかれらにのぞみ その苦痛は子を  
 うまんとする婦のごとし 六 なんぢは東風をおこしてタルシンの舟をやぶりたまふ 七 曩にわれらが聞してとく  
 今われらは萬軍のエホバの都われらの神のみやこにて之をみることをえたり 神はこの都をとこしへまで固くし  
 たまはん セラ 神よ我らはなんぢの宮のうちにて 仁慈をおもへり 一〇 神よなんぢの譽はその名のごとく地の

極にまでおよべり なんぢの右手はたゞしきにて充り 二 なんぢのもろもろの審判によりてシオンノ山はよろこ  
 びユダの女輩はたのしむべし 三 シオンノ周圍をありき徧くめぐりてその權をかぞへよ 四 その石垣に目を  
 とめよ そのもろもろの殿をみよ なんぢらこれを後代にかたりつたへんが爲なり 五 そはこの神はいや遠長に  
 われらの神にましましてわれらを死るまでみちびきたまはん

第四九篇

一 俗長にうたはしめたるコラの子のうた

もろもろの民よきげ賤きも貴きも富るも貧きもすべて地にすめる者よなんぢらともに耳をそば  
 だてよ 二 わが口はかしこきことをかたり わが心はさときことを思はん 三 われ耳を嘯言にかたづけ琴をなら  
 してわが幽玄なる語をときあらはさん 四 わが腰にちかゝる不義のわれを打圍むわざはひの日もいかで懼るゝ  
 ことあらんや 五 おのが富をたのみ財おほきを誇るもの 六 たれ一人おのが兄弟をあがなふことあたはず之が  
 ために贖價を神にさしけ 七 之をとこしへに生存へしめて朽さらしむることあたはず 八 靈魂をあがなふには費  
 いとおほくして此事をとこしへに捨置ざるを得ざればなり 九 そは智きものも死おろかものも黙心者もひと  
 しくほろびてその富を他人にのこすことは常にみるところなり 一〇 かれら竊におもふわが家はとこしへに存り  
 わがすまひは世々にいたらんと 一 一 かれらはその地におのが名をおはせたり 二 二 されど人は譽のなかに永くとどま  
 らず亡びうする獸のごとし 三 斯のごときは愚かなるもの途なり 然はあれど後人はその言をよしと  
 せん セラ 四 かれらは羊のむれのごとくに陰府のもの定めらる 死これが教者とならん直きもの朝にかれらを  
 をさめん その美容は陰府にほろぼされて宿るところなるべし 五 されど神われを接たまふべければわが靈魂を  
 あがなひて陰府のちからより脱かれしめたまはん セラ 六 人のとみてその家のさかえくはらんとき汝おそる  
 るなかれ 七 かれの死るときは何一つたづさへゆくことあたはずその榮はこれにしたがひて下ることをせざ  
 ればなり 八 かゝる人はいきながらふるほどに己がたましひを脱するともみづからを厚うするがゆゑに人々



二〇九

なんちをほむるとも 二〇九 なんち列祖の世にゆかんかれらはたえて光をみさるべし 尊貴なかにありて曉らざる人はほろびうする獸のごとし

第五〇篇

アサフのうた

二〇八 二〇七 二〇六 二〇五 二〇四 二〇三 二〇二 二〇一 二〇〇 一九九 一九八 一九七 一九六 一九五 一九四 一九三 一九二 一九一 一九〇 八八 八七 八六 八五 八四 八三 八二 八一 八〇 七九 七八 七七 七六 七五 七四 七三 七二 七一 七〇 六九 六八 六七 六六 六五 六四 六三 六二 六一 六〇 五九 五八 五七 五六 五五 五四 五三 五二 五一 五〇 四九 四八 四七 四六 四五 四四 四三 四二 四一 四〇 三九 三八 三七 三六 三五 三四 三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一

ぜんのうの神エホバ詔命して日のいづるところより日のいるところまであまねく地をよびたまへり かみは美麗の極なるシオンより光をはなちたまへり われらの神はきたりて黙したまはじ火その前にものをやきつくし暴風その四周にふきあれん 神はその民をさばかんとて上なる天および地をよびたまへり いはく祭物をもて我とけいやくをたてしわが聖徒をわがもとに集めよと もろもろの天は神の義をあらはせり 神はみづから審士たればなり セラ わが民よきけ我ものいはんイスラエルよきけ我なんちにむかひて證をなさん われは神なんちの神なり わがなんちを責るは祭物のゆゑにあらすなんちの燔祭はつねにわが前にあり 我はなんちの家より牡牛をとらずなんちの羊より牡山羊をとらず 林のもろもろのけもの山のうへ千々の牲畜はみなわが有なり われは山のすべての鳥をしる野のたけき獸はみなわがものなり 世界とそのなかに充るものとはわが有なれば縦ひわれ飢るともなんちに告じ われいかで牡牛の肉をくらひ牡山羊の血をのまんや 感謝のそなへものを神にさしげよなんちのちかひを至上者につくのへ なやみの日にわれをよべ我なんちを援けん而してなんち我をあがむべし 然はあれど神あしきものに言給くなんちは教をにくみわが言をその後にすつるものなるに何のかはりありてわが律法をのべわがけいやくを口にとりしや なんち盗人をみれば之をよしとし姦淫をおこなふもの同伴となれり なんちその口を惡にわたすなんちの舌は詭計をくみなせり なんち坐りて兄弟をそしり己がはの子を認のしれり 汝これらの事をなししをわれ黙しぬればなんち我をおのれに恰にたるものとおもへりされど我なんちを責めてその罪をなんちの目前につらぬべし 神をわするものよ今このことを念へおそらくは我なんちを抓さかんとき助るものあら

第五一篇

ダビデがバテセバにかよひしもの預言者ナタンの來れるときよみて伶長にうたはしめたる歌

二〇九 二〇八 二〇七 二〇六 二〇五 二〇四 二〇三 二〇二 二〇一 二〇〇 一九九 一九八 一九七 一九六 一九五 一九四 一九三 一九二 一九一 一九〇 八八 八七 八六 八五 八四 八三 八二 八一 八〇 七九 七八 七七 七六 七五 七四 七三 七二 七一 七〇 六九 六八 六七 六六 六五 六四 六三 六二 六一 六〇 五九 五八 五七 五六 五五 五四 五三 五二 五一 五〇 四九 四八 四七 四六 四五 四四 四三 四二 四一 四〇 三九 三八 三七 三六 三五 三四 三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一

感謝のそなへものを獻るものは我をあがむおのれの行爲をつしむ者にはわれ神の救をあらはさん 第五一篇 一 あゝ神よねがはくはなんちの仁慈によりて我をあはれみなんちの憐憫のおほきによりてわがもろもろの愆をけしたまへ わが不義をことごとくあらひさり我をわが罪よりきよめたまへ われはわが愆をしるわが罪はつねにわが前にあり 我はなんちにむかひて獨なんちに罪ををかし聖前にあしきことを行へり されば汝ものいふときは義とせられなんち轉くときは咎めなしとせられ給ふ 視よわれ邪曲のなかにうまれ罪にありてわが母われをはらみたりき なんち眞實をこゝろの衷にまでのぞみわが隠れたるところに智慧をしらしめ給はん なんちヒソプをもて我をきよめたまへさらばわれ淨まらん 我をあらひたまへさらばわれ雪よりも白からん なんち我によるこびと快樂とをきかせなんちが碎きし骨をよるこばせたまへ ねがはくは聖顔をわがすべての罪よりそむけわがすべての不義をけしたまへ あゝ神よわがために清心をつくりわが衷になほき靈をあらたにおこしたまへ われを聖前より棄たまふなかれ 汝のきよき靈をわれより取りたまふなかれ なんちの救のよろこびを我にかへし自由の靈をあたへて我をたもちたまへ さらばわれ愆をかける者になんちの途ををしへん罪人はなんちに歸りきたるべし 神よわが救のかみよ血をながし罪より我をたすけいだしたまへわが舌は聖たからになんちの義をうたはん 主よわが口唇をひらきたまへ 然はわが口なんちの頌美をあらはさん なんちは祭物をこのみたまはずもし然らずば我これをさしげんなんちまた燔祭をも悦びたまはず 神のものとめたまふ祭物はくだけたる靈魂なり 神よなんちは碎けたる悔しこゝろを藐しめたまふまじ ねがはくは聖意にしたがひてシオンにさいはひしエルサレムの石垣をきづきたまへ 其時なんち義のそなへものと燔祭と全きはんさいとを悦びたまはんかくて人々なんちの祭壇に牡牛をさしぐべし



第五二篇

エドム人ドエグ、サウルにきたりてダビデはアビメレクの家いへにきぬと告つひしときダビデがよみて伶長うたのかみにうたはしめたる歌調うたのうた

一 猛者いさやよなんぢ何いなればあしき企圖くはだてをもて自らほこるや神かみのあはれみは恒とこにたえざるなり 二 なんぢの舌したはあしきことをはかり利とき剃刀はさみのごとくいつはりをおこなふ 三 なんぢは善よよりも惡わるをこのみ正義ちせきをいふよりも虚偽うそをいふをこのむセラ 四 たばかりの舌したよなんぢはすべての物をくひほろぼす言ことばをこのむ 五 されば神かみとこしへまでも汝なんぢをくだきまた汝なんぢをとらへてその幕屋まくらよりぬきいだし生いるものの地ちよりなんぢの根ねをたやしたまはんセラ 六 義者よきひとはこれを見ておそれ彼かをわらひていはん 七 神かみをおのが力ちからとなさすその富とみのゆたかなるをたのみその惡わるをもて己おのをかたくせんとする人ひとをみよと 八 然しかはあれどわれは神かみの家いへにあるあをき橄欖えんぴんの樹きのごとし我われはいやとほながに神かみのあはれみに依頼たのままん 九 なんぢこの事ことをおこなひ給たまひしによりて我われとこしへになんぢに感謝かんしやうしなんぢの聖徒せいとのまへにて聖名せいなをまちのぞまんこは宜よろしきことなればなり

第五三篇

マハラツマハラツ(樂器の名、あるひ)にははせて伶長うたのかみにうたはしめたるダビデの歌調うたのうた

一 愚かなるものは心のうちに神かみなしといへりかれらは侮あはれたりかれらは憎にくむべき不義ふぎをおこなへり善よをおこなふ者ものなし 二 神かみは天あまより人ひとの子こをのぞみて悟さとるものと神かみをたづぬる者ものとありやなしやを見たまひしに 三 みな退ひききてことごとく汚よごれたり善よをなすものなし一人ひとりだになし 四 不義ふぎをおこなふものは知覺ちかくなきかかれらは物ものくふごとくわが民たみをくらひまた神かみをよばふことをせざるなり 五 かれらは懼おそるべきことなきときに大おほにおそれたり神かみはなんぢにむかひて營えいをつらぬるものの骨ほねをちらしたまへばなり 六 神かみかれらを棄すたまひしによりて汝なんぢかれらを辱はかしめたり 七 願ねがはしシオンよりイスラエルの救すくのいでんことを 八 神かみその民たみのとははれたるを返かへしたまふときヤコブはよろこびイスラエルは樂よろこまん

第五四篇

ジフ人のサウルにきたりてダビデはわれらの處ところにかくれをるにあらざやといひたりしとき

一 神かみよねがはくは汝なんぢの名なによりて我われをすくひなんぢの力ちからをもて我われをさばきたまへ 二 神かみよわが祈いのちをききたまへわが口くちのことばに耳みみをかたぶけたまへ 三 そは外人あらしはわれにさからひて起たりたり強暴きやうぼう人はわがたましひを索もとむるなりかれらは神かみをおのが前まへにおかざりきセラ 四 みよ神かみはわれをたすくるものなり 五 主しゅはわがたましひを保たもつものとともに在あり 六 主しゅはわが仇あだにそのあしきことの報むくをなしたまはん 七 願ねがはしなんぢの眞實まことによりて彼等かれらをほろぼしたまへ 八 我われよろこびて祭物さいぶつをなんぢに獻たまふ 九 エホバよ我われなんぢの名なにむかひて感謝かんしやうせん 十 こは宜よろしきことなればなり 十一 そはエホバはすべての患難あやまより我われをすくひたまへりわが目はわが仇あだにつきての願望ねがひをみたり

第五五篇

ダビデうたのかみに琴こたにてうたはしめたる歌調うたのうた

一 神かみよねがはくは耳みみをわが祈いのちにかたぶけたまへわが懇求こんきうをさけて身みをかくしたまふなかれ 二 われに聖意せいいをとめ我われにこたへたまへわれ歎息なげきによりてやすからず悲かなみうめくなり 三 これ仇あだのこゑと惡わるきもの暴虐はげとのゆゑなりそはかれら不義ふぎをわれに負おせ 四 いきどほりて我われにおひせまるなり 五 わが心こころわがうちに憂うれひいたみ死しのもろもろの恐懼おそわがうへにおちたり 六 おそれと戰慄せんりつとわれにのぞみ甚いただしき恐懼おそわれをおほへり 七 われ云いねがはくは餽かのごとく羽翼うよくのあらんことを 八 さらば我われとびさりて平安やすみをえん 九 みよ我われはるかにのがれさりて野のにすまんセラ 十 われ速すみかにのがれて暴風はげと狂風くるとをはなれん 十一 われ都みやこのうちに強暴きやうぼうとあらそひとをみたり 十二 主しゅよねがはくは彼等かれらをほろぼしたまへかれらの舌したをわかれしめたまへ 十三 彼等かれらはひるもよるも石垣いしがきのうへをあるきて邑むらをめぐる 十四 邑むらのうちには邪曲よこしまとあしき企圖くはだてとあり 十五 また惡わるきこと邑むらのうちにあるしへたげと欺詐あざむとはその街衢まちをはなることなし 十六 われを誘さそはれるものは仇あだたりしものにあらずもし然しかりしならば尙なほしの



ばれしなるべし 我にむかひて己をたかくせし者はわれを恨みたりしものにあらず若しかりしならば身をかくして彼をさけしなるべし されどこれ汝なりわれとおなじきもの わが友われと親しきものなり 互にしたしき語らひをなしまた會衆のなかに在てともに神の家にのぼりたりき 死は忽然かれらにのぞみその生るまゝにて陰府にくだらんことをそは惡事その住處にありその中にあればなり されど我はたゞ神をよばんエホバわれを救ひたまふべし 夕にあしたに靈にわれなげき且かなしみうめかん エホバわが聲をきいたまふべし エホバは我をせむる戰闘よりわが靈魂をあがなひいだして平安をえしめたまへり そはわれを攻るもの多かりければなり 太古よりいます者なる神はわが聲をきいてかれらを憐れたまふべし されらには變ることなく神をおそるゝことなし かの人はおのれと睦みをりしものに手をのべてその契約をけがしたり その口はなめらかにして乳醉のごとくなれどもその心はたゞかひなり その言はあぶらに勝りてやはらかなれどもぬきたる劍にことならず なんちの荷をエホバにゆだねよさらば汝をさへたまはん たゞしき人のうごかざるゝことを常にゆるしたまふまじ かくて神よなんちはかれらを亡の坑におとしいたたまはん血をながすものと詭計おほきものとは生ておのが日の半にもいたらざるべし 然はあれどわれは汝によりたまふ

第五六篇

あゝ神よねがはくは我をあはれみたまへ 人いきまきて我をのまんとし終日たゞかひて我をしへたぐわが仇ひねもす急喘てわれをのまんとす誇りたかぶりて我とたゞかふものおほし われおそるゝときは汝によりたまふまじ されらに終日わがことばを曲るなりその思念はことごとくわれにわざはひをなすかれらは群つどひて身をひそめ わが歩に目をとめてわが靈魂をうかひむとむ されらに不義をもてのが

れんとおもへり 神よねがはくは憤りてもろもろの民をたふしたまへ 汝わがあまたゝびの流離をかぞへたまへり なんちの革囊にわが涙をたくはへたまへ ことは皆なんちの冊にしるしあるにあらずや わがよびもとむる日にはわが仇しりぞかん われ神のわれを守りたまふことを知る われ神によりてその聖言をほめまつらん 我エホバによりてそのみことばを讀まつらん われ神によりたまのみたれば懼るゝことあらじ 人はわれに何をなしえんや 神よわがなんちにたてし誓はわれをまとへり われ感謝のさげものを汝にさげん 汝わがたましひを死よりすくひたまへばなり なんち我をたふさじとわが足をまもり生命の光のうちにて神のまへに我をあゆませ給ひしにあらずや

第五七篇

我をあはれみたまへ 神よわれをあはれみたまへ わが靈魂はなんちを避所とす われ禍害のすぎさるまではなんちの翼のかけを避所とせん 我はいとたかき神によばはん わがために百事をなしをへたまふ神によばはん 神はたすけを天よりおくりて我をのまんとする者おしるるときに我を救ひたまはん 神はその憐憫その眞實をおくりたまはん わがたましひは群る獅のなかにあり火のごとくもゆる者 その齒は戈のごとく矢のごとくその舌はとき劍のごとき人の子のなかに我ふしぬ 神よねがはくはみづからを天よりも高くしみさかえを全地のうへに擧たまへ されらにわが足をとらへんとて網をまうく わが靈魂はうなたる されらにわがまへに隣をほりたり而してみづからその中におちいれり せ わが心さだまれり 神よわがこゝろ定まれり われ謳ひまつらん 頌まつらん わが榮よさめよ 榮よさめよ われ黎明をよびさまさん 主よ われもろもろの民のなかにてなんちに感謝し もろもろの國のなかにて汝をほめうたはん そは汝のあはれみは大にして天にまでいたり なんちの眞實は雲にまでいたる 神よねがはくは自からを天よりも高くし 光榮を



あまねく地のうへに擧たまへ

第五八篇

一 ダビデがよみて「ほろぼすなかれ」といふ詞にあはせて、僂長にうたはしめたるミクダムのうた  
 心こころのうちうちに悪事あくじをおこなひ、その手ての強暴きやうぼうをこの地ちにはかりいだすなり、あしきものは胎たをはなるより背せき  
 とほざかり生なまれいづるより迷まよひていつはりをいふ、かれらの毒どくは蛇へびのどくのごとし、かれらは靈術まじないをおこなふ  
 ものの甚いたたくみにまじなふその聲こゑをだにきかざる耳みみふさぐ蟬せみの蚊かのごとし、神かみよかれらの口くちの齒はをりたま  
 へ、エホバよ壯獅さうしの牙はをぬきくだきたまへ、願ねがはかれらを流ながれゆく水みづのごとくに消失しょうじつしめ、その矢やをはなつ  
 ときは折よれたるごとくなし給たまはんことを、また融とてきえゆく蝸牛かたむねのごとく、婦つまのときならず産うむる日ひをみぬ嬰あやの  
 ごとくならしめ給へ、なんぢらの釜かまいまだ荊蕀しんじの火ひをうけざるさきに青あおをも燃もたるをもとに狂風きやうふうにて吹ふさり  
 たまはん、義者よきものはかれらが歸かへかへさるゝを見てよろこび、その足あしをあしきものの血ちのなかにてあらはん  
 二 かくて人はいふべし、實まことにたゞしきものに報賞ほうしょうあり、實まことにさばきをほどこしたまふ神かみはましますなりと

第五九篇

一 わが神かみよねがはくは我われをわが仇あだよりたすけいだし、われを高處たかところにおきて我われにさからひ起立おこたつものより脱だか  
 れしめたまへ、邪曲よこしまをおこなふものより我われをたすけいだし、血ちをながす人ひとより我われをすくひたまへ、視みよかれら  
 は潛ひそみかくれてわが靈魂たまごころをうかゞひ、猛者たけものむれつどひて我われをせむ、エホバよ此こゝはわれに愆とがあるにあらず、われに罪つと  
 あるにあらず、かれら趨たすりまはりて過失とがなきに我われをそこなはんとて、備たごをなす、ねがはくは我われをたすくるために  
 目をさまして見たまへ、なんぢエホバ萬軍ばんぐんの神かみイスラエルの神かみよ、ねがはくは目をさまして、もろもろの國くにに  
 のぞみたまへ、あしき罪人つとひにあはれみを加くへたまふなかれ、セラ、かれらは夕ゆふにかへりきたり、犬いぬのごとくほえて

「ほろぼすなかれ」といふ詞にあはせて、僂長にうたはしめたるミクダムの歌  
 サウル、ダビデを殺さんとし、人をおくりてその家いへをうかゞはしめし時、ダビデがよみて

七 邑むらをへありく、視みよかれらは口くちより悪あくをはく、そのくちびるに劍つるぎあり、かれらおもへらく誰たれありてこの言ことをきか  
 んやと、されどエホバよ汝なれはかれらをわらひもろもろの國くにをあざわらひたまはん、わが力ちからよ、われ汝なれをまち  
 のぞまん、神かみはわがたかき楯たもとなり、憐憫あはれみをたまふ神かみはわれを迎むかへたまはん、神かみはわが仇あだにつきての願望ねがひをわれに  
 見みさせたまはん、願ねがはかれらを殺ころしたまふなかれ、わが民たみつひに忘れやせん、主あまたわれらの盾たもとよ、大能ちからをもて  
 かれらを散ちし、また卑いやししたまへ、かれらがくちびるの言ことはその口くちのつみなり、かれらは詛うそと虚偽いつはりとをいひいづ  
 るによりてその傲慢ごうまんのためにとらへられしめたまへ、忿怒いらいをもてかれらをほろぼしたまへ、再びながらふる  
 ことなきまでに彼等かれらをほろぼしたまへ、ヤコブのなかに神かみいまして統治とくしめたまふことをかれらに知しりて、地の極はた  
 にまでおよぼしたまへ、セラ、かれらは夕ゆふにかへりきたり、犬いぬのごとくほえて、邑むらをへありくべし、かれらは  
 ゆきゝして食物けものをあさりもし飽あることなくば、夜よるとどまれり、されど我われはなんぢの大能ちからをうたひ、清晨あけにこゑを  
 あげて、なんぢの憐憫あはれみをうたひまつらん、なんぢわが迫せまりくるしみたる日にたかき楯たもととなり、わが避所かきかたとなりたまひ  
 たればなり、わがちからよ、我われなんぢにむかひて頌辭たほひことばをうたひまつらん、神かみはわがたかき楯たもとわれにあはれみを  
 たまふ神かみなればなり

第六〇篇

一 神かみよなんぢわれらを棄すわれらをちらし給へり、なんぢは憤いらいほりたまへり、ねがはくは再びわれらを歸かへしたま  
 へ、なんぢ國くにをふるはせてこれを毀こしたまへり、ねがはくはその多くの隣となりをおぎなひたまへ、そは國くにゆりうごく  
 なり、なんぢはその民たみにたへがたきことをしめし、人ひとをよろめかする酒さけをわれらに飲のしめ給へり、なんぢ  
 眞理まことのために擧あげしめんとして、汝なれをおそるゝものに一つの旗はたをあたへたまへり、セラ、ねがはくは右みぎの手てを

ダビデ、ナハライムのアラムおよびゾバのアラムとたゝかひをりしが、ヨアブかへりゆき、豊谷とよたににて  
 エドム人エドムじん一萬二千いちまんにせんをころし、とき敬調けいじょうをなさんとて、ダビデがよみて「隣詞の百合花」といふ詞にて  
 あはせて、僂長にうたはしめたるミクダムの歌



もて救をほどこしわれらに答をなして愛しみたまふものに助をえしめたまへ 神はその聖をもていひたまへりわれ甚くよろこばんわれシケムをわかちスコテの谷をはからん ギレアデはわがものマナセはわが有なり エフライムも亦わが首のまもりなり ユダはわが杖 モアブはわが足 鹽なり エドムにはわが腹をなげん ベリシテよわが故によりて聲をあげよと たれかわれを堅固なる邑にすゝましめんや 誰かわれをみちびきて エドムにゆきたるか 神よなんちはわれらを棄たまひしにあらすや 神よなんちはわれらの軍とともにいで ゆきたまはず ねがはくは助をわれにあたへて敵にむかはしめたまへ 人のたすけは空しければなり われらは神によりて勇しくはたらかんわれらの敵をふみたまふものは神なればなり

第六一篇

一 神よねがはくはわが哭聲をきゝたまへ わが祈にみこころをとめたまへ わが心くづほるるとき地のはてより汝をよばん なんぢ我をみちびきてわが及びがたきほどの高き磐にのぼらせたまへ なんぢはわが避所われを仇よりのがれしむる堅固なる楯なればなり われ永遠になんぢの帷幄にすまはん我なんぢの翼の下にのがれん セラ 神よなんちはわがもろの誓をきゝ名をおそるゝものにたまふ嗣業をわれにあたへたまへり なんぢは王の生命をのばしその年を幾代にもいたらせたまはん 王はとこしへに神のみまへにとどまらん ねがはくは仁と眞實とをそなへて彼をまもりたまへ さらば我とこしへに名をほめうたひて日ごとくにわがもろの誓をつくのひ果さん

一 わがたましひは黙してたゞ神をまつ わがすくひは神よりいづるなり 神こそはわが誓わがすくひなれ またわが高き楯にしあれば我いたくは動かされじ なんぢらは何のときまで人におしせまるや なんぢら相共にかたぶける石垣のごとく揺ぎうごける籬のごとくに人をたふさんとするか かれらは人を

第六二篇

一 わがたましひは黙してたゞ神をまつ わがすくひは神よりいづるなり 神こそはわが誓わがすくひなれ またわが高き楯にしあれば我いたくは動かされじ なんぢらは何のときまで人におしせまるや なんぢら相共にかたぶける石垣のごとく揺ぎうごける籬のごとくに人をたふさんとするか かれらは人を

たふとき位よりおとさんとのみ謀りいつはりをよろこびまたその口にてはいはひその心にてはのろふ セラ わがたましひと黙してたゞ神をまつ そはわがのぞみは神よりいづ 神こそはわが誓わがすくひなれ 又わがたかき楯にしあれば我はうごかされじ わが救とわが榮とは神にあり わがちからの誓わがさけどころは神にあり 民よいかなる時にも神によりたのめその前になんぢらの心をそゝぎいだせ 神はわれらの避所なり セラ 實にひくき人はむなしくたかき人はいつはりなり すべてかれらを權衡におかば上にあがりて虚しきものよりも軽きなり 暴虐をもて恃とするなかれ 掠奪ふをもてほころなかれ 富のましくはゝる時はこれに心をかくるなかれ ちからは神にあり 神ひとたび之をのたまへり われ二次これをきけり あゝ主よあはれみも亦なんぢにあり なんぢは人おのおのの作にしたがひて報をなしたまへばなり

第六三篇

一 神よなんぢはわが神なり われ切になんぢをたづねもとむ 水なき燥きおとろへたる地にある

ごとくわが靈魂はかわきて汝をのぞみ わが肉體はなんぢを戀したふ 曩にも我かくのごとく大權と榮光とをみんことをねがひ聖所にありて目をなんぢより離れしめざりき なんぢの仁慈はいのちにも勝れるゆゑにわが口唇はなんぢを讃まつらん 斯われはわが生るあひだ汝をいはひ名によりてわが手をあげん われ床にありて汝をおもひいで夜の更るまゝになんぢを深くおもはん時 わがたましひは髓と脂とにて饗さるゝごとく飽ことをえ わが口はよろこびの口唇をもてなんぢを讃たゝへん そはなんぢわが助となりたまひたれば我なんぢの翼のかけに入てよろこびたのしまん わがたましひはなんぢを慕追ふみぎの手はわれを支ふるなり 然どわがたましひを滅さんとて奪ねもとむるものは地のふかきところにゆき 又つるぎの刃にわたされ野犬の獲るところとなるべし しかれども王は神をよろこばん 神によりて誓をたつるものはみな誇ることをえん 虚偽をいふものの口はふさがるべければなり



第六四篇

伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 神よわがなげくときわが聲をきゝたまへわが生命をまもりて仇のおそれより脱かれしめたまへ  
 二 ねがはくは汝われをかくして悪をなすもの陰かなる謀略よりまぬかれしめ不義をおこなふもの喧嘩より  
 三 まぬかれしめ給へ かれらは劍のごとくおのが舌をときその弓をはり矢をつがへることく苦言をはなち  
 四 隠れたるところにて全者を射んとす俄かにこれを射ておそろふことなし 又また彼此にあしき企圖をはげまし  
 五 共にはかりてひそかに網をまうく斯ていふ誰かわれらを見んと かれらはさまざまの不義をたづねいだして  
 六 云われらは怒ろにたづね終れりとおのおの衷のおもひと心とはふかし 然はあれど神は矢にてかれらを射  
 七 たまふべし かれらは俄かに傷をうけん 斯てかれらの舌は其身にさからふがゆゑに遂にかれらは頭かんこれ  
 八 を見るものみな逃れざるべし moreover の人はおそれん而して神のみわざをのべつたへその作たまへること  
 九 を考ふべし 義者はエホバをよるこびて之によりたまんすべて心のなほきものは皆ほこることを得ん

第六五篇

伶長にうたはしめたる歌ダビデの讚美なり

一 あゝ神よさんびはシオンにて汝をまつ 人はみまへにて誓をはたさん 祈をきゝたまふものよ  
 二 諸人こそぞりて汝にきたらん 不義のことば我にかてり なんぢ我儕のもろもろの愆をきよめたまはん 汝に  
 三 えらばれ汝にちかづけられて大庭にすまふ者はさいはひなり われらはなんぢの家なんぢの宮のきよき處のめぐ  
 四 みにて飽くことをえん われらが救のかみよ 地と海とのもろもろの極なるきはめて遠ものの特とするなんぢは  
 五 公義によりて畏るべきことをもて我儕にこたへたまはん かみは大能をおびその權力によりてもろもろの山  
 六 をかたたくしめ 海のひびき狂瀾のひびきもろもろの民のかしがましきを鎮めたまへり されば極遠に  
 七 すめる人々もなんぢのくさぐさの豫兆をみておそろなんぢ朝夕のいづる處をよるこびて謳はしめたまふ  
 八 なんぢ地にのぞみて漑そぎおほいに之をゆたかにしたまへり 神のかはに水みちたり なんぢ如此そなへをなし

第六六篇

伶長にうたはしめたる讚美なり 歌なり

一 穀物をかれらにあたへたまへり なんぢ歌をおほいにうるほし敵をたひらにし白雨にてこれをやはらかに  
 二 にしその萌芽を祝し また恩恵をもて年の晁弁としたまへり なんぢの途には膏したれり 其の恩滴は  
 三 野の牧場をうるほし小山はみな歡びにかこまる 牧場はみな羊のむれを衣もろもろの谷は穀物におほはれ  
 四 たり かれらは皆よるこびてよばはりまた謳ふ

第六六篇

全地上神にむかひて歡びよばはれ

一 其の名の榮光をうたへその頌美をさかえしめよ かみ  
 二 に告まつれ 汝のもろもろの功用はおそろべきかな大なる力によりてなんぢの仇はなんぢに畏れしたがひ 全  
 三 地はなんぢを拜みてうたひ名をほめうたはんと セラ 來りて神のみわざをみよ 人の子孫にむかひて作たまふ  
 四 ことはおそろべきかな 神はうみをかへて乾ける地となしたまへり ひとびと歩行にて河をわたりきその處に  
 五 てわれらは神をよるこべり 神はその大能をもてとこしへに統治めその目は諸國をみたまふそむく者みづか  
 六 らを崇むべからず セラ moreover の民よわれらの神をほめまつれ神をほめたふる聲をきこえしめよ 神  
 七 はわれらの靈魂をながらへしめわれらの足のうごかさるゝことをゆるしたまはず 神よなんぢはわれらを試  
 八 みて白銀をねるごとくにわれらを鍊たまひたればなり 汝われらを網にひきいれわれらの腰におもき荷をお  
 九 き 人々をわれらの首のうへに騎こえしめたまひき われらは火のなか水のなかをすぎゆけり されど汝その中  
 一〇 よりわれらをひきいだし豊盛なる處にいたらしめたまへり われ燔祭をもてなんぢの家にゆかん 迫りくるし  
 一一 みたるときにわが口唇のいひいでわが口ののべし誓をなんぢに懐はん われ肥たるものを燔祭とし牡羊を馨香  
 一二 として汝にさけ牡牛と牡山羊とをそなへまつらん セラ 神をおそろふ人よ みな來りてきけ われ神のわが  
 一三 たましひのために作たまへることをのべん われわが口をもて神によばはり また舌をもてあがむ 然るに  
 一四 わが心にしれる不義あらば主はわれにきゝたまふまじ されどまことに神はきゝたまへり 聖意をわがいのりの



聲にとめたまへり 神はほむべきかなわが祈をしりぞけず その憐憫をわれよりとりのぞきたまはざりき

第六七篇

ねがはくは神われらをあはれみわれらをさきはひてその聖顔をわれらのうへに照したまはん

ことをセラ 此はなんぢの途のあまねく地にしられなんぢの救のもろもろの國のうちに知れんがためなり

かみよ庶民はなんぢに感謝し もろもろの民はみな汝をほめたへん もろもろの國はたのしみ又よるこび

うたふべしなんぢは直をもて庶民をさばき地のうへなる萬の國ををさめたまふべければなり 神よ

たみらはなんぢに感謝し もろもろの民はみな汝をほめたへん 地は産物をいだせり 神わが神はわれらを

福ひたまはん 神われらをさきはひたまふべし かくて地のもろもろの極ごとく神をおそれん

第六八篇

ねがはくは神おきたまへ その仇はことごとくちり神をにくむものは前よりけざらんことを

煙のおひやらるゝごとくかれらを驅逐たまへ 惡きものは火のまへに蠟のとくるごとく 神のみまへにてほろぶ

べし されど義きものには歡喜あり かれら神の前にてよるこびをどらん實にたのしみて喜ばん 神のみまへ

にうたへ その名をほめたへよ 乘て野をすぐる者のために大道をきづけかれの名をヤハとよぶ その前による

こびをどれ きよき住居にまします神はみなしごの父やもめの審士なり 神はよるべなきものを家族の中に

をらしめ囚人をときて 福社にみちびきたまふされど悖逆者はうるほひなき地にすめり 神よなんぢは民

にさきだちいでて野をすゝみゆきたまひき 神よなんぢの嗣業の地のつかれおとろへたるとき豊かなる雨をふらせ

て之をかたくしたまへり 義になんぢの公會はその中にとどまれり 神よなんぢは恵をもて貧きもののために

預備をなしたまひき 主みことばを賜ふその佳音をのぶる婦女はおほくして群をなせり もろもろの軍旅

の王たちはにげさる 逃去りたれば家なる婦女はその掠物をわかつ なんぢら羊の半のうちにあふすときは鶴の

つばさの白銀におほはれその毛の黄金におほはるゝがとし 全能者かして列王をちらし給へるときはサ

ルモンシナイの山に雪ふりたるがごとくなりき パシヤンのやまは神の山なりパシヤンのやまは峰かさなれる山なり

峰かさなれるもろもろの山よ なんぢら何なれば神の住所にえらびたまへる山をねたみ見るや 然れエホバは

永遠にこの山にすみたまはん 神の戦車はよろづに萬をかさね干にちぢをくはふ 主その中にいませり 聖所

にいますごとくシナイの山にいましゝがとし なんぢら高處にのぼり虜者をとりこにしてひきぬる禮物を人の

なかよりも叛逆者のなかよりも受たまへり ヤハの神こゝに住たまはんが爲なり 日々にわれらの荷を

おひたまふ主われらのすくひの神はほむべきかな 神はしばしばわれらを助けたまへる神なり 死より

のがれうるは主エホバに由る 神はその仇のかうべを撃やぶりたまはん 愆のなかにとどまるものの髪おほき

顛頂をうちやぶりたまはん 主いへらく我パシヤンよりかれらを携へかへり海地中海のふかき所よりたづさへ

歸らん 斯てなんぢの足をそのあたの血にひたし之をなんぢの犬の舌になめしめん 神よすべての人は

なんぢの進行きたまふをみたり わが神わが王の聖所にすゝみゆきたまふを見たり 義うつ重女のなかに

ありて譚ふものは前にゆききひくものは後にしたがへり なんぢらすべての會にて神をほめよ イスラエルの

みなもとより出るなんぢらよ 主をほめまつれ 彼處にかれらを統るとしわかきベニヤミンあり ユダの諸侯と

その群衆とありまたゼブルンのきみたちナフタリの諸侯あり なんぢの神はなんぢの力をたてたまへり

神よなんぢ我儕のためになしたまひし事をかたくしたまへ エルサレムなるなんぢの宮のために列王なんぢに

禮物をさゝげん ねがはくは葦間の獸むらがる牯犢のごときもろもろの民をいましめてかれらに白銀を

たづさへきたりみづから服ふことを爲しめたまへ 神はたゝかひを好むもろもろの民をちらしたまへり

諸侯はエジプトよりきたり エテオピアはあわたしく神にむかひて手をのべん 地のもろもろのくによ



神のまへにうたへ主をほめうたへセラ 上古よりの天の天にのりたまふ者にむかひてうたへみよ主はみこまを發したまふ勢力ある聲をいだしたまふ なんぢらちからを神に歸せよその稜威はイスラエルの上にとどまりその大能は雲のなかにあり 神のおそるべき状態はきよき所よりあらはるイスラエルの神はその民にちからと勢力とをあたへたまふ神はほむべきかな

第六九篇

百合花にあはせて伶長にうたはしめたるダビデのうた

神よねがはくは我をすくひたまへ 大水ながれきたりて我がたましひにまでおよべり われ立止なきふかき泥の中にしづめりわれ深水におちいるおほみづわが上をあふれすや われ歎息によりてつかれたりわが喉はかわきわが目はわが神をまちわびておとろへぬ 故なくしてわれをにくむ者わがかしらの髪よりもおほく謂なくしてわが仇となり我をほろぼさんとするもの勢力つよしわれ掠めざりしものをも償はせらる 神よなんぢはわが愚なるをしりたまふわがもろもろの罪はなんぢにかくれざるなり 萬軍のエホバ主よねがはくは汝をまぢのぞむ者をわが故によりて辱かしめらるゝことなからしめたまへイスラエルの神よねがはくはなんぢを求むる者をわが故によりて恥をおはしめらるゝことなからしめたまへ 我はなんぢのために諍をおひ恥はわが面をおほひたればなり われわが兄弟には旅人のごとくわが母の子には外人のごとくなれり そはなんぢの家をおもふ熱心われをくらひ汝をそしるもの諍われにおよべり われ涙をながして食をたちわが靈魂をなげかすれば反てこれによりて諍をうく われ魚布をころもとなしゝにかれらが諍語となりぬ 門にすわる者はわがうへをかたる われは醉狂たるものに驅ひはやされたり 然はあれどエホバよわれは恵のときに汝にいのるねがはくは神よなんぢの憐憫のおほきによりて汝のすくひの眞實をもて我にこたへたまへ ねがはくは泥のなかより我をたすけいだして沈まざらしめたまへ 我をにくむものより深水よりたすけいだしたまへ 大水われを淹ふことなく淵われをのむことなく坑その口をわがうへに閉ることなから

二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

しめたまへ エホバよねがはくは我にこたへたまへなんぢの仁慈うるはしければなりなんぢの憐憫はおほしわれに歸りきたりたまへ 面をなんぢの僕にかくしたまふなかれわれ迫りくるしめりねがはくは速かに我にこたへたまへ わがたましひに近くよりて之をあがなひわが仇のゆゑに我をすくひたまへ 汝はわがうる諍とはちと侮辱とをしりたまへりわが敵はみな汝のみまへにあり 諍諍わが心をくだきぬれば我いたくわづらへりわれ憐憫をあたる者をまちたれど一人だになく慰むるものを俟たれど一人をもみざりき かれらは苦草をわがくひものにあたへわが渴けるときに醋をのませたり ねがはくは彼等のまへなる筵は網となりそのたのむ安逸はつひに網となれ その目をくらくして見しめずその腰をつねにふるはしめたまへ 願くはなんぢの忿恚をかれらのうへにそゝぎ汝のいかりの猛烈をかれらに追及せたまへ かれらの屋をむなしくせよその幕屋に人をすまはするなかれ かれらはなんぢが撃たまひたる者をせめなんぢが傷けたまひたるものの痛をかたりふるればなり ねがはくはかれらの不義に不義をくはへてなんぢの義にあづからせ給ふなかれ かれらを生命の册よりけして義きものとともに記さるゝことなからしめたまへ 斯てわれはくるしみ且うれひあり神よねがはくはなんぢの救われを高くにおかんとす われ歌をもて神の名をほめたまへ感謝をもて神をあがめまつらん 此はをうしまたは角と蹄とある力つよき牡牛にまさりてエホバよろこびたまはん 謙遜者はこれを見てよろこべり神をしたふ者よなんぢらの心はいくべし エホバは乏しきものをきゝその俘囚をかるしめたまはさればなり 天地はエホバをほめ蒼海とその中にうごくあらゆるものとはエホバを讃まつるべし 神はシオンをすくひユダのもろもろの邑を建たまふべければなり かれらは其處にすみ且これをおのが有とせん その僕のすゑも亦これを嗣その名をいつくしむ者その中にすまん

第七〇篇

伶長にうたはしめたるダビデが記念のうた

神よねがはくは我をすくひたまへ エホバよ速きたりて我をたすけたまへ わが靈魂をたづぬる



もの恥あわてんことをわが害はるゝをよるこぶもの後にしりぞきて恥をおはんことを  
 視よやといふもののおのが恥によりて後にしりぞかんことを すべて汝をたづねもとむる者のなんちによりて  
 樂みよろこばんことをなんちの救をしたふものつねに神は大なるかなととなへんことを われは苦しみ且  
 ともし神よいそきて我にきたりたまへ 汝はわが助われを救ふものなり エホバよねがはくは猶豫たまふなけれ

第七一篇

義をもて我をたすけ我をまぬかれしめたまへなんちの耳をわれに傾けて我をすくひたまへ  
 ね

がはくは汝わがすまひの磐となりたまへわれ恒にそのところに往くことを得んなんち我をすくはんとして勅命を  
 いだしたまへりそは汝はわが磐わが城なり わが神よあしきものの手より不義殘忍なる人のてより我をまぬ  
 かれしめたまへ 主エホバよなんちはわが望なりわが幼少よりの恃なり われ胎をはなるゝより汝にまも  
 られ母の腹にありしときより汝にめぐまれたり 我つねに汝をほめたゝへん 我おほくの人にあやしまるゝこ  
 とき者となれり然どなんちはわが堅固なる避所なり なんちの頌辭となんちの頌美とは終日わが口にみちん  
 わが年老ぬるとき我をすてたまふなけれわが力おとろふるとき我をはなれたまふなけれ わが仇はわが  
 ことを論らひわが靈魂をうかいふ者はたがひに譲ていふ 神かれを離れたり彼をたすくる者なし かれを追て  
 とらへよと 神よわれに遠ざかりたまふなけれわが神よとく來りて我をたすけたまへ わがたましひの  
 敵はち且おとろへ我をそこなはんとするものは誘と辱とにおほはれよ されど我はたえず望をいだきていや  
 ますます汝をほめたゝへん わが口はひねもす汝の義となんちの救とをかたらんわれその數をしらざれば  
 なり われは主エホバの大能の事跡をたづさへゆかんわれは只なんちの義のみをかたらん 神よなんち  
 われを幼少より教へたまへりわれ今にいたるまで汝のくすしき事跡をのべつたへたり 神よねがはくは  
 われ老て頭髮しろくなるとも我がなんちの力を次代にのべつたへなんちの大能を世にうまれいづる凡のものに

宣傳ふるまで我をはなれ給ふなけれ 神よなんちの義もまた甚たかしなんちは大なることをなしたまへり  
 神よたれか汝にひとしき者あらんや 汝われらを多のおもき苦難にあはせたまへりなんち再びわれらを活し  
 われらを地の深所よりあげたまはん ねがはくは我をいよいよ大ならしめ歸りきたりて我をなぐさめ給へ  
 わが神よさらばわれ等をもて汝をほめなんちの眞實をほめたゝへんイスラエルの聖者よわれ等をもて  
 なんちを諷うたはん われ聖前にうたふときわが口唇よろこびなんちの贖ひたまへるわが靈魂おほいに喜ばん  
 わが舌もまた終日なんちの義をかたらんわれを害はんとするもの愧惶つればなり

第七二篇

神よねがはくは汝のもろもろの審判を王にあたへなんちの義をわうの子にあたへたまへ かれ

は義をもてなんちの民をさばき公平をもて苦しむものを鞠かん 義によりて山と岡とは民に平康をあたふべし  
 かれは民のゝるしむ者のために審判をなし乏しきものの子孫をすくひ磨ぐるものを壊きたまはん かれら  
 は日と月とのあらんかぎり世々おしなべて汝をおそるべし かれは刈とれる牧にふる雨のごとく地をうるほす  
 白雨のごとくのぞまん かれの世にたゞしき者はさかえ平和は月のうするまで豊かならん またその政治は  
 海より海にいたり河より地のはてにおよぶべし 野にをる者はそのまへに屈みその仇は塵をなめん タル  
 シシおよび島々の王たちは貢ををさめシバとセバの王たちは禮物をさしげん もろもろの王はそのまへに  
 俯伏しもろもろの國はかれにつかへん かれは乏しき者をその叫ぶときにすくひ 助けなき苦しむ者をたすけ  
 弱きものと乏しき者とをあはれみ乏しきものの靈魂をすくひ かれらのたましひを暴虐と強暴とより  
 あがなひたまふその血はみまへに貴かるべし かれらは存ふべし人はシバの黄金をさしげてかれのために  
 恒にいのり終日かれをいはん 國のうち五穀ゆたかにしてその實はレバノンのごとく山のいたゞきにそよぎ  
 邑の人々は地の草のごとく榮ゆべし かれの名はつねにたえず かれの名は日の久しきごとくに絶ることなし



人はかれによりて福祉をえんもろもろの國はかれをさいはひなる者ととなへん  
 一八 たゞイスラエルの神のみ奇しき事跡をなしたまへり 神エホバはほむべきかな  
 一九 その榮光の名はよゝにほむべきかな全地はその榮光にて滿べしアーメンアーメン  
 二〇 エッサイの子ダビデの祈はをばりぬ

第七三篇

アサフのうた

神はイスラエルにむかひ心のきよきものに對ひてまことに恵あり 然はあれどわれはわが足つまづくばかりわが歩すべかりにてありき  
 一 此はわれ惡きもの榮ゆるを見てその誇れる者をねたみしによる  
 二 かれらは死るに苦しみなくそのちからは反てかたし  
 三 かれらは人のごとく愛にをらす人のごとく患難にあふことなし  
 四 このゆゑに傲慢は妝飾のごとくその頸をめぐり 強暴はころものごとく彼等をおほへり  
 五 かれら肥ふとりてその目とびいで心の欲にまさりて物をうるなり  
 六 また嘲笑をなし惡をもて暴虐のごとばをいだし高ぶりてものいふ  
 七 その口を天におきその舌を地にあまねく往しむ  
 八 このゆゑにかれの民はこゝにかへり水のみちたる杯をしぼりいだして  
 九 いへらく神いかで知たまはんや 至上者に知識あらんやと  
 一〇 視よかれらは惡きものなるに常にやすらかにしてその富ましくはれり  
 一一 誠に我はいたづらに心をきよめ罪をかさずして手をあらひたり  
 一二 そはわれ終日なやみにあひ朝ごとに責をうけしなり  
 一三 われもし斯ることを述んといひしならば我なんちが子孫の代をあやまらせしならん  
 一四 われこれらの道理をしらんとして思ひめぐらしむにわが眼いたく痛たり  
 一五 われ神の聖所にゆきてかれらの結局をふかく思へるまでは然りき  
 一六 誠になんちはかれらを滑かなるところにおきかれらを滅亡におとしれ給ふ  
 一七 かれらは瞬間にやぶれたるかな 彼等は恐怖をもてことごとく滅びたり  
 一八 主よなんち目をさましてかれらが像をかるしめたまはんときは 夢みし人の目さめたるがごとし  
 一九 わが心はうれへわが腎はさゞれたり  
 二〇 われおろかにして知覺なし聖前にありて黙にひとしかりき  
 二一 されど我つねになんちとともにあり 汝わが右手をたもちたまへり  
 二二 なんちその訓諭をもて我を

みちびき後またわれをうけて榮光のうちに入たまはん  
 二三 汝のほかに我たれをか天にもたん地にはなんちの他にわが慕ふものなし  
 二四 わが身とわが心とはおとろふされど神はわがこゝろの磐わがとこしへの嗣業なり  
 二五 視よなんちに遠きものは滅びん 汝をばなれて濫淫をおこなふ者はみななんち之をほろぼしたまひたり  
 二六 神にちかづき奉るは我によきことなり われは主エホバを居所としてそのもろもろの事跡をのべつたへん

第七四篇

アサフの歌調のうた

神よいかなれば汝われらをかぎりなく棄たまひしや 奈何ばなんちの草苑の羊にみいかりの煙あがれるや  
 一 ねがはくは往昔なんちが買求めたまへる公會ゆづりの支派となさんとて贖ひたまへるものと思ひいでたまへ  
 二 又なんちが住たまふシオンのおもひいで給へ  
 三 とこしへの滅亡の跡にみあしを向たまへ 仇は聖所にてもろもろの惡きわざをおこなへり  
 四 なんちの敵はなんちの集のなかに吼たけびおのが旗をたてて誌とせり  
 五 かれらは林のしげみにて斧をあぐる人の状にみゆ  
 六 いま鐵と鑼とをもて聖所のなかなる彫刻めるものをことごとく毀ちおとせり  
 七 かれらはなんちの聖所に火をかけ名の居所をけがして地におとしたり  
 八 かれら心のうちにいふわれらことごとく之をばちあらさんとかくて國內なる神のもろもろの會堂をやきつくせり  
 九 われらの誌はみえず預言者も今はなし 斯ていくその時をかふべきわれらのうちに知るものなし  
 一〇 神よ敵はいくその時をふるまでしるや 仇はなんちの名をとこしへに汚すならんか  
 一一 いかなれば汝その手みぎの手をひきたまふや  
 一二 ねがはくは手をふところよりいだしてかれらを滅したまへ  
 一三 神はいにしへよりわが王なり すぐひを世の中におこなひたまへり  
 一四 なんちその力をもて海をわかち水のなかなる龍の首をくだき  
 一五 鰐のかうべをうちくだき野にすめる民にあたへて食となしたまへり  
 一六 なんちは泉と水流とをひらき 又もろもろの大河をからしたまへり  
 一七 晝はなんちのもの夜も又汝のものなり なんちは光と日とをそなへ  
 一八 あまねく地のもろもろの界をたて夏と冬とをつくりたまへり  
 一九 エホバよ仇はなんちをそしり愚かなる民はなんちの名をけが



せりこの事をおもひいでたまへ 願くはなんぢの鶴のたましひを野のあらしにわたしたまふなかれ 苦しむもの命をこしへに忘れたまふなかれ 契約をかへりみたまへ 地のくらきところは強暴の宅にて充たればなり ねがはくは虐げらるゝものを慚返かしめ給ふなかれ 憫るものと苦しむものとに聖名をほめたへしめたまへ 神よおきてなんぢの訟をあげつらひ思かなるもの終日なんぢを誘れるをみこゝろに記したまへ なんぢの敵の聲をわすれたまふなかれ 汝にさからひて起りたつ者のかしがましき聲はたえずあがり

第七五篇

「滅すなかれ」といふ詞にあはせて俗長にうたはしめたるアサフの歌なり 讚美なり

神よわれら汝にかんしやすわれら感謝す なんぢの名はちかく坐せばなり もろもろの人はなんぢの奇しき事跡をかたりあへり 定りたる期いたらば我なほき審判をなさん 地とすべての之にすむものと消去しとき我そのもろもろの柱をたてたりセツ われ誇れるものに誇りかにおこなふなかれといひ 惡きものに角をあぐるなかれといへり なんぢらの角をたかく擧るなかれ頭をかたくして高りいふなかれ 擧ること 是東よりにあらず西よりにあらず また南よりにあらずなり たい神のみ審士にましますば此をさげ彼をあげたまふ エホバの手にさかづきありて酒あわだてり その中にもまじりてみつ 神これをそまぎいだせり 誠とその洋は地のすべてのあしき者しほりて飲むべし されど我はヤコブの神のべつたへん とこしへに讀うたはん われ惡きものすべての角をきりはなたん 義きもの角はあげらるべし

第七六篇

琴にあはせて俗長にうたはしめたるアサフの歌なり 讚美なり

神はユダにしられたまへり その名はイスラエルに大なり またサレムの中にその幕屋あり その居所はシオンにあり 彼所にてかれは弓の火矢ををり盾と劍と戰陣とをやぶりたまひきセツ なんぢの榮光あり 掠めうばふ山よりもたふとし 心のつよきものは掠めらる かれらは睡にしづみ勇ましきものは皆その手を見うしなへり ヤコブの神よなんぢの叱咤によりて戰車と馬とともに深睡につけり 神よなん

ちこそ懼るべきものなれ 一たび怒りたまふときは誰かみまへに立えんや なんとち天より宣告をのりたまへり 地のへりくだる者をみなすくはんとて 神のさばきに立たまへるとき地はおそれ黙したりセツ 實に人のいかりは汝をほむべし 怒のあまりは汝おのれの帯としたまはん なんとちの神エホバにちかひをたてて 償へそのまはりなるすべての者はおそるべき エホバに禮物をさぐべし エホバはもろもろの諸侯のたましひを絶たまはん エホバは地の王たちのおそるべき者なり

第七七篇

エドトンの體にしたがひて俗長にうたはしめたるアサフのうた

我わがこゑをあげて神によははん われ聲を神にあげなばその耳をわれにかたぶけたまははん わがなやみの日にわれ主をたづねまつれり 夜わが手をのべてゆるむることなかりき わがたましひは慰めらるるをいなみたり われ神をおもひいでて 打なやむ われ思ひなげきてわが靈魂おとろへぬセツ なんとちわが眼をさへて閉がしめたまはず 我はものいふこと能はぬほどに惱みたり われむかしの日にしへの年をおもへり われ夜わが歌をおもひいづ 我わが心にてふかくおもひわが靈魂はねもころに尋ねもとむ 主はとこしへに棄たまふや 再びめぐみを垂たまはざるや その憐憫はのこりなく永遠にさり そのちかひは世々ながく廢れたるや 神は恩をほどこすことを忘れたまふや 怒をもてそのあはれみを滅たまふやセツ 斯るときに我いへらく此はたゞわが弱きがゆゑのみいで至上者のみぎの手のもろもろの年をおもひいでん われヤハの作爲をのべとなへん われ往古よりありし汝がくすしきみわざを思ひいださん また我なんぢのすべての作爲をおもひいで汝のなしたまへることを深くおもはん 神よなんぢの途はいとよし 神のごとく大なる神はたれぞや なんとちは奇きみわざをなしたまへる神なり もろもろの民のあひだにその大能をしめし その臂をもてヤコブ、ヨセフの子輩なんぢの民をあがなひたまへりセツ かみよ大水なんぢを見たり おほみづ汝をみてをのゝき淵もまたふるへり 雲はみづをそまぎいだし 空はひゞきをいだし なんぢの矢は



はしりいでたり 一八 なんぢの雷鳴のこゑは暴風のうちにありき 電光は世をてらし地はふるひうごけり 二〇  
 ちの大道は海のなかにあり なんぢの徑はおほみづの中にあり なんぢの蹤跡はたづねがたかりき 二二 なんぢその  
 民をモーセとアロンとの手によりて羊の群のごとくみちびきたまへり

第七八篇

アサフの歌調のうた

一 わが民よわが教訓をきゝわが口のことばになんぢらの耳をかたぶけよ 二 われ口をひらきて  
 譬喩をまうけいにしへの支幽なる語をかたりいでん 三 是われらが義にきゝしところ知しところ又われらが  
 列祖のかたりつたへし所なり 四 われら之をその子孫にかくさすエホバのもろもろの頌美と能力とそなしたま  
 へる奇しき事跡とをきたらんとする世につげん 五 そはエホバ證詞をヤコブのうちにたて律法をイスラエルのう  
 ちに定めてその子孫にしらすべきことをわれらの列祖におぼせたまひたればなり 六 これ來らんとする代のちに  
 生るる子孫がこれを知みづから起りてそのまた子孫につたへ 七 かれらをして神によりたのみ神のみわざを忘れ  
 ずその誠命をまもらしめん爲なり 八 またその列祖のごとく頑固にしてそむくもの類となりそのころ修ま  
 らずそのたましひ神に忠ならざる類とならざらん爲なり 九 エフライムのこらは武具とへの弓をたづさへし  
 に戦ひの日にうしろをそむけたり 一〇 かれら神のちかひをまもらずそのおきてを履ことをいなみ 一一 エホバの  
 なしたまへることかれらに示したまへる奇しき事跡とをわすれたり 一二 神はエジプトの國にてゾアンの野にて  
 妙なる事をかれらの列祖のまへになしたまへり 一三 すなはち海をさきてかれらを通ぎしめ水をつみて堆かくし  
 たまへり 一四 ひるは雲をもてかれらをかみちびき夜はよすがら火の光をもてこれを導きたまへり 一五 神はあれの  
 にて磐をさき大なる淵より液がごとくにかれらに飲しめ 一六 また磐より流をひきて河のごとくに水をながれしめ  
 たまへり 一七 然るにかれら尙たえまなく罪ををかしめて神にさからひ荒野にて至上者にそむき 一八 またおのが怒の  
 ために食をもとめてその心のうちに神をこゝろみたり 一九 然のみならずかれらは神にさからひていへり 神は

三〇 荒野にて筵をまうけたまふを得んや 三一 みよ神いはを撃たまへば水ほどばしりいで流あぶれたり 糶をもあたへ  
 たまふを得んや神はその民のために肉をそなへたまはんやと 三二 この故にエホバこれを聞いていきどほりたまひき  
 火はヤコブにむかひてもえあがり怒はイスラエルにむかひて立騰れり 三三 こはかれら神を信ぜずその教にたのま  
 ざりし故なり 三四 されどなほ神はうへなる雲に命じて天の戸をひらき 三五 彼等のうへにマナをふらせて食はしめ  
 天の穀物をあたへたまへり 三六 人みな勇士の糶をくらへり 神はかれらに食物をおくりて飽足らしめたまふ  
 神は天に東風をふかせ大能もて南の風をみちびきたまへり 三七 神はかれらのうへに塵のごとく肉をふらせ  
 海の沙のごとく翼ある鳥をふらせて 三八 その營のなかその住所のまはりに落したまへり 三九 斯てかれらは食ひて  
 飽たりぬ神はこれにその欲みしものを與へたまへり 四〇 かれらが未だその怒をはなれず食物のなほ口のうちに  
 あるほどに 神のいかり既かれらに對ひてたちのほり彼等のうちにて最もこえたる者をころしイスラエルの  
 わかき男をうちたふしたまへり 四一 これらの事ありしかど彼等はなほ罪ををかしめてその奇しきみわざを信ぜざり  
 しかば 神はかれらの目を空しくすくさせその年をおそれつゝ過させたまへり 四二 神かれらを殺したまへる  
 時かれら神をたづね歸りきたりて懇ろに神をもとめたり 四三 かくて神はおのれの誓いとたかき神はおのれの  
 贈主なることをおもひいでたり 四四 然はあれど彼等はたゞその口をもて神にへつらひその舌をもて神にいつ  
 はりをいひたりしのみ 四五 そはかれらのこゝろは神にむかひて堅からずその契約をまもるに忠信ならざりき  
 四六 されど神はあれみに充たまへばかれらの不義をゆるして亡したまはず屢はそのみいかりを轉してことごと  
 くは忿怒をふりおこし給はざりき 四七 又かれがたゞ肉にして過去ばふたゞび歸りこぬ風なるをおもひいで給へり  
 四八 かれらは野にて神にそむき荒野にて神をうれしめしこと幾度ぞや 四九 かれらかへすがへす神をこゝろみ  
 イスラエルの聖者をはづかしめたり 五〇 かれらは神の手をも敵より贖ひたまひし日をおもひいでざりき  
 五一 神はそのもろもろの豫兆をエジプトにあらはしその奇しき事をゾアンの野にあらはし 五二 かれらの河を血に



かはらせてその流を飲あたはざらしめ 又また蛇の群をおくりてかれらをくはしめ蛙をおくりてかれらをこさせ  
 たまへり 神はかれらの田産を逐賊にわたしかれらの勤勞を蝗にあたへたまへり 神は雹をもてかれら  
 の葡萄の樹をからし霜をもてかれらの桑の樹をからし その家畜をへうにわたしその群をもゆる閃電にわた  
 し かれらの上にはげしき怒といきどほりと怨恨となやみと禍害のつかひの群とをなげいだし給へり 神は  
 その怒をもらす道をまうけ かれらのたましひを死よりまぬかれしめすそのいのちを疫癘にわたし エジプト  
 にてすべての初子をうちハムの幕屋にてかれらの力の始をうちたまへり されどおのれの民を羊のごとくに  
 引いだしかれらを曠野にてけだもの群のごとくにみちびき かれらをとみなひておそれなく安けからしめ  
 給へりされど海はかれらの仇をおほへり 神はその聖所のさかひその右の手にて購たまへるこの山に彼らを  
 携へたまへり 又かれらの前にもろもろの國人を逐ひいだし準繩をもちひその地をわかつて嗣業となし  
 イスラエルの族をかれらの幕屋にすまはせたまへり 然はあれど彼等はいとたかき神をこゝろみ之にそむきて  
 そのもろもろの證詞をまもらず 叛きしりぞきてその列祖の如く眞實をうしなひくるへる弓のごとくひるが  
 へりて逸ゆけり 高處をまうけて神のいきどほりをひき刻める像にて神の嫉妬をおこしたり 神きゝたま  
 ひて甚だしくいかり大にイスラエルを憎みたまひしかば 人々の間におきたまひし幕屋なるシロのあげばりを  
 棄さり その力をとりことならしめその榮光を敵の手にわたし その民を劍にあたへその嗣業にむかひて  
 甚だしく怒りたまへり 火はかれらのわかき男をやきつくしかれらの處女はその婚姻の歌によりて響らるゝ  
 ことなく かれらの祭司はつるぎにて仆れかれらの家婦は嬰のなげきだにせざりき 斯るときに主は  
 ねぶりし者のさめしごとく勇士の酒によりてさけぶがごとく目さめたまひて その敵をうちしりぞけとこし  
 への辱をかれらに負せたまへり またヨセフの幕屋をいなみエフライムの族をえらばす ユダの族その  
 いつくしみたまふシオンの山をえらびたまへり その聖所を山のごとく永遠にさだめたまへる地のごとくに立

たまへり またその僕ダビデをえらびて羊の宰のなかよりとり 乳をあたふる牝羊にしたがひゆく勤のうち  
 より携へきたりてその民ヤコブその嗣業イスラエルを牧はせたまへり 斯てダビデはそのこゝろの完全に  
 したがひてかれらを牧ひその手のたくみをもて之をみちびけり

第七九篇

アサフのうた

あゝ神よもろもろの異邦人はなんちの嗣業の地ををかしなんちの聖宮をけがしエルサレムを  
 こぼちて磔堆となし なんちの僕のしかばねをそらの鳥に與へて餌となしなんちの聖徒の肉を地のけものに  
 あたへ 其の血をエルサレムのめぐりに水のごとく流したり されど之をばうむる人なし われらは隣人に  
 そしられ四周のひとびとに侮られ嘲けらるゝものとなれり エホバよ斯て幾何時をへたまふや汝とこしへに  
 怒たまふやなんちのねたみは火のごとく燃るか 願くはなんちを護ることくにびと聖名をよばざるもろも  
 ろの國のうへに烈怒をそまきたまへ かれらはヤコブを呑その住處をあらしたればなり われらにむかひて  
 先祖のよこしまなるわざを記念したまふなかれ願くはなんちの憐憫をもて速かにわれらを迎へたまへ われらは  
 貶されて甚だしく卑くなりたればなり われらのすくひの神よ名のえいくわうのために我儕をたすけ名のため  
 にわれらを救ひわれらの罪をのぞきたまへ いかなれば異邦人はいふかれらの神はいづくにありやと願く  
 はなんちの僕等がながされし血の報をわれらの目前になして異邦人にしらしめたまへ ねがはくは汝のみまへ  
 にとらはれびとの嘆息のとどかんことをなんちの大なる能力により死にさだめられし者をまもりて存へしめ  
 たまへ 主よわれらの隣人のなんちをそしりたる謗を七倍ましてその懐にむくいかへしたまへ 然ばわれら  
 なんちの民なんちの草苑のひつじは永遠になんちに感謝しその頌辭を世々あらはさん

第八〇篇

證阿の百合花といへる調にあはせて伶長にうたはしめたるアサフの歌

イスラエルの牧者よひつじの群のごとくヨセフを導きたまふもの上耳をかたぶけたまへゲルビム



のうへに坐したまふものよ 光をはなちたまへ エフライム、ベニヤミン、マナセの前になんぢの力をふりおこし來りてわれらを救ひたまへ 神よふたゝびわれらを復しなんぢの聖顔のひかりをてらしたまへ 然ばわれら救をえん ばんぐんの神エホバよなんぢその民の祈にむかひて何のときまで怒りたまふや 汝かれらになみだの糧をくらはせ涙を量器にみちみつるほどあたへて飲しめ給へり 汝われらを隣人のあひあらしむ種料となしたまふわれらの仇はたがひにあざわらへり 萬軍の神よふたゝびわれらを復したまへ 汝のみかほの光をてらしたまへ さらばわれら救をえん なんぢ葡萄の樹をエジプトより携へいだしもろもろの國人をおひしりぞけて之をうゑたまへり 汝そのまへに地をまうけたまひしかば深く根して國にはびこれり その影はもろもろの山をおほひそのえだは神の香柏のごとくにありき その樹はえだを海にまでのべ その若枝を河にまでのべたり 汝いかなればその垣をくづして踏ゆくすべての人に擄取らせたまふや はやしの猪はこれをあらし野のあらし獸はこれをくらふ あゝ萬軍の神よねがはくは歸りたまへ 天より俯視てこの葡萄の樹をかへりみ なんぢが右の手にてうゑたまへるもの 自己のために強くなしたまへる枝をまもりたまへ その樹は火にて焼れまた斫たふさる かれらは聖顔のいかりにて亡ぶ ねがはくはなんぢの手をその右の手の人のうへにおき自己のためにつよくなしたまへる人の子のうへにおきたまへ さらばわれら汝をしりぞき離ることなからん 願はくはわれらを活したまへ われら名をよばん あゝ萬軍の神エホバよふたゝび我俤をかへしたまへ なんぢの聖顔のひかりを照したまへ 然ばわれら救をえん

第八一篇

ヤサフの歌に於て伶長にうたはしめたるヤサフのうた

われらの力なる神にむかひて高らかにうたひヤコブの神にむかひてよろこびの聲をあげよ 歌をうたひ鼓とよき音のことと等とをもちきたれ 新月と満月とわれらの節會の日とにラッパをふきならせ これイスラエルの律法ヤコブのかみの格なり 神さきにエジプトを攻たまひしときヨセフのなかに之をたて

て證となしたまへり 我かしこにて未だしらざりし方言をきけり われかれの肩より重荷をのぞき かれの手を籠よりまぬかれしめたり 汝なやめるとき呼しかば我なんぢをすくへり われ雷鳴のかくれたるところにて汝にこたへメリバの水のほとりにて汝をこゝろみたり ヲラ わが民よきけ我なんぢに證せん イスラエルよ汝がわれに従はんことをもとむ 汝のうちには他神あるべからず なんぢ他神ををがむべからず われはエジプトの國よりなんぢを携へいでたる汝の神エホバなり なんぢの口をひろくあけよ われ物をみたしめん されどわが民はわが聲にしたがはず イスラエルは我をこのます このゆゑに我かれらが心のかたくななるにまかせ 彼等がその任意にゆくにまかせたり われはわが民のわれに従ひ イスラエルのわが道にあゆまんことを求む さらば我すみやかにかれらの仇をしたがへ わが手をかれらの敵にむけん 斯てエホバをにくみし者もかれらに従ひ かれらの時はとこしへにつゞかん 神はむぎの最盛をもてかれらをやしなひ 磐よりいでたる雲をもて汝をあかしむべし

第八二篇

ヤサフのうた

かみは神のつどひの中にたちたまふ 神はもろもろの神のなかに審判をなしたまふ なんぢらは正からざる審判をなし あしきもの身をかたよりみて幾何時をへんとするや ヲラ よわきものと孤兒とのためにさばき苦しむものと乏しきものとのために公平をほどこせ 弱きものと貧しきものどくすくひ彼等をあしきもの手よりたすけいませ かれらは知ることなく悟ることなくして暗中をゆきめぐりぬ 地のもろもろの基はうごきたり 我いへらくなんぢらは神なり なんぢらはみな至上者の子なりと 然どなんぢらは人のごとくに死もろもろの侯のなかの一人のごとく仕れん 神よおきて全地をさばきたまへ 汝もろもろの國を嗣たまふべければなり



第八三篇

神よもだしたまふなかれ 神よものいはで寂靜たまふなかれ 視よなんちの仇はかしましき  
 聲をあげ汝をにくむものは首をあげたり かれらはたくみな謀略をもてなんちの民にむかひ相共にはかりて  
 汝のかくれたる者にむかふ かれらいひたりき 來かれらを斷滅してふたゝび國をたつることを得ざらしめい  
 スラエルの名をふたゝび人にしられざらしめんと かれらは心をついにしよともにはかり互にちかひをなして  
 なんちに逆ふ 此はエドムの幕屋にすめる人イシマエル人モアブ、ハガル人、ゲバル、アムモン、アマレク、  
 ペリシテおよびツロの民などなり アッスリヤもかれらにくみせり 斯てロトの子輩のたすけをなせりセラ  
 なんち義にミデアンになしたまへる如くキシヨンの河にてシセラとヤピンとに作たまへることく彼等にもなし  
 たまへ かれらはエンドルにてほろび地のために肥料となれり かれらの貴人をオレブ、ゼエブのごとく  
 そのもろもの候をゼバ、ザルムンナのごとくなしたまへ かれらはいへりわれら神の草苑をえてわが有とす  
 べしと わが神よかれらをまきあげらるる塵のごとく風のまへの葉のごとくならしめたまへ 林をやく火の  
 ごとく山をもやす燄のごとく なんちの暴風をもてかれらを追ひなんちの旋風をもてかれらを怖れしめたまへ  
 かれらの面に恥をみたしめたまへ エホバよ然ばかれらなんちの名をもとめん かれらをとこしへに恥おそ  
 れしめ惶てまどひて亡びうせしめたまへ 然ばかれらはエホバてふ名をもちたまふ汝のみ全地をしらしめす  
 至上者なることを知るべし

第八四篇

萬軍のエホバよなんちの帷帳はいかに愛すべきかな わが靈魂はたえいるばかりにエホバの大  
 庭をしたひわが心わが身はいける神にむかひて呼ぶ 誠やすめは窩をえ燕子はその雛をいける巢をえたり  
 萬軍のエホバわが神よこれなんちの祭壇なり なんちの家にすむものは福ひなり かゝる人はつねに汝

二二二 二二〇 九 八七六 五四三 二一 二 一〇 九 八 七 六五

をたゝへまつらんセラ その力なんちにありその心シオンの大路にある者はさいはひなり かれらは涙の  
 谷をすぐれども其處をおほくの泉あるところとなすまた前の雨はもろもろの恵をもて之をおほへり かれら  
 は力より力にすゝみ遂におのおのシオンにいたりて神にまみゆ ばんぐんの神エホバよわが祈をききたまへ  
 ヤコブの神よ耳をかたぶけたまへセラ われらの盾なる神よみそなはしてなんちの受膏者の顔をかへりみ  
 たまへ なんちの大庭にすまふ一日は千日にもまされりわれは惡の幕屋にをらんよりは寧ろわが神のいへの  
 門守とならんことを欲ふなり 是は神エホバは日なり盾なり エホバは恩とえいくわうとをあたへ直くあゆむ  
 ものに善物をこばみたまふことなし 萬軍のエホバよなんちに依頼むものはさいはひなり

第八五篇

エホバよなんちは御國にめぐみをそゝきたまへりなんちヤコブの俘囚をかへしたまひき 汝  
 んちおのが民の不義をゆるしそのもろもろの罪をおほひたまひきセラ 汝すべての怒をすてその烈しきい  
 どほりを遠けたまへり われらのすくひの神よかへりきたり我儕にむかひて忿怒をやめたまへ なんち永遠  
 にわれらをいかり萬世にみいかりをひきのべたまふや 汝によりてなんちの民の喜悅をえんが爲に我儕を活し  
 たまはざるか エホバよなんちの憐憫をわれらにしめし汝のすくひを我儕にあたへたまへ わが神エホバの  
 かたりたまふ事をきかん エホバはその民その聖徒に平和をかたりたまへばなりさればかれらは愚かなる行爲に  
 ふたゝび歸るなかれ 實にそのすくひは神をおそるる者にちかしかくて榮光はわれらの國にとゞまらん  
 あはれみと眞實とともにあひ義と平和とがひに接吻せり まことは地よりはえ義は天よりみおろせり  
 エホバ善物をあたへたまへばわれらの國は物産をいださん 義はエホバのまへにゆきエホバのあゆみ  
 たまふ跡をわれに踏しめん



第八六篇

エホバよなんぢ耳をかたぶけて我にこたへたまへ 我はくるしみかつましければなり ねがはくはわが靈魂をまもりたまへ われ神をうやまふ者なればなり わが神よなんぢに依頼める汝のしもべを救ひ給へ 主よわれを憐みたまへ われ終日なんぢによばふ なんぢの憐のたましひを悦ばせたまへ 主よわが靈魂はなんぢを仰ぎのぞむ 主よなんぢは恵ふかくまた救をこのみたまふ 汝によばふ凡てのものを豊かにあはれみたまふ エホバよわがいのりに耳をかたぶけ わが懇求のこゑをききたまへ われわが患難の日になんぢに呼はん なんぢは我にこたへたまふべし 主よもろもろの神のなかに汝にひとしきものはなく汝のみわざに伸しきものはなし 主よなんぢの遣れるもろもろの國はなんぢの前にきたりて伏拜まん かれらは聖名をあがむべし なんぢは大なり 奇しき事跡をなしたまふ 唯なんぢのみ神にましませり エホバよなんぢの道をわれに教へたまへ 我なんぢの眞理をあゆまん ねがはくは我をして心ひとつに聖名をおそれしめたまへ 主わが神よ我心をつくして汝をほめたまへ とこしへに聖名をあがめまつらん 是はなんぢの憐憫はわれに大なり わがたましひを陰府のふかき處より助けいだしたまへり 神よたかぶれるものは我にさからひて起りたるもろもろの人の會はわがたましひをもとめ 斯てなんぢを己がまへに置きさりき されど主よなんぢは憐憫とめぐみとにとみ怒をおそくし愛しみと眞實とにゆたかなる神にましませり 我をかへりみ我をあはれみたまへ ねがはくは汝のしもべに能力を興へ汝のはしための子をすくひたまへ 我にめぐみの源をあらはしたまへ 然ばわれをにくむ者これを見ても恥をいだかん 是はエホバよなんぢ我をたすけ我をなぐさめたまへばなり

第八七篇

エホバの基はきよき山にあり エホバはヤコブのすべての住居にまさりてシオンのもろもろの門を愛したまふ 神の都よなんぢにつきておほくの榮光のことを語りはやせり せら われはラハブ・バビロン

をも我をしるものの中にあげん ベリシテ、ツロ、エヌオピアを視よ この人はかしこに生れたりといはん シオンにつきては如此いはん 此もの彼ものその中にうまれたり至上者みづからシオンを立たまはんと エホバもろもろの民をしるしたまふ時このものは彼處にうまれたりと算へあげたまはん せら うたふもの踊るもの 皆いはんわがもろもろの泉はなんぢの中にと

第八八篇

マハラテ、レアソテの淵にあはせて侍長にうたはしめたるコラのうたなり 讚美なり エズラ人  
ヘインのをしへの歌なり  
わがすくひの神エホバよわれ晝も夜もなんぢの前にさけべり 願くはわが祈をみまへにいたらせ汝のみをわが號呼のこゑにかたぶけたまへ わがたましひは患難にてみち我がいのちは陰府にちかづけり われは穴にいるものとともにかぞへられ依仗なき人のごとくなれり われ患のうなる殺されしものごとく死者のうちにてらる汝かれらを再びこゝろに記たまはず かれらは御手より斷滅されしものなり なんぢ我をいとふかき穴 くらき處 ふかき淵におきたまひき なんぢの怒はいたくわれにせまれり なんぢそのもろもろの涙をもて我をくるしめ給へり せら わが相識ものを我よりとほさけ我をかれらに憎ませたまへり われは鋼閉されていづることあたはず わが眼はなやみの故をもておとろへぬ われ日ごとに汝をよべり エホバよなんぢに向ひてわが兩手をのべたり なんぢ死者にくすしき事跡をあらはしたまはんや 亡にしもの立てなんぢを讃たへんや せら 汝のいつくしみは墓のうちに汝のまことは滅亡のなかに宣傳へられんや 汝のくすしきみわざは幽暗になんぢの義は忘失のくに知るゝことあらんや されどエホバよ我なんぢに向ひてさけべり わがいのりは朝にみまへに達らん エホバよなんぢ何なればわが靈魂をすてたまふや何なればわれに面をかくしたまふや われ幼稚よりなやみて死るばかりなり 我なんぢの恐嚇にあひてくるしみまでへり 汝のはげしき怒わがうへをすく 汝のおびやかし我をほろぼせり これらの事ひねもす大水のごとく我を



めぐりごとく來りて我をかこみふさげり 一八 　なんぢ我をいつくしむ者とわが友とををほさけ わが相識るものを幽暗にいれたまへり

第八九篇

ニズラ人エタンのをしへの歌

一 われエホバの憐憫をとしへにうたはん われ口もてエホバの眞實をよろづ代につげしらせん  
二 われいふあはれみは永遠にたてらる 汝はその眞實をかたく天にさだめたまはんと 　われわが撰びたるものと契約をむすびわが僕ダビデにちかひたり 　われなんぢの裔をとしへに因らしなんぢの座位をたてて代々におよばしめん セラ 　エホバよもろもろの天はなんぢの奇しき事跡をほめん なんぢの眞實もまた深きもの會にてほめらるべし 　蒼天にてたれかエホバに類ふものあらんや 　神の子のなかに誰かエホバのごとき者あらんや 　神はきよきものの公會のなかにて畏むべきものなり その四周にあるすべての者にまさりて懼るべきものなり 　萬軍の神エホバよハハ汝のごとく大能あるものは誰ぞや なんぢの眞實はなんぢをめぐりたり 　なんぢ海のあるををさめその浪のたちあがらんとときは之をしづめたまふなり 　なんぢラハブを殺されしもののごとく撃碎きおのれの仇どもを力ある腕をもて打散したまへり 　もろもろの天はなんぢのもの地もまた汝のものなり世界とその中にみつるものとはなんぢの基したまへるなり 　北と南はなんぢ造りたまへり タボル、ヘルモンはなんぢの名によりて歡びよばふ 　なんぢは大能のみうでをもちたまふ なんぢの手はつよく汝のみぎの手はたかし 　義と公平はなんぢの寶座のもととなり あはれみと眞實とは聖顔のまへにあらはれゆく 　よろこびの音をしる民はさいはひなり エホバよかれらはみかほの光のなかをあゆめり 　かれらは名によりて終日よろこび 汝の義によりて高くあげられたり 　かれらの力の榮光はなんぢなり 汝の恵によりてわれらの角はたかくあげられん 　そはわれらの盾はエホバに屬われらの王はイスラエルの聖者につけり 　そのとき異象をもてなんぢの聖徒につけたまはく われ扶助をちからあるものに委ねたり わが民のなかより一人を

二一〇 　えらびて高くあげたり 　われわが僕ダビデをえて之にわが聖膏をそまげり 　わが手はかれとともに堅くわが臂はかれを強くせん 　三三 　仇かれをしへたぐるることなし惡の子かれを苦しむることなからん 　三二 　われかれの前にそのもろもろの敵をたふし彼をにくめるものを撃ん 　三三 　されどわが眞實とわが憐憫とはダビデとともに居りわが名によりてその角はたかくあげられん 　三三 　われ亦かれの手を海のうへにおきそのみぎの手を河のうへにおかん 　三六 　ダビデ我にむかひて汝はわが父わが神わがすくひの岩なりとよばん 　三六 　われまた彼をわが初子となし地の王たちのうち最もたかき者となさん 　三八 　われとしへに憐憫をかれがためにたもち之とてし契約はかはることなかるべし 　三九 　われまたその裔をとしへに存へそのくらゐを天の日數のごとくながらしめん 　四〇 　もしその子わが法をはなれわが審判にしたがひて歩まず 　四一 　わが律法をやぶりわが誠命をまもらずば 　四二 　われ杖をもてかれらの愆をたゞし鞭をもてその邪曲をたゞすべし 　四三 　されど彼よりわが憐憫をことごとくはとりさらずわが眞實をおとろへしむることなからん 　四四 　われおのれの契約をやぶらず己のくちびるより出しことをかへじ 　四五 　われ義にわが聖をさして誓へり われダビデに虚偽をいはじ 　四六 　その裔はとしへにつゞきその座位は日のごとく恒にわが前にあらん 　四七 　また月のごとく永遠にたてられん空にある證人はまことなり セラ 　四八 　されどその受膏者をとほさけて棄たまへり なんぢ之をいきどほりたまへり 　四九 　なんぢ己がしもべの契約をいみ 其かんむりをけがして地にまでおとし給へり 　五〇 　またその垣をことごとく倒しその保壁をあれたれしめたまへり 　五一 　その道をすぐるすべての者にかすめられ隣人にのしらる 　五二 　なんぢかれが敵のみぎの手をたく舉そのもろもろの仇をよろこばしめたまへり 　五三 　なんぢかれの劍の刃をふりかへして戦闘にたつに堪へざらしめたまひき 　五四 　またその光輝をけしその座位を地になげおとし 　五五 　その年若き日をちりめ恥をそのうへに覆たまへり セラ 　五六 　エホバよかくて幾何時をへたまふや 　自己をとしへに隠したまふや忿怒は火のもゆるごとくなるべきか 　五七 　ねがはくはわが時のいかに短かきかを思ひたまへ 汝いたづらにすべての人の子をつくりたまはんや 　五八 　誰かいきて死を



九 　みず又おのがたましひを陰府より救ひ得るものあらんや　セラ　主よなんちが眞實をもてダビデに誓ひたまへ  
 一〇 　る昔日のあはれみはいづこにありや　主よねがはくはなんちの僕のうくる謗をみこころにとめたまへ　エホバ  
 一〇 　よ汝のもろもろの仇はわれをそしりなんちの受膏者のあしあとをそしれり　我もろもろの民のそしりをわが懐中  
 一〇 　にいだく　エホバは永遠にほむべきかな　アーメン　アーメン  
 神の人モーセの祈禱

第九〇篇

一 　主よなんちは往古より世々われらの居所にてましますり　山いまだ生いでず汝いまだ地と世界  
 二 　とをつくりたまはざりしとき　永遠よりとこしへまでなんちは神なり　なんち人を塵にかへらしめて宜はく  
 三 　人の子よなんちら歸れと　なんちの目前には千年もすでにすぐる昨日のごとく　また夜間のひとときにおなじ  
 四 　なんちこれら大水のごとく流去らしめたまふ　かれらは一夜の寝のごとく朝にはえいづる青草のごとし  
 五 　朝にはえいでてさかえ夕にはかられて枯るなり　われらはなんちの怒によりて消うせ　汝のいきどほりにより  
 六 　て怖まどふ　汝われらの不義をみまへに置　われらの隠れたるつみを聖顔のひかりのなかにおきたまへり　わ  
 七 　れらのもろもろの日はなんちの怒によりて過去り　われらがすべての年のつくるは一息のごとし　われらが  
 八 　年をふる日は七十歳にすぎずあるひは壯やかにして八十歳にいたらん　されどその誇るところはたゞ勤勞とかな  
 九 　しみとのみ　その去ゆくこと速かにしてわれらもまた飛去れり　誰かなんちの怒のちからを知らんや　たれか  
 一〇 　汝をおそるゝ畏にたくらべて汝のいきどほりをしらんや　願くはわれらにおのが目をかぞふることをしへて  
 一一 　智慧のこころを得しめたまへ　エホバよ歸りたまへ斯ていくそのときを歴たまふや　ねがはくは汝のしもべら  
 一二 　に保れるみこころを變へたまへ　ねがはくは朝にわれらを汝のあはれみにてあきたらしめ　世をはるまで喜び  
 一三 　たのしませたまへ　汝がわれらを苦しめたまへるもろもろの日とわれらが禍害にかゝれるもろもろの年とに  
 一四 　たくらべて我儕をたのしませたまへ　なんちの作爲をなんちの僕等に　なんちの榮光をその子等にあらはし

一五 　たまへ　斯てわれらの神エホバの佳美をわれらのうへにのぞましめ　われらの手のわさをわれらのうへに確か  
 一六 　らしめたまへ　願くはわれらの手のわさを確からしめたまへ

第九一篇

一 　至上者のもとなる隠れたるところにすまふその人は全能者の蔭にやどらん　われエホバのこと  
 二 　を宣て　エホバはわが避所わが城わがよりたのむ神なりといはん　そは神なんちを獵人のわなと  
 三 　毒をながす疫癘よりたすけいだしたまふべければなり　かれその脚をもてなんちを庇ひたまはん　なんちその  
 四 　翼の下にかくれん　その眞實は眉なり干なり　夜はおどろくべきことあり　驚はとびきたる矢あり　幽暗には  
 五 　あゆむ疫癘あり日午にはそこなふ勵しき疾あり　されどなんち畏るゝことあらじ　千人はなんちの左にたふれ  
 六 　萬人はなんちの右にたふる　されどその災害はなんちに近づくことなからん　なんちの眼はたゞこの事をみる  
 七 　のみ　なんち悪者のむくいを見ん　なんち義にいへり　エホバはわが避所なりと　なんち至上者をその住居となし  
 八 　たれば　災害なんちにいたらず　苦難なんちの幕屋に近づかじ　そは至上者なんちのためにその使者に  
 九 　せて汝があゆむもろもろの道になんちを守らせ給へばなり　かれら手にてなんちの足の石にふれざらんため  
 一〇 　に汝をさへん　なんちは脚と蛇とをふみ　脚と蛇とを足の下にふみにじらん　彼その愛をわれにそよける  
 一一 　がゆゑに我これを助けん　かれわが名をしるがゆゑに我これを高處におかん　かれ我をよばば　我こたへん　我  
 一二 　その苦難のときに憐にをりて之をたすけ之をあがめん　われ長壽をもてかれを足はしめ　且わが救をしめさん

第九二篇

一 　いとたかき者よ　エホバにかんしやし　聖名をほめたゝふるは善かな　あしたに汝のいつくしみを  
 二 　あらはし　夜々なんちの眞實をあらはすに　十絃のなりものと等とをもちん　琴の妙なる音をもちるはいと善  
 三 　かな　そはエホバよ　なんちその作爲をもて我をたのしませたまへり　我なんちの手のわさをよるこびほこらん  
 四 　エホバよ　汝のみわざは大なるかな　汝のもろもろの思念はいとよかし　無知者はしることなく　愚なるものは之



をさとらず 悪きものは草のごとくもえいで 不義をおこなふ衆庶はさかゆるとも 途にはとこしへにほろびん  
 されどエホバよ汝はとこしへに高處にましませり エホバよ吁なんちの仇あゝなんちの仇はほろびん 不義を  
 おこなふ者はことごとく散されん されど汝わが角をたくあげて 野の牛のつのごとくならしめたまへり  
 我はあたらしき膏をそゝがれたり 又わが目はわが仇につきて願へることを見わが耳はわれにさからひておこ  
 りたつ悪をなすものにつきて願へることをきゝたり 義しきものは椶櫚の樹のごとく榮えレバノンの香柏の  
 ごとくそだつべし エホバの宮にうゑられしものはわれらの神の大庭にさかえん かれらは年老てなほ果を  
 むすび豊かにうるほひ緑の色みちみちて エホバの直きものなることを示すべし エホバはわが巖なりエホバ  
 には不義なし

第九三篇

エホバは統御たまふ エホバは後威をきたまへり エホバは能力をころもとなし 帯となしたまへり  
 さればまた世界もかたたくちて動かさるゝことなし なんちの寶座はいにしへより堅くたちぬ  
 汝はとこしへより在せり 大水はこゑをあげたり エホバよおほみづは聲をあげたり おほみづは浪をあぐ  
 エホバは高處にいましてその威力はおほくの水のごゑ海のさかまくにまさりて盛んなり なんちの證詞は  
 いとかたし エホバよ聖潔はなんちの家にとこしへまでも適應なり

第九四篇

エホバよ仇をかへすは汝にあり 神よあたを報すはなんちにあり ねがはくは光をはちたまへ  
 世をさばきたまふものよ 願くは起てたかぶる者にそのうくべき報をなしたまへ エホバよ悪き  
 もの幾何のときを經んとするや あしきもの勝誇りていくそのとしを經るや かれらはみだりに言をいだして  
 誇りものいふすべて不義をおこなふ者はみづから高ぶれり エホバよ彼等はなんちの民をうちくだきなんち  
 の業をそこなふ かれらは贅婦と旅人との生命をうしなひ 孤子をころす かれらはいふヤハは見チヤコブ  
 の神はさとらざるべしと 民のなかなる無知よなんちらさとれ 愚かなる者よいづれのときにか智からん

九 八 七 六 五 四 三 二 一 二 三 四 五 六 七 八 九

みゝを植るものきくことをせざらんや 目をつくれるものを見ることをせざらんや もろもろの國ををしふる者  
 たゞすことを爲ざらんや 人に知識をあたふる者しることなからんや エホバは人の思念のむなしきを知り  
 たまふ ヤハよなんちの懲めたまふ人なんちの法ををしへらるゝ人はさいはひなるかな かる人をわざ  
 はひの日よりのがれしめ 悪きものために坑のほらるゝまで これに平安をあたへたまはん 彼はエホバその  
 民をすてたまはず その嗣業をはなれたまはざるなり 審判はたゞしきにかへり心のなほき者はみなその後  
 したがはん 誰かわがために起りたちて悪きものを責んや 誰か我がために立て不義をおこなふ者をせめんや  
 もしエホバ我をたすけたまはざりせば わが靈魂はとくに幽寂ところに住ひしならん されどわが足すべり  
 ぬといひしとき エホバよなんちの憐憫われをさゝへたまへり わがうちに憂慮のみつる時なんちの安慰  
 わがたましひを喜ばせたまふ 律法をもて害ふことをはかる惡の位はなんちに親むことを得んや 彼等は  
 あひかたらひて 義人のたましひをせめ罪なき血をつみに定む 然はあれどエホバはわがたかき權 わが神は  
 わが避所の磐なりき 神はかれらの邪曲をその身におはしめ かれらをその惡き事のなかに滅したまはん われ  
 らの神エホバはこれを滅したまはん

第九五篇

率われらエホバにむかひてうたひ すぐひの磐にむかひてよろこばしき聲をあげん われら感  
 謝をもてその前にゆき エホバにむかひ歌をもて歡ばしきこゑをあげん 彼はエホバは大なる神な  
 り もろもろの神にまされる大なる王なり 地のふかき處みなその手にあり 山のいたゞきもまた神のものなり  
 うみは神のものその造りたまふところ 早ける地もまたその手にて造りたまへり いざわれら拜みひれふし  
 我降をつくれる主エホバのみまへに曲跪くべし 彼はわれらの神なり われらはその草苑の民その手のひつじ  
 なり 今日なんちらがその聲をきかんことをぞむ なんちらメリバに在りしときのごとく 野なるマサにあり  
 し日の如くその心をかたくなにするなかれ その時なんちらの列祖われをこゝろみ我をためし 又わがわざを







エルありかれらエホバをよびしに應へたまへり エホバ雲の柱のうちにましましてかれらに語りたまへり  
 かれらはその證詞とその賜はりたる律法とを守りたりき われらの神エホバよなんぢ彼等にこたへたまへり  
 かれらのなしし事にむくいたまひたれどもまた赦免をあたへたまへる神にてましますせり われらの神エホバを  
 崇めそのきよき山にてをがみまつれそはわれらの神エホバは聖なるなり

第一〇〇篇

感謝のうた

全地よエホバにむかひて歡ばしき聲をあげよ 欣喜をいだきてエホバに事へうたひつゝその  
 前にきたれ 知れエホバこそ神にますなれ われらを造りたまへるものはエホバにしませば我儕はその屬な  
 りわれらはその民その草苑のひつじなり 感謝しつゝその門にいりほめたまへつゝその大庭にいれ 感謝して  
 その名をほめたまへよ エホバはめぐみふかくその憐憫かぎりなくその眞實よろづ世におよぶべければなり

第一〇一篇

ダビデのうた

われ憐憫と審判とをうたはん エホバよ我なんぢを讃うたはん うれ心をさとして全き道  
 をまもらんなんぢいつれの時われにきたりたまふや 我なほき心をもてわが家のうちをありかん われわが  
 眼前にいやしき事をおかす われ叛くもの業をにくむそのわざは我につかじ 僻めるころは我よりはなれ  
 ん 惡きものを知ることこそます 隠にその友をそしめるものは我これをほろぼさん 高ぶる眼また驕れる心の  
 ものは我これをしのばじ わが眼は國のうちの忠なる者を見て之をわれとともに住はせん 全き道をあゆむ人  
 はわれに事へん 欺くことをなす者はわが家のうちに住むことをえず 虚偽をいふものはわが目前にたつこと  
 を得じ われ朝な朝なこの國のあしき者をことごとく滅しエホバの邑より不義をおこなふ者をことごとく  
 絶除かん

第一〇二篇

なやみたる者おもひくづはれてその歎息をエホバの前にそまぎいだせるとき祈願

エホバよわが祈をきたまへ 願くはわが號呼のこゑの御前にいたらんことを わが窮苦の日  
 みかほを蔽ひたまふなかれなんぢの耳をわれにかたづけ我がよぶ日にすみやかに我にこたへたまへ わが  
 もろもろの日は煙のごとききえわが骨はたきごのごとき焚るなり わがころは草のごとき擧れてしほれ  
 たりわれ糶をくらふを忘れしによる わが歎息のこゑによりてわが骨はわが肉につく われは野の鴉鵂の  
 ごとき荒たる跡のふくろふのごときになりぬ われ醒てねぶらずたゞ友なくして屋蓋にをる雀のごとくなれり  
 わが仇はひねもす我をそしる 猖狂ひて我をせむるもの我をさして誓ふ われは糶をくらふごとくに灰をく  
 らひわが飲ものには涙をまじへたり こは皆なんぢの怒と忿恚とによりてなり なんぢ我をもたげてなげすて  
 給へり わが齡はかたぶける日影のごとしまたわれは草のごとく萎れたり されどエホバよなんぢは  
 永遠にながらへその名はよろづ世にながらへん なんぢ起てシオンをあはれみたまはんそはシオンに恩恵を  
 ほどこしたまふときなりそのさだまれる期すでに來れり なんぢの僕はシオンの石をもよるこびその塵をさ  
 へ愛しむ もろもろの國はエホバの名をおそれ地のもろもろの王はその榮光をおそれん エホバはシオンを  
 きづき榮光をもてあらはれたまへり エホバは乏しきものの祈をかへりみ彼等のいのりを裁しめたまはざりき  
 來らんとするのちの世のためにこの事をしるさん 新しくつくられたる民はヤハをほめたまふべし エホバ  
 その聖所のたかき所よりみおろし天より地をみたまへり こは俘囚のなげきをきゝ死にさだまれる者とき  
 はなち 人々のシオンにてエホバの名をあらはしエルサレムにてその頌美をあらはさんが爲なり かゝる時  
 にもろもろの民もろもろの國つどひあつまりてエホバに事へまつらん エホバはわがちからを途にておと  
 ろへしめわが齡をみじかからしめ給へり 我いへりねがはくはわが神よわがすべての日のなかばにて我を  
 とりさりたまふなかれ 汝のよはひは世々かぎりなし 汝いにしへ地の基をすゑたまへり天もまたなんぢの手の



工なり 二六 これらは亡びんされど汝はつねに存らへたまはんこれらはみな衣のごとくふるびん 汝これら  
 袍のごとく更たまはんされば彼等はかはらん 然れども汝はかはることなし 二七 なんぢの輪はをはらざるなり  
 二八 汝のしもべの子輩はながらへん その裔はかたく前にたてらるべし

第一〇三篇

ダビデのうた

わが靈魂よエホバをほめまつれ わが衷なるすべてのものよそのきよき名をほめまつれ 一 わ  
 がたましひよエホバを讃まつれ そのすべての恩恵をわするなかれ 二 エホバはなんぢがすべての不義をゆる  
 し 汝のすべての疾をいやし 三 なんぢの生命をほろびより贖ひだし 仁慈と憐憫とを汝にかうぶらせ 四 なんぢ  
 の口を嘉物にてあかしめたまふ 斯てなんぢは壯きて驚のごとく新になるなり 五 エホバはすべて塵げらるる者  
 のために公義と審判とをおこなひたまふ 六 おのれの途をモーセにらしめ おのれの作爲をイスラエルの子輩  
 にらしめ給へり 七 エホバはあはれみと思恵にみちて怒りたまふことおそく 仁慈ゆたかにましませり 八 恒に  
 せむることをせず永遠にいかりを懷きたまはざるなり 九 エホバはわれらの罪の量にしたがひて我儕をあしらひ  
 たまはず われらの不義のかさにしたがひて報いたまはざりき 一〇 エホバをおそるるものにエホバの賜ふその  
 あはれみは大にして 天の地よりも高きがごとし 一一 そのわれらより愆をとほされたまふことは 東の西より遠き  
 がごとし 一二 エホバの己をおそるる者をあはれみたまふことは 父がその子をあはれむが如し 一三 エホバは我儕の  
 つくられし状をしり われらの墮なることを念ひ給へばなり 一四 人のよはひは草のごとく その榮はのの花のごと  
 し 一五 風すくれば失てあもなくその生いでし處にとへど 尚しらざるなり 一六 然はあれどエホバの憐憫はとこしへ  
 より永遠まで エホバをおそるるものにてたり 一七 その公義は子孫のまた子孫にいたらん 一八 その契約をまもりその  
 訓諭を心にとめて行ふものぞその人なる 一九 エホバはその寶座をもろもろの天にかたく置たまへり 二〇 その政權は  
 よろづのものうへにあり 二一 エホバにつかふる使者よ エホバの聖言のこゑをきよ その聖言をおこなふ勇士よ

エホバをほめまつれ 二二 その萬軍よ その聖旨をおこなふ僕等よ エホバをほめまつれ 二三 その造りたまへる萬物  
 よ エホバの政權の下なるすべての處にて エホバをほめよ わがたましひよ エホバを讃まつれ

第一〇四篇

わが靈魂よエホバをほめまつれ わが神エホバよ なんぢは至大にして尊貴と穆威とを衣たまへ  
 二 なんぢ光をころものごとくにとまとい天を幕のごとくにはり 三 水のなかにおのれの殿の  
 棟梁をおき 雲をおのれの車となし 風の翼にのりあるき 四 かぜを使者となし 雷のいづる火を僕となしたまふ  
 五 エホバは地を基のうへにおきて 永遠にうごくことなからしめたまふ 六 衣にておほふがごとく 大水にて地を  
 おほひたまへり 水たへて山のうへをこゆ 七 なんぢ叱咤すれば水しりぞき 汝いかづちの聲をはなれば水たち  
 まち去ぬ 八 あるひは山にのぼり或ひは谷にくだりて 汝のさだめたまへる所にゆけり 九 なんぢ界をたてて之を  
 こえしめす 一〇 ふたゝび地をおほふことなからしむ 一一 エホバはいつみを谷にわきだし給ふ その流は山のあひだ  
 にはしる 一二 かくて野のもろもろの獸にのましむ 野の驢馬もその湯をやむ 一三 空の鳥もそのほとりにすみ 樹梢  
 の間よりさえずりうたふ 一四 エホバはその殿よりもろもろの山に灌溉たまふ 地はなんぢのみわざの實によりて  
 飽足ぬ 一五 エホバは草をはえしめて 家畜にあたへ 田産をはえしめて人の使用にそなへたまふ かく地より食物を  
 いだしたまふ 一六 人のこゝろを欺ばしむる葡萄酒 ひとの顔をつややかならしむるあぶら 人のこゝろを強からし  
 むる糧どもなり 一七 エホバの樹とその植たまへるレバノンの香柏とは 飽足ぬべし 一八 鳥はそのなかに巢をつくり  
 鶴は松をその棲とせり 一九 たかき山は山羊のすまひ 磐石は山嵐のかくるる所なり 二〇 エホバは月をつくりて時を  
 つかさどらせたまへり 日はその西にすることをしる 二一 なんぢ黒暗をつくりたまへば夜あり そのとき林のけも  
 のは皆しのびしのびに出きたる 二二 わかき獅ほえて餌をもとめ 神にくひものをもとむ 二三 日いづれば退きてその  
 穴にふす 二四 人はいでて工をとりその勤勞はゆふべにまでいたる 二五 エホバよなんぢの事跡はいかに多なるこ  
 れらは皆なんぢの智慧にてつくりたまへり 汝のもろもろの富は地にみつ 二六 かしこに大なるひろき海ありその



なかに敷しられぬ筒ふもの小なる大なる生るものあり 舟そのうへをはしり汝のつくりたまへる鱈そのうちに  
 あそびたはぶる 彼ら皆なんぢを俟望むなんぢ宜時にくひものを之にあたへたまふ 彼等はなんぢの予へ  
 たまふ物をひろふなんぢ手をひらきたまへばかれら嘉物にあきたりぬ なんぢ面をおほひたまへば彼等はあ  
 わてふためく汝かれらの氣息をとりたまへばかれらは死て塵にかへる なんぢ靈をいだしたまへば百物みな  
 造らるなんぢ地のおもてを新にしたまふ 願くはエホバの榮光とこしへにあらんことを エホバそのみわざを  
 喜びたまはんことを エホバ地をみたまへば地ふるひ山にふれたまへば山は煙をいだす 生るかぎり  
 エホバに向ひてうたひ 我ながらふるほどはわが神をほめうたはん エホバをおもふわが思念はたのしみ深か  
 らんわれエホバによりて喜ぶべし 罪人は地より絶滅されあしきものは復あらざるべしわが靈魂よエホバ  
 をほめまつれエホバを讃稱へよ

第一〇五篇

エホバに感謝しその名をよびそのなしたまへる事をもろもろの民衆のなかにしらしめよ  
 エホバにむかひてうたへエホバを讃うたへそのもろもろの妙なる事跡をかたれ その  
 きよき名をほこれ エホバをたづねもとむるもの心はよろこぶべし エホバとその能力とをたづねもとめよ  
 つねにその聖顔をたづねよ \*その僕アブラハムの裔よヤコブの子輩よそのえらびたまひし所のものよその  
 なしたまへる妙なるみわざと奇しき事跡とその口のさばきとを心にとむれ 彼はわれらの神エホバなりその  
 みさはきは全地にあり エホバはたえずその契約をみこころに記たまへり 此はよろづ代に命じたまひし  
 聖言なり アブラハムとむすびたまひし契約イサクに與へたまひし誓なり 之をかたくしヤコブのために律法  
 となしイスラエルのためにとこしへの契約となして 言たまひけるは我なんぢにカナンの地をたまひてなんぢ  
 らの嗣業の分となさん この時かれらの數おほからず甚すくなくしてかしてにて旅人となり この國より  
 かの國にゆきこの國よりほかの民にゆけり 人のかれらを虐ぐるをゆるし給はずかれらの故によりて王たち  
 を懲しめて 宣給くわが受膏者たちにふるゝなかれ わが預言者たちをそこなふなかれ エホバは饑饉を地に  
 まねき人の杖とする糧をことごとく碎きたまへり 又かれらの前にひとりを遣したまへり ヨセフはうられて  
 僕となりぬ かれら足械をもてヨセフの足をそこなひくろがねの鏈をもてその靈魂をつなげり 斯てその  
 ことばの驗をうるまでに及ぶ エホバのみことば彼をこころみたまへり 王は人をつかはしてこれを解きもろ  
 もろの民の長はこれをゆるし 之をその家司となしその財寶をことごとく司どらせ その心のまゝにかの  
 國のきみたちを縛しめ長老たちに智慧ををしへしむ イスラエルも亦エジプトにゆきヤコブはハムの地に  
 やどれり エホバはその民を大にましくはへ之をその敵よりも強くしたまへり また敵のこころをかへて  
 おのれの民をにくましめおのれの僕をあざむき待たせしめたまへり 又そのしもべモーセとその選びたまへ  
 るアロンとを遣したまへり かれらはエホバの預兆をハムの地におこなひまたその國にくすしき事をおこな  
 へり エホバは闇をつかはして暗くしたまへり かれらその聖言にそむくことをせざりき 彼等のすべての  
 水を血にかへてその魚をころしたまへり かれらの國は蛙むれいでて王の殿のうちにまでみちふさがりぬ  
 エホバいひたまへば蠅むらがり蚤そのすべての境にいりきたりぬ また雨にかへて穀をかれらに與へ  
 もゆる火をかれらの國にふらし かれらの葡萄の樹といちじくの樹とをうちその境のもろもろの樹をりくだ  
 きたまへり エホバいひたまへば算しられぬ蝗と蝻賊きたり かれらの國のすべての田産をはみつくし  
 その地のすべての實を食つくせり エホバはかれらの國のすべての首出者をうちかれらのすべての力の始を  
 うちたまへり しろかね黄金をたづさへて彼等をいでゆかしめたまへり その家族のうち一人のよわき者も  
 なかりき エジプトはかれらの出るをよろこべり かれらをおさるるの念そのうちにおこりたればなり  
 エホバは雲をきて蓋となし夜は火をもて照したまへり 又かれらの求によりて鴉をきたらしめ天の餅  
 にてかれらを飽しめたまへり 雲をひらきたまへば水ほどばしりいで 潤ひなきところに川をなして流れいで

を懲しめて 宣給くわが受膏者たちにふるゝなかれ わが預言者たちをそこなふなかれ エホバは饑饉を地に  
 まねき人の杖とする糧をことごとく碎きたまへり 又かれらの前にひとりを遣したまへり ヨセフはうられて  
 僕となりぬ かれら足械をもてヨセフの足をそこなひくろがねの鏈をもてその靈魂をつなげり 斯てその  
 ことばの驗をうるまでに及ぶ エホバのみことば彼をこころみたまへり 王は人をつかはしてこれを解きもろ  
 もろの民の長はこれをゆるし 之をその家司となしその財寶をことごとく司どらせ その心のまゝにかの  
 國のきみたちを縛しめ長老たちに智慧ををしへしむ イスラエルも亦エジプトにゆきヤコブはハムの地に  
 やどれり エホバはその民を大にましくはへ之をその敵よりも強くしたまへり また敵のこころをかへて  
 おのれの民をにくましめおのれの僕をあざむき待たせしめたまへり 又そのしもべモーセとその選びたまへ  
 るアロンとを遣したまへり かれらはエホバの預兆をハムの地におこなひまたその國にくすしき事をおこな  
 へり エホバは闇をつかはして暗くしたまへり かれらその聖言にそむくことをせざりき 彼等のすべての  
 水を血にかへてその魚をころしたまへり かれらの國は蛙むれいでて王の殿のうちにまでみちふさがりぬ  
 エホバいひたまへば蠅むらがり蚤そのすべての境にいりきたりぬ また雨にかへて穀をかれらに與へ  
 もゆる火をかれらの國にふらし かれらの葡萄の樹といちじくの樹とをうちその境のもろもろの樹をりくだ  
 きたまへり エホバいひたまへば算しられぬ蝗と蝻賊きたり かれらの國のすべての田産をはみつくし  
 その地のすべての實を食つくせり エホバはかれらの國のすべての首出者をうちかれらのすべての力の始を  
 うちたまへり しろかね黄金をたづさへて彼等をいでゆかしめたまへり その家族のうち一人のよわき者も  
 なかりき エジプトはかれらの出るをよろこべり かれらをおさるるの念そのうちにおこりたればなり  
 エホバは雲をきて蓋となし夜は火をもて照したまへり 又かれらの求によりて鴉をきたらしめ天の餅  
 にてかれらを飽しめたまへり 雲をひらきたまへば水ほどばしりいで 潤ひなきところに川をなして流れいで



たり エホバそのきよき聖言とその僕アブラハムとおもひいでたまひたればなり その民をみちびきて  
 歎びついでしめそのえらべる民をみちびきて謳ひついでしめたまへり もろもろの國人の地をかれらに  
 與へたまひしかば 彼等もろもろのたみの勤勞をおのが有とせり 此は彼等がその律にしたがひその法をまも  
 らんが爲なり エホバをほめたまへよ

第一〇六篇

エホバをほめたまへ エホバに感謝せよ そのめぐみはふかくその憐憫はかぎりなし たれか  
 エホバの力ある事跡をかたり その讃べきことを悉くいひあらはし得んや 審判をまもる人々  
 つねに正義をおこなふ者はさいはひなり エホバよなんぢの民にたまふ恵をもて我をおほえなんぢの救をも  
 てわれに臨みたまへ さらば我なんぢの撰びたまへる者のさいはひを見なんぢの國の歡喜をよろこびなんぢ  
 の嗣業とともに誇ることをせん われら列祖とともに罪をかせり 我儕よこしまをなし惡をおこなへり  
 われらの列祖はなんぢがエジプトにてなしたまへる奇しき事跡をさとらず 汝のあはれみの豊かなるを心に  
 めす海のほとり即ち紅海のほとりにて逆きたり されどエホバはその名のゆゑをもて彼等をすくひたまへり  
 此は大なる能力をしらしめんとてなり また紅海を叱咤したまひたれば乾きたり かくて民をみちびきて野を  
 ゆくがごとくに淵をすぎしめ 恨むるもの手よりかれらをすくひ 仇の手よりかれらを贖ひたまへり 水  
 その敵をおほひたればその一人だにのこりし者なかりき 此のとき彼等そのみことばを信じしその頌美をうたへ  
 り 彼等しはしがほどにその事跡をわすれその訓誨をまたす 野にていたくむさぼり荒野にて神をこゝろみ  
 たりき エホバはかれらの願欲をかなへたまひしかど その靈魂をやしめたまへり たみは營のうちにて  
 モーセを嫉みエホバの聖者アロンをねたましかば 地ひらけてダタンを呑みアピラムの黨類をおほひ 火は  
 このともがらの中にもえおこり焔はあしき者をやきつくせり かれらはホルツの山にて横をつくり錫たる像を  
 をがみたり かくの如くおのが榮光をかへて草をくらふ牛のかたちに似す 救主なる神はエジプトにて大な

るわざをなし ハムの地にて奇しき事跡をなし紅海のほとりにて懼るべきことを爲たまへり 彼らは斯る神を  
 わすれたり 此の故にエホバかれらを亡さんと宣まへり されど神のえらみたまへる者モーセやぶれの間隙に  
 ありてその前にたちその烈怒をひきかへして滅亡をまぬかれしめたり かれら美しき地を獲しそのみことば  
 を信ぜず 剩さへその幕屋につぶやきエホバの聲をもきかざりき 此の故に手をあげて彼等にむかひたま  
 へり 此野にてかれらを斃れしめんとし 又もろもろの國のうちにてその商をたふれしめもろもろの地に  
 かれらを散さんとしたまへるなり 彼らはバアルベオルにつきて死するもの祭物をくらひたり 斯のごとく  
 その行爲をもてエホバの烈怒をひきいだしければえやみ侵しいたり 其のときビネハスたちて裁判をなせり  
 かくて疫癘はやみぬ ビネハスは萬代までとこしへたこのことを義とせられたり 民メリバの水のほとり  
 にてエホバの烈怒をひきおこししかばかれらの故によりてモーセも禍害にあへり かれら神の靈にそむき  
 しかばモーセその口唇にて妄にもいひたればなり かれらはエホバの命じたまへる事にしたがはずしてもろ  
 もろの民をほろぼさず 反てもろもろの國人とまじりてその行爲にならひ おのが驕となりしその偶像  
 につかへたり かれらはその子女を鬼にさぐ 罪なき血すなはちカナン人の偶像にさげたる己がむすこ  
 むすめの血をながしぬ 斯てくには血にてけがされたり またそのわざは自己をけがしそのおこなふところは  
 森淫なり このゆゑにエホバの怒その民にむかひて起り 其の嗣業をにくみて かれらをもろもろの國の手  
 にわたしたまへり 彼等はおのれを恨むるものに制へられ おのれの仇にしへたげられその手の下にうちふせ  
 られたり エホバはしはしばし助けたまひしかどかれらは謀略をまうけて逆きそのよこしまに申くせられたり  
 されどエホバはかれらの哭聲をきたまひしときその患難をかへりみ 其の契約をかれらの爲におもひ  
 いだしその憐憫のゆたかなるにより聖意をかへさせ給ひて かれらを己がとりこにせられたる者どもに憐ま  
 ることを得しめたまへり われらの神エホバよわれらをすくひて列邦のなかより取集めたまへ われらは



聖名に謝し なんちのほむべき事をほこらん イスラエルの神エホバはとこしへより永遠までほむべきかなすすべての民はアーメンとなふべし エホバを讃稱へよ

第一〇七篇

エホバに感謝せよ エホバは恵ふかくましましてその憐憫かぎりなし エホバの救贖をかうぶる者はみな然いふべきなり エホバは敵の手よりかれらを贖ひもろもろの地より東西南北よりとりあつめたまへり かれら野にてあれはてたる路にさまよひその住ふべき邑にあはざりき かれら飢また渴きそのうちの靈魂おとろへたり 斯てその困苦のうちにてエホバをよばばりたればエホバこれを患難よりたすけいだし 住ふべき邑にゆかしめんとて直き路にみちびきたまへり 願くはすべての人はエホバの恵により人の子になしたまへる奇しき事跡によりてエホバを讃稱へんことを エホバは渴きたふ靈魂をたはせ飢たるたましひを嘉物にてあかしめ給へばなり くらきと死の蔭に居るもの患難とくろがねとに縛しめらるゝもの 神の言にそむき至高者のをしへを蔑しめければ 勤勞をもてその心をひくうしたまへり かれら仆れたれど助くるものなかりき 斯てその困苦のうちにてエホバをよばばりたればエホバこれを患難よりすくひ くらきと死のかけより彼等をみちびき出してその杖をこぼちたまへり 願くはすべての人はエホバの恵により人の子になしたまへる奇しき事跡によりてエホバを讃稱へんことを 是はあかがねの門をこぼちくろがねの關木をたちきりたまへり 愚かなる者はおのが愆の道により己がよこしまによりて惱めり かれらの靈魂はすべての食物をきらひて死の門にちかづく かくてその困苦のうちにてエホバをよばばエホバこれを患難よりすくひたまふ その聖言をつかはして之をいやし之をその滅亡よりたすけいだしたまふ 願くはすべての人エホバのめぐみにより人の子になしたまへる奇しき事跡によりてエホバをほめたまへんことを かれらは感謝のそなへものをささげ喜ぶうたひてその事跡をいひあらはすべし 舟にて海にうかび大洋にて事をいとなむ者は エホバのみわざを見また淵にてその奇しき事跡をみる エホバ命じたまへば

あらし風おこりてその浪をあぐ かれら天にのぼりまた淵にくだり患難によりてその靈魂とけさり 左た右たにかたぶき酔たる者のごとく踉蹌てなす所をしらす かくてその困苦のうちにてエホバをよばばエホバこれを患難よりたすけいだし 狂風をしづめて浪をおだやかになし給へり かれらはおのが靜かなるをよるこぶ 斯てエホバはかれらをその望むところの澳にみちびきたまふ 願くはすべての人エホバの恵により人の子になしたまへる奇しき事跡によりてエホバをほめたまへんことを かれら民の會にてこれをあがめ長老の座にてこれを讃稱ふべし エホバは河を野にかはらせ泉をかわける地に變らせ また豊かなる地にすめる民の悪によりてそこを幽の地にかはらせ給ふ 野を池にかはらせ乾ける地をいづみにかはらせ こゝに饑たるものを住はせたまふ されば彼らは己がすまひの邑をたて 舟にたねをまき葡萄園をまうけてそのむすべる實をえたり エホバはかれらの齒くふえひろこれるまでに恵をあたへその牲畜のへることをも許したまはず されどまた虐待くるしみ悲哀によりて滅ゆき且うなれたり エホバもろもろの君に侮辱をそそぎ道なき荒地にさまよはせたまふ 然はあれど貧しきものを患難のうちより擧てその家族をひつじの群のごとくならしめたまふ 直きものは之をみて喜びもろもろの不義はその口をふさがん すべて慧者はこれらのことに心をよせエホバの憐憫をさとりべし

第一〇八篇

ダビデの歌なり 讚美なり 神よわが心はさだまれり われ誣ひまつらん 稱まつらん わが榮をもてたへまつらん 等上琴よささむべし われ黎明をよびさまさん エホバよ我もろもろの民のなかにてなんちに感謝しもろもろの國のなかにてなんちをほめうたはん 是は汝のあはれみは大にして天のうへにあり なんちの眞實は雲にまでおよぶ 神よねがはくはみづからを天よりもたかくし榮光を全地のうへに擧たまへ ねがはくは右の手をもて救をほどこし われらに答をなして愛しみたまふものに助をえしめたまへ 神はその聖をもていひたまへり



われ甚くよるこばん我シケムをわかちスコテの谷をはからん  
 ギレアデはわがものマナセはわが有なりエフラ  
 イムも亦わが首のまもりなりユダはわが杖  
 モアブはわが足體なりエドムにはわが腰をなげんベリシテよわが  
 故によりて聲をあけよと  
 誰かわれを堅固なる邑にすましめんや  
 誰かわれをみちびきてエドムにゆきしや  
 神よなんちはわれらを棄たまひしにあらすや  
 神よなんちはわれらの軍とともに出ゆきたまはず  
 ねがはく  
 は助をわれにあたへて敵にむかはしめたまへ  
 人のたすけは空しければなり  
 われらは神によりて勇しくはた  
 らかん  
 われらの敵をふみたまふものは神なればなり

第一〇九篇

伶長にうたはしめたるダビデのうた

わが讒たふる神よもだしたまふなかれ  
 かれらは惡の口とあざむきの口とをあけて我にむ  
 かひいつはりの舌をもて我にかたり  
 うらみの言をもて我をかこみゆゑなく我をせめて闘ふことあればなり  
 われ愛するにかれら反りてわが敵となる  
 われた祈るなり  
 かれらは惡をもてわが善にむくい恨をもてわ  
 が愛にむくいたり  
 ねがはくは彼のうへに惡人をたてその右方に敵をたしめたまへ  
 かれが轉かるゝとき  
 はその罪をあらはにせられ又そのいのりは罪となり  
 その日はすくなくその職はほかの人にえられ  
 その  
 子衆はみなしごとなり  
 その妻はやもめとなり  
 その子衆はさすらひて乞  
 そのあれたる處よりいできたりて  
 食をもとむべし  
 彼のもてるすべてのものは債主にうばはれ  
 かれの勤勞は外人にかすめらるべし  
 かれに  
 恵をあたふる人ひとりだになく  
 かれの孤子をあはれむ者もなく  
 その裔はたえその名はつぎの世にきえうす  
 べし  
 その父等のよこしまはエホバのみこゝろに記され  
 その母のつみはきえざるべし  
 かれらは恒にエホ  
 バの前におかれその名は地より斷るべし  
 かゝる人はあはれみを施すことをおもはず反りて貪しきもの乏し  
 きもの心のいためる者をころさんとして攻たりき  
 かゝる人は詛ふことをこのむこの故にのろひ己にいたる  
 恵むことをたのします  
 この故にめぐみ己にとほさかれり  
 かゝる人はころものごとくに詛をきるこの故に

一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一

のろひ水のごとくにおのれの衷にいり油のごとくにおのれの骨にいれり  
 ねがはくは詛をおのれのきたる衣の  
 ごとく帯のごとくなして恒にみづから纏はんことを  
 これらの事はわが敵とわが靈魂にさからひて惡言をいふ  
 者にと  
 エホバのあたへたまふ報なり  
 されど主エホバよなんちの名のゆゑをもて我をかへりみたまへ  
 なんち  
 の憐憫はいとふかしねがはくは我をたすけたまへ  
 われは貧しくして乏しわが心うちにて傷をうく  
 わが  
 ゆく状はゆふ日の影のごとくまた蝗のごとく吹さらるゝなり  
 わが喉は斷食によりてよろめきわが肉はやせ  
 おとろふ  
 われは彼等にせしらるゝ者となれり  
 かれら我をみるときは首をふる  
 わが神エホバよねがはく  
 は我をたすけその憐憫にしたがひて我をすくひたまへ  
 エホバよこれらは皆なんちの手よりいで  
 汝のなしたま  
 へることなるを彼等にしらしめたまへ  
 かれらは詛へども汝はめぐみたまふ  
 かれらの立ときは恥かしめらる  
 れどもなんちの僕はよろこばん  
 わがもろもろの敵はあなどりを衣おのが恥を外袍のごとくにまとふべし  
 われはわが口をもて大にエホバに謝しおほくの人のなかにて讃まつらん  
 エホバはまづしきもの右にた  
 ちてその靈魂を罪せんとする者より之をすくひたまへり

第一一〇篇

ダビデのうた

エホバわが主にのたまふ我なんちの仇をなんちの承足とするまではわが右にさすべし  
 エ  
 ホバはなんちのちからの杖をシオンよりつきいださしめたまはん  
 汝はもろもろの仇のなかに王となるべし  
 なんちのいきほひの日になんちの民は聖なるうはしき衣をつけ心よりよろこびて己をさげん  
 なんちは朝  
 の胎よりいづる壯きものの露をもてり  
 エホバ誓をたてて聖意をかへさせたまふことなし  
 汝はメルキセデク  
 の状にひとしくとしへに祭司たり  
 主はなんちの右にありてそのいかりの日に王等をうちたまへり  
 主は  
 もろもろの國のなかにて審判をおこなひたまはん  
 此處にも彼處にも屍をみたしめ  
 實測なる地をすぶる首領を  
 うちたまへり  
 かれ道のほとりの川より渡てのみ斯てかうべを擧ん



第一一二篇

エホバを讃たへよ 我はなほきもの會あるひは公會にて心をつくしてエホバに感謝せん  
 エホバのみわざは大なりすべてその事跡をしたふものは之をかながへ究む その行ひたまふところは榮光ありまた稜威ありその公義はとこしへに失することなし エホバはその奇しきみわざを人のこゝろに記しめたまへり エホバはめぐみと憐憫にて充たまふ エホバは己をおそるゝものに糧をあたへたまへり またその契約をとこしへに心にとめたまはん エホバはもろもろの國の所領をおのれの民にあたへてその作爲のちからを之にあらはしたまへり その手のみわざは眞實なり公義なり そのもろもろの訓諭はかたし これらは世々かぎりなく堅くたち眞實と正直とにてなれり エホバはそのために救贖をほどこしその契約をとこしへに立たまへり エホバの名は聖にしてあがむべきなり エホバをおそるゝは智慧のはじめなり これらを行ふものは皆あきらかなる聰ある人なり エホバの頌美はとこしへに失ることなし

第一一二篇

エホバを讃まつれ エホバを畏れてそのもろもろの誠命をいたく喜ぶものはさいはひなり かくる人のすゑは地にてつよく直きものの類はさいはひを得ん 富と財とはその家にありその公義はとこしへにうすることなし 直き者のために暗きなかにも光あらはる 彼は恵ゆたかに憐憫にみつる義しきものなり 恵をほどこし貸ことをなす者はさいはひなり かくる人は審判をうくるときおのが訴をささへうべし 又とこしへまで動かさるゝことなからん 義者はながく忘れらるゝことなかるべし 彼はあしき音信によりて畏れずその心エホバに依頼みてさだまれり その心かたくたちて懼るゝことなく敵につきての願望をつひに見ん 彼はちらして負者にあたふその正義はとこしへにうすることなし その角はあがめをうけて擧られん 悪者はこれを見てうれひもだえ切齒しつゝ消さらん また悪きものの願望はほろぶべし

第一一三篇

エホバをほめまつれ汝等エホバの僕よほめまつれエホバの名をほめまつれ 今より永遠にいたるまでエホバの名はほむべきかな 日のいづる處より日のいる處までエホバの名はほめらる

べし エホバはもろもろの國の上においてたかくその榮光は天よりもたかし かわれらの神エホバにたぐふべき者はたれぞや寶座をその高處にする己をひくゝして天と地とをかへりみ給ふ まづしきものを塵よりあげ 乏しきものを糞土よりあげて もろもろの諸侯とともにすわらせその民のきみたちと共にすわらせたまはん 又はらみなき婦に家をまもらせ おほくの子女のよろこばしき母たらしめたまふ エホバを讃まつれ

第一一四篇

イスラエルの民エジプトをいでヤコブのいへ異言の民をはなれしとき ユダはエホバの聖所となりイスラエルはエホバの所領となれり 海はこれを見てにげヨルダンには後にしりぞき 山は牡羊のごとくをどり小山はこひつじのごとく躍れり 海よなんぢ何とてにぐるやヨルダンよなんぢ何とて後にしりぞくや 山よなんぢ何とて牡羊のごとくをどるや小山よなんぢ何とて小羊のごとく躍るや 地上主のみまへヤコブの神の前にをのけ 主はいはを池にかはらせ石をいづみに變らせたまへり

第一一五篇

エホバ榮光をわれらに歸するなかれわれらに歸するなかれなんぢのあはれみと汝のまこととの故によりてたゞ名にのみ歸したまへ もろもろの國人はいかなればいふ今かれらの神はいづくにありやと 然どわれらの神は天にいます 神はみこゝろのまゝにすべての事をおこなひ給へり かれらの偶像はしろかねと金にして人の手のわざなり その偶像は口あれどいはす目あれどみず 耳あれどきかず鼻あれどかきず 手あれどとらず脚あれどあゆまず喉より聲をいだすことなし 此をつくる者とこれに依頼むものとは皆これにひとしからん イスラエルよなんぢエホバに依頼め エホバはかれらの助かれらの盾なり アロンの家よなんぢらエホバによりたのめ エホバはかれらの助かれらの盾なり エホバを畏るゝものよ エホバに依頼め エホバはかれらの助かれらの盾なり エホバは我儕をみこゝろに記たまへり われらを恵みイストラエルの家をめぐみアロンのいへをめぐみ また小なるも大なるもエホバをおそるゝ者をめぐみたまはん 願くはエホバなんぢらを増加へなんぢらとなんぢらの子孫とをましくはへ給はんことを なんぢらは天地を



つくりたまへるエホバに恵まるゝ者なり 天はエホバの天なりされど地は人の子にあたへたまへり  
 死人も幽霊とて下れるものもヤハを讃稱ふることなし 然どわれらは今より永遠にいたるまでエホバ  
 を讃まつらむ 汝等エホバをほめたまへよ

第一一六節

われエホバを愛しむそはわが聲とわが願望とをききたまへばなり エホバに我にかた  
 ぶけたまひしが故に われ世にあらんかぎりエホバを呼まつらむ 死の繩われをまとい陰府の  
 くるしみ我にのぞめり われは患難とうれへとにあへり その時われエホバの名をよべり エホバよ願くはわが  
 靈魂をすくひたまへと エホバは恩恵ゆたかにして公義ましますせり われらの神はあはれみ深し エホバは  
 愚かなるものを離りたまふわれ卑くせられしがエホバ我をすくひたまへり わが靈魂よなんぢの平安にかへ  
 れ エホバは豊かになんぢを待ひたまへばなり 汝はわがたましひを死よりわが目をなみだよりわが足を  
 脚蹠よりたすけいだしたまひき われは活るもの國にてエホバの前にあゆまん われ大になやめりといひ  
 つゝもなほ信じたり われ惶てしときに云らくすべての人はいつはりなりと 我いかにしてその賜へるも  
 ろもろの恩恵をエホバにむくいんや われ救のさかづきをとりてエホバの名をよびまつらむ 我すべての民  
 のまへにてエホバにわが誓をつくのはん エホバの聖徒の死はのみまへにて貴とし エホバよ誠ニわれは  
 なんぢの僕なり われはなんぢの婢女の子にして汝のしもべなりなんぢわが線絛をときたまへり われ感謝を  
 そなへものとして汝にさげんわれエホバの名をよばん 我すべての民のまへにてエホバにわがちかひを償  
 はん エルサレムよ汝のなかにてエホバのいへの大庭のなかにて此をつくのふべし エホバを讃まつれ  
 第一一七節  
 もろもろの國よなんぢらエホバを讃まつれもろもろの民よなんぢらエホバを稱へまつれ  
 そはわれらに賜ふその憐憫はおほいなり エホバの眞實はとこしへに絶ることなし エホバを  
 ほめまつれ

第一一八節

エホバに感謝せよエホバは恩恵ふかくその憐憫とこしへに絶ることなし イスラエルは率  
 べしその憐憫はとこしへにたゆることなしと アロンの家はいさ言ふべしそのあはれみは  
 永遠にたゆることなしと エホバを畏るゝものは率いふべしその憐憫はとこしへにたゆることなしと  
 患難のなかよりエホバをよべば エホバこたへて我をひろき處におきたまへり エホバわが方にいませばわれ  
 におそれなし 人われに何をなしえんや エホバはわれを助くるものとともに我がかたに坐すこの故にわれを  
 憎むものにつきての願望をわれ見ることえん エホバに依頼むは人にたよるよりも勝りてよし エホバに  
 よりたのむはもろもろの侯にたよるよりも勝りてよし もろもろの國はわれを圍めり われエホバの名により  
 て彼等をほろぼさん かれらは我をかこめり我をかこめりエホバの名によりて彼等をほろぼさん かれらは  
 蜂のごとく我をかこめりかれらは荊の火のごとく消たり われはエホバの名によりてかれらを滅さん 汝われ  
 を倒さんとしていたく刺つれど エホバわれを助けたまへり エホバはわが力わが歌にしてわが救となりたま  
 へり 歡喜とすくひとの聲はたゞしきもの幕屋にあり エホバのみぎの手はいさましき動作をなしたまふ  
 エホバのみぎの手はたかくあがりエホバの右の手はいさましき動作をなしたまふ われは死ることなか  
 らん存へてヤハの事跡をいひあらはさん ヤハはいたく我をこらしたまひしかど死には付したまはざりき  
 わがために義の門をひらけ我そのうちにいりてヤハに感謝せん 此はエホバの門なりたゞしきものは  
 その内にいるべし われ汝に感謝せんなんぢ我にこたへてわが救となりたまへばなり 工師のすてたる  
 石はすみの首石となれり これエホバの成たまへる事にしてわれらの目にあやしとする所なり これエホバ  
 の設けたまへる日なり われらはこの日によるこびたのしまん エホバよねがはくはわれらを今すくひたまへ  
 エホバよねがはくは我儕をいま榮えしめたまへ エホバの名によりて来るものは福ひなり われらエホバの家  
 よりなんぢらを祝せり エホバは神なり われらに光をあたへたまへり 繩をもて祭壇の角にいけにへをつなげ



三九 八  
なんぢはわが神なり我なんぢに感謝せんなんぢはわが神なり我なんぢを崇めまつらん 三九  
二九 八  
せよエホバは恩恵ふかくその憐憫とこしへに絶ることなし

第一九篇

○アレフ

二一  
おのが道をなほくしてエホバの律法をあゆむ者はさいはひなり 二  
エホバのもろもろの證詞を  
まもり 心をつくしてエホバを尋求むるものは福ひなり 三  
かゝる人は不義をおこなはずしてエホバの道を  
あゆむなり 四  
エホバよなんぢ訓諭をわれらに命じてねんごろに守らせたまふ 五  
なんぢわが道をかたくたてて  
その律法をまもらせたまはんことを 六  
われ汝のもろもろの誠命にこゝろをとむるときは恥ることあらじ 七  
わ  
れ汝のたゞしき審判をまなばゞ直き心をもてなんぢに感謝せん 八  
われは律法をまもらん 九  
われを棄はてたまふ  
なかれ

○ベテ

九  
わかき人はなによりてかその道をきよめん 聖言にしたがひて慎むのほかぞなき 一〇  
われ心をつくして汝  
をたづねもとめたり 願くはなんぢの誠命より迷ひいださしめ給ふなかれ 二  
われ汝にむかひて罪をかすまじき  
爲になんぢの言をわが心のうちに藏へたり 三  
讀べきかなエホバよねがはくは律法をわれに教へたまへ 四  
われ  
わが口唇をもてなんぢの口よりいでしもろもろの審判のべつたへたり 五  
我もろもろの財貨をよるこぶごと  
くに汝のあかしの道をよるこべり 六  
我なんぢの訓諭をおもひ汝のみにち心をとめん 七  
われは律法をよるこび  
聖言をわするゝことなからん

○ギメル

一  
ねがはくは汝のしもべを響にあしらひて存へしめたまへ さらばわれ聖言をまもらん 二  
なんぢわが眼を  
ひらきなんぢの法のうちなる奇しきことを我にみせたまへ 三  
われは世にある旅客なり 我になんぢの誠命を

二〇  
かくしたまふなかれ 断るときなくなんぢの審判をしたがふが故にわが靈魂はくだくるなり 二  
汝はたかぶる  
者をせめたまへりなんぢの誠命よりまよひいづる者はのろはる 三  
我なんぢの證詞をまもりたり 我より誇と  
あなどりとを取去たまへ 四  
又もろもろの候は坐して相語りわれをそこなはんとせり 然はあれど汝のしもべは  
律法をふかく思へり 五  
汝のもろもろの證詞はわれをよるこばせわれをさとす者なり

○ダレテ

三  
わが靈魂は塵につきぬなんぢの言にしたがひて我をいかしたまへ 四  
我わがふめる道をあらはしゝかば  
汝こたへを我になしたまへりなんぢの律法をわれに教へたまへ 五  
なんぢの訓諭のみちを我にわかまへしめた  
まへ 六  
われ汝のくすしき事跡をふかく思はん 七  
わがたましひ痛めるによりてとけゆくねがはくは聖言にしたが  
ひて我にちからを予へたまへ 八  
願くはいつはりの道をわれより遠ざけなんぢの法をもて我をめぐみたまへ  
九  
われは眞實のみちをえらび 恒になんぢのもろもろの審判をわが前におけり 一〇  
我なんぢの證詞をしたがひて  
離れずエホバよねがはくは我をばつかしめ給ふなかれ 一一  
われ汝のいましめの道をはしらん 十二  
その時なんぢわが  
心をひろく爲たまふべし

○ヘ

三三  
エホバよ願くはなんぢの律法のみちを我にをしへたまへ 三  
われ終にいたるまで之をまもらん 三  
われに  
智慧をあたへ給へ さらば我なんぢの法をまもり 心をつくして之にしたがはん 四  
われに汝のいましめの道を  
ふましめたまへ 五  
われその道をたのしめばなり 六  
わが心をなんぢの證詞にかたぶかして 貪利にかたぶかしめ  
給ふなかれ 七  
わが眼をはかにむけて虚しきことを見さらしめ 我をなんぢの途にて活し給へ 八  
ひたすらに汝を  
おそるゝ汝のしもべに 聖言をかたくしたまへ 九  
わがおそるゝ誇をのぞきたまへ 十  
そはなんぢの審判はきはめて  
善し 一〇  
我なんぢの訓諭をしたへり 願くはなんぢの義をもて我をいかしたまへ



○ ワウ  
 エホバよ聖言にしたがひてなんちの憐憫なんちの拯救を我にのぞませたまへ さらば我われを誘ふものに答ふることをえん われ聖言によりたのめばなり 又わが口より眞理のことばをことごとく除き給ふなかれ われなんちの審判をのぞみたればなり われたえずいや永久になんちの法をまもらん われなんちの訓諭をもとめたるにより隙なくしてあゆまん われまた王たちの前になんちの證詞をかたりて恥ることあらじ 我が愛するなんちの誠命をもて己をたのしましめん われ手をわがあいする汝のいましめに擧げなんちの律法をふかく思はん

○ ザイン

ねがはくは汝のしもべに宜ひたる聖言をおもひいだしたまへ 汝われに之をのぞましめ給へり なんちの聖言はわれを活ししがゆゑに今もなほわが艱難のときの安慰なり 高ぶる者おほいに我をあざわらへりされど我なんちの法をはなれざりき エホバよわれ汝がふるき往昔よりの審判をおもひいだして 自から慰めたり なんちの法をすつる悪者のゆゑによりて 我はげしき怒をおこしたり なんちの律法はわが旅の家にてわが歌となれり エホバよわれ夜間になんちの名をおもひいだして なんちの法をまもり われ汝のさとしを守りしによりてこの事をえたるなり

○ ヘテ

エホバはわがうくべき有なり われ汝のまろろの言をまもらんといへり われ心をつくして汝のめぐみを請求めたり ねがはくは聖言にしたがひて我をあはれみたまへ 我わがすべての途をおもひ足をかへしてなんちの證詞にむけたり 我なんちの誠命をまもるに速くしてたゆたはざりき 悪きものの繩われに纏ひたれども 我なんちの法をわすれざりき 我なんちのたゞしき審判のゆゑに 夜半におきてなんちに感謝せん

われは汝をおそる者 またなんちの訓諭をまもるもの侶なり エホバよ汝のあはれみは地にみちたり 願くはなんちの律法をわれにしへたまへ

○ テテ

エホバよなんち聖言にしたがひ 恵をもてその僕をあしらひたまへり われ汝のいましめを信す ねがはくはわれに聰明と知識とををしへたまへ われ苦しむる前にはまよひいでぬ されど今はわれ聖言をまもるなんちは善にして善をおこなひたまふ ねがはくは汝のおきてを我にしへたまへ 高ぶるもの虚偽をくはだて、我にさからへり われ心をつくしてなんちの訓諭をまもらん かれらの心はこえふとりて脂のごとし されど我はなんちの法をたのしむ 困苦にあひたりしは我に上きことなり 此によりて我なんちの律法をまなびえたり なんちの口の法はわがためには千々のこがね白銀にもまされり

○ ヨーデ

なんちの手はわれを造りわれを形づくれり ねがはくは智慧をあたへて我になんちの誠命をまなばしめたまへ なんちを畏るものは我をみて喜ばん われ聖言によりて望をいだきたればなり エホバよ我はなんちの審判のたゞしく 又なんちが眞實をもて我をくるしめたまひしを知る ねがはくは汝のしもべに宜ひたる聖言にしたがひて 汝の仁慈をわが安慰となしたまへ なんちの憐憫をわれに強ませたまへ さらばわれ生んなんちの法はわが樂しめるところなり 高ぶるものに恥をかうぶらせたまへ かれらは虚偽をもて我をくつがへしたればなり されど我なんちの訓諭をふかくおもはん 汝をおそる者となんちの證詞をしるものとを我にかへらしめたまへ わがこゝろを全くして 汝のおきてを守らしめたまへ さらばわれ恥をかうぶらじ

○ カフ

わが靈魂はなんちの救をしたひてたえいるばかりなり 然どわれなほ聖言によりて望をいだく なんち



何のとき我をなくさむるやといひつゝ、我みことばを慕ふによりて眼おとろふ。我は煙のなかの華葉のごとく  
 なりぬれども、尙なんちの律法をわすれず。汝のしもべの日は幾何ありや。汝いつれるとき我をせむるものに  
 審判をおこなひたまふや。たかぶる者われを害はんとて阱をほれり。かれらはなんちの法にしたがはず。  
 なんちの誠命はみな眞實なり。かれらは虚偽をもて我をせむ。ねがはくは我をたすけたまへ。かれらは地にてほと  
 んど我をほろぼせり。されど我はなんちの訓諭をすてざりき。願くはなんちの仁、慈にしたがひて我をいかした  
 まへ。然ばわれ御口よりいづる證詞をまもらん。

○ ラメテ

エホバよみことばは天にてとこしへに定まり。なんちの眞實はよろづ世におよぶ。なんち地をかたく立  
 たまへば地はつねにあり。これらのものはなんちの命令にしたがひ恒にありて今日にいたる。萬のものは皆  
 なんちの僕なればなり。なんちの法わがたのしみとならざりしならば我はつひに患難のうちに滅びたるならん。  
 われ恒になんちの訓諭をわすれじ。汝これをもて我をいかしたまへばなり。我はなんちの有なり。ねがはくは  
 我をすくひたまへ。われ汝のさとしを求めたり。悪きものは我をほろぼさんとして、窺ひぬ。われは唯なんちの  
 もろもろの證詞をおもはん。我ももろの純全に限あるをみたり。されど汝のいましめはいと廣し。

○ メム

われなんちの法をいつくしむこといかばかりぞや。われ終日これを深くおもふ。なんちの誠命はつねに  
 我とともにありて、我をわが仇にまさりて慈からしむ。我はなんちの證詞をふかくおもふが故に、わがすべての  
 師にまさりて智慧おほし。我はなんちの訓諭をまもるがゆゑに、老たる者にまさりて事をわきまふるなり。  
 われ聖言をまもらんために、わが足をとめてもろもろのあしき途にゆかしめず。なんち我をしへたま  
 ひしによりて、我なんちの審判をばなれざりき。みことばの滋味はわが唇にあまきこといかにばかりぞや。聖の

わが口に甘きにまされり。我なんちの訓諭によりて智慧をえたり。このゆゑに虚偽のすべての途をにくむ。

○ ヌン

なんちの聖言はわがあしの燈火わが路のひかりなり。われなんちのたゞしき審判をまもらんことをちか  
 ひ且かたくせり。われ甚いたく苦しめり。エホバよねがはくは聖言にしたがひて我をいかしたまへ。エホバ  
 よねがはくは誠意よりするわが口の獻物をうけて、なんちの審判をしへたまへ。わが靈魂はつねに危険を  
 をかす。されど我なんちの法をわすれず。あしき者わがために綱をまうけたり。されどわれ汝のさとしより迷ひ  
 いでざりき。われ汝のもろもろの證詞をとこしへにわが嗣業とせり。これらの證詞はわが心をよろこばしむ  
 われ汝のおきてを最後までとこしへに守らんとて、之にこゝろを傾けたり。

○ サメク

われ二心のものにくみ汝のおきてを愛しむ。なんちはわが匿るべき所わが盾なり。われ聖言によりて  
 望をいだく。悪きをなすものよ我をばなれされ。われわが神のいましめを守らん。聖言にしたがひ我をさ  
 へて生存しめたまへ。わが望につきて恥なからしめたまへ。われを支へたまへ。さらばわれ安けかるべし。われ  
 恒になんちの律法にこゝろをそゝがん。すべて律法よりまよひいづるものを汝かろしめたまへり。かれらの  
 欺詐はむなしければなり。なんちは地のすべての悪きものを渣滓のごとく除きさりたまふ。この故にわれ汝の  
 あかしを愛す。わが肉體なんちを懼るゝによりてふるふ。我はなんちの審判をおそる。

○ アイン

われは審判と公義とをおこなふ。我をすてて處ぐるものに委ねたまふなかれ。汝のしもべの中保となり  
 て福祉をえしめたまへ。高ぶるもの我をしへたぐるを容したまふなかれ。わが眼はなんちの救と。なんちのた  
 だしき聖言とをしたふによりておとろふ。ねがはくはなんちの憐憫にしたがひてなんちの僕をあしらひ。我に



二二五 なんぢの律法ををしへたまへ 我はなんぢの僕なり われに智慧をあたへてなんぢの證詞をしらしめたまへ  
 二二六 彼等はなんぢの法をすてたり 今はエホバのはたらきたまふべき時なり この故にわれ金よりもまじり  
 二二七 なき金よりもまさりて汝のいましめを愛す この故にもろもろのことに保るなんぢの一切のさとしを正しと  
 二二八 おもふ我すべてのいつはりの途をにくむ

○ へ

二二九 汝のあかしは妙なり かゝるが故にわが靈魂これをまもる 聖言うちひらくれば光をはなちて 愚かなる  
 二三〇 ものをさとからしむ 我なんぢの誠命をしたふが故に わが口をひろくあけて喘ぎもとめたり ねがはくは  
 二三一 聖名を愛するものに恒になしたまふごとく 身をかへして我をあはれみたまへ 聖言をもてわが步履をとりの  
 二三二 へもろもろの邪曲をわれに主たらしめたまふなかれ われを人のしへたげより贖ひたまへ さらばわれ訓諭を  
 二三三 まもらん ねがはくは聖顔をなんぢの僕のうちへにてらし 汝のおきてを我にをしへ給へ 人なんぢの法を  
 二三四 まもらざるによりて わが眼のみみだ河のごとくに流る

○ ツアデー

二三五 エホバよなんぢは義しくなんぢの審判はなほし 汝たゞしきと此上なき眞實とをもてその證詞を命じ  
 二三六 給へり わが敵なんぢの聖言をわすれたるをもて わが熱心われをほろぼせり なんぢの聖言はいときよし  
 二三七 此故になんぢの僕はこれを愛す われは微なるものにて人にあなどらるれども 汝のさとしを忘れず なん  
 二三八 ぢの義はとこしへの義なり 汝ののりは眞理なり われ患難と憂とにかゝれども 汝のいましめはわが喜樂なり  
 二三九 なんぢの證詞はとこしへに義し ねがはくはわれに智慧をたまへ 我ながらふることを得ん

○ コフ

二四〇 われ心をつくしてよばはれり エホバよ我にこたへたまへ 我なんぢの律法をまもらん われ汝をよばは

二四一 れり ねがはくはわれを救ひ給へ 我なんぢの證詞をまもらん われ詰朝おきいでて呼はれり われ聖言によりて  
 二四二 望をいだけり 夜の更のきたらぬに先だち わが眼はさめて汝のみことばを深くおもふ ねがはくはなんぢの  
 二四三 仁慈にしたがひてわが聲をききたまへ エホバよなんぢの審判にしたがひて我をいかしたまへ 惡をおひも  
 二四四 てるものは我にちかづけり 彼等はなんぢの法にとほくはなる エホバよ汝はわれに近くましませり なんぢの  
 二四五 すべての誠命はまことなり われ早くよりなんぢの證詞によりて 汝がこれを永遠にたてたまへることを知り

○ レシ

二四六 ねがはくはわが患難をみて我をすくひたまへ 我なんぢの法をわすれざればなり ねがはくはわが訟を  
 二四七 あげつらひて我をわがなひ 聖言にしたがひて我をいかしたまへ すくひは惡きものより遠くはなる かれらは  
 二四八 なんぢの律法をもとめざればなり エホバよなんぢの憐憫はおほいなり 願くはなんぢの審判にしたがひて我  
 二四九 をいかしたまへ 我をせむる者われに敵する者おほし 我なんぢの證詞をはなるゝことなかりき 虚偽をお  
 二五〇 こなふもの汝のみことばを守らざるにより 我かれらを見てうれへたり ねがはくはわが汝のさとしを愛する  
 二五一 こと幾何なるをかへりみたまへ エホバよなんぢの仁慈にしたがひて我をいかしたまへ なんぢのみことばの  
 二五二 總計はまことなり 汝のたゞしき審判はとこしへにいたるまで皆たゆることなし

○ シン

二五三 もろもろの侯はゆゑなくして我をせむ 然どわが心はたゞ汝のみことばを畏る われ人のおほいなる掠物  
 二五四 をえたるごとくに 汝のみことばをよるこぶ われ虚偽をにくみ之をいみきらへども 汝ののりを愛す われ  
 二五五 汝のたゞしき審判のゆゑをもて 一日に七次なんぢを讚稱す なんぢの法をあいするものには大なる平安あり  
 二五六 かれらには頭礙をあたふる者なし エホバよ我なんぢの救をのぞみ 汝のいましめをおこなへり わが靈魂は  
 二五七 なんぢの證詞をまもれり 我はいたく之をあいす われなんぢの訓諭となんぢの證詞とをまもりぬ わがすべて



の道はみまへにあればなり

○ タウ

一七〇  
一七一  
一七二  
一七三  
一七四  
一七五  
一七六  
一七七  
一七八  
一七九

エホバよ願くはわがよぶ聲をみまへにちかづけ 聖言にしたがひて我にちをあたへたまへ 一七〇 わが願を  
みまへにいたらせ 聖言にしたがひて我をたすけたまへ 一七一 わがくちびるは讚美をいだすべし 汝われに律法を  
をしへ給へばなり 一七二 わが舌はみことばを福ふべし 汝の一切のいましめは義なればなり 一七三 なんちの手を  
つねにわが助となしたまへ われなんちの訓諭をえらび用ゐたればなり 一七四 エホバよ我なんちの救をしたへりな  
んちの法はわがたのしみなり 一七五 願くはわが靈魂をながらへしめたまへ さらば汝をほめたまへん 汝のさばきの  
我をたすけんことを 一七六 われは亡はれたる羊のごとく迷ひいでぬ なんちの僕をたづねたまへ われ汝のいましめ  
を忘れざればなり

第二二〇篇

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
一〇  
一一  
一二  
一三  
一四  
一五  
一六  
一七  
一八  
一九  
二〇  
二一  
二二  
二三  
二四  
二五  
二六  
二七  
二八  
二九  
三〇  
三一  
三二  
三三  
三四  
三五  
三六  
三七  
三八  
三九  
四〇  
四一  
四二  
四三  
四四  
四五  
四六  
四七  
四八  
四九  
五〇  
五一  
五二  
五三  
五四  
五五  
五六  
五七  
五八  
五九  
六〇  
六一  
六二  
六三  
六四  
六五  
六六  
六七  
六八  
六九  
七〇  
七一  
七二  
七三  
七四  
七五  
七六  
七七  
七八  
七九  
八〇  
八一  
八二  
八三  
八四  
八五  
八六  
八七  
八八  
八九  
九〇  
九一  
九二  
九三  
九四  
九五  
九六  
九七  
九八  
九九  
一〇〇

一 われ困苦にあひてエホバをよびしかば我にこたへたまへり 二 エホバよねがはくは虚偽の  
くちびる欺詐の舌より わが靈魂をたすけいだしたまへ 三 あさむきの舌よなんちに何をあたへられ何をくはへ  
らるべきか 四 ますらをの利き箭と金雀花のあつき炭となり 五 わさはひなるかな我はメセクにやどりケダ  
ル幕屋のかたはらに住めり 六 わがたましひは平安をにくむものと借にすめり 七 われは平安をねがふされど  
我ものいふときにかれら戦争をこのむ

第二二一篇

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
一〇  
一一  
一二  
一三  
一四  
一五  
一六  
一七  
一八  
一九  
二〇  
二一  
二二  
二三  
二四  
二五  
二六  
二七  
二八  
二九  
三〇  
三一  
三二  
三三  
三四  
三五  
三六  
三七  
三八  
三九  
四〇  
四一  
四二  
四三  
四四  
四五  
四六  
四七  
四八  
四九  
五〇  
五一  
五二  
五三  
五四  
五五  
五六  
五七  
五八  
五九  
六〇  
六一  
六二  
六三  
六四  
六五  
六六  
六七  
六八  
六九  
七〇  
七一  
七二  
七三  
七四  
七五  
七六  
七七  
七八  
七九  
八〇  
八一  
八二  
八三  
八四  
八五  
八六  
八七  
八八  
八九  
九〇  
九一  
九二  
九三  
九四  
九五  
九六  
九七  
九八  
九九  
一〇〇

一 われ山にむかひて目をあく わが扶助はいづこよりきたるや 二 わがたすけは天地をつくり  
たまへるエホバよりきたる 三 エホバはなんちの足のうごかざるを容したまはず 汝をまもるものは微睡  
たまふことなし 四 視よイスラエルを守りたまふものは 微睡こともなく寝ることなからん 五 エホバは汝を

まもる者なり エホバはなんちの右手をおほふ蔭なり 一 ひるは日なんちをうたす夜は月なんちを傷じ 二 エ  
ホバはなんちを守りてもろもろの禍害をまぬかれしめ 並なんちの靈魂をまもりたまはん 三 エホバは今より  
とこしへにいたるまで 汝のいづると入るとをまもりたまはん

第二二三篇

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
一〇  
一一  
一二  
一三  
一四  
一五  
一六  
一七  
一八  
一九  
二〇  
二一  
二二  
二三  
二四  
二五  
二六  
二七  
二八  
二九  
三〇  
三一  
三二  
三三  
三四  
三五  
三六  
三七  
三八  
三九  
四〇  
四一  
四二  
四三  
四四  
四五  
四六  
四七  
四八  
四九  
五〇  
五一  
五二  
五三  
五四  
五五  
五六  
五七  
五八  
五九  
六〇  
六一  
六二  
六三  
六四  
六五  
六六  
六七  
六八  
六九  
七〇  
七一  
七二  
七三  
七四  
七五  
七六  
七七  
七八  
七九  
八〇  
八一  
八二  
八三  
八四  
八五  
八六  
八七  
八八  
八九  
九〇  
九一  
九二  
九三  
九四  
九五  
九六  
九七  
九八  
九九  
一〇〇

一 人われにむかひて 率エホバのいへにゆかんといへるとき我よろこべり 二 エルサレムよわれら  
の足はなんちの門のうちにたてり 三 エルサレムよなんちは稠くつらなりたる邑のごとく固くたてり 四 もろも  
ろのやから即ちヤハの支派かしこに上りきたり イスラエルにむかひて 證詞をなしたまへ エホバの名にかんしやを  
なす 五 彼處にさばきの寶座まうけらる これダビデの家のみくらなり 六 エルサレムのために平安をいのれ  
エルサレムを愛するものは榮ゆべし 七 ねがはくはなんちの石垣のうちに平安あり なんちの諸殿のうちに福祉  
あらんことを 八 わが兄弟のためわが侶のために われ今なんちのなかに平安あれといはん 九 われらの神エホ  
バのいへのために 我なんちの福祉をもとめん

第二二四篇

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
一〇  
一一  
一二  
一三  
一四  
一五  
一六  
一七  
一八  
一九  
二〇  
二一  
二二  
二三  
二四  
二五  
二六  
二七  
二八  
二九  
三〇  
三一  
三二  
三三  
三四  
三五  
三六  
三七  
三八  
三九  
四〇  
四一  
四二  
四三  
四四  
四五  
四六  
四七  
四八  
四九  
五〇  
五一  
五二  
五三  
五四  
五五  
五六  
五七  
五八  
五九  
六〇  
六一  
六二  
六三  
六四  
六五  
六六  
六七  
六八  
六九  
七〇  
七一  
七二  
七三  
七四  
七五  
七六  
七七  
七八  
七九  
八〇  
八一  
八二  
八三  
八四  
八五  
八六  
八七  
八八  
八九  
九〇  
九一  
九二  
九三  
九四  
九五  
九六  
九七  
九八  
九九  
一〇〇

一 天にいますものよ我なんちにむかひて目をあく 二 みよ僕その主の手に目をそよぎ 婢女その  
主母の手に目をそよぐがごとく われらはわが神エホバに目をそよぎて そのわれを憐みたまはんことをまつ 三 ね  
がはくはわれらを憐みたまへ エホバよわれらを憐みたまへ そはわれらに輕侮はみちあふれぬ 四 おもひわづら  
ひなきものの凌辱とたかぶるもの輕侮とは われらの靈魂にみちあふれぬ

一 今イスラエルはいふべし エホバもしわれらの方にいませす 二 人々われらにさからひて起り  
たつとき エホバもし我儕のかたに在さざりしならんには 三 かれらの怒のわれらにむかひておこりし時 われら



を生るまゝにて香しならん 〓 また水はわれらをおほひ 流はわれらの靈魂をうちこえ 高ぶる水はわれらの靈魂をうちこえしならん 〓 エホバはほむべきかな 我儕をかれらの齒にわたして嚙くらはせたまはさりき 我儕のたましひは捕鳥者のわなをのがるゝ鳥のごとくにのがれたり 羅はやぶれてわれらはのがれたり 〓 われらの助は天地をつくりたまへるエホバの名にあり

第二二五篇

みや、詣のうた

エホバに依頼むものはシオンの山のうごかざるゝことなくして永遠にあるがごとし 〓 エルサレムを山のかこめるごとく エホバも今よりとこしへにその民をかこみたまはん 〓 惡の杖はたゞしきもの 所領にとゞまることなるべし 斯てたゞしきものはその手を不義にのぶることあらじ 〓 エホバよねがはくは善人とこゝろ直きものとに福祉をほどこしたまへ 〓 されどエホバは轉へりておのが曲れる道にいるものを 惡きわざをなすものとともに去しめたまはん 平安はイスラエルのうへにあれ

第二二六篇

みや、詣のうた

エホバ、シオンの俘囚をかへしたまひし時 われらは夢みるもののごとくなりき 〓 そのとき笑はわれらの口にみち歌はわれらの舌にみりてり エホバかれらのために大なることを作たまへりといへる者もろの國のなかにありき 〓 エホバわれらのために大なることをなしたまひたれば我儕はたのしめり 〓 エホバよ願くはわれらの俘囚をみなみの川のごとくに歸したまへ 〓 涙とともに播くものは歡喜とともに種らん 〓 その人は種をたづさへ涙をながしていでゆけど 禾束をたづさへ喜びてかへりきたらん

第二二七篇

ソロモンがよめるみや、詣のうた

エホバ家をたてたまふにあらすば 建るもの勤勞はむなしく エホバ城をまもりたまふにあらすば 衛士のさめをるは徒勞なり 〓 なんぢら早くおき遅くいねて 辛苦の糧をくらふはむなしきなり 斯てエホバ

その愛しみたまふものに寝をあたへたまふ 〓 みよ子輩はエホバのあたへたまふ嗣業にして 胎の實はその報のたまものなり 〓 年壯きころほひの子はますらをの手にある矢のごとし 〓 矢のみちたる簾をもつ人はさいはひなり 〓 かれら門にありて仇とものいふとき恥ることあらじ

第二二八篇

みや、詣のうた

エホバをおそれその道をおゆむものは皆さいはひなり 〓 そはなんぢおのが手の勤勞をくらふべければなり 〓 なんぢは福祉をえまた安處にをるべし 〓 なんぢの妻はいへの奥にをりておほくの實をむすぶ 〓 葡萄の樹のごとく 汝の子輩はなんぢの筵に圓居して かんらん若樹のごとし 〓 視よエホバをおそるゝ者はかく福祉をえん 〓 エホバはシオンより恵をなんぢに賜はん 〓 なんぢ世にあらんかぎりエルサレムの福祉をみん 〓 なんぢおのが子輩の子をみるべし 平安はイスラエルの上にあり

第二二九篇

みや、詣のうた

今イスラエルはいふべし 彼等はいはば我をわかきときより憐めたり 〓 かれらはいはば我をわかきときより憐めたり 〓 されどわれに勝ことを得ざりき 〓 耕すものはわが背をたがへしてその歌をながくせり 〓 エホバは義しあしきものの繩をたちたまへり 〓 シオンをにくむ者はみな恥をおびてしりぞかせらるべし 〓 かれらは長たざるさきにかるゝ屋上の草のごとし 〓 これを刈るものはその手にみたす之をつかぬるものはその束ふところに登ざるなり 〓 かたはらを過るものはエホバの恵なんぢの上にあれといはず われらエホバの名によりてなんぢらを祝すといはず

第二三〇篇

みや、詣のうた

あゝエホバよ われふかき淵より汝をよべり 〓 主よねがはくはわが聲をきゝ 汝のみゝをわが懇求のこゑにかたぶけたまへ 〓 ヤハよ主よなんぢ若もろの不義に目をとめたまはば 誰かよく立てとをえんや



されどなんちに救あれば 人におそれかしこまれ給ふべし 我エホバを俟望む わが靈魂はまぢのぞむ  
 われはその聖言によりて望をいやく わがたましひは衛士があしたを待にまさり 誠に至しが且をまつにまさ  
 りて主をまつり イスラエルよエホバによりて望をいだけそはエホバにあはれみありまたゆたかなる救贖  
 あり エホバはイスラエルをそのもろもろの邪曲よりあがなひたまはん

第一三一篇

エホバよわが心おこらすわが目たかぶらす われは大なることと我におよばぬ奇しき事とを  
 つとめざりき われはわが靈魂をもださしめまた安からしめたり 乳をたちし嬰兒のその母にたよることく  
 我がたましひは乳をたちし嬰兒のごとくわれに恃れり イスラエルよ今よりとこしへにエホバにたよりて望を  
 いだけ

第一三二篇

エホバよねがはくはダビデの爲にそのもろもろの憂をこゝろに記たまへ だビデ、エホバに  
 ちかひヤコブの全能者にうけひていふ われエホバのために處をたづねいだしヤコブの全能者のために居所を  
 もとめうるまでは 我家の幕屋にいらす わが臥床にのぼらす わが目をねぶらしめす わが眼瞼をとぢしめさるべ  
 しと われらエフラタにて之をき、ヤアルの野にて見とめたり われらはその居所にゆきて その承足のまへ  
 に俯伏さん エホバよねがはくは起きて なんぢの稜威の權とともになんぢの安居所にいらたまへ なんぢの  
 祭司たちは義を衣 なんぢの聖徒はみな歡びよばふべし なんぢの僕ダビデのために なんぢの受膏者の面を  
 しりぞけたまふなかれ エホバ眞實をもてダビデに誓ひたまひたれば之にたがふことあらじ 曰くわれなんぢ  
 の身よりいでし者をなんぢの座位にさせしめん なんぢの子輩もしわがをしふる契約と證詞とをまもらは  
 かれるの子輩もまた永遠になんぢの座位にさすべしと エホバはシオンを擇びておのが居所にせんとのぞみ

たまへり 曰くこれは永遠にわが安居處なり われこゝに住ん 所はわれ之をのぞみたればなり われシオン  
 の欄をゆたかに祝しくひものをもてその負者をあかしめん われ救をもてその祭司たちに衣せん その聖徒  
 はみな聲たからかよるこびよばふべし われダビデのためにかしこに一つの角をはえしめん わが受膏者の  
 ために燈火をそなへたり われかれの仇にはちを衣せん されどかれはその冠弁さかゆべし

第一三三篇

視よはらから相睦とともにをるはいかに善いかに樂きかな 首にそゝがれたる貴きあぶら  
 鬚にながれアロンの鬚にながれその衣のすそにまで流れしたるゝがごとく またヘルモンの露くだりてシ  
 オンに山にながるゝがごとしそはエホバかしこに福祉をくだし 窮なき生命をさへあたへたまへり

第一三四篇

夜間エホバのいへにたちエホバに事ふるもろもろの僕よ エホバをほめまつれ なんぢら聖所  
 にむかひ手をあげてエホバをほめまつれ ねがはくはエホバ天地をつくりたまへるものシオンより汝をめぐみ  
 たまはんことを

第一三五篇

なんぢらエホバを讚稱へよ エホバの名をほめたまへよ エホバの僕等ほめたまへよ エホバ  
 の家われらの神のいへの大庭にたつものよ 讚稱へよ エホバは恵ふかしなんぢらエホバを  
 ほめたまへよその聖名はうるはし讚うたへ そはヤハおのがためにヤコブをえらみイスラエルをえらみて  
 その珍寶となしたまへり われエホバの大なるとわれらの主のもろもろの神にまされるとをしれり エホバ  
 その聖旨にかなふことを天にも地にも淵にもみなことごとく行ひ給ふなり エホバは地のはてより霧を  
 のぼらせ 雨のために電光をつくりその庫より風をいだしたまふ エホバは人より畜類にいたるまでエジプト  
 の首出をうちたまへり エジプトよエホバはなんぢの中にしるしと奇しき事跡とをおくりて パロとその僕とに



臨ませ給へり。エホバはおほくの國々をうち、又いさほひある王等をころし給へり。アモリ人のわうシホン、  
 二二〇 二二〇 二二〇  
 バシヤンの王オグならびにカナンの國々なり。かれらの地をゆづりとし、その民イスラエルの嗣業として  
 二二一 二二一 二二一  
 あたへ給へり。エホバよなんぢの名はとこしへに絶ることなし。エホバよなんぢの記念はよるづ世におよばん  
 二二二 二二二 二二二  
 エホバはその民のために審判をなし、その僕等にかゝはれる聖意をかへたまふ可ればなり。もろもろの  
 二二三 二二三 二二三  
 くにの偶像はしろかねと金にして人の手のわざなり。そのくうさうは口あれどいはす目あれど見ず。耳あれ  
 二二四 二二四 二二四  
 どきかず、またその口に氣息あることなし。これを造るものと之によりたのむものとは皆これにひとしからん  
 二二五 二二五 二二五  
 イスラエルの家よ、エホバをほめまつれ。アロンのいへよ、エホバをほめまつれ。レビの家よ、エホバをほめまつ  
 二二六 二二六 二二六  
 れ。エホバを畏るゝものよ、エホバをほめまつれ。エルサレムにすみたまふエホバは、シオンにて讃まつるべき  
 二二七 二二七 二二七  
 かな。エホバをほめたゝへよ。

第一三六篇

エホバに感謝せよ。エホバはめぐみふかし、その憐憫はとこしへに絶ることなければなり。も  
 二二八 二二八 二二八  
 ろもろの神の神に、かんしやせよ。その憐憫はとこしへにたゆることなければなり。もろもろの  
 二二九 二二九 二二九  
 主の主にかんしやせよ。その憐憫はとこしへにたゆることなければなり。たゞ獨りおほいなる奇跡なしたまふ  
 二三〇 二三〇 二三〇  
 ものに感謝せよ。その憐憫はとこしへにたゆることなければなり。智慧をももろもろの天をつくりたまへる  
 二三一 二三一 二三一  
 ものに感謝せよ。そのあはれみは永遠にたゆることなければなり。地を水のうへに布たまへるものに感謝せよ。  
 二三二 二三二 二三二  
 そのあはれみは永遠にたゆることなければなり。巨大なる光をつくりたまへる者にかんしやせよ。その憐憫は  
 二三三 二三三 二三三  
 とこしへに絶ることなければなり。晝をつかさどらるるために日をつくりたまへる者にかんしやせよ。その  
 二三四 二三四 二三四  
 憐憫はとこしへにたゆることなければなり。夜をつかさどらるるために月ともろもろの星をつくりたまへる  
 二三五 二三五 二三五  
 者にかんしやせよ。その憐憫はとこしへにたゆることなければなり。もろもろの首出をうちてエジプトを賣た  
 二三六 二三六 二三六  
 まへるものに感謝せよ。そのあはれみは永遠にたゆることなければなり。イスラエルを率てエジプト人のなか

より出したまへる者にかんしやせよ。そのあはれみはとこしへに絶ることなければなり。臂をのばしつよき手  
 二三七 二三七 二三七  
 をもて之をひきいだしたまへる者にかんしやせよ。その憐憫はとこしへにたゆることなければなり。紅海をよ  
 二三八 二三八 二三八  
 たつに分たまへる者にかんしやせよ。その憐憫はとこしへにたゆることなければなり。イスラエルをしてその  
 二三九 二三九 二三九  
 中をわたらしめ給へるものに感謝せよ。そのあはれみは永遠にたゆることなければなり。バロとその軍兵とを  
 二四〇 二四〇 二四〇  
 紅海のうちに仆したまへるものに感謝せよ。そのあはれみは永遠にたゆることなければなり。その民をみちび  
 二四一 二四一 二四一  
 きて野をすぎしめたまへる者にかんしやせよ。その憐憫はとこしへにたゆることなければなり。大なる王たち  
 二四二 二四二 二四二  
 を撃たまへるものに感謝せよ。そのあはれみは永遠にたゆることなければなり。名ある王等をころしたまへる  
 二四三 二四三 二四三  
 者にかんしやせよ。その憐憫はとこしへに絶ることなければなり。アモリ人のわうシホンをころしたまへる者  
 二四四 二四四 二四四  
 にかんしやせよ。その憐憫はとこしへにたゆることなければなり。バシヤンのわうオグを誅したまへるものに  
 二四五 二四五 二四五  
 感謝せよ。そのあはれみは永遠にたゆることなければなり。かれらの地を嗣業としてあたへたまへる者にかん  
 二四六 二四六 二四六  
 しやせよ。その憐憫はとこしへにたゆることなければなり。その僕イスラエルにゆづりとして之をあたへたま  
 二四七 二四七 二四七  
 へるものに感謝せよ。そのあはれみは永遠にたゆることなければなり。われらが機賤かりしときに記念したま  
 二四八 二四八 二四八  
 へる者にかんしやせよ。その憐憫はとこしへに絶ることなければなり。わが敵よりわれらを助けいだしたまへ  
 二四九 二四九 二四九  
 る者にかんしやせよ。その憐憫はとこしへに絶ることなければなり。すべての生るものに食物をあたへたまふ  
 二五〇 二五〇 二五〇  
 ものに感謝せよ。そのあはれみはとこしへに絶ることなければなり。天の神にかんしやせよ。その憐憫はとこし  
 二五一 二五一 二五一  
 へに絶ることなければなり。

第一三七篇

われらバビロンの河のほとりにすわり、シオンをおもひいでて涙をながしぬ。われらその  
 二五二 二五二 二五二  
 あたりの柳にわが琴をかけた。そはわれらを虜にせしものわれらに歌をもとめたり。我儕  
 二五三 二五三 二五三  
 をくるしむる者われらにおのれを歎ばせんとて、シオンのうた一つうたへといへり。われら外邦にありていかに



エホバの歌をうたははんや エルサレムよもし我なんちをわすれなばわが右の手にその巧をわすれしめたまへ  
もしわれ汝を思ひいでずもしわれエルサレムをわがすべての歡喜の種となさずばわが舌をわが唇につかしめ  
たまへ エホバよねがはくはエルサレムの日にエドムの子孫がこれを掃除けその基までもはらひのぞけと  
いへるを 聖意にとめたまへ ほろぼさるべきバビロンの女よなんちがわれらに作しごとく汝にむくゆる人は  
さいはひなるべし なんちの嬰兒をとりて岩のうへになげうつものは禍ひなるべし

第一三八篇

ダビデのうた

われはわが心をつくしてなんちに感謝しもろもろの神のまへにて汝をほめうたはん 我な  
んちのきよき宮にむかひて伏拜み なんちの仁慈とまこととの故によりて聖名にかんしやせん そは汝そのみこと  
ばをもろもろの聖名にまさりて高きしたまひたればなり 汝わがよばはりし日にわれにこたへわが靈魂に  
ちからをあたへて雄々しからしめたまへり エホバよ地のすべての王はなんちに感謝せん くれらはなんちの  
口のもろもろの言をきいたればなり かれらはエホバのもろもろの途についてうたはん エホバの榮光おほい  
なればなり エホバは高くましませども卑きものを願みたまふされど亦おこれるものを遠よりしりたまへり  
縦ひわれ患難のなかを歩むとも汝われをふたゝび活しその手をのばしてわが仇のいかりをふせき その右の手  
われをすくひたまふべし エホバはわれに係れることを全うしたまはん エホバよなんちの憐憫はとこしへに  
たゆることなし 願くはなんちの手のもろもろの事跡をすてたまふなかれ

第二三九篇

伶長にうたはしめたるダビデの歌

エホバよなんちは我をさぐり我をしりたまへり なんちはわが坐るをも立をもしり 又とほく  
よりわが念をわきまへたまふ なんちはわが歩むをもわが臥をもさぐりいだしわがもろもろの途をことごと  
く知たまへり そはわが舌に一言ありとも 視よエホバよなんちことごとく知たまふ なんちは前より後より

われをかこみわが上にその玉をおき給へり かゝる知識はいとくすしくして我にすぐまた高くして及ぶこと  
あたはず 我いづこにゆきてなんちの聖靈をはなれんや われいづこに往てなんちの前をのがれんや われ  
天にのぼるとも汝かしこにいまし われわが榻を陰府にまうくるとも 視よなんち彼處にいます 我あけぼの  
の翼をかりて海のはてにすむとも かしこにて尙なんちの手われをみちびき 汝のみぎの手われをたもちたま  
はん 暗はかならず我をおほひ 我をかこめる光は夜とならんと我いふとも 汝のみまへには暗ものをかくす  
ことなく 夜もひるのごとくに輝けり なんちにはくらきも光もことなることなし 汝はわがはらわたをつくり  
又わがはらの胎にわれを組成たまひたり われなんちに感謝す われは畏るべく奇しくつくられたり なんちの  
事跡はことごとくすし わが靈魂はいとつばらに之をしれり われ隠れたるところにてつくられ 地の底所に  
て妙につゞりあはされしときわが骨なんちにかくるゝことなかりき わが體いまだ全からざるに なんちの目  
ははやくより之をみ 日々かたちづくられしわが百體の一だにあらざりし時に ことごとくなんちの册にしろされ  
たり 神よなんちのもろもろの思念はわれに實きこといかばかりぞや そのみおもひの總計はいかに多きかな  
我これを算へんとすれどもそのかずは沙よりもおほし われ眼さむるときも尙なんちとともにをる 神よ  
なんちはかならず悪者をころし給はん されば血をながすものよ我をはなれされ かれらはあしき企圖をもて  
汝にさからひて言ふなんちの仇はみだりに聖名をとふるなり エホバよわれは汝をにくむ者をにくむに  
あらずや なんちに逆ひておこりたつものを厭ふにあらずや われ甚くかれらをにくみてわが仇とす 神よ  
ねがはくは我をさぐりてわが心をしり 我をこゝろみてわがもろもろの思念をしりたまへ ねがはくは我に  
よこしまなる途のありやなしやを見て われを永遠のみにち導きたまへ

第一四〇篇

伶長にうたはしめたるダビデのうた

エホバよねがはくは悪人よりわれを助けいだし 我をまもりて強暴人よりのがれしめたまへ



かれらは心のうちに殘害をくはだてたえず戦闘をおこす かれらは蛇のごとくおのが舌を利すそのくちび  
 るのうちに腹の毒ありセラ エホバよ願くはわれを保ちてあしきひとの手よりのがれしめ我をまもりてわが  
 足をつまづかせんと謀るあらぶる人よりのがれしめ給へ 高ぶるものはわがために罾と索とをふせ路のほとり  
 に網をはりかつ機をまうけたりセラ われエホバにいへらく汝はわが神なりエホバよねがはくはわが祈の  
 こゑをき給へ わが救のちからなる主の神よなんちはたかひの日にわが首をおほひたまへり エホバ  
 よあしきひとの欲のまゝにすることをゆるしたまふなかれそのあしき企圖をとげしめたまふなかれおそらくは  
 彼等みづから誇らんセラ われを圍むものの首はおのれのくちびるの殘害におほはるべし 〇もえたる炭は  
 かれらのうへにおちかれらは火になげいられふかき穴になげいられて再びおきいづることあたはざるべし  
 惡言をいふものは世にたてられず暴ふるものはわざはひに追及れてたふさるべし われは苦しむもの  
 訴とまづしきもの義とをエホバの守りたまふを知る 義者はかならず聖名にかんしやし直者はみまへ  
 に住ん

第一四一篇

エホバよ我なんちを呼ぶねがはくは速かにわれにきたりたまへ われ汝をよばふときわが聲に  
 耳をかたぶけたまへ われは薫物のごとくにわが祈をみまへにさづけ夕のそなへもの如くにわが手をあげて  
 聖前にさづけんことをねがふ エホバよねがはくはわが口に門守をおきてわがくちびるの戸をまもりたまへ  
 惡事にわがころを傾かしめて 邪曲をおこなふ者とともに惡きわざにあづからしめ給ふなかれ 又かれらの  
 珍髓をくらはしめたまふなかれ 義者われをうつとも我はこれを愛しみとしその我をせむるを頭のあぶら  
 とせんわが頭はこれを辭ます かれらが禍害にあふときもわが祈はたえじ その審士はいはほの睡になげられ  
 んかれらわがことばの甘美によりて睡ことをすべし 人つちを辨しうがつごとく我傳のほねははかり口に

第一四二篇

われ聲をいだしてエホバによばはり聲をいだしてエホバにこひもとむ われはその聖前に  
 わが歎息をそそぎいだしそのみまへにわが患難をあらはす わが靈魂わがうちにきえうせんとするときも汝  
 わがみちを識たまへり人われをとらへんとてわがゆくみちに罾をかくせり 願くはわがみぎの手に目をそ  
 ぎて見たまへ 一人だに我をしるものなしわれには避所なくまたわが靈魂をかへりみる人なし エホバよわれ  
 汝をよばふ我いへらく汝はわがさけどころ有生の地にてわがうべき分なりと ねがはくはわが號呼にみこる  
 をとめたまへ われいたく卑くせられたればなり 我をせむる者より助けいだしたまへ 彼等はわれにまさりて  
 強ければなり 願くはわがたましひを圍圍よりいだしわれに聖名を感謝せしめたまへ なんち聖かにわれを  
 待ひたまふべければ 義者われをめぐらん

第一四三篇

エホバよねがはくはわが祈をき 〇わが懇求にみまをかたぶけたまへ なんちの眞實なんちの  
 公義をもて我にこたへたまへ 汝のしもべの審判にかつらひたまふなかれそはいけるもの一人だにみまへ  
 に義とせらるゝはなし 仇はわがたましひを迫めわが生命を地にうちすて死てひさしく世を経たるものごと  
 く我をくらき所にすまはせたり 又わがたましひはわが裏にきえうせんとしわが心はわがうちに曠さびれた  
 り われはいにしへの日をおもひいで汝のおこなひたまひし一切のことを考へなんちの手のみわざをおもふ  
 われ汝にむかひてわが手をのべわがたましひは慄きおとろへたる地のごとく汝をしたへりセラ エホバよ



速かにわれにこたへたまへ わが靈魂はおとろふ われに聖顔をかくしたまふなかれ おそくはわれ穴にくだるものごとくならん <sup>八</sup> 朝になんちの仁慈をきかしたまへ われ汝によりたのめばなり わが歩むべき途をしらせたまへ われわが靈魂をなんぢに舉ればなり <sup>九</sup> エホバよねがはくは我をわが仇よりたすけ出したまへ われ匿れんとして汝にはしりゆく <sup>一〇</sup> 汝はわが神なり われに聖旨をおこなふことををしへたまへ 恵ふかき聖靈をもて我をたひらかなる國にみちびきたまへ <sup>一一</sup> エホバよねがはくは聖名のために我をいかしなんちの義によりてわがたましひを患難よりいだしたまへ <sup>一二</sup> 又なんちの仁慈によりてわが仇をたち 靈魂をくるしむる者ごとくとく滅したまへ <sup>一三</sup> そは我なんちの僕なり

第一四四篇

ダビデのうた

戦することをわが手にをしへ 闘ふことをわが指にしへたまふ わが磐石エホバはほむべきかな <sup>一</sup> エホバはわが仁慈わが城なり わがたかき楯われをすくひたまふ者なり わが盾わが依頼むものなり エホバはわが民をわれにしたがはせたまふ <sup>二</sup> エホバよ人はいかなる者なれば之をしり 人の子はいかなる者なれば之をみこゝろに記たまふや <sup>三</sup> 人は氣息にことならずその存らる日はすきゆく影にひとし <sup>四</sup> エホバよねがはくはなんちの天をたれてくだり 手を山につけて煙をたしめたまへ <sup>五</sup> 電光をうちいだして彼等をちらしなんちの矢をはなちてかれらを敗りたまへ <sup>六</sup> 上より手をのべ我をすくひて 大水より外人の手よりたすけいだしたまへ <sup>七</sup> かれらの口はむなしき言をいひ その右の手はいつはりのみぎの手なり <sup>八</sup> 神よわれ汝にむかひて新らしき歌をうたひ 十絃の琴にあはせて汝をほめうたはん <sup>九</sup> なんちは王たちに救をあたへ 僕ダビデをわさはひの剣よりすくひたまふ神なり <sup>一〇</sup> ねがはくは我をすくひて 外人の手よりたすけいだしたまへ かれらの口はむなしき言をいひ その右の手はいつはりのみぎの手なり <sup>一一</sup> われらの男子はとしわかきとき育ちたる草木のごとく われらの女子は宮のふりにならひて刻みいだし 隅の石のごとくならん <sup>一二</sup> われらの倉はみちたらひて さまさまの

ものをそなへ われらの羊は野にて千萬の子をうみ <sup>一三</sup> われらの牡牛はよく物をおひ われらの衛にはせめいることなく亦おしいづることなく叫ぶこともなからん <sup>一四</sup> かゝる状の民はさいはひなり エホバをおのが神とする民はさいはひなり

第一四五篇

ダビデの讚美のうた

わがかみ王よわれ汝をあがめ 世々かぎりなく聖名をほめまつらん <sup>一</sup> われ日ごとに汝をほめ世々かぎりなく聖名をほめたへん <sup>二</sup> エホバは大にましませば最もほむべきかな その大なることは尋ねしることかたし <sup>三</sup> この代はかの代にむかひてなんちの事跡をほめたへん なんちの大能のはたらきを宣つたへん <sup>四</sup> われ汝のほまれ榮光ある稜威となんちの奇しきみわざとを深くおもはん <sup>五</sup> 人はなんちのおそるべき動作のいきほひをかたり 我はなんちの大なることを宣つたへん <sup>六</sup> かれらはなんちの大なる惠の跡をいひいで なんちの義をほめうたはん <sup>七</sup> エホバは恵ふかき憐情みちまた怒りたまふことおそく憐憫おほいなり <sup>八</sup> エホバはよろづの者にめぐみあり そのふかき憐憫はみわざの上にあまねし <sup>九</sup> エホバよ汝のすべての事跡はなんちに感謝しなんちの聖徒はなんちをほめん <sup>一〇</sup> かれらは御國のえいくわうをかたり 汝のみちからを宣つたへて <sup>一一</sup> その大能のはたらきと そのみくにの榮光あるみいつとを人の子孫にしらすべし <sup>一二</sup> なんちの國はとこしへの國なりなんちの政治はよろづ代にたゆることなし <sup>一三</sup> エホバはすべて倒れんとする者をさへ かいむものを直くたしめたまふ <sup>一四</sup> よろづのもの目の目はなんちを待たなんちは時にしたがひてかれらに糧をあたへ給ふ <sup>一五</sup> なんち手をひらきてもろもろの生るもの願望をあかしめたまふ <sup>一六</sup> エホバはそのすべての途にたゞしく そのすべての作爲にめぐみふかし <sup>一七</sup> すべてエホバをよぶもの 誠をもて之をよぶものに エホバは近くましますなり <sup>一八</sup> エホバは己をおそるゝもの願望をみちたらしめ その號呼をききて之をすくひたまふ <sup>一九</sup> エホバはおのれを愛しむものをすべて守りたまへど 悪者をごとくとく滅したまはん <sup>二〇</sup> わが口はエホバの頌美をかたりよろづの民は世々かぎり



なくそのきよき名をほめまつるべし

第一四六篇

エホバを讃稱へよ わがたましひよエホバをほめたよへよ われ生るかぎりにはエホバをほめたよへよ わがながらふるほどはわが神をほめうたはん もろもろの君によりたのむことなく人の子によりたのむなかれ かれらに助あることなし その氣息いでゆけばかれ土にかへる その日かれがもろもろの企圖はほろびん ヤコブの神をおのが助としその望をおのが神エホバにおくものは福ひなり 此はあめつちと海とそのなかなるあらゆるものを造りとこしへに眞實をまもり 虚げらるゝものために審判をおこなひ 餓ゑたるものに食物をあたへたまふ神なり エホバはとらはれたる人をときはなちたまふ エホバはめしひの目をひらき エホバは屈者をなほくたせ エホバは義しきものを愛しみたまふ エホバは他邦人をまもり 孤子と寡婦とをさへたまふされど悪きものの徑はくつがへしたまふなり エホバはとこしへに統御めたまはん シオンよなんちの神はよろづ代まで統御めたまはん エホバをほめたよへよ

第一四七篇

エホバをほめたよへよ われらの神をほめうたふは善ことなり 樂しきことなり 稱へまつるはよろしきに適へり エホバはエルサレムをきづき イスラエルのさすらへる者をあつめたまふ エホバは心のくだけたるものを醫しその傷をつみたまふ エホバはもろもろの星の數をかぞへてすべてこれに名をあたへたまふ われらの主はおほいなり その能力もまた大なり その智慧はきはまりなし エホバは柔和なるものをさへ悪きものを地にひきおとし給ふ エホバに感謝してうたへ 琴にあはせてわれらの神をほめうたへ エホバは雲をもて天をおほひ 地のために雨をそなへもろもろの山に草をはえしめ くのものを獸にあたへ並なく小鴉にあたへたまふ エホバは馬のちからを喜びたまはず 人の足をよみしたまはず エホバはおのれを畏るゝものとおのれの憐憫をのぞむものとを好したまふ エルサレムよエホバをほめたよへよ シオンよなんちの神をほめたよへよ エホバはなんちの門の關木をかたうし 汝のうちなる子輩を

二四 さきはひ給ひたればなり 二五 エホバは汝のすべての境にやはらぎをあたへいと嘉麥をもて汝をあかしめたまふ 二六 エホバはそのいましめを地にくだしたまふその聖言はいとすみやかにしる 二七 エホバは雪をひつじの毛のごとくふらせ 霜を灰のごとくにまきたまふ 二八 エホバは氷をつちくれのごとくに擲ちたまふたれかその寒冷にたふることをえんや 二九 エホバ聖言をくだしてこれを消しその風をふかしめたまへばもろもろの水はながる 三〇 エホバはそのみことばをヤコブに示しそのもろもろの律法とその審判とをイスラエルにしめたまふ 三一 エホバはいづれの國をも如此あしらひたまひしにあらず エホバのもろもろの審判をかれらはしらざるなり エホバをほめたよへよ

第一四八篇

エホバをほめたよへよもろもろの天よりエホバをほめたよへよもろもろの高所にてエホバをほめたよへよ その天使よみなエホバをほめたよへよその萬軍よみなエホバをほめたよへよ 日よ月よエホバをほめたよへよひかりの星よみなエホバをほめたよへよ もろもろの天のてんよ天のうへなる水よ エホバをほめたよへよ これらはみなエホバの聖名をほめたよふべしそはエホバ命じたまひたればかれらは造られたり エホバまた此等をいやとほながに立たまひたり 又すきうすまじき詔命をくだしたまへり 龍よすべての淵よ地よりエホバをほめたよへよ 火よ霧よ雪よ霧よみことばにしたがふ狂風よもろもろの山もろもろのをか實をむすぶ樹よ すべて香柏よ 獸もろもろの牲畜はふもの翼ある鳥よ 地の王たちもろもろのたみ地の諸侯よ 地のもろもろの審士よ 少きをのこ 若きをみな 老たる人をさなきものよ みなエホバの聖名をほめたよふべしその聖名はたかくして類なくそのえいくわうは地よりも天よりもうへにあればなり エホバはその民のために一つの角をあげたまへりこはそのもろもろの聖徒のほまれ エホバにちかき民なるイスラエルの子輩のほまれなり エホバを讃稱へよ



第一四九篇

エホバをほめたへよ エホバに對ひてあたらしき歌をうたへ 聖徒のつどひにてエホバの頌美  
 をうたへ イスラエルはおのれを造りたまひしものをよろこび シオンの子輩は己が王のゆゑ  
 によりて樂しむべし かれらをどりつゝその聖名をほめたへ 琴鼓にてエホバをほめうたふべし エホバ  
 はおのが民をよろこび 救にて柔和なるものを美しくしたまへばなり 聖徒はえいくわうの故によりてよろこ  
 びその寢牀にてよろこびうたふべし その口に神をほむるうたあり その手にもろはの劍あり こはもろも  
 ろの國に仇をかへし もろもろの民をつみなひ かれらの王たちを鏗にて かれらの貴人をくろがねの械にて  
 いましめ 録したる審判をかれらに行ふべきためなり 斯るほまれはそのもろもろの聖徒にあり エホバをほめ  
 たへよ

第一五〇篇

エホバをほめたへよ その聖所にて神をほめたへよ その能力のあらはるゝ穹蒼にて神をほ  
 めたへよ その大能のはたらきのゆゑをもて神をほめたへよ その秀ておほいなることの  
 故によりてエホバをほめたへよ ラッパの聲をもて神をほめたへよ 箏と琴をもて神をほめたへよ  
 つどみと踏舞をもて神をほめたへよ 絃籥をもて神をほめたへよ 音のたかき鏡鏡をもて神をほめ  
 たへよ なりひびく鏡鏡をもて神をほめたへよ 氣息あるものは皆ヤハをほめたへよ べしなんぢらエホバ  
 をほめたへよ

詩 篇 をはり

第一章

ダビデの子イスラエルの王ソロモンの箴言 人は人に智慧と訓誨とをしらしめ 哲言を曉らせ  
 さとき訓と公義と公平と正直とをえしめ 拙者にさとりを與へ少者に知識と謹慎とを得させ  
 ん爲なり 智慧ある者は之を聞て學にすゝみ 哲者は智略をうべし 人これによりて箴言と譬喩と智慧ある  
 者の言とその隠語とを悟らん エホバを畏るゝは知識の本なり 愚なる者は智慧と訓誨とを輕んず 我  
 が子よ汝の父の教をきけ 汝の母の法を棄ることなかれ 汝の首の美しき冠となり 汝の項の妝飾とならん  
 わが子よ惡者なんぢを誘ふとも從ふことなかれ 彼等なんぢにむかひて請ふわれらと偕にきたれ 我儕まぢ  
 ぶせて人の血を流し 無辜ものを故なきに伏てねらひ 陰府のごとく彼等を活たるまゝにて呑み 壯健なる者  
 を墳に下る者のごとくなさん われら各様のたふとき財寶をえ 奪ひ取たる物をもて我儕の家に盈さん 汝  
 われらと偕に鏡をひけ 我儕とともに一の金囊を持べしと云とも 我が子よ彼等とともに途を歩むことなかれ  
 汝の足を禁めてその路にゆくこと勿れ 彼は彼らの足は惡に趨り 血を流さんとて急げばなり (すべて鳥の  
 眼の前にて羅を張は徒勞なり) 彼等はおのれの血のために埋伏し おのれの命をふしてねらふ 凡て利を貪  
 る者の途はかくの如し 是はその持主をして生命をうしなはしむるなり 智慧外に呼はり 衝に其聲をあげ  
 熱鬧しき所にさけび 城市の門の口邑の中にその言をのべていふ なんぢら拙者のつたなきを愛し 嘲笑者  
 のあざけりを樂しみ 愚なる者の知識を惡むは幾時までぞや わが督斥にしたがひて心を改めよ 視よわれ我が  
 邊を汝らにそゝぎ 我が言をなんぢらに示さん われ呼たれども汝らこたへず 手を伸たれども顧る者なく  
 かへつて我がすべての勸告をすて 我が督斥を受ざりしに由り われ汝らが禍災にあふとき之を笑ひ 汝ら  
 の恐懼きたらんとし嘲るべし これは汝らのおそれ颯風の如くきたり 汝らのほろび颯風の如くきたり 艱難と







第四章

小子等よ父の訓をきけ 聰明を知らんために耳をかたむけよ 二 われ善教を汝らにさづくわが律を棄つることなかれ 三 われも我が父には子にして 我が母の目には獨の愛子なりき 四 父われを教へていへらく我が言を汝の心にとりめ わが誠命をまもれ 然らば生べし 五 智慧をえ聰明をえよ これを忘るゝなかれ また我が口の言に身をそむくるなかれ 六 智慧をすつることなかれ 彼なんちを守らん 彼を愛せよ 彼なんちを保たん 七 智慧は第一なるものなり 智慧をえよ 凡て汝の得たる物をもて聰明をえよ 八 彼を尊べ さらば彼なんちを高く擧げんもし彼を懐かば彼汝を尊榮からしめん 九 かれ美しき飾を汝の首に置き 榮の冠弁を汝に予へん 一〇 我が子よきけ 我が言を納れよ さらば汝の生命の年おほからん 一一 われ智慧の道を汝に教へ 義しき徑筋に汝を導けり 一二 歩くとき汝の歩は艱まず 趨るときも躓かじ 一三 堅く訓誨を執りて離すこと勿れ 一四 これを避よ 過るれこれ汝の生命なり 一五 邪曲なる者の途に入るることなかれ 惡者の路をあゆむこと勿れ 一六 これを避よ 過ること勿れ 離れて去れ 一七 そは彼等は惡を爲さざれば睡らず 人を躓かせざればいねす 一八 不義のパンを食ひ 暴虐の酒を飲めばなり 一九 義者の途は旭光のごとし 一〇 一よい光輝をまして晝の正午にいたる 二一 惡者の途は幽冥のごとし 彼らはその蹟くものなになるを知るなり 二二 わが子よ我が言をきけ 我が語るところに汝の耳を傾けよ 二三 之を汝の目より離すこと勿れ 汝の心のうちに守れ 二四 是は之を得るもの生命にしてまたその全體の良藥なり 二五 すべての操守べき物よりもまさりて汝の心を守れ 是は生命の流これより出ればなり 二六 虚偽の口を汝より棄さり 惡き口唇を汝より遠くはなせ 二七 汝の目は正しく視 汝の眼瞼は汝の前を眞直に視るべし 二八 汝の足の徑をかんがへはかり 汝のすべての道を直くせよ 二九 右にも左にも偏ること勿れ 汝の足を惡より離れしめよ

第五章

我が子よわが智慧をきけ 汝の耳をわが聰明に傾け 二 しかしてなんち謹慎を守り 汝の口唇に知識を保つべし 三 娼妓の口唇は蜜を滴らし 其口は脂よりも滑なり 四 されど其終は蒺藜の如くに 苦く 兩刃の劍の如くに利し 五 その足は死に下り 其の歩は陰府に趣く 六 彼は生命の途に入らず 其徑はさだか

ならねども自ら之を知ざるなり

小子等よいま我にきけ 我が口の言を棄つる勿れ 一 汝の途を彼より遠く離れしめよ 其家の門に近づくことなかれ 二 恐くは汝の榮を他人にわたし 汝の年を憐憫なき者にわたすに

いたらん 三 恐くは他人なんちの資財によりて盈され 汝の勞苦は他人の家にあらん 四 終にいたりて汝の身を

んちの體亡ぶる時 なんち泣き悲みていはん 五 われ教をいと心に譴責をかるんじ 六 我が師の聲をきかず

我を教ふる者に耳を傾けず 七 あつまりの中會衆のうちにてほとんど 諸の惡に陥れりと 八 汝おのれの

水溜より水を飲み おのれの泉より流るゝ水をのめ 九 汝の流をほかに溢れしめ 汝の河の水を衝に流れしむべけ

んや 一〇 これを自己に歸せしめ 他人をして汝と偕に之に與らしむること勿れ 一一 汝の泉に福祉を受けしめ 汝の

少き時の妻を樂しめ 一 彼は愛しき 應のごとく 美しき 鹿の如し その乳房をもて常にたれりとし その愛をもて

常によろこべ 二 我子よ何なればあそびめをたのしみ 淫婦の胸を懐くや 三 それ人の途はエホバの目の前に

あり 彼はすべて其行爲を量りたまふ 四 惡者はおのれの愆にとらへられ その罪の繩に繋る 五 彼は訓誨なき

によりて死 その多くの愚なることに由りて亡ぶべし

第六章

我子よ汝もし朋友のために保証をなし 他人のために汝の手を拍ば 一 汝その口の言によりて

救へすなはち往て自ら謙だり 只管なんちの友に求め 二 汝の目をして睡らしむることなく 汝の眼瞼をして閉し

むること勿れ 三 かりうどの手より鹿ののがるゝごとく 鳥とる者の手より鳥ののがるゝ如くして みづからを救

へ 四 情者よ蟻にゆき其爲すところを觀て 智慧をえよ 五 蟻は首領なく有司なく 君王なけれども 六 夏の

うちに食をそなへ 收穫のときに糧を斂む 七 情者よ汝いつれの時まで臥息むや 一いつれの時まで睡りて起ざ

るや 八 しばらく臥し しばらく睡り 手を叉きてまた片時やすむ 九 さらば汝の貧窮は盜人の如くきたり 汝の

缺乏は兵士の如くきたるべし 一〇 邪曲なる人あしき人は虚偽の言をもて事を行ふ 一一 彼は眼をもて陶せし脚を



二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一

もてしらせ 指をもて示す 二〇 その心に虚偽をたもち 常に悪をはかり 争端を起す 二二 この故にその禍害にはか  
 に来り 援助なくして 立刻に敗るべし 二一 エホバの憎みたまふもの六あり 否その心に嫌ひたまふもの七あり  
 即ち 驕る目 一つはりをいふ舌 つみなき人の血を流す手 二二 悪き謀計をめぐらす心 すみやかに悪に趨る足  
 詐偽をのぶる證人 および兄弟のうちに争端をおこす者なり 二三 我子よ 汝の父の誠命を守り 汝の母の法  
 を棄る勿れ 二四 常にこれを汝の心にむすび 之をなんぢの頸に佩よ 二五 これは汝のゆくとき 汝をみちびき 汝の幾  
 るとき 汝をまもり 汝の痛るとき 汝をかたらん 二六 それ誠命は燈火なり 法は光なり 教訓の懲治は生命の道なり  
 三〇 これは汝をまもりて 惡き婦よりまぬかれしめ 汝をたもちて 淫婦の舌の谄媚にまどはされざらしめん 三一 その  
 艶美を心に戀ふことなかれ 其の眼瞼に捕へらるること勿れ 三二 それ娼妓のために人はたゞ 僅に一擲の糧をの  
 こすのみにいたる 又淫婦は人の貴き生命を求むるなり 三三 人は火を懷に抱きて その衣を焚れざらんや 人は  
 熱火を踏みて 其足を焚れざらんや 三四 その隣の妻と 姦淫をおこなふ者もかくあるべし 凡て之に捫る者は罪なしと  
 せられず 三五 竊む者もし 飢しときに 其飢を充さん爲にぬすめるならば 人これを獲ぜじ 三六 もし捕へられれば その  
 七倍を償ひ 其家の所有をことごとく出さざるべからず 三七 婦と姦淫をおこなふ者は 智慧なきなり 之を行ふ者は  
 おのれの靈魂をじし 傷と液辱とをうけて 其恥を雪ぐこと能はず 三八 嫉忌その夫をして 忿怒をもやましむれば  
 その怨を報ゆるとき かならず寛さじ 三九 いかなる贖物をも 願みず 衆多の贖物をなすとも やはらがざるべし  
 四〇 我子よ わが言をまもり 我が誠命を 汝の心にたくはへよ 四一 我が誠命をまもりて 生命をえよ 我法を  
 守ること 汝の眸子を守るが如くせよ 四二 これを汝の指にむすび これを汝の心の碑に銘せ 四三 なん  
 ぢ智慧にむかひて 汝はわが姉妹なりといひ 明理にむかひて 汝はわが友なりといへ 四四 さらば 汝をまもりて 淫婦  
 にまよはざらしめ 言をもて 媚る娼妓にとほざからしめん 四五 われ我室の闢により 掃子よりのぞきて 拙き者の  
 うち 幼弱者のうちに 一人の智慧なき者あるを 觀たり 四六 彼衝をすぎ 婦の門に ちかづき 其家の路にゆき 四七 黄昏

第七章

二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一

に 半背に 夜半に 黑暗の中にあるけり 一〇 時に 娼妓の衣を著たる 狡らなる 婦に かれにあふ 一一 この 婦は 謙しくして  
 つゝしみなく 其足は 家に 止らず 一二 あるときは 衝にあり 或時は ひろばにあり すみすみに たちて 人を うかゞふ  
 一三 この 婦かれを ひきて 接吻し 恥しらしめ 面をもていひけるは 一四 われ 酬恩祭を 獻げ 今日す でに わが 誓願を 償せり  
 一五 これによりて 我なんぢを 迎へんとて いで 汝の面を たづねて 汝に 逢へり 一六 わが 榻には 美しき 褥および エジプ  
 トの 文衣をしき 一七 液藥 蘆薈 桂皮をもて 我が 榻に そゝげり 一八 來れ われら 詰朝まで 情をつくし 愛をかよはして  
 相なぐさめん 一九 そは 夫は 家に あり 速く 旅立して 二〇 手に 金囊をとれり 望月なら では 家に 歸らじと 二一 多の  
 婉 言をもて 惑し 口唇の 谄媚をもて 誘へば 二二 わかき 人たゞ ちに これに 隨へり あたかも 牛の 幸地に ゆくが  
 如く 愚なる 者の 桎梏を かけらるゝ 爲に ゆくが 如し 二三 遂には 矢その 肝を 刺さん 鳥の 速かに 羅に 入りて その 生命  
 を 喪ふに 至るを 知ざるがごとし 二四 小子等よ いま 我に かけ 我が 口の 言に 耳を 傾けよ 二五 なんぢの 心を 淫婦  
 の 道にかたむくること 勿れ また これが 徑に 迷ふこと 勿れ 二六 そは 彼は 多の 人を 傷つけて 仕せり 彼に 殺されたる  
 者ぞ 多かる 二七 その 家は 陰府の 途にして 死の 室に 下りゆく  
 第八章 二八 彼は 路の ほとりの 高處 また 街衢の なかに 立ち  
 もて 人の子等を よぶ 二九 拙き者よ なんぢら 聰明に 明かなれ 愚なる 者よ 汝ら 明かなる 心を得よ 汝きけ われ  
 善事を かたらん わが 口唇を ひらきて 正 事を いださん 三〇 我が 口は 眞實を 述べ わが 口唇は あしき 事を 憎むなり  
 三二 わが 口の 言は みな 義し その うちに 虚偽と 奸邪と あることなし 三三 是みな 智者の 明かに するところ 知識を うる  
 者の 正とする ところなり 三四 なんぢら 銀を うくるよりは 我が 教を うけよ 精金よりも むしろ 知識を えよ 三五 それ  
 智慧は 眞珠に 愈れり 凡の 寶も 之に 比ぶるに 足らず 三六 われ 智慧は 聰明を すみかとし 知識と 謹慎に いたる  
 三七 エホバを 畏るゝとは 惡を 憎むことなり 我は 傲慢と 驕者 惡道と 虚偽の 口とを 憎む 三八 謀略と 聰明は 我に あり



我は了知なり 我は能力あり 我に由て王者は政をなし 君たる者は義しき律をたて 我によりて主たる者および牧伯たちなど凡て地の審判人は世ををさむ われを愛する者は我これを愛す 我を切に求むるものは我に遇ん 富と榮とは我にあり 貴き寶と公義とも亦然り わが果は金よりも精金よりも愈り わが利は精銀よりもよし 我は義しき道にあゆみ 公平なる路徑のなかを行む これ我を愛する者に貨財をえさせ 又その庫を充しめん爲なり エホバいにしへ其御わざをなしそめたまへる前に その道の始として我をつくりたまひき 永遠より元始より地の有ざりし前より我は立られ いまだ海洋あらず いまだ大なるみづの泉あざりしとき我すでに生れ 山いまださだめられず 陵いまだ有ざりし前に我すでに生れたり 即ち神いまだ地をも野をも地の塵の根元をも造り給はざりし時なり かれ天をつくり 海の面に穹蒼を張たまひしとき我かしこに在りき 彼うへに雲氣をかたく定め 淵の泉をつよくならしめ 海にその限界をたて 水をしてその岸を踏えざらしめ また地の基を定めたまへるとき 我はその傍にありて創造者となり 日々に欣び 恒にその前に樂み 其の地にて樂み 又世の人を喜べり されば小子等よいま我にきけ わが道をまもる者は福ひなり 教をききて智慧をえよ之を棄つることなかれ 凡そ我にきき 日々わが門の傍にまち わが戸口の柱のわきにたつ人は福ひなり 是は我を得る者は生命をえ エホバより恩寵を獲ればなり 我を失ふものは自己の生命を害ふすべて我を惡むものは死を愛するなり

第九章

智慧はその家を建て その七の柱を砍成し その畜を宰り その酒を混和せ その筵をそなへにいふ 汝等きたりて我が糧を食ひ わがまぜあはせたる酒をのみ 拙劣をすてて生命をえ 聰明のみちを行め 嘲笑者をいましむる者は恥を己にえ 惡人を責むる者は疵を己にえん 嘲笑者を責むることなかれ 恐くは彼なんちを惡まん 智慧ある者をせめよ 彼なんちを愛せん 智慧ある者に投げよ 彼はますます智慧をえん

第一〇章

ソロモンの箴言 智慧ある子は父を欣ばす 愚なる子は母の憂なり 不義の財は益なし されど正義は救ひて死を脱かれしむ エホバは義者の靈魂を饑ゑしめず 惡者にその欲するところを得ざらしむ 手をものうくして動くものは貧くなり 勤めはたらく者の手は富を得 夏のうちに斂むる者は智き子なり 收穫の時にねむる者は辱をきたす子なり 義者の首には福社きたり 惡者の口は強暴を掩ふ 義者の名は讃られ 惡者の名は腐る 心の智き者は誠命を受く されど口の頑愚なる者は滅さる 直くあゆむ者はそのあゆむこと安し されどその途を曲ぐる者は知らるべし 眼をもて向せする者は愛をおこし 口の頑愚なる者は亡さる 義者の口は生命の泉なり 惡者の口は強暴を掩ふ 怨恨は争端をおこし 愛はすべての愆を掩ふ 哲者のくちびるには智慧あり 智慧なき者の背のためには鞭あり 智慧ある者は知識をたくはふ 愚かなる者の口はいまにも滅亡をきたらす 富者の資財はその堅き城なり 貧者のともしきはほろびなり 義者の動作は生命にいたり 惡者の利得は罪にいたる 教をまもる者は生命の道にあり 懲戒をすつる者はあやまりにおちいる 怨をかくす者には虚偽のくちびるあり 誹謗をいだす者は愚かなる者なり 言おほければ罪なきことあたはず その口唇を禁むるものは智慧あり 義者の舌は精銀のごとし 惡者の心は價すくなし 義者の口唇はおほくの人をやしなひ 愚なる者は智慧なきに由て死ぬ エホバの祝福は



人を富す人の勞工はこれに加ふるところなし 愚かなる者は悪をなすを戯れごとのごとくす 智慧のさとかる  
 人にとりても是のごとし 悪者の怖るゝところは自己にきたり 義者のねがふところはあたへらる 狂風  
 のすぐるとき悪者は無に歸せん 義者は窮なくたもつ 基のごとし 情る者のこれを遺すものに於るは 酢の  
 齒に於るが如く 煙の目に於るが如し エホバを畏るゝことは人の目を多くす されど悪者の年はちどめらる  
 義者の望は喜悦にいたり 悪者の望は絶へし エホバの途は直者の城となり 悪を行ふものの滅亡と  
 なる 義者は何時までも動かされず 悪者は地に住むことを得じ 義者の口は智慧をいだすなり 虚偽の  
 舌は抜るべし 義者のくちびるは喜ばるべきことをわきまへ 悪者の口はいつはりを語る

第二章

いつはりの權衡はエホバに惡まれ 義しき砝碼は彼に欣ばる 驕傲きたれば辱も亦きたる 謙だ  
 る者には智慧あり 直者の端莊は己を導き 悖逆者の邪曲は己を亡す 實は震怒の日に益  
 なし されど正義は救ふて死をまぬかれしむ 完全者はその正義によりてその途を直くせられ 悪者はその惡に  
 よりて跌るべし 直者はその正義によりて救はれ 悖逆者は自己の惡によりて執へらる 悪人は死るときに  
 その望たえ 不義なる者の望もまた絶へし 義者は艱難より救はれ 悪者はこれに代る 邪曲なる者は口を  
 もてその鄰を亡す されど義しき者はその知識によりて救はる 義しきもの幸福を受ければその城邑に歡喜あり  
 惡きもの亡さるれば歡喜の聲おこる 城邑は直者の祝ふに倚て高く舉られ 惡者の口によりて亡さる 其の  
 鄰を侮る者は智慧なし 聰明人はその口を噤む 住て人の是非をいふ者は密事を洩し 心の忠信なる者は事を  
 隠す はかりごとなければ民たふれ 謙士多ければ平安なり 他人のために保證をなす者は苦難をうけ 保證  
 を嫌ふ者は平安なり 柔順なる婦は榮譽をえ 強き男子は資財を得 慈悲ある者は己の靈魂に益をくはへ  
 殘忍者はおのれの身を擾はす 惡者の獲る報はむなく 義を播くものの得る報賞は確し 堅く義をたもつ  
 者は生命にいたり 惡を追もとむる者はおのれの死をまぬく 心の戻れる者はエホバに憎まれ 直く道を歩む者

は彼に悦ばる 手に手をあはするとも惡人は罪をまぬかれず 義人の苗裔は救を得 美しき婦のつゝし  
 なきは金の環の冢の鼻にあるが如し 義人のねがふところは凡て福祉にいたり 惡人ののぞむところは震怒  
 にいたる ほどこし散して反りて増ものあり 與ふべきを呑みてかへりて貧しきにいたる者あり 施與を好む  
 ものは肥え 人を潤ぼす者はまた利潤をうく 穀物を藏めて糶ざる者は民に詛はる 然れど售る者の首には祝詞  
 あり 善をもとむる者は恩恵をえん 惡をもとむる者には惡き事きたらん おのれの富を恃むものは仆れん  
 されど義者は樹の青葉のごとくさかえん おのれの家をくるしむるものは風をえて所有とせん 愚なる者は  
 心の智きものの僕とならん 義人の果は生命の樹なり 智慧ある者は人を捕ふ みよ義人すらも世に  
 ありて報をうくべし 況て惡人と罪人とをや

第二章

訓誨を愛する者は知識を愛す 懲戒を惡むものは畜のごとし 善人はエホバの恩寵をうけ 惡き  
 謀略を設くる人はエホバに罰せらる 人は惡をもて堅く立ことあたはず 義人の根は動くこと  
 なし 賢き婦はその夫の冠弁なり 辱をきたらす婦は夫をしてその骨に腐あるが如くならしむ 義者の  
 おもひは直し 惡者の計るところは虚偽なり 惡者の言は人の血を流さんと一伺ふ されど直者の口は人を救ふ  
 なり 惡者はたふされて無ものとならん されど義者の家は立べし 人はその聰明にしたがひて譽られ 心  
 の悖れる者は藐めらる 卑賤してしもべある者は自らたかぶりて食に乏き者に愈る 義者はその畜の生命  
 を顧みる されど惡者は殘忍をもてその憐憫とす おのれの田地を耕すものは食にあく 放蕩なる人にしたがふ  
 者は智慧なし 惡者はあしき人の獲たる物をうらやみ 義者の根は芽をいだす 惡者はくちびるの嚙に  
 よりて唇に陥る されど義者は患難の中よりまぬかれいでん 人はその口の徳によりて福祉に飽ん 人の手の  
 行爲はその人の身にかへるべし 愚なる者はみづからその道を見て正しとす されど智慧ある者はすゝめを  
 容る 愚なる者はたゞちに怒をあらはし 智きものは恥をつゝむ 眞實をいふものは正義を述べ いつはりの



證人は虚偽をいふ 妄りに言をいだし剣をもて刺がごとくする者あり されど智慧ある者の舌は人をいやす  
 眞理をいふ口唇は何時まで存つされど虚偽をいふ舌はたゞ瞬息のあひだのみなり 悪事をはかる者の心  
 には欺詐あり 和平を議する者には歡喜あり 義者には何の禍害も來らず 悪者はわざはひをもて充さる  
 つはりの口唇はエホバに憎まれ 眞實をおこなふ者は彼に悦ばる 賢人は知識をかくす されど愚なる者の  
 こゝろは愚なる事を述べ 勤めはたらく者の手は人ををさむるにいたり 情者は人に服ふるにいたる  
 れひ人の心にあれば之を屈ます されど善言はこれを樂します 義者はその友に道を示す されど悪者は自ら  
 途にまよふ 情者はおのれの獵獲たる物をも燔す 勉めはたらくことは人の貴とき實なり 義しき道には  
 生命あり その道すぢには死なし

第一三章

智慧ある子は父の教訓をきき 戯謔者は懲治をきかず 人はその口の徳によりて福祉をくらひ  
 悖逆者の靈魂は強暴をくらふ その口を守る者はその生命を守る その口唇を大きくひらく者に  
 は滅亡きたる 情者はこゝろに慕へども得ることなし 勤めはたらく者の心は豊饒なり 義者は虚偽の  
 言をにくみ 悪者ははちをかうむらせ面を赤くせしむ 義は道を直くあゆむ者をまもり 悪は罪人を倒す 自  
 ら富めりといひあらはして些少の所有もなき者あり 自ら貧しと稱へて實財おほき者あり 人の實財はその  
 生命を贖ふものとなるあり 然ど貧者は威嚇をきくことあらず 義者の光は輝き 悪者の燈火はけさる  
 驕傲はたゞ争端を生ず 勸告をきく者は智慧あり 譎詐をもて得たる資財は減る されど手をもて聚めたく  
 はふる者はこれを増すことを得 望を得ること遅きときは心を疾しめ 願ふ所既にとぐるときは生命の樹を得  
 たるがごとし 御言をかるんずる者は亡され 誠命をおそる者は報賞を得 智慧ある人の教訓はいのちの  
 泉なり 能く人をして死の罟を脱れしむ 善にして習きものは恩を蒙る されど悖逆者の途は艱難なり 凡そ  
 賢者は知識に由りて事をおこなひ 愚なる者はおのれの痴を顯す 悪き使者は災禍に陥る されど忠言なる

使者は良樂の如し 貧乏と恥辱とは教訓をすつる者にきたる されど譎責を守る者は尊まる 望を得れば  
 心に甘し 愚なる者は惡を棄つることを嫌ふ 智慧ある者と偕にあゆむものは智慧をえ 愚なる者の友となる  
 者はあしくなる わざはひは罪人を追ひ 義者は善報をうく 善人はその産業を子孫に遺す されど罪人の  
 資財は義者のために蓄へらる 貧しき者の新田にはおほくの糧あり されど不義によりて亡る者あり 鞭を  
 くはへざる者はその子を憎むなり 子を愛する者はしきりに之をいましむ 義しき者は食をえて飽く されど  
 悪者の腹は空し

第一四章

智慧ある婦はその家をつたて 愚なる婦はおのれの手をもて之を毀つ 直くあゆむ者はエホバを  
 畏れ 曲りてあゆむ者はこれを侮る 愚なる者の口にはその傲のために鞭あり 智者の口唇は  
 おのれを守る 牛なければ飼養食むなし 牛の力によりて生産る物おほし 忠信の證人はいつはらず 虚偽の  
 あかしびとは虚言を吐く 嘲笑者は智慧を求むれどもえず 哲者は知識を得ること容易し 汝おろかなる者  
 の前を離れされつひに知識の彼にあるを見ざるべし 賢者の智慧はおのれの道を曉るにあり 愚なる者の痴  
 は欺くにあり おろかなる者は罪をかるんず されど義者の中には恩恵あり 心の苦みは心みづから知る  
 其よるこびには他人あづからず 悪者の家は亡され 正直き者の幕屋はさかゆ 人のみづから見て正しとす  
 る途にして その終はつひに死にいたる途となるものあり 笑ふ時にも心に悲あり 歡樂の終に憂あり 心の  
 悖れる者はおのれの途に飽かん 善人もまた自己に飽かん 拙者はすべての言を信ず 賢者はその行を慎む  
 智慧ある者は怖れて惡をはなれ 愚なる者はたかぶりて怖れず 怒り易き者は愚なることを行ひ 惡き謀計  
 を設くる者は惡まる 拙者は愚なる事を得て所有となし 賢者は知識をもて冠弁となす 悪者は善者の前  
 に俯伏し 罪ある者は義者の前に俯伏す 貧者はその鄰にさへも惡まる されど富者を愛する者はおほし  
 二 その鄰を藐むる者は罪あり 困苦者を憐むものは幸福あり 惡を謀る者は自己をあやまるにあらずや 善を



謀る者には憐憫と眞實とあり すべて勤勞には利益あり されど口唇のことは貧乏をきたらすのみなり  
 智慧ある者の財實はその冠弁となる 愚なる者のおろかはたゞ痴なり 眞實の證人は人のいのちを救ふ 謊言  
 を吐く者は偽人なり エホバを畏るゝことは堅き依頼なり その兒童は逃避場をうべし エホバを畏るゝこ  
 とは生命の泉なり 人を死の咎より脱れしむ 王の榮は民の多きにより 牧伯の衰敗は民を失ふにあり 怒を  
 遅くする者は大なる知識あり 氣の短き者は愚なることを顯す 心の安穩なるは身のいのちなり 媚嫉は骨の腐  
 なり 貧者を虐ぐる者はその造主を侮るなり 彼をうやまふ者は貧者をあはれむ 惡者はその惡のうち  
 にて亡され 義者はその死ぬる時にも望あり 智慧は哲者の心にとゞまり 愚なる者の裏にある事はあらはる  
 義は國を高くし 罪は民を辱しむ さとき僕は王の恩を蒙り 辱をきたらす者はその震怒にあふ

第一五章

柔和なる答は憤恨をとゞめ 厲しき言は怒を激す 智慧ある者の舌は知識を善きものと  
 おもはしめ 愚なる者の口はおろかをはく エホバの目は何處にもありて 惡人と善人とを鑒みる  
 溫柔き舌は生命の樹なり 悖れる舌は靈魂を傷ましむ 愚なる者はその父の訓をかるんす 誠命をまもる者は  
 賢者なり 義者の家には多くの寶財あり 惡者の利潤には擾累あり 智者のくちびるは知識をひろむ 愚  
 なる者の心は定りなし 惡者の祭物はエホバに憎まれ 直き人の祈は彼に悅ばる 惡者の道はエホバに憎まれ  
 正義をもとむる者は彼に愛せらる 道をはなるゝ者には嚴しき懲治あり 譴責を惡む者は死ぬべし 陰府と  
 沉淪とはエホバの目の前にあり 況て人の心をや 嘲笑者は誠めらるゝことを好まず また智慧ある者に近づ  
 かず 心に喜樂あれば顔色よろこばし 心に憂苦あれば氣ふさぐ 哲者のころは知識をたづね 愚なる者の  
 口は愚をくらふ 艱難者の日はことごとく 惡く心の權べる者は恒に酒宴にあり すこしの物を有てエホバを  
 畏るゝは多の寶をもちて 擾煩あるに愈る 蔬菜をくらひて互に愛するは肥たる牛を食ひて互に恨むるに愈る  
 憤ほり易きものは争端をおこし 怒をおそくする者は争端をとゞむ 情者の道は棘の籬に似たり 直者の

二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

途は平坦なり 智慧ある子は父をよるこばせ 愚なる人はその母をかるんす 無知なる者は愚なる事をよる  
 こび哲者はその途を直くす 相議ることあらざれば 謀計やぶる 議者おほければ 謀計かならず成る 人は  
 その口の答によりて 喜樂をう 言語を出して 時に適ふはいかに善らずや 哲人の途は生命の路にして 上へ昇り  
 ゆくこれ下にあるところの陰府を離れんが爲なり エホバはたかぶる者の家をほろぼし 寡婦の地界をさだめ  
 たまふ あしき謀計はエホバに憎まれ 溫柔き言は潔白し 不義の利をむさぼる者はその家をわづらはせ  
 賄賂をにくむ者は活ながらふべし 義者の心は答ふべきことを考へ 惡者の口は惡を吐く エホバは惡者  
 に遠ざかり 義者の祈禱をききたまふ 目の光は心をよるこばせ 好音信は骨をうるほす 生命の誠命を  
 きくところの耳は智慧ある者の中間に駐まる 教をすつる者は自己の生命をかるんすなり 懲治をきく者は  
 聰明を得 エホバを畏るゝことは智慧の訓なり 謙遜は尊貴に先だつ

第一六章

と見ゆ 惟エホバ靈魂をはかりたまふ なんちの作爲をエホバに託せよ さらば汝の謀るところ  
 必ず成るべし エホバはすべての物をおのその用のために造り 惡人をも惡き日のために造りたまへり  
 すべて心たかぶる者はエホバに惡まれ 手に手をあはするとも罪をまぬかれじ 憐憫と眞實とによりて 慈は  
 贈はる エホバを畏るゝことによりて 人惡を離る エホバもし人の途を喜ばゞ その人の敵をも之と和がしむべ  
 し 義によりて得たるところの僅少なる物は 不義によりて得たる多の寶財にまさる 人は心におのれの途を  
 考へはかる されどその步履を導くものはエホバなり 王のくちびるには 神のさばきあり 審判するときその口  
 あやまる可らず 公平の權衡と天秤とはエホバのものなり 義にある砵碼もことごとく彼の造りしものなり  
 惡をおこなふことは 王の憎むところなり 是の位は公義によりて 堅く立ばなり 義しき口唇は王による  
 こばる 彼等は正直をいふものを愛す 王の怒は死の使者のごとし 智慧ある人はこれをなだむ 王の面の光



には生命ありその恩寵は春雨の雲のごとし 智慧を得るは金をうるよりも更に善らさや 聰明をうるは銀を得るよりも望まし 悪を離るゝは直き人の路なり おのれの道を守るは靈魂を守るなり 驕傲は滅亡にさきだち 誇る心は傾跌にさきだつ 卑き者に交りて謙だるは驕ぶる者と備にありて 贖物をわかつに愈る 慎みて御言をおこなふ者は益をうべし エホバに倚頼むものは福なり 心に智慧あれば哲者と稱へらる ぐちびる甘ければ人の知識をます 明智はこれを持つものに生命の泉となる 愚なる者をいましむる者はおのれの痴是なり 智慧ある者の心はおのれの口ををしへ 又おのれの口唇に知識をます ことろよき言は蜂蜜のごとくにして 靈魂に甘く骨に良薬となる 人の自から見て正しとする途にして その終はつひに死にいたる途となるものあり 勞をるものは飲食のために骨をる 是の口おのれに迫ればなり 邪曲なる人は悪を觸る その口唇には烈しき火のごときものあり いつはる者はあらそひを起しつけぐちする者は朋友を離れしむ 強暴人はその罪をいざなひ之を善らざる途にみちびく その目を閉て悪を謀り その口唇を覺めて悪事を成遂ぐ 白髪は榮の冠弁なり 義しき途にてこれを見ん 怒を遅くする者は勇士に愈り おのれの心を治むる者は城を攻取る者に愈る 人は義をひくされど事をさだむるは全くエホバにあり

第一七章

是れをきたらす子をもさめ 且その子の兄弟の中において 産業を分ち取る 銀を試むる者は 堆場金を試むる者は 人の心を試むる者は エホバなり 悪を行ふものは 虚偽のくちびるにき 虚偽をいふ者は あしき舌に耳を傾ぶく 貴人を嘲るものは その造主をあたどるなり 人の災禍を喜ぶものは 罪をまぬかれず 孫は老人の冠弁なり 父は子の榮なり 勝れたる事をいふは 愚なる人に適はず 況て虚偽をいふ口唇は 君たる者に適はんや 贈物はこれを受る者の目には 貴き珠のごとし その向ふところにて 凡て幸福を買ふ 愛を追求する者は 人の過失をおほふ 人の事を言ひふるゝ者は 朋友をあひ離れしむ 一句の誠命の哲人に

徹るは 百回打つことの愚なる人に徹るよりも 深し 叛きもとる者は たび悪きことのみをもとむ 此故に彼にむかひて 残忍なる使者遣はさる 愚なる者の愚妄をなすにあはんよりは 寧ろ子をとられたる牝鹿にあへ 悪をもて 善に報ゆる者は 惡その家を離れし 争端の起源は 堤より水をもらすに似たり この故に あらそひの起らざる先にこれを止むべし 惡者を懲らし 義者を慰しとするこの二者は エホバに憎まる 愚なる者は すでに心なし 何ぞ智慧をかはんとて 手にその價の金をもつや 朋友はいつれの時にも 愛す 兄弟は危難の時のために 生る 智慧なき人は 手を拍て その友の前にて 保證をなす 争端をこのむ者は 罪を好み その門を高くする者は 敗境を求む 邪曲なる心ある者は さいはひを得ず その舌をみだりにする者は わざはひに陥る 愚なる者を産むものは 自己の愛を生じ 愚なる者の父は 喜樂を得ず 心のたのしみは 良薬なり 靈魂のうれひは 骨を枯す 惡者は人の懐より 賄賂をうけて 審判の道をまぐ 智慧は 哲者の面のまへにあり されど 愚なる者は 目を地の極にそぐ 愚なる子は 其父の愛となり 亦これを生る母の煩勞となる 義者を罰するは 善らず 貴き者をその義がために 朴は 善らず 言を寡くする者は 知識あり 心の靜なる者は 哲人なり 愚なる者は 黙するときは 智慧ある者と思はれ 其の口唇を閉るときは 哲者とあもよら

第一八章

自己を人と異にする者は 一己の欲するところのみを求めて すべて善き考察にもとる 愚なる者は 明智を喜ばず 惟おのれの心意を顯すことを喜ぶ 惡者きたれば 藐視したがひてきたり 恥きたれば 凌辱もともに来る 人の口の言は 深水の如し 湧てながるゝ川 智慧の泉なり 惡者を偏視るは 善らず 審判をなして 義者を惡しとするも 亦善し 愚なる者の口唇は あらそひを起し その口は 打るゝことを招く 愚なる者の口は おつし 人の敗境となり その口唇は おのれの靈魂の罅となる 人の是非をいふもの言は ともよれのごとしといへども 反つて腹の奥に在る 其の行爲をおこたる者は 滅すもの兄弟なり エホバの名は かたき楯のごとし 義者は 之に走りいりて 救を得 富者の資財は 其の堅き城なり これを高き石垣の如く



二二 人に思ふ 人の心のたかぶりは滅亡に先だち 謙遜はたふとまるゝ事にさきだつ 二一 二  
 二一 應ふる者は愚にして辱をかうぶる 人の心は尙其疾を忍ぶべしされど心の傷める時は誰かこれに耐んや  
 二〇 哲者の心は知識をえ 智慧ある者の耳は知識を求む 人の贈物はその人のために道をひらき かつ貴きもの  
 一九 の前にこれを導く 先に訴訟の理由をのぶるものは正義に似たれども その鄰人きたり詰問ひてその事を明か  
 一八 にす 讒は争端をとどめ且つよきもの間にへだてとなる 怒れる兄弟はかたき城にもまさりて説き伏せ  
 一七 がたし 兄弟のあらそひは槽の貫木のごとし 人は口の徳によりて腹をあかし その口唇の徳によりて自ら飽  
 一六 べし 死生は舌の權能にあり これを愛する者はその果を食はん 妻を得るものは美物を得るなり 且エホバ  
 一五 より恩寵をあたへらる 貧者は哀なる言をもて乞ひ 富人は厲しき答をなす 多の友をまうくる人は遂に  
 一四 その身を亡す 但し兄弟よりもたのもしき知己もまたあり

第一九章

一七 一 たゞしく歩むまづしき者はくちびるの悴れる愚なる者に愈る 心に思慮なければ善らず 足に  
 一六 て急ぐものは道にまよふ 人はおのれの痴によりて道につまづき 反て心にエホバを怨む 資財  
 一五 はおほくの友をあつむされど貧者はその友に疎まる 虚偽の證人は罰をまねかれず 謊言をはくものは避る  
 一四 ることをえず 君に媚る者はおほし 凡そ人は贈物を與ふる者の友となるなり 貧者はその兄弟すらも皆こ  
 一三 れをにくむ 況てその友これに遠ざからざらんや 言をはなちてこれを呼とも去てかへらざるなり 智慧を得る  
 一二 者はおのれの靈魂を愛す 聰明をたもつ者は善福を得ん 虚偽の證人は罰をまねかれず 謊言をはく者はほろぶ  
 一一 べし 愚なる者の驕者に居るは適當からず 況て僕にして上に在る者を治むることをや 聰明は人に怒をしの  
 一〇 ばしむ 過失を宥すは人の榮譽なり 王の怒は獅の吼るが如く その恩典は草の上におく露のごとし 愚なる  
 九 子はその父の災禍なり 妻の相争そふは雨漏のたえぬにひとし 家と資財とは先祖より承嗣ぐもの 賢き妻はエ  
 八 ホバより賜ふものなり 懶惰は人を酣寐せしむ 懈怠人は飢べし 誠命を守るものは自己の靈魂を守るなり

二七 その道をかろむるものは死ぬべし 貧者をあはれむる者はエホバに貸すなり その施濟はエホバ償ひたまはん  
 二六 望ある間に汝の子を打て これを殺すところを起すなかれ 怒ることの烈しき者は罰をうく 汝もしこれを  
 二五 救ふともしばしば然せざるを得じ なんぢ勳をきゝ訓をうけよ 然ばなんぢの終に智慧あらん 人の心には  
 二四 多くの計畫あり されど惟エホバの旨のみ立べし 人のよろこびは施濟をするにあり 貧者は謙 人に愈る  
 二三 エホバを畏るゝことは人をして生命にいたらしめ かつ恒に飽足りて災禍に遇さらしむ 情者はその手を  
 二二 盤にいろゝも之をその口に擧ることをだにせず 嘲笑者を打て さらば拙者も慎まん 哲者を認めよ さらば  
 二一 かれ知識を得ん 父を煩はし母を逐ふは羞恥をきたらし 凌辱をまねく子なり わが子よ 哲言を離れしむる  
 二〇 教を聞くことを息めよ 悪き證人は審判を嘲り 悪者の口は惡を呑む 審判は嘲笑者のために備へられ 鞭は  
 一九 愚なる者の背のために備へらる

第二〇章

一七 酒は人をして嘲らせ 濃酒は人をして騒がしむ 之に迷はざるゝ者は無知なり 王の震怒は獅の  
 一六 吼るがごとし 彼を怒らす者は自己のいのちを害す 隠かに居りて争はざるは人の榮譽なり  
 一五 すべて愚なる者は怒り争ふ 情者は寒ければとて耕さず この故に收穫のときにおよびて求るとも得るゝところ  
 一四 なし 人の心にある謀計は深き井の水のごとし 然れど哲人はこれを汲出す 凡そ人は各自おのれの善を誇  
 一三 るされど誰か忠信なる者に遇しぞ 身を正しくして步履む義 人はその後の子孫に福祉あるべし 審判の位  
 一二 に坐する王はその目をもてすべての惡を散す たれか我わが心をきよめわが罪を潔められたりといひ得るや  
 一一 二種の權衡二種の斗量は等しくエホバに憎まる 幼子といへどもその動作によりておのれの根性の清きか  
 一〇 或は正しきかをあらはす 聴くところの耳と視るところの眼とはともにエホバの造り給へるものなり なん  
 九 ぢ睡眠を愛すること勿れ 恐くは貧窮にいたらん 汝の眼をひらけ 然らば糧に飽べし 買者はいふ惡し惡しと  
 八 然れど去りて後はみづから誇る 金もあり眞珠も多くあれど 貴き器は知識のくちびるなり 人の保證を



17 貧者よりは先その衣をとれ 他人の保證をなす者をばかたくとらへよ 欺きとりし糧は人に甜しされど後に  
 18 はその口に沙を充されん 謀計は相議るによりて成る 戦はんとなせば先よく議るべし ありきめぐりて人の  
 19 是非をいふ者は密事をもらす 口唇をひらきてあるくものと交ること勿れ 人の父を罵るものはその  
 20 燈火くらやみの中に消ゆべし 初に俄に得たる産業はその終さいはひならず われ惡に報いんと言ふこと勿  
 21 れ エホバを待て 彼なんぢを救はん 二種の磁石はエホバに憎まる 虚偽の權衡は善らす 人の歩履はエホ  
 22 バによる 人いかに自らその道を明かにせんや 漫に誓願をたつことは其人の害となる 誓願をたてしものに  
 23 考ふることも亦然り 賢き王は笑をもて驚ることく 惡人を散し 車輪をもて碾すことく之を罰す 人の靈魂  
 24 はエホバの燈火にして人の心の奥を窺ふ 王は仁慈と眞實をもて自らたもつ その位もまた恩惠のおこなひに  
 25 よりて堅くなる 少者の榮はその力おいたる者の美しきは白髪なり 傷つくまでに打たば惡きところきよ  
 26 まり 打てる鞭は腹の底までもとほる

第二一章

1 王の心はエホバの手の中にありて恰かも水の流れのごとし 彼その聖旨のまゝに之を導きたまふ  
 2 人の道はおのれの目に正しとみゆ されどエホバは人の心をはかりたまふ 正義と公平を行ふ  
 3 は犠牲よりも愈りて エホバに悦ばる 高ぶる目と驕る心とは惡人の光にしてたゞ罪のみ 勧めはたらく者の  
 4 圖るところは遂にその身を豊裕ならしめ 凡てさわがしく急ぐ者は貧乏をいたす 虚偽の舌をもて財を得るは  
 5 吹はらはるゝ雲烟のごとし 之を求むる者は死を求むるなり 惡者の殘虐は自己を亡す 此義しきを行ふこと  
 6 を好まざればなり 罪人の道は曲り 潔者の行爲は直し 相争ふ婦と借に室に居らんよりは 屋蓋の隅にをる  
 7 はよし 惡者の靈魂は惡をねがふ その鄰も彼にあはれみ見られず あざけるもの罰をうくれば拙 者は  
 8 智慧を得 ちあるもの教をうくれば知識を得 義しき神は惡者の家のみとめて 惡者を滅亡に投げられたまふ  
 9 耳を掩ひて貧者の呼ぶ聲をきかざる者は おのれ自ら呼ぶときもまた聽れざるべし 汚なる儲物は忿恨を

10 なため 懐中の賄賂は烈しき瞋毒をやはらぐ 公義を行ふことは我々の喜樂にして 惡を行ふものの敗壞なり  
 11 さとりの道を離るゝ人は死し者の集會の中にをらん 實業を好むものは貧 人ととなり 酒と膏とを好むもの  
 12 は富をいたさじ 惡者は義者のあがなひとなり 悖れる者は直き者に代る 争ひ怒る婦と借にをらんより  
 13 は荒野に居るはよし 智慧ある者の家には貴き寶と膏とあり 愚なる人は之を香つくす 正義と憐憫とを  
 14 追求むる者は生命と正義と尊貴とを得べし 智慧ある者は強者の城にのぼりて その堅く頼むところを倒す  
 15 口と舌とを守る者はその靈魂を守りて患難に遇ぜじ 高ぶる驕る者を嘲笑者となづく これ驕者を逞しくし  
 16 て行ふものなり 情者の情慾はおのれの身を殺す 是はその手を背て 働かせざればなり 人は終日しきり  
 17 に慾を圖るされど義者は與へて吝まらず 惡者の獻物は憎まる 況て惡き事のために獻ぐる者をや 虚偽  
 18 の證人は滅さる 然れど聴く人は恒にいふべし 惡人はその面を厚くし 義者はその道を謹む エホバに  
 19 むかひては智慧も明哲も謀略もよすところなし 戦鬪の日のために馬を備ふ されど勝利はエホバによる  
 20 第二二章  
 21 造りし者はエホバなり 賢者は災禍を見てみづから避け 拙者はすゝみて罰をうく 謙遜  
 22 とエホバを畏るゝ事との報は富と尊貴と生命となり 悖れる者の途には荊棘と罟とあり 靈魂を守る者は遠く  
 23 これを離れん 子をその道に従ひて教へよ 然ばその老たる時も之を離れじ 富者は貧 者を治め 借者は  
 24 貸人の僕となる 惡を播くものは禍害を種り 其の怒の杖は廢るべし 人を見て恵む者はまた恵まる 此は  
 25 その糧を負者に與ふればなり 嘲笑者を逐へば争論も亦さり 且嘲諷も恥辱もやむ 心の深きを愛する者は  
 26 その口唇に憐憫をもてり 王その友とならん エホバの目は知識ある者を守る 彼は悖れる者の言を敗りたまふ  
 27 情者はいふ獅子とあり われ獨りて殺されんと 妓婦の口は深き坑なり エホバに憎まるゝ者これに陥  
 28 らん 痴なること子の心の中に繋がる 懲治の鞭これを逐いだす 貧者を虐げて 自らを富さんとする者と



富者に與ふる者とは遂にかならず貧しくなる 汝の耳を傾けて智慧ある者の言をき、且なんちの心をわが知識に用ゐよ 一八 汝の腹にたもちて盡くなんちの口唇にそなはらしめば樂しかるべし 汝をしてエホバに倚頼ましめんが爲にわれ今日これを汝に教ふ 一九 われ勸言と知識とをふくみたる勝れし言を汝の爲に録しにあらすや 二〇 これ汝をして眞の言の確實なることを曉らしめ、且なんちを遣し、者に眞の言を持歸らしめん爲なり 二一 弱き者を弱きがために掠むることなかれ、報難者を門にて壓つくること勿れ 二二 そは舌ホバその訴を糺し、且かれらを害ふもの生命をそこなはん 二三 怒る者と交ること勿れ、憤る人とともに往ことなかれ 二四 恐くは汝その道に效ひてみづから罣に陥らん 二五 なんち人と手をうつ者となることなかれ、人の負債の保證をなすこと勿れ 二六 汝もし債ふべきものあらすば、人なんちの下なる臥牀までも奪ひ取ん、是豈よからんや 二七 なんちの先祖がたてし古き地界を移すこと勿れ 二八 汝その業に巧なる人を見るか、斯る人は王の前に立んかならず、賤者の前にたゞじ

第三章

なんぢ候たる者とともに坐して食ふときは、慎みて汝の前にある者の誰なるかを思へ 一 汝もし食を嗜む者ならば、汝の喉に刀をあてよ 二 その珍饈を貪り食ふこと勿れ、これ迷惑の食物なればなり 三 富を得んと思煩らふこと勿れ、自己の明智を恃むこと勿れ 四 なんち虚しきに歸すべき者に目をとむるか、富はかならず自ら翅を生じて、鷲のごとく天に飛さらん 五 悪目をする者の糧をくらふことなく、その珍饈をむさばりねがふことなかれ 六 そはその心に思ふごとく、その人となりも亦しかればなり、彼なんちに食へ飲めといふといへども、その心は汝に眞實ならず 七 汝つひにその食へる物を吐出すにいたり、且その出し、懇勸の言もむなしくならん 八 愚なる者の耳に語ること勿れ、彼なんちが言の示す明智を獲めん 九 古き地界を移すことなかれ、孤子の畑を侵すことなかれ 一〇 そはかれが贖者は強し、必ず汝に對らひて之が訴をのべん 一一 汝の心を教に用ゐ、汝の耳を知識の言に傾けよ 一二 子を懲すことを爲さるなかれ、鞭をもて彼を打とも死することあらじ 一三 もし鞭をもて

彼をうたば、その靈魂を陰府より救ふことをえん 一四 わが子よ、もし汝のこゝろ智からば、我が心もまた歡び 一五 もし汝の口唇たゞしき事をいはゞ、我が腎腸も喜ぶべし 一六 なんち心に罪人をうらやむ勿れたゞ、終日エホバを畏れよ 一七 そは必ず應報ありて、汝の望は廢らざればなり 一八 わが子よ、汝きて智慧をえ、かつ汝の心を道にかたづけよ 一九 酒にふけり肉をたしむものと交ること勿れ 二〇 それ酒にふける者と肉を嗜む者とは、貧しくなり、睡眠を食る者は、敝れたる衣をきるにいたらん 二一 汝を生る父にきけ、汝の老たる母を輕んずる勿れ 二二 眞理を買へ、これを售るなかれ、智慧と誠命と知識とまた然あれ 二三 義者の父は、大によろこび、智慧ある子を生る者は、これがために樂しまん 二四 汝の父母を樂しませ、汝を生る者を喜ばせよ 二五 わが子よ、汝の心を我にあたへ、汝の目にわが途を樂しめ 二六 それ妓婦は深き坑のごとく、淫婦は狭き井のごとし、彼は盜賊のごとく、人を窺ひ、かつ世の人の中に佇れる者を増なり 二七 禍害ある者は誰ぞ、憂愁ある者は誰ぞ、争端をなす者は誰ぞ、煩慮ある者は誰ぞ、故なくして傷をうくる者は誰ぞ、赤目ある者は誰ぞ 二八 是すなはち酒に夜をふかすもの、往て混和せたる酒を味ふる者なり 二九 酒はあかく、盃の中に泡だち滑かにくだる、汝これを見るなかれ 三〇 是は終に蛇のごとく、嘘み、蟻の如く刺すべし、また汝の目は、怪しきものを見、なんちの心は、謊言をいはん、汝は海のなかに偃すもののごとく、帆桅の上に偃すもののごとし 三一 汝いはん、人われを擊ども、我いたます、我を拂けども、我おぼえず、我さめなば、また酒を求めんとす 三二 なんち思き人を羨むことなかれ、又これと偕に居らんことを願ふなかれ 三三 そはその心に暴虐を

第四章

はかり、その口唇に人を害ふことをいへばなり 一 家は智慧によりて建られ、明智によりて堅くせられ 二 また家は知識によりて各種の貴く美しき寶にて充されん 三 智慧ある者は強し、知識ある人は力をます 四 汝よ、謀計をもて、戦闘をなせ、勝利は謙者の多きによる 五 智慧は高くして、愚なる者の及ぶところにあらず 六 愚なる者は門にて口を啓くことをえず 七 惡をなさんと謀る者を、邪曲なる者と稱ふ 八 愚なる者の謀るところは罪なり、嘲笑者は人に憎まる 九 汝もし患難の日に、氣を挫かば、汝の力は弱し 一〇 なんち死地に曳れゆく者を拯へ







痴にしたがひて之に答へよ 恐くは彼おのれの目に自らを智者と見ん 愚なる者に托して事を言おくる者は  
 おのれの足をきり身に害をうく 跛者の足は用なし 愚なる者の口の箴もかくのごとし 榮譽を愚なる者  
 に與ふるは 石を投石索に繋ぐが如し 愚なる者の口にたもつ箴言は 酔へるものの刺ある杖を手にて擧ぐるが  
 ごとし 愚なる者を備ひ流浪者を備ふ者は すべての人を傷くる射手の如し 狗のかへり來りてその吐たる  
 物を食ふがごとく 愚なる者は重ねてその痴なる事をおこなふ 汝おのれの目に自らを智者ある者とする人を  
 見るか 彼よりも却て愚なる人に望あり 情者は途に獅あり 衢に獅ありといふ 戸の蝶紋によりて轉るこ  
 とく 情者はその牀に輾轉す 情者はその手を盤に在るも之をその口に擧ることを厭ふ 情者はおのれ  
 の目に自らを善く答ふる七人の者よりも智慧ありとなす 路をよぎり自己に關りなき争擾にたづさはる者は  
 狗の耳をとらふる者のごとし 一八既にその鄰を欺くことをなして我はたゞ戯れしのみといふ者は 火箭または鎗  
 または死を擲つ 狂人のごとし 薪なければ火はきえ 人の是非をいふ者なければ争端はやむ 熾火に炭を  
 つぎ火に薪をくぶるがごとく 争論を好む人は争論を起す 人の是非をいふもの言はたはぶれのごとしと雖も  
 かへつて腹の奥に入る 温かき口唇をもちて悪き心あるは 銀の滓をきせたる瓦片のごとし 恨むる者は口唇  
 をもて自ら飾れども 心の衷には虚偽をいだく 彼の聲を和らかにするとも之を信するなかれ その心に七の  
 憎むべき者あればなり たとひ虚偽をもてその恨をかくすとも その惡は會集の中に顯はる 坑を掘るものは  
 自ら之に陥らん 石を轉ばしあぐる者の上にはその石まろびかへらん 虚偽の舌はおのれの害す者を憎み 陥ふ  
 口は滅亡をきたらす

第二十七章

なんぢ明日のことを誇るなかれ そは一日の生ずるところの如何なるを知らざればなり 汝おの  
 れの口をもて自ら讃むることなく 人をして己を讃めしめよ 己の口唇をもてせず 他人をして己を  
 ほめしめよ 石は重く沙は軽からず 然ど愚なる者の怒はこの二よりも重し 忿怒は猛く憤恨は烈しされ

ど嫉妬の前には誰か立ことを得ん 明白に譴むるは秘に愛するに愈る 愛する者の傷つくるは眞實よりし  
 敵の接吻するは偽詐よりするなり 飽るものは蜂の蜜をも踐つくされど飢たる者には苦き物さへもすべて甘し  
 その家を離れてさまよふ人は その巢を離れてさまよふ鳥のごとし 膏と香とは人の心をよるこばすなり  
 心よりして勸言を與ふる友の美しきもまた斯のごとし なんぢの友と汝の父の友とを棄るなかれ なんぢ患難  
 にあふ日に兄弟の家にいることなけれ 親しき鄰は疏き兄弟に愈れり わが子よ智慧を得てわが心を悦ばせよ  
 然ば我をそしる者に我をたふることを得ん 賢者は禍害を見てみづから避け 拙者はすゝみて罰をうく 人  
 の保證をなす者よりは先その衣をとれ 他人の保證をなす者をば固くとらへよ 晨はやく起て大聲にその鄰を  
 祝すれば却て呪詛と見なされん 相争ふ婦は雨ふる日に絶すある雨漏のごとし これを制ふるものは風をお  
 さふるがごとく 右の手に膏をつかむがごとし 鐵は鐵をとぐ 斯のごとくその友の面を研なり 無花果の樹  
 をまもる者はその果をくらふ 主を貴ぶものは譽を得 水に照せば面と面と相肖るがごとく 人の心は人の心に  
 似たり 陰府と沈淪とは飽ことなく 人の目もまた飽ことなし 増埒によりて銀をためし 鑛によりて金をた  
 めしその讚らるゝ所によりて人をためす なんぢ愚なる者を白にいれ 杖をもて麥と借にこれを搗ともその愚  
 は去らざるなり なんぢの羊の情況をよく知り なんぢの群に心を留めよ 富は永く保つものにあらず  
 いかで位は世々にたもたん 艸枯れ苗いで山の蔬菜あつめらる 羔羊はなんぢの衣服を出し 牡羊は田圃を  
 買ふ價となり 牝羊の乳はおほくして汝となんぢの家人の糧となり 汝の女をやしなふにたる

第二十八章

愚者は逐ふ者なけれども逃げ 義者は獅子のごとくに勇まし 國の罪によりて侯伯多くなり  
 智くして知識ある人によりて國は長く保つ 弱者を虐ぐる貧人は糧をのこさざる暴しき雨のこ  
 とし 律法を棄るものは愚者をほめ 律法を守る者はこれに敵す 惡人は義きことを覺らず エホバを求むる  
 者は凡の事をさとる 義しくあゆむ貧者は曲れる路をあゆむ富者に愈る 律法を守る者は智子なり 放蕩



九八七六五四三二一

なる者に交るものは父を辱かしむ 利息と高利とをもてその財産を増すものは貧人をめぐる者のために之を  
 たくはふるなり 耳をそむけて律法を聞ざる者はその祈すらも憎まる 義者を悪き道に惑す者はみづから  
 自己の阱に陥らん されど質直なる者は福祉をつくべし 富者はおのれの目に自らを智慧ある者となすされど  
 聰明ある貧者は彼をかり知る 義者の喜ぶときは大なる榮あり 悪者の起るときは民身を匿す 罪を  
 隠すものは榮ゆることなし 然ど認らはして之を離るる者は憐憫をうけん 恒に畏るる人は幸福なり その  
 心を剛愎にする者は災禍に陥るべし 貧しき民を治むるあしき侯伯は 吼る獅子あるひは飢たる熊のごとし  
 智からざる君はおほく暴虐をおこなふ 不義の利を惡む者は 避 歸をうべし 人を殺してその血を心に負ふ  
 者は墓に奔るなり 人これを阻むること勿れ 義く行む者は救をえ 曲れる路に行む者は直に跌れん おのれ  
 の田地を耕す者は糧にあき 放蕩なる者に従ふものは貧乏に飽く 忠信なる人は多くの幸福をえ 速かに富を得  
 んとする者は罪を免れず 人を偏視するはよからず 人はたゞ一片のパンのために怨を犯すなり 惡目をもつ  
 者は財をえんとて急がはしく 却て貧窮のおのれに來るを知らず 人を誑むる者は舌をもて 語ふ者よりも大  
 る感謝をうく 父母の者を竊みて罪ならずといふ者は滅す者の友なり 心に貪る者は争端を起し エホバに  
 倚頼むものは豐饒になるべし おのれの心を持つ者は愚なり 智慧をもて行む者は救をえん 貧者に賜す  
 ものは乏しからず その目を掩ふ者は詛を受ること多し 惡者の起るときは人匿れ その滅るときは義者ます  
**第二十九章**  
 一 しばしば責られてもなほ強項なる者は 救はるることなくして 猝然に滅されん 義者ませば  
 民よるこび 惡きもの權を掌らば民かなしむ 智慧を愛する人はその父を悦ばせ 妓婦に交る者は  
 その財産を費す 王は公義をもて國を堅うす されど租税を征取る者はこれを滅す その鄰に語ふ者はかれ  
 の脚の前に羅を張る 惡き人の罪の中には咎あり 然ど義者は歡び樂しむ 義きものは貧きもの訟を  
 かへりみる 然ど惡人は之を知ること願はず 嘲笑人は城邑を擡し 智慧ある者は怒をしづむ 智慧ある人

九八七六五四三二一

おろかなる人と争へば或は怒り或は笑ひて休むことなし 血をながす人は直き人を惡む されど義き者は  
 その生命を救はんことを求む 愚なる者はその怒をことごとく露はし 智慧ある者は之を心に藏む 君王  
 もし虚偽の言を聴かばその臣みな惡し 貧者と苛酷者と偕に世にをる エホバは彼等の目に光をあたへ給ふ  
 眞實をもて弱者を審判する王はその位つねに堅く立つべし 鞭と誹責とは智慧をあたふ 任意になしおかれ  
 たる子はその母を辱しむ 惡きもの多ければ罪も亦おほし 義者は彼等の傾覆をみん なんちの子を懲せ  
 さらば彼なんちを安からしめ 又なんちの心に喜樂を與へん 默示なければ民は放肆にす 律法を守るものは  
 福ひなり 僕は言をもて誑むるとも改めず 彼は知れども從はざればなり なんち言を誑まさる人を見しや  
 彼よりは却て愚なる者に望あり 僕をその幼なき時より柔かに育てなば終には子の如くならしめん 怒る  
 人は争端を起し 憤る人は罪おほし 人の傲慢はおのれを卑くし 心に謙だる者は榮譽を得 盜人に黨する  
 者はおのれの靈魂を惡むなり 彼は誓を聴けども説述べず 人を畏るれば咎におちいる エホバをたのむ者は謙  
 られん 君の慈悲を求むる者はおほし 然れど人の事を定むるはエホバによる 不義をなす人は義者の惡む  
 ところ 義くあゆむ人は惡者の惡むところなり  
**第三十章**  
 一 ヤケの子アグルの語る箴言 かれイテエルにむかひて之をいへり 即ちイテエルとウカル  
 とにいへる所のものなり 我は人よりも愚なり 我には人の聰明あらず 我いまだ智慧をなら  
 ひ得ず またいまだ至聖きものを曉ることをえず 天に昇りまた降りし者は誰か 風をその掌中に聚めし者は  
 誰か 水を衣につみし者は誰か 地のすべての限界を定めし者は誰か その名は何ぞ その子の名は何ぞ 汝これを  
 知るや 神の言はみな潔よし 神は彼を頼むもの盾なり 汝その言に加ふること勿れ 恐くは彼なん  
 ちをせめ 又なんちを誑る者となしたまはん われ一の事をなんちに求めたり 我が死ざる先にこれを  
 たまへ 即ち虚假と謊言とを我より離れしめ 我をして貧からしめず また富しめず 惟なくてはならぬ糧を



九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

給へ 九 そは我あきて神を知ずといひエホバは誰なりやといはんことを恐れまた貧くして窃盗をなし我が神の名を汚さんことを恐るればなり 一〇 なんぢ僕をその主に讒ることなかれ 恐くは彼なんぢを誑みてなんぢ罪せられん 一一 その父を誑みその母を祝せざる世類あり 一二 おのれの目に自らを潔者となしして尙その汚穢を濼はれざる世類あり 一三 また一の世類あり 嗚呼その眼はいかに高きぞやその喙は昂れり 一四 その齒は劍のごとくその牙は刃のごとき世類あり 彼等は貧き者を地より呑み 窮乏者を人の中より食ふ 一五 姪に二人の女あり 與へよ與へよと呼はる飽ことを知るもの三あり 否な四あり皆たれりといはず 一六 即ち陰府姪まざる胎水に滿されざる地 足りといはざる火これなり 一七 おのれの父を嘲り母に従ふことをいやしとする眼は 谷の穉これを抜いだし 鷲の雛これを食はん 一八 わが奇とするもの三あり 否な四あり共にわが識ざる者なり 一九 即ち空にとぶ鷲の路 磐の上にはふ蛇の路 海にはしる舟の路 男の女にあふの路これなり 二〇 淫婦の途も亦しかり 彼は食ひてその口を拭ひ われ悪きことを爲ざりきといふ 二一 地は三の者によりて震ふ 否な四の者によりて耐ることあたはざるなり 二二 即ち僕たるもの王となるに因り 愚なるもの糶に飽るにより 二三 厭忌はれたる婦の嫁ぐにより 婢女その主母に續に因りてなり 二四 地に四の物あり 微小といへども最智し 二五 蟻は力なき者なれどもその糶を夏のうちに備ふ 二六 山嵐は強からされどもその室を磐につくる 二七 蝗は王なれどもみな隊を立ていづ 二八 守宮は手をもてつかまり王の宮にをる 二九 善あゆむもの三あり 否な四あり皆よく歩く 三〇 獸の中にて最も強くもろものもの前より退かざる獅子 三一 肚帯せし戦馬 牡野羊 および當ること能はざる王これなり 三二 汝もし愚にして自から高ぶり或は悪きことを計らば 汝の手を口に當つべし 三三 それ乳を搾れば乾酷いで鼻を搾れば血いで 怒を激ふれば争端おこる

第三十一章

レムエル王のことは即ちその母の彼に教へし箴言なり 一 わが子よ何を言んか わが胎の子よ何をいはんか 我が願ひて得たる子よ何をいはんか 二 なんぢの力を女につひやすなかれ 王を

欠



# 欠

二五 善をおこなふより外に善事はあらず 二六 また人はみな食欲をなしその勞苦によりて逸樂を得べきなり 是すなはち  
二四 神の賜物たり 二五 我知る凡て神のなしたまふ事は限なく存せん 是は加ふべき所なく是は減すべきところ無し 神  
二三 の之をなしたまふは人をしてその前に畏れしめんがためなり 二四 昔ありたる者は今もあり 後にあらん者は既に  
二二 ありし者なり 神はその逐やられし者を求めたまふ

二一 我また日の下を見るに審判をおこなふ所に邪曲なる事あり 公義を行ふところに邪曲なる事あり 我すな  
二〇 はち心に謂けらく神は義者と惡者とを鞠きたまはん 彼處においては萬の事と萬の所爲に時あるなり 一八 我また  
一九 心に謂けらく是事あるは是世の人のためなり 即ち神は斯世の人を檢して之にその獸のごとくなることを自ら  
一八 らしめ給ふなり 一七 世の人に隨むところの事はまた獸にも隨むこの二者に隨むところの事は同一にして是も死ば  
一七 彼も死るなり 皆同一の呼吸に依れり 人は獸にまさる所なし 皆空なり 一六 皆一の所に往く 皆塵より出で 皆塵に  
一六 かへるなり 一五 誰か人の魂の上に昇り獸の魂の地にくだることを知ん 一四 然ば人はその動作によりて逸樂をなす  
一四 に如はなし 是の分なればなり 我これを見る その身の後の事は誰かこれを携へゆきて見さしむる者あらんや  
一三 一三 茲に我身を轉して日の下に行はる 諸の磨遇を視たり 嗚呼 磨げらるゝ者の涙ながる 之を慰む  
一三 第四章 一四 爾者あらざるなり また磨ぐる者の手には權力あり 彼等はこれを慰むる者あらざるなり 一五 我は猶  
一四 生る生者よりも既に死たる死者をもて幸なりとす 一六 またこの二者よりも幸なるは未だ世にあらすして日の下に  
一四 おこなはるゝ惡事を見ざる者なり

一三 我また 諸の勞苦と諸の工事の精巧とを觀るに 是は人のたがひに嫉みあひて成せる者たるなり 是も空  
一三 にして風を捕ふるが如し 愚なる者は手を束ねてその身の肉を食ふ 片手に物を盈て平穩にあるは 兩手に  
一三 物を盈て勞苦て風を捕ふるに愈れり  
一三 我また身をめぐらし日の下に空なる事のあるを見たり 一四 茲に人あり只獨にして伴侶もなく子もなく兄弟



もなし然るにその勞苦は都て窮なくその目は富に飽ことなし 彼また言す嗚呼我は誰がために勞するや何とて  
 我は心を樂よせざるやと是もまた空にして勞力の苦き者なり 二人は一人に愈る其はその勞苦のために善報を  
 得ればなり 即ちその跌倒る時には一箇の人その伴侶を扶けおこすべし 然ど孤身にして跌倒る者は憐なるかな  
 之を扶けおこす者なきなり 又二人ともに寝れば溫暖なり一人ならば手で溫暖ならんや 人もしその一人を  
 攻撃ば二人してこれに當るべし 三根の繩は容易く斷ざるなり  
 貧くして賢き童子は老て愚にして諫を納れざる王に愈る 彼は獄牢より出て王となれり 然どその國に  
 生れし時は貧かりき 我日の下にあゆむところの群生が彼王に續てこれに代りて立ところの童子とともにある  
 を觀たり 民はすべて際限なしその前にありし者みな然り 後にきたる者また彼を悦ばず 是も空にして風を  
 捕ふるがごとし

第五章

汝エホバの室にいたる時にはその足を慎め進みよりて聽聞は愚なる者の犧牲にまさる 彼等は  
 その惡をおこなひをすることを知らざるなり 汝神の前にありては輕々しく口を開くなかれ 心を攝  
 めて妄に言をいだすなかれ 其は神は天にいまし汝は地にをればなり 然ば汝の言詞を少からしめよ 夫夢は事  
 の繁多によりて生じ 愚なる者の聲は言の衆多によりて聽るなり 汝神に誓願をかけたば之を還すことを怠る  
 なかれ 神は愚なる者を悦びたまはざるなり 汝はそのかけし誓願を還すべし 誓願をかけてこれを還さざる  
 よりは寧ろ誓願をかけたばは汝に善し 汝の口をもて汝の身に罪を犯さしむるなかれ 亦使者の前に其は過誤  
 なりといふべからず 恐くは神汝の言を怒り汝の手の所爲を滅したまはん 夫夢多ければ空なる事多し 言詞の  
 多きもまた然り 汝エホバを畏め  
 汝國の中に貧き者を慮遇る事および公道と公義を枉ることあるを見るもその事あるを怪むなかれ 其は  
 その位高き人よりも高き者ありてその人を伺へばなり 又其等よりも高き者あるなり 國の利益は全く是にあり

即ち王者が農事に勤むるにあるなり

銀を好む者は銀に飽こと無し 豊富ならんことを好む者は得るところ有らず 是また空なり 貨財増せば  
 これを食む者も増すなり 其の所有主は唯目にこれを看るのみ 其の外に何の益かあらん 勞する者はその食ふ  
 ところは多きも少きも快く睡るなり 然れども富者はその貨財の多きがために睡ることを得せず  
 我また日の下に患の大なる者あるを見たり すなはち財寶のこれを蓄ふる者の身に害をおよぼすことある  
 是なり 其の財寶はまた災難によりて失落ことあり 然ばその人子を擧ることあらんもその手には何物もある  
 ことなし 人は母の胎より出て來りしごとくにまた裸體にして販りゆくべし 其の勞苦によりて得たる者を憂  
 も手にとりて携へゆくことを得ざるなり 人は全くその來りしごとくにまた去ゆかざるを得ず 是また患の大  
 なる者なり 抑風を追て勞する者何の益をうることを有んや 人は生命の涯黑暗の中に食ふことを爲す また憂愁  
 多かり 疾病身にあり 憤怒あり

視よ我は斯觀たり 人の身にとりて善かつ美なる者は神にたまはるその生命の糧食飲をなし 且その日の  
 下に勞して働ける勞苦によりて得るところの福祿を身に享るの事なり 是はその分なればなり 何人によらず神が  
 これに富と財を興へてそれに食ことを得せしめまたその分を取りその勞苦によりて快樂を得ることをせさせ  
 たまふればその事は神の賜物たるなり かゝる人はその年齢の日を憶ゆること深からず 其は神これが心の  
 喜ぶところにしたがひて應ることを爲したまへばなり

第六章

我觀るに日の下に一件の患あり 是は人の間に恒なる者なり すなはち神富と財と貴を人に  
 あたへてその心に慕ふ者を一件もこれに缺ることなからしめたまひながら 神またその人に之を  
 食ふことを得せしめたまはずして 他人のこれを食ふことあり 是空なり 惡き疾なり 假令百人の子を擧げ  
 また長壽してその年齢の日多からんも 若その心景福に満足せざるか 又は葬らるゝことを得ざるれば 我言ふ



流産の子はその人にまさるなり 夫流産の子はその來ること空しくして黑暗中の中に去ゆきその名は黑暗中にかくるなり 又是は日を見ることなく物を知らざれば彼よりも安泰なり 人の壽命千年に倍するとも福祉を蒙れるにはあらず 皆一所に往くにあらずや

人の勞苦は皆その口のためなり その心はなほも飽ざるところ有り 賢者なんぞ愚者に勝るところあらんや また世人の前に歩行ことを知るところの貧者も何の勝るところ有んや 目に觀る事物は心のさまよひ歩くに愈るなり 是また空にして風を捕ふるがごとし

昔て在し者は久しき前にすでにその名を命られたり 即ち是は人なりと知る 然ば是はかの自己よりも力強き者と争ふことを得ざるなり 衆多の言論ありて虚浮き事を増す然ど人に何の益あらんや 人はその虚空き生命の目を影のごとくに送るなり 誰かこの世において如何なる事か人のために善き者なるやを知らん 誰かその身の後に日の下にあらんところの事を人に告ぐる者あらんや

第七章

名は美膏に愈り 死る日は生る日に愈る 哀傷の家に入は宴樂の家にいるに愈る 其は一切の人の終かくのごとくなればなり 生る者またこれをその心にとむるあらん 悲哀は嬉笑に愈る 其は面に愛色を帯るなれば心も善にむかへばなり 賢き者の心は哀傷の家にあり 愚なる者の心は喜樂の家にあり 賢き者の勸責を聽は愚なる者の歌詠を聽に愈るなり 愚なる者の笑は釜の下に焚る荊棘の聲のごとし 是また空なり 賢き人も辱待る事によりて狂するに至るあり 賄賂は人の心を壞なふ 事終はその始よりも善し 容忍心ある者は傲慢心ある者に勝る 汝氣を急くして怒るなけれ 怒は愚なる者の胸にやどるなり 昔の今にまさるは何故ぞやと汝言なけれ 汝の斯る問をなすは是智慧よりいづる者にあらざるなり 智慧の上に財産をかぬれば善し 然れば日を見る者等に利益おほかるべし 智慧も身の護庇となり 銀子

も身の護庇となる 然ど智慧はまたこれを有る者に生命を保しむ 是知識の殊勝たるころなり 汝神の作爲を考ふべし 神の曲たまひし者は誰かこれを直くすることを得ん 幸福ある日には樂め 禍患ある日には考へよ 神はこの二者をあひ交錯て降したまふ 是は人をしてその後の事を知ることなからしめんためなり

我この空の世にありて各様の事を見たり 義人の義をおこなひて亡ぶるあり 惡人の惡をおこなひて長壽あり 汝義に過るなれまた賢に過るなれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなれ また愚なる勿れ 汝なんぞ時いたらざるに死べけんや 汝此を執は善しまた彼にも手を放すなれ 神を畏む者はこの一切の者の中より逃れ出るなり

智慧の智者を幫くることは邑の豪雄者十人にまさるなり 正義して善をおこなひ罪を犯すことなき人は世にあることなし 人の言出す言詞には凡て心をとむる勿れ 恐くは汝の僕を汝を誣ふを聞ともあらん 汝も 愚人を誣ふことあるは汝の心に知ところなり

我智慧をもてこの一切の事を試み我は智者とならんと謂たりしが遠くおよばざるなり 事物の理は遠くして甚だ深し 誰かこれを究むることを得ん 我は身をめぐらし心をもちひて物を知り事を探り 智慧と道理を索めんとし 又惡の愚たると愚癡の狂妄たるを知んとせり 我了れり 婦人のその心羅と網のごとくその手繰れのごとくなる者は是死よりも苦き者なり 神の悦びたまふ者は之を避ることを得ん 罪人は之に執らるべし 傳道者言ふ 視よ我その數を知んとして一々に算へてつひに此事を了る 我なほ尋ねて得ざる者は是なり 我千人の中に一箇の男子を得たれども その數の中には一箇の女子をも得ざるなり 我了れるところは唯是のみ 即ち神は人を正直者に造りたまひしに人衆多の計略を案 出せしなり

第八章

誰か智者に如ん誰か事物の理を解ことを得ん 人の智慧はその人の面に光輝あらしむ 又その粗暴面も變改べし 我言ふ王の命を守るべし 既に神をさして誓ひしことあれば然るべきなり 早まりて



王の前を去ることなかれ 惡き事につること勿れ 其は彼は凡てその好むところを爲ばなり 王の言語には 權力あり 然ば誰か之に汝何をなすやといふことを得ん 命令を守る者は禍患を受るに至らず 智者の心は時期と判断を知なり 萬の事務には時あり 判断あり是をもて人大なる禍患をうくるに至るあり 人は後にあらん ところの事を知す また誰か如何なる事のあらんかを之に告る者あらん 靈魂を掌管て靈魂を留めうる人あらず 人はその死る日には權力あること無し 此戦争には釋放たる者あらず 又罪惡はこれを行ふ者を救ふことを得せざるなり

我この一切の事を見また日の下におこなはるゝ諸の事に心を用ひたり時としては此人彼人を治めてこれに害を蒙らしむることあり 我見しに惡人の葬られて安息に在るあり また善をおこなふ者の靈所を離れてその邑に忘らるゝに至るあり また空なり 惡き事の報應にきたらざるが故に世人心を專にして惡をおこなふ 罪を犯す者百次惡をなして猶長命あれども 我知る神を畏みてその前に長怖をいだく者には幸福あるべし 但し惡人には幸福あらずまたその生命も長からずして影のごとし其は神の前に長怖をいだくことなければなり 我日の下に空なる事のおこなはるゝを見たり 即ち義人にして惡人の遣べき所に遣ふ者あり 惡人にして義人の遣べきところに遣ふ者あり 我謂り是もまた空なり 是に於て我喜樂を讚む 其は食飲して樂むよりも好き事は日の下にあらざればなり 人の勞して得る物の中是こそはその日の下にて神にたまはる生命の日の間 その身に離れざる者なれ

茲に我心をつくして智慧を知らんとし世に爲ところの事を究めんとしたり 人は夜も晝もその目をとちて眠ることをせざるなり 我神の諸の作爲を見しが人は日の下におこなはるゝところの事を究むるあたはざるなり 人これを究めんと勞するもこれを究むることを得ず 且又智者ありてこれを知ると思ふもこれを究むることあたはざるなり

第九章

我はこの一切の事に心を用ひてこの一切の事を明めんとせり 即ち義き者と賢き者およびかれらの爲ところは神の手にあるなるを明めんとせり 愛むや惡むやは人これを知ることなし 一切の事はその前にあるなり

諸の人に臨む所は皆同じ 義き者にも惡き者にも善者にも浮者にも穢れたる者にも 犠牲を獻ぐる者にも犠牲を獻げぬ者にもその臨むところの事は同一なり 善人も罪人に異ならず 誓をなす者も誓をなすことを畏るゝ者に異ならず 諸の人に臨むところの事の同一なるは是日の下におこなはるゝ事の中の惡き者たり 抑人の心には惡き事充をり その生る間は心に狂妄を懐くあり 後には死者の中に往くなり 凡活る者の中に列る者は望あり 其は生る大は死る獅子に愈ればなり 生者はその死んことを知る 然ど死者は何事をも知すまた應報をうくることも重てあらず その記憶らるゝ事も遂に忘れらるゝに至る 又またその愛も惡も嫉も既に消うせ

て彼等は日の下におこなはるゝ事に最早何時までも關係ことあらざるなり 汝往て喜悅をもて汝のパンを食ひ 樂き心をもて汝の酒を飲め 其は神久しく汝の行爲を嘉納たまへばなり 汝の衣服を常に白からしめよ 汝の頭に膏を絶しむるなかれ 日の下に汝が賜はるこの汝の空なる生命の日の間 汝その愛する妻とともに喜び度生せ 汝の空なる生命の日の間しかせよ 是は汝が世にありて受る分汝が日の下に働ける勞苦によりて得る者なり 凡て汝の手に堪ることは力をつくしてこれを爲せ 其は汝の往んところの陰府には工作も計謀も知識も智慧もあることなければなり

我また身をめぐらして日の下を觀るに 迅速者走ることに勝にあらず 強者戦争に勝にあらず 智慧者食物を獲にあらず 明哲人財寶を得にあらず 知識人恩顧を得にあらず 凡て人に臨むところの事は時ある者偶然なる者なり 人はまたその時を知す 魚の網の網にかゝり 鳥の鳥羅にかゝるが如くに世の人もまた禍患の時の計らざるに臨むに及びてその禍患にかゝるなり







らんとすれば哭婦衝にゆきかふ 然る時には銀の紐は解け金の邊は碎け吊瓶は泉の側に壊れ鐘は井の傍に破ん 而して塵は本の如くに土に飯り靈魂はこれを賦けし神にかへるべし 傳道者云ふ空の空なるかな 皆空なり

また傳道者は智慧あるが故に恒に知識を民に教へたり 彼は心をもちひて尋ね究め許多の箴言を作れり 傳道者は務めて佳美き言詞を求めたり その書しるしたる者は正直して眞實の言語なり

智者の言語は刺鞭のごとく 會衆の師の釘たる釘のごとくにして 一人の牧者より出し者なり わが子よ 是等より訓誡をうけよ 多く書をつくれば竟なし 多く學べば體疲る

事の全體の版する所を離れし云く 神を畏れその誠命を守れ 是は諸の人の本分たり 神は一切の行爲ならびに一切の隠れたる事を善惡ともに審判たまふなり 傳道之書をばり

雅歌

第一章

これはソロモンの雅歌なり ねがはしきは彼その口の接吻をもて我にくちつけせんこと

なり 汝の愛は酒よりもまさりぬ なんちの香膏は其香味たへに馨しくなんちの名はそゝがれたる香膏のごとし 是をもて女子等なんちを愛す われを引たまへ われら汝にしたがひて走らん 王われをたづさへてその後宮にいれたまへり 我らは汝によりて歡び樂しみ酒よりも勝りてなんちの愛をほめたふ 彼らは直きこゝろをもて汝を愛す

エルサレムの女子等よ われは黒けれどもなほ美はシゲダルの天幕のごとく またソロモンの帷帳に似たり われ色くろきが故に日のわれを焼たるが故に我を視るなかれ わが母の子等われを怒りて我に葡萄園をまもらしめたり 我はおのが葡萄園をまもらざりき わが心の愛する者よなんちは何處にてなんちの群を牧ひ 午時いづこにて之を息まするや 請ふわれに告よ なんぞ面を覆へる者の如くしてなんちが伴侶の群のかたはらにをるべけんや 婦人の最も美はしき者よなんち若しらずば群の足跡にしたがひて出ゆき 牧羊者の天幕のかたはらにて汝の羔山羊を牧へ

なんちの臉には鏈索を垂れなんちの頭には珠玉を陳ねて至も美はし われら白銀の星をつけたる黄金の鏈索をなんちのために造らん 王其席につきたまふ時 わがナルダ其香味をいだせり わが愛する者は我にとりてはわが胸のあひだにおきたる没薬の袋のごとし わが愛する者はわれにとりてはエンゲデの園にあるコベルの英華のごとし あゝ美はしきかな わが佳耦よ あゝうるはしきかななんちの目は鶴のごとし わが愛する者よ あゝなんちは美はしくまた樂しきかな われらの牀は青緑なり われらの家の棟梁は香柏 その垂木は松の木なり



第二章

われはシャロンの野花谷の百合花なり 女子等の中にわが佳耦のあるは荊棘の中に百合花  
 のあるがごとし わが愛する者の男子等の中にあるは林の樹の中に林檎のあるがごとし  
 我ふかく喜びてその蔭にすわれり その實はわが口に甘かりき 彼われをたづさへて酒宴の室にいらたまへり  
 その我上にひるがへしたる旗は愛なりき 請ふなんぢら彼葡萄をもてわが力をおきなへ 林檎をもて我に力を  
 つけよ 我は愛によりて疾わづらふ かが左の手はわが頭の下にあり その右の手をもて我を抱く  
 ルサレムの女子等よ我なんぢらに律と野の鹿とをさし誓ひて請ふ愛のおのづから起るときまでは殊更に喚起し  
 且つ醒すなかれ わが愛する者の聲きこゆ 視よ山をとび 岡を躍りこえて来る わが愛する者は律の  
 ごとくまた小鹿のごとし 視よ彼われらの壁のうしろに立ち 窓より 覗き 格子より 窺ふ わが愛する者  
 われに語りて言ふ わが佳耦よ わが美はしき者よ 起ていできたれ 視よ 冬すでに過ぎ 雨もやみてはやさり  
 ぬ もろもろの花は地にあらはれ 鳥のさへつる時すでに至り 班鳩の聲われらの地にきこゆ 無花果樹は  
 その青き果を赤らめ 葡萄の樹は花さきてその馨はしき香氣をはなつ わが佳耦よ わが美しき者よ 起て出きたれ  
 禁間にをり 斷崖の隙 處にをるわが鴿よ 我なんぢの面を見させよ なんぢの聲をきかしめよ なんぢの聲  
 は愛らしくなんぢの面はうるはし われらのために狐をとらへよ 彼の葡萄園をそこなふ小狐をとらへよ  
 我等の葡萄園は花盛なればなり わが愛する者は我につき我はかれにつく 彼は百合花の中にてその群を牧ふ  
 わが愛する者よ 日の涼しくなるまで 影の消るまで身をかへして出ゆき 荒き山々の上において律のごとく  
 小鹿のごとくせよ

第三章

夜われ床にありて我心の愛する者をたづねしが尋ねたれども得ず 我おもへらく今おきて邑を  
 まはりありき わが心の愛するものを街衢あるひは大路にてたづねんと 乃ちこれを尋ねたれども  
 得ざりき 星をまはりありく 夜巡者われに遇ければ 汝らわが心の愛する者を見しやと問ひ これに別れて

過ゆき 間もなくわが心の愛する者に遇たれば 之をひきとめて放さず 遂にわが母の家にともなひゆき 我を産し  
 者の室にいりぬ エルサレムの女子等よ 我なんぢらに律と野の鹿とをさし誓ひて請ふ愛のおのづから  
 起る時まで殊更に喚起し且つ醒すなかれ この没薬乳香など商人のもろもろの薫物をもて身をかわらせ  
 煙の柱のごとくして荒野より来る者は誰ぞや 視よこはソロモンの乗輿にして 勇士六十人その周圍に  
 ありイスラエルの勇士なり みな刀剣を執り 戰鬪を善す 各人腰に刀剣を帯て夜の警誡に備ふ ソロモン王  
 レバノンの木をもて己のために輿をつくれり その柱は白銀 その欄杆は黄金 その座は紫色にて作りその  
 内部にはイスラエルの女子等が愛をもて纏たる物を張つく シオンの女子等よ 出きたりてソロモン王を見よ  
 かれは婚姻の日心の喜べる日にその母の己にかうぶらし 冠冕を戴けり

第四章

あゝなんぢ美はしきかな わが佳耦よ あゝなんぢうるはしきかな なんぢの目は面帕のうしろに  
 ありて鶴のごとし なんぢの髪はギレアデ山の腰に臥たる山羊の群に似たり なんぢの齒は毛を  
 剪たる牝羊の浴場より出たるがごとし おのおの雙子をうみてひとつも子なきものはなし なんぢの唇は紅色  
 の線維のごとく その口は美はしなんぢの頬は面帕のうしろにありて石榴の半片に似たり なんぢの頸項は  
 武器庫にとて建たるダビデの成樓のごとし その上には一千の盾を懸つらぬ みな勇士の大楯なり なんぢの胸  
 乳房は牝羊の雙子なる二箇の小鹿が百合花の中に草はみをるに似たり 日の涼しくなるまで影の消るまで  
 われ没薬の山また乳香の岡に行べし わが佳耦よ なんぢはことごとくうるはしくしてすこしのきすもなし  
 新婦よ レバノンより我にともなへ レバノンより我とともに來れ アマナの嶺セルまたヘルモンの嶺より  
 望み 獅子の穴また豹の山より望め わが妹わが新婦よ なんぢはわが心を奪へり なんぢは只一目をもてまた  
 頸玉の一をもてわが心をうばへり わが妹わが新婦よ なんぢの愛は樂しきかな なんぢの愛は酒よりも遙にす  
 ぐれ なんぢの香 膏の馨は一切の香物よりもすぐれたり 新婦よ なんぢの唇は蜜を滴らす なんぢの舌の底に



は蜜と乳とありなんちの衣裳の香氣はレバノンの香氣のごとし 一三 わが妹わがはなよめよなんちは閉たる園  
 閉たる水源封じたる泉水のごとし 一四 なんちの園の中に生いづる者は石榴及びもろの佳果またコベル及び  
 ナルダの草 一五 ナルダ番紅花 葛蒲 桂枝さまざまの乳香の木および液藥 蘆薈一切の貴とき香物なり 一六 なんち  
 は園の泉水 活る水の井レバノンよりいづる流水なり 一七 北風よ起れ 南風よ來れ 我國を吹てその香氣を  
 揚よねがはくはわが愛する者のおが園にいりきたりてその佳き果を食はんことを

第五章

一 わが妹わがはなよめよ 我はわが園にいり わが液藥と薰物とを採り わが蜜房と蜜とを食ひ わが  
 酒とわが乳とを飲り わが伴侶等よ 請ふ食へ わが愛する人々よ 請ふ飲あけよ 二 われは睡り

たれどもわが心は醒りたり時にわが愛する者の聲あり 即ち門をたきていふわが妹 わが佳耦 わが鴿 わが  
 完きものよ われのために開け わが首には露滿ち わが髪に毛には夜の點滴みてりと 三 われすてにわが衣服を  
 脱りいかでまた著るべき 已にわが足をあらへり いかでまた汚すべき 四 わが愛する者戸の穴より手をさしい  
 れしかばわが心かれのためにうごきたり 五 やがて起いでてわが愛する者の爲に開かんとき 液藥わが手  
 より液藥の汁わが指よりながれて園木の把柄のうへにしたれり 六 我わが愛する者の爲に開きしにわが愛する  
 者は已に退き去りぬ さきにその物いひし時はわが心さわきたり 我かれをたづねたれども遇す 呼たれども答應  
 なかりき 七 邑をまはりありく夜巡者等われを見てうちて傷つけ 石垣をまもる者らはわが上衣をはぎとれり  
 八 エルサレムの女子等よ 我なんちらにかたく請ふもしわが愛する者には汝ら何とこれにつぐべきや 我愛  
 によりて疾わづらふと告よ 九 なんちの愛する者は別の人の愛する者何の勝れるところありや 婦女の中の  
 いと美はしき者よ なんちが愛する者は別の人の愛する者何の勝れるところありて斯われらに固く請ふや  
 一〇 わが愛する者は白くかつ紅にして萬人の上に越ゆ 一一 その頭は純金のごとく その髪はふさやかにして黒き  
 こと鳥のごとし 一二 その目は谷川の水のほとりにをる鴿のごとく 乳にて洗はれて美はしく嵌れり 一三 その頬は

馨しき花の床のごとく 香草の壇のごとし 一四 その唇は百合花のごとくにして液藥の汁をしたいらす 一五 その手は  
 きばみたる碧玉を嵌し黄金の鎖のごとく 一六 其鉢は青玉をもておほひたる象牙の雕刻物のごとし 一七 その腰は蠟石  
 の柱を黄金の臺にたてたるのごとく 一八 その相貌はレバノンのごとく その優れたるさまは香柏のごとし 一九 その口  
 ははなはだ甘く 誠に彼には一つだにうつくしからぬ所なし 二〇 エルサレムの女子等よ これぞわが愛する者これぞ  
 わが伴侶なる

第六章

一 婦人のいと美はしきものよ 汝の愛する者は何處へゆきしやなんちの愛する者はいづこへおもむ  
 きしや われら汝とともにたづねん 二 わが愛するものは己の園にくだり 香しき花の床にゆき

園の中に群を牧ひまた百合花を探る 三 我はわが愛する者につきわが愛する者はわれにつく 彼は百合花の  
 中にてその群を牧ふ 四 わが佳耦よ なんちは美はしきことテルザのごとく 華やかなることエルサレムのこ  
 とく 畏るべきこと旗をあげたる軍旅のごとし 五 なんちの目は我をおそれしむ 請ふ我よりはなれしめよなん  
 ちの髪はギレアデ山の腰に臥たる山羊の群に似たり 六 なんちの齒は毛を剪たる牝羊の浴場より出たるのごとし  
 おのおの雙子をうみてひとつも子なきものはなし 七 なんちの頬は面帕の後にありて石榴の半片に似たり 八 后  
 六十人 妃嬪八十人 數しられぬ處女あり 九 わが鴿わが完き者はたゞ一人のみ 彼はその母の獨子にして産たる  
 者の喜ぶところの者なり 女子等は彼を見て幸福なる者となへ 后等妃嬪等は彼を見て讚む 一〇 この晨光の  
 ごとくに見えわたり 月のごとく美はしく 日のごとくに輝やき 畏るべきこと旗をあげたる軍旅のごとき者は  
 誰ぞや 一一 われ胡桃の園にくだりゆき 谷の青き草木を見 葡萄や芽し 一二 木柵の花を咲しと見回しをりしに  
 意はず知ず我が心われをしてわが貴とき民の車の中川にあらしむ 一三 歸れ歸れ シュラムの婦よ 歸れ歸れ  
 われら汝を観んことをねがふ 一四 なんちら何とて マハナイムの跳舞を観ることくに シュラムの婦を観んと  
 ねがふや



第七章

君の女よ なんちの足は鞋の中にありて如何に美はしきかな 汝の腿はまろらかにして玉のごとく  
 巧匠の手にて作りたるがごとし 二 なんちの膺は美酒の缺ることあらざる圓き杯盤のごとく 三  
 ちの腹は積かさねたる麥のまはり百合花もてかこめるが如し 四 なんちの兩乳房は牝鹿の雙子なる二の小鹿の  
 ごとし 五 なんちの頸は象牙の成樓の如く 六 汝の目はヘシボンにてベテラビム門のほとりにある池のごとく  
 なんちの鼻はダマスコに對へるレバノンの成樓のごとし 七 なんちの頭はカルメルのごとく 八 なんちの頭の髪は  
 紫色のごとし 九 王その垂たる髪につながれたり 一〇 あゝ愛よもろもろの快樂の中にありてなんちは如何に美はし  
 く如何に悦ばしき者なるかな 一一 なんちの身の長は棕櫚の樹に等しく 一二 なんちの乳房は葡萄のふさのごとし  
 〆 われ謂ふこの棕櫚の樹にのぼりその枝に執つかんと 一三 なんちの乳房は葡萄のふさのごとく 一四 なんちの鼻の氣息  
 は林檎のごとく匂はん 一五 なんちの口は美酒のごとし 一六 わが愛する者のために滑かに流れくだり 一七 睡れる  
 者の口をして動かしむ 一八 われはわが愛する者につき 一九 彼はわれを戀したふ 二〇 わが愛する者よ 二一 われら田舎  
 にくたり村里に宿らん 二二 われら夙におきて 二三 葡萄や芽し 二四 昔やいでし 二五 石榴の花やさきし 二六 葡萄園にゆきて  
 見ん 二七 かしこにて我わが愛をなんちにあたへん 二八 懸茄かくはしき香氣を發ち 二九 もろもろの佳き果物古き新らしき  
 共にわが戸の上 三〇 ありわが愛する者よ 三一 我これをなんちのためにたくはへたり

第八章

ねがはくは 汝わが母の乳をのみしわが兄弟のごとくならんことを 一 われ戸外にてなんちに遇ふ  
 とき接吻せん 二 然するとも誰ありてわれをいやしむるものあらじ 三 われ汝をひきてわが母の家に  
 いたり 四 汝より教誨をうけん 五 我かくはしき酒石榴のあまき汁をなんちに飲しめん 六 かれが左の手はわが頭の  
 下にあり 七 その右の手をもて我を抱く 八 エルサレムの女子等よ 九 我なんち等に誓ひて請ふ 一〇 愛のおのづから  
 起る時まで 一一 殊更に喚起し且つ醒すなかれ 一二 おのれの愛する者に倚かりて荒野より上りきたる者は誰ぞや  
 林檎の樹の下にてわれなんちを喚させり 一三 なんちの母かしこにて汝のために効勞をなし 一四 なんちを産し者

六

かしこにて効勞をなしぬ 一 われを汝の心におきて印のごとくし 二 なんちの腕におきて印のごとくせよ 三 其は愛は  
 強くして死のごとく 四 嫉妬は堅くし 五 陰府にひとし 六 その焔は火のほのほのごとし 七 いともはげしき焔なり 八 愛  
 は大水も消ことあたはず 九 洪水も溺らすことあたはず 一〇 その家の一切の物をことごとく與へて愛に換んとすると  
 も 一 尚いやしめらるべし 二 われら小さき妹子あり 三 未だ乳房あらず 四 われらの妹子の問購をうくる日には之に  
 何をなしてあたへんや 五 かれもし石垣ならんには我ら白銀の城をその上にたてん 六 彼もし戸ならんには香柏  
 の板をもてこれを圍まん 七 われは石垣わが乳房は成樓のごとし 八 是をもてわれは情をかうむれる者のごと  
 く 九 彼の目の前にありき 一〇 パアルハモンにソロモン葡萄園をもてり 一一 これをその守る者等にあづけおき 一二 彼等を  
 しておのおの銀一千をその果のために納めしむ 一三 われ自らの有なる葡萄園われの手にあり 一四 ソロモンなんちは  
 一千を獲よ 一五 その果をまもる者も二百を獲べし 一六 なんち園の中に住むべよ 一七 伴侶等なんちの聲に耳をかた  
 むく 一八 請ふ我にこれを聴しめよ 一九 わが愛する者よ 二〇 請ふ急ぎはしれ 二一 香はしき山々の上 二二 ありて瘴のごとく  
 小鹿のごとくあれ 二三 雅 歌 をはり

三

わが愛する者よ 一 請ふ急ぎはしれ 二 香はしき山々の上 三 ありて瘴のごとく  
 小鹿のごとくあれ 四 雅 歌 をはり



第一章

一 アモツの子イザヤがユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤのときに示されたるユダとエルサレムとに係る異象

二 天よきけ地よ耳をかたづけよ エホバの語りたまふ言あり 曰くわれ子をやしなひ育てしにかれらは我にそむけり 牛はその主をしり驢馬はそのあるじの厩をしる 然どイスラエルは識ずわが民はさとらず 罪ををかける國人よこしまを負ふたみ 惡をなす者のすゑ壞りそこなふ種族 かれらはエホバをすてイスラエルの聖者をあなどり之をうとみて退きたり なんぢら何ぞかさがね悖りて猶違れんとするかその頭はやまさる所なくその心はつかはれてたり 足のうらより頭にいたるまで全きところなくたゞ創痍と打傷と腫物とのみなり而してこれを合すものなく包むものなく亦あぶらにて軟らぐる者もなし なんぢらの國はあれすたれなんぢらの諸邑は火にてやかれなんぢらの田畑はその前にて外人にのまれ既にあだし人にくつがへされて荒廢れたり シオンの女はぶだろぞの廠のごとく瓜田の假舎のごとくまた園をうけたる城のごとく唯ひとり遺れり 萬軍のエホバわれらに少しの遺をとめて給ふことなくば我儕はソドムのごとく又ゴモラに同じかりしならん

三 なんぢらソドムの有司よエホバの言をきけなんぢらゴモラの民よわれらの神の律法に耳をかたづけよ 四 エホバ言たまはくなんぢらが獻ぐるおほくの犠牲はわれに何の益あらんや 我はをひつじの燔祭とこえたるけもの膏とにあげりわれは牡牛あるひは小羊あるひは牡山羊の血をよるこばす なんぢらは我に見えんとてきたるこのことを誰がなんぢらに要めしや徒らにわが庭をふむのみなり 五 なんぢら祭物をふたたび携ふることなかれ 燔物はわがにくむところ 新月および安息日また會衆をよびあつむること我がにくむところなり

六 なんぢらは聖會に惡を兼ねわれ容すにたへず 七 わが心はなんぢらの新月と節會とをきらふ 是わが重荷なり 八 われ負にうみたり 九 我なんぢらが手をおぶるとき目をおほひ汝等がおほくの祈禱をなすときも聞ことをせじ 十 なんぢらの手には血みちたり 十一 なんぢら己をあらひ己をきよくしわが眼前よりその惡業をさり 惡をおこなふことを止め 善をおこなふことをならひ 公平をもとめ 慮げらるゝ者をたすけ 孤子に公平をおこなひ 寡婦の訟をあけつらへ

一二 エホバいひたまはく率われらともに論らはんなんぢらの罪は絆のごとくなるも雪のごとく白くなり 一三 紅のごとく赤くとも羊の毛のごとくにならん 一四 若なんぢら肯ひしたがはゞ地の美産をくらふことを得べし 一五 もし汝等こばみそむかば劍にのまるべし 此はエホバその御口よりかたりたまへるなり

一六 忠信なりし邑いかにして妓女とはなれる 昔しは公平にてみち正義の中にやどりしに今は人をころす者ばかりとなりぬ 一七 なんぢの白銀は滓となりなんぢの葡萄酒は水をまじへ 一八 なんぢの長敷はそむきて盜人の伴侶となりおのおの賄賂をよるこび 贖財をおひもとめ 孤子に公平をおこなはず 寡婦の訟はかれらの前にいつること能はず

一九 このゆゑに主萬軍のエホバ、イスラエルの全能者のたまはく 嗚われ敵にむかひて念をはらし仇にむかひて報をすべし 二〇 我また手なんぢの上にそへなんぢの滓をことごとく淨くしなんぢの鉛をすべて取り去り 二一 なんぢの審士を舊のごとくなんぢの議官を始のごとくに復すべし 然るもなんぢは正義の邑忠信の邑となへられん 二二 シオンは公平をもてあがなはれ 歸來るものも正義をもて贖はるべし 二三 されど愆をかすものと罪人とともに敗れ エホバをすつる者もまた亡びうせん 二四 なんぢらはその喜びたる楡樹によりて恥をいだきそのえらびたる園によりて慙むべし 二五 なんぢらは葉のかるゝ楡樹のごとく 水なき園のごとくならん 二六 權勢あるものは麻のごとく その工は火花のごとく 二七 のもの一同もえてこれを撲滅すものなし



第二章

アモツの子イザヤが示されたるユダとエルサレムとにかゝる言  
 事の日にエホバの家の山はもろもろの山のいたゞきに堅立ちもろもろの嶺よりたかく  
 擧りすべての國は流のごとく之につかん おほくの民ゆきて相語いはん 率われらエホバの山にのほりヤコブ  
 の神の家にゆかん 神われらにその道ををしへ給はん われらその路をあゆむべしとそは律法はシオンよりいで  
 エホバの言はエルサレムより出べければなり エホバはもろもろの國のあひだを鞠き おほくの民をせめたま  
 はん 斯てかれらはその劍をうちかへて鋤となしその鎗をうちかへて鎌となし 國は國にむかひて劍をあげず  
 戰闘のことを再びまばざるべし

ヤコブの家よきたれ我儕エホバの光にあゆまん 主よなんぢはその民ヤコブの家をすてたまへり 此は  
 かれらのなかに東のかたの風俗みち 皆ペリシテ人のごとく陰陽師となり 異邦人のともがらと手をうちて盟を  
 たてしが故なり かれらの國には黄金白銀みちて 財寶の數かぎりなし かれらの國には馬みちて 戰車のかず  
 限りなし かれらの國には偶像みち 皆おのが手の工の指のつくれる者ををがめり 賤しきものは屈めら  
 れ 尊きものは卑せらる かれらを容したまふなかれ なんぢ岩間にいりまた土にかくれて エホバの畏るべき  
 容貌とその後威の光輝とをさくべし この日には目をあけて高ぶるもの卑せられ 驕る人かゞめられ 唯エホバ  
 のみ高くあげられ給はん

そは萬軍のエホバの一の日ありすべて高ぶる者おとる者みづからを崇るものの上にのぞみて之をひくし  
 し またレバノンのたかく聳たるすべての香柏バシヤンのすべての樅樹 もろもろの高山もろもろの聳え  
 たる嶺 すべてたかき構すべての堅固なる石垣 およびタルシシのすべての舟すべての慕ふべき美はしき  
 ものに臨むべし この日には高ぶる者かゞめられ 驕る人はひくしせられ 唯エホバのみ高くあげられ給はん  
 かくて偶像はことごとく亡びうすべし エホバたちて地を震動したまふとき 人々そのおそるべき容貌と

その後威の光輝とをさけて巖の洞と地の穴とにいらん その日人々おのが拜せんとて造れる白銀のぐうさうと  
 黄金のぐうさうとを鼯鼠のあな 蝙蝠の穴になげすて 岩々の隙はしき山峽にいり エホバの起て地をふるひ  
 うごかしたまふその畏るべき容貌と後威のかゞやきとを避ん なんぢら鼻より息のいでいりする人に倚ること  
 をやめよ 斯るものは何ぞかぞふるに足らん

第三章

みよ主ばんぐんのエホバ、エルサレムおよびユダの頼むところなる 凡てその頼むところ  
 の糧すべてその頼むところの水 勇士 戰士 審士 預言者 卜筮者 長老 五十人の首 貴顯者  
 議官 藝に長たる者 および言語たくみなるものを除去りたまはん われ童子をもてかれらの君とし 嬰兒にかれ  
 らを治めしめん 民たがひに相虐げ 人おのおのその隣をしへたげ 童子は老たる者にむかひて高ぶり 賤しき  
 ものは貴きものに對ひてたかぶらん そのとき人々の家にて兄弟にすがりていはん 汝なほ衣あり われらの  
 有司となりてこの荒敗をその手にてをさめよと その日かれ聲をあげていはん 我なんぢらを愈すものとなる  
 を得じわが家に糧なくまた衣なし 我をたて、民の有司とすることなかれと 是かれらの舌と行爲とはみな  
 エホバにそむきてその榮光の目ををかし、が故に エルサレムは敗れユダは仆れたればなり かれらの面色は  
 その悪きことの證をなしソドムのごとくその罪をあらはして隠すことをせざるなり かれらの靈魂はわさはひな  
 るかな自らその惡の報をとれり なんぢら義人にいへ かならず福をうけん と 彼等ははそれをおこなひの實を  
 くらふべければなり 惡者はわさはひなる哉かならず災禍をうけん その手の報きたるべければなり わが  
 民はをさなごに虐げられ婦女にをさめらる 嗚わが民よ なんぢを導くものは反てなんぢを迷はせ汝のゆくべき  
 途を絶つ

エホバ立いでて公理をのべ起てもろもろの民を審判し給ふ エホバ來りておのが民の長老ともろもろの  
 君とをさばきて言給はん なんぢらは葡萄園をくひあらせり 負きものより掠めとりたる物はなんぢらの家にあり



いかなれば汝等わが民をふみにじり貧きものの面をすりくだくやとこれ主萬軍のエホバのみことばなり  
 エホバまた言給はくシオンの女輩はおごり頂をのばしてあるき眼にて媚をおくり徐々としてあゆみゆく  
 その足にはりんりんと音あり このゆゑに主シオンのむすめらの頭をかぶるにしエホバ彼らの褌所をあらは  
 し給はん その日主かれらが足にかされる美はしき鍔をとり 環珞半月飾 耳環手釧面帕 華冠 壓飾  
 紳香盒符囊 指環鼻環 公服上衣 外帔金囊 鏡 細布の衣 首帕 被衣などを取除きたまはん 而  
 して馨はしき香はかはりて臭穢となり 紳はかはりて繩となり 美はしく編たる髪はかぶるとなり 華かなる衣は  
 かはりて鹿布のころもとなり 麗顔はかはりて烙鐵せられたる痕とならん なんちの男はつるぎにたふれな  
 んちの勇士はたゝかひに仆るべし その門はなげきかなしきシオンは荒廢れて地にすわらん

第四章

その日エホバの枝はさかえて 輝かん地よりなりいづるもの實はすぐれ並うるはしくして逃れのこれる  
 イスラエルの益となるべし 而してシオンに遺れるもの エルサレムにとどまれる者すべて此等のエルサレム  
 に存ふる者のなかに録されたるものは聖ととなへられん 是は主さばきするみたまと焼つくす聖とをもてシオ  
 ンのむすめらの汚をあらひ エルサレムの血をその中よりのぞきたまふ期きたるべければなり 爰にエホバは  
 シオンの山のすべての住所ともろもろの聚會とのうへに 晝は雲と煙とをつくり 夜はほの光をつくり給はん  
 あまねく榮のうへに覆庇あるべし また一つの假廬ありて 晝はあつさをふせぐ陰となり 暴風と雨とをさけて  
 かくるる所となるべし

第五章

われわが愛する者のために歌をつくり 我があひするものの葡萄園のことをうたはん わが愛する  
 ものは土肥たる山にひとつの葡萄園をもてり 彼の園をすきかへし石をのぞきて 嘉ぶだうを

うゑ そのなかに望樓をたて 酒樽をほりて 嘉葡萄のむすぶを望みまてり 然るに結びたるものは野葡萄なりき  
 さればエルサレムに住るものとユダの人よ 請なんちら我とわがぶだうぞのとの間をさばけ わが葡萄園  
 にわれの作たるほか何のなすべき事ありや 我はよきぶだうの結ぶをのぞみまじしに 何なれば野葡萄をむすびし  
 や 然ばわれわが葡萄園になさんとすることを汝等につげん 我はぶだうぞの籬笆をとりさりてその食あらさ  
 るゝにまかせその垣をこぼちてその踐あらさるゝにまかせん 我これを荒してふたゝび剪ことをせず耕す  
 ことをせず棘と荊とをはえいでしめん また雲に命せてそのうへに雨ふることなからしめん され萬軍のエホ  
 バの葡萄園はイスラエルの家なりその喜びたまふところの植物はユダの人なり これに公平をのぞみたまひしに  
 反りて血をながしこれに正義をのぞみ給ひしにかへりて號呼あり  
 禍ひなるかな彼らは家に家をたてつらね 田圃に田圃をましくはへて餘地をあまさず 己ひとり國のうち  
 住んとす 萬軍のエホバ我耳につけて宣はく 實におほくの家はあれすたれ大にして美しき家は人のすむこと  
 なきにいたらん 十段のぶだうぞの僅かに一バテをみのり一ホメルの穀種はわづかに一エバを實るべし 禍  
 ひなるかなかれらは朝つとにおきて濃酒をおひもとめ 夜のふくるまで止まりてのみ酒にその身をやるゝなり  
 かれらの酒宴には琴あり瑟あり鼓あり笛あり 葡萄酒あり されどエホバの作爲をかへりみずその手のなし  
 たまふところに目をとめず  
 斯るが故にわが民は無知にして虜にせられ その貴顯者はうゑ そのもろもろの民は渴によりて疲れはてん  
 また陰府はその欲望をひろくし その度られざる口をはる かれらの榮華かれらの群衆かれらの饒富および  
 喜びたのしめる人みなその中におつべし 賤しき者はかゞめられ 貴きものは卑くせられ 目をあげて高ぶる者  
 はひくくせらるべし されど萬軍のエホバは公平によりてあがめられ 聖なる神は正義によりて聖とせられ給  
 ふべし 而して小羊おのが牧場にあるごとくに草をはみ 豊かなるものの田はあれて旅客にくらはれん







レマリヤの子はげしく怒るとも、二の糧餘りたる煙れる片柴のごとし、懼るゝなかれ心をよわくするなかれ、アラム、エフライム及びレマリヤの子なんちにむかひて悪き謀ごとを企て、いふ、われらユダに攻上りて之をおびやかし我儕のためにこれを破りとり、タビエルの子をその中にたて、王とせんと、されど主エホバはたまはくこの事おこなはれずまた成ることなし、アラムの首はダマスコ、ダマスコの首はレヂンなり、エフライムは六十五年のうちに敗れて國をなさざるべし、またエフライムの首はサマリヤ、サマリヤの首はレマリヤの子なり、若しなんちら信ぜずばかならず立ことを得じと

エホバ再びアハズに告げていひたまはく、なんちの神エホバに一の豫兆をもとめよ、或はふかき處あるひは上のたかき處にもとめよ、アハズいひけるは我これを求めじ、我はエホバを試むることをせざるべし、イヤヤいひけるはダビデのいへよ、請なんちら聞なんちら人をわづらはし、これを小事として亦わが神をも煩はんとするか、この故に主みづから一の豫兆をなんちらに賜ふべし、視よをとめ孕みて子をうまん、その名をインマヌエルと稱ふべし、かれ悪をすて善をえらぶことを知ころほひにいたりて、乳酥と蜂蜜とをくらはん、その子はいまだ悪をすて善をえらぶことを知ざるさきに、なんちが思きらふ兩の王の地はすてらるべし、エホバはエフライムがユダを離れし時よりこのかた臨みしことなき日を汝となんちの民となんちの父の家とにのぞませ給はん、是アツスリヤの王なり

其日エホバ、エジプトなる河々のほとりの蠅をまねきアツスリヤの地の蜂をよびたまはん、皆きたりて荒たるたに岩穴すべての荊棘すべての牧場のうへに止まるべし

その日主はかはの外ふより雇へるアツスリヤの王を剃刀として首と足の毛とを剃たまはん、また髻をも除きたまふべし

その日人わかき牝犢ひとつと羊ふたつとを飼をらん、その出すところの乳おほきによりて乳酥をくらは

ことを得ん、すべて國のうちに遺れるものは乳酥と蜂蜜とをくらふべし

その日子株に銀一千の價をえたる葡萄ありし處もことごとく荊と棘はえいづべし、荊とおどろと地にあまねきがゆゑに人々矢と弓とをもて彼處にゆくなり、鋤をもて掘たがへしたる山々もいばらと棘のために人おそれその中にゆくことを得じ、その地はたい牛をはなち羊にふましむる處とならん

第八章 エホバ我にいひたまひけるは、一の大なる牌をとり、そのうへに平常の文字にてマヘル、シヤラル、マヘル、シヤラル、ハシバズと稱へよ、そはこの子いまだ我が父が母とよぶことを知らざるうちに、ダマスコの富とサマリヤの財貨はうばはれてアツスリヤ王のまへに到るべければなり

エホバまた重て我につげたまへり云く、この民はゆるやかに流るゝシロアの水をすて、レヂンとレマリヤの子とをよるこぶ、此によりて主はいきほひ猛くみなぎりわたる大河の水をかれらのうへに堰入たまはん

是はアツスリヤ王とそのもろもろの威勢とにして、百の支流にはびこりもろもろの岸をこえ、ユダにながれり、溢れひろりてその項にまで及ばん、インマヌエルよ、そののぶる翼はあまねくなんちの地にみちわたらん

もろもろの民よ、さばめき騒げなんちら推かるべし、遠きくにぐにの者よ、きけ腰におびせよ、汝等くだかるべし、腰に帯せよ、なんちら推かるべし、なんちら互にはかれつひに徒勞ならん、なんちら言をいだせ、遂におこなはれし、そは神われらとともに在せばなり、エホバつよき手をもて此如われに示し、この民の路にあゆま

ざらんことを我にさとして言給はく、此民のすべて叛逆となふるところの者をなんちら叛逆となふるなかれ、彼等のおそるるところを汝等おそるゝなかれ、憎くなかれ、なんちらはたゞ萬軍のエホバを聖としてこれを

畏みこれを恐るべし、然らばエホバはきよき避所となりたまはん、然どイスラエルの兩の家には、固く石となり

舊約聖書 イザヤ書 第七章二三節―第八章一四節 九七七



妨ぐる弊とならんエルサレムの民には網罟となり機檻とならん おほくの人々これによりて騒きかつ仆れやぶれ網せられまた捕へらるべし

證詞をつかね律法をわが弟子のうちに封べし いま面をおほひてヤコブの家をかへりみ給はずといへども我そのエホバを待そのエホバを望みまつらん 視よわれとエホバが我にたまひたる子輩とは イスラエルのうちの豫兆なり奇しき標なり此はシオンの上にいます萬軍のエホバの與へたまふ所なり

もし人なんぢらにつけて巫女および魔術者のさえづるがごとく細語がごとき者にもとめよといはゞ民はおのれの神にもとむべきにあらすやいかで活者のために死者にもとむることを爲んといへ たり律法と證詞とを求むべし 彼等のいふところ此言にかなはずば晨光あらじ かれら國をへあるきて苦みうゑん その飢るとき怒をはなち己が王おのが神をさして詛ひかつその面をうへに向ん また地をみれば艱難と幽暗とくるしみの闇とあり かれらは昏黒におひやられん

第九章

今くるしみを受れども後には闇なかるべし 昔しはゼブルンの地ナフタリの地をあたどられしめ給ひしかど 後には海にそひたる地ヨルダンの外の地ごとくに人のガリラヤに榮をうけしめ給へり 幽暗をあゆめる民は大なる光をみ 死蔭の地にすめる者のうへに光てらせり なんぢ民をましその歡喜を大にしたまひければ かれらは收穫時によるこぶがごとく掠物をわかつときに樂むがごとく汝の前によるべり 汝は汝かれらがおへる輓とその肩の咎と處ぐるもの杖とを折りこれを折りてミデアンの日のごとくなし給ひたればなり すべて亂れたるかふ兵士のよろひと血にまみれたる衣とはみな火のもえくさとなりて焚るべし ひとりり嬰兒われらのために生れたり我情はひとりの子をあたへられたり 政事はその肩にありその名は奇妙また謙士また大能の神とこしへのち、平和の君となへられん その政事と平和とはましくはよりて窮りなし 且ダビデの位にすわりてその國ををさめ今よりのちとこしへに公平と正義とをもてこれを立これを保ち

たまはん 萬軍のエホバの熱心これを成たまふべし

主一言をヤコブにおくり之をイスラエルの上にのぞませ給へり すべてこの民エフライムとサマリアに居るものとは知ららん かれらは高ぶる誇る心をもていふ 互くづるゝともわれら研石をもて建くはの木きらるゝともわれら香柏をもて之にかへんと この故にエホバ、レヂンの敵をあげもちゐてイスラエルを攻しめその仇をたけび勇しめたまはん 前にアラム人あり後にベリシテ人あり 口をはりてイスラエルを呑んとす 然はあれどエホバの怒やまずして尙その手をのばしたまふ

然どこの民はおのれをうつものに歸らず 萬軍のエホバを求めず 斯るゆゑにエホバ一日のうちに首と尾と機綱のえだと華とをイスラエルより断切たまはん その首とは老たるもの尊きもの その尾とは諛言をのぶる預言者をいふなり この民をみちびく者はこれを迷はせその引導をうる者はほろぶるなり このゆゑに主はその少壯者をもよろこびたまはずその孤子と寡婦とを憐みたまはざるべし 是はその民はことごとく邪まなり 惡をおこなふ者なり おのおのの口は愚かなる言をかたればなり 然はあれどエホバの怒やまずして尙その手をのばしたまふ

惡は火のごとくも棘と荊とを食つくし茂りあふ林をやくべければ みな煙となりむらがりて上騰らん 萬軍のエホバの怒によりて地はくろく燒 其の民は火のもえくさとなり 人々たがひに相憐むことなし 人みぎに擾めどもなほ飢 ひだりに食へども尙あかず おのおのその腕の肉をくらふべし マナセはエフライムをエフライムはマナセをくらひ 又かれら相合てユダを攻ん 然はあれどエホバの怒やまずして尙その手をのばしたまふ

第一〇章

不義のおきてをさだめ暴虐のことばを録すものは禍ひなるかな かれらは乏きものの訴をうけずわが民のなかの貧しきものの權利をはぎ 寡婦の資産をうばひ 孤兒のものを掠む なんぢら



懲しめらるゝ日きたらば何をなさんとするか敗壞とほきより來らんとし何をなさんとするかなんぢら逃れゆきて誰にすくひを求めんとするかまた何處になんぢらの榮をのこさんとするか たゞ縛められたるもの下にかがみ殺されたるものしたに伏せられんのみ然はあれどエホバのいかり止すして尙ほその手をのばしたまふ  
 咄アツスリヤ人なんぢはわが怒の杖なりその手の管はわが忿怒なり われ彼をつかはして邪曲なる國をせめ我かれに命じて我がいかれる民をせめてその所有をかすめその財寶をうばはしめかれらを街の泥のごとくに蹂躙らしめん されどアツスリヤ人のこゝろざしは斯のごとくならずその心の念もまた斯のごとくならずそのこゝろは敗壞をこのみあまたの國をほろぼし絶ん かれ云わが諸侯はみな王にあらすや カルノはカルケミシの如くハマテはアルパデの如くサマリヤはダマスコの如きにあらずや わが手は偶像につかふる國々を得たりその彫たる像はエルサレムおよびサマリヤのものに勝れたり われ既にサマリヤとその偶像とに行へることく亦エルサレムとその偶像とにおこなはざる可んやと

このゆゑに主いひたまふ 我シオンの山とエルサレムとに爲んとする事をことごとく遂をはらんとし我アツスリヤ王のおられる心の實とその高ぶり仰ぎたる眼とを罰すべし 彼は彼いへらくわれ手の力と智慧によりて之をなせり 我はかしこし國々の境をのぞきその獲たるものをうばひ 又われは丈夫にしてかの位に坐するものを下したり わが手もろの民のたからを得たりしは巢をとるが如く また天が下を取收めたりしは遺しすたる卵をとりあつむるが如くなりきあるひは翼をうごかしあるひは口をひらきあるひは啼々する者もなかりしなりと

斧はこれをもちて伐ものにもかひて己みづから誇ることをせんや 鋸はこれを動かす者にむかひて己みづから高ぶることをせんや 此はあたかも管がおのれを擧るものを動かす杖みづから木にあらざるものを擧んとするにひとし 此のゆゑに主萬軍のエホバは肥たるものを瘠しめ且その榮光のしたに火のもゆるが如き火燄をおこし給はん イスラエルの光は火のごとくその聖者はほのほの如くならん 斯て一日のうちに荆とおどろとを焼ほろぼし 又かの林と土肥たる田圃の榮をうせしめ 靈魂をも身をもうせしめて病るもの衰へたるが如くなさん かつ林のうちに残れる木わづかにして童子も算へうるが如くなるべし

その日イスラエルの遺れる者とヤコブの家ののがれたる者とは再びおのれを擧し者にたよらず誠意をもてイスラエルの聖者エホバにたよらん 其の遺れるものヤコブの遺れるものは大能の神にかへるべし あゝイスラエルよなんぢの民は海の沙のごとしといへども遺りて歸りきたる者はたゞ僅少ならん 是は敗壞すでにさだまり義にて溢るべければなり 主萬軍のエホバの定めたまへる敗壞はこれを徧く國內におこなひ給ふべし

このゆゑに主萬軍のエホバいひたまはくシオンに住るわが民よアツスリヤ人エジプトの例にならひ管をもて汝をうち 杖をあけて汝をせむるとも懼るゝなかれ たゞ頃刻にして忿怒はやまん 我がいかりは彼等をほろぼして息ん 萬軍のエホバむかしメディアン人をオレブの巖のあたりにて撃たまひしごとくに禍害をおこして之をせめ 又その杖を海のうへに伸しエジプトの例にしたがひてこれを擧たまはん 其の日のかれの重荷はなんぢの肩より下 かれの鞭はなんぢの頸よりはなれ 其の鞭はあぶらの故をもて壊れん

かれアイにきたりミグロンを過ミクマシにてその輜重をとめ 渡口を過ぎてゲバに宿ることゝに於てラマはをのゝきサウルギベア人は逃れはしれり ガリムの女よなんぢ聲をあげて叫べ ライシよ耳をかたぶけて聽け アナトテよなんぢも聲をあげよ マデメナはさすらひゲビムの民はのがれ走れり 此の日のかれノブに立とゞまりシオンのむすめの山エルサレムの岡にむかひて手をふりたり

主ばんぐんのエホバは雄々しくたけびてその枝を断たまはん 丈高きものは伐おとされ聳えたる者はひくくせらるべし また鋏をもて茂りあふ林をきり給はん レバノンに能力あるものに倒さるべし

第一章 エツサイの株より一つの芽いでその根より一つの枝はえて實をむすばん 其の上にエホバの



靈といまらんこれ智慧聰明の靈謀略才能の靈知識の靈エホバをおそるゝの靈なり かれはエホバを畏るをもて歡樂としまた目みるところによりて審判をなさず耳きくところによりて斷定をなさず 正義をもて貧しき者をさばき公平をもて國のうちの卑しき者のために斷定をなしその口の杖をもて國をうちその口唇の氣息をもて惡人をころすべし 正義はその腰の帯となり忠信はその身のおびとならん

おほかみは小羊とともにやどり豹は小山羊とともにふし犢をじし肥たる家畜ともに居てちひさき童子にみちびかれ 牝牛と熊とはくひものを同じし熊の子と牛の子とともにふし獅はうしのごとく藁をくらひ 乳兒は毒蛇のほらにたはふれ乳ばなれの兒は手をまむしの穴にいれん 斯てわが聖山のいづこにても害ふことなく傷ることなからんそは水の海をおほへることくエホバをしるの知識地みつべければなり

その日エツサイの根たちでもろもろの民の族となりもろもろの邦人はこれに服ひきたり榮光はそのとどまる所にあらん

その日主はまたふたゝび手をのべてその民ののこれる僅かのものをアツスリヤ、エジプト、パテロス、エチオピア、エラム、シナル、ハマテおよび海のしまじまより贖ひたまふべし エホバは國々の爲に旗をたてイスラエルの遂やられたる者をおつめ地の四極よりユダの散失たるものを集へたまはん またエフライムの猶はうせユダを憐ますものは斷れエフライムはユダをそねますユダはエフライムを憐ますことなかるべし かれらは西なるベリシテ人の境にとびゆき相共にひがしの子輩をかすめその手をエドムおよびモアブにのべアンモンの子孫をおのれに服はしめん エホバ、エジプトの海濱をからし河のうへに手をふりて熱風をふかせその河をうちて七の小流となし履をはきて涉らしめたまはん 斯てその民ののこれる僅かのもの爲にアツスリヤより來るべき一つの大路あり 昔しイスラエルがエジプトの地よりいでし時のごとくなるべし

第二章 その日なんぢ言ん エホバよ我なんぢに感謝すべし汝さきに我をいかり給ひしかどその怒はやみ

て我をなぐさめたまへり 視よ神はわが救なりわれ依頼ておそるゝところなし 主エホバはわが力わが歌なり エホバは亦わが救となりたまへりと 此故になんぢら欣喜をもて救の井より水をくむべし その日なんぢらいはん エホバに感謝せよその名をよべその行爲をもろもろの民の中につたへよその名のあがむべきことを語りつけよと エホバを頌うたへそのみわざは高くすぐれたればなりこれを全地につたへよ シオンに住るものよ聲をあげてよばはれイスラエルの聖者はなんぢの中にて大なればなり

アモツの子イザヤが示されたるベピロンにかゝる重負の預言

第二章 なんぢらかぶろの山に旗をたて聲をあげ手をふり彼等をまねきて貴族の門にいらしめよ われ

既にきよめ別ちたるものに命じわが丈夫ほこりかにいさめる者をよびてわが怒をもらさしむ 山におほくの人の聲きこゆ大なる民あるがごとしもろもろの國民のよりつどひて喧めく聲きこゆこれ萬軍のエホバたゝかひの軍兵を召したまふなり かれらはとほき國より天の極よりきたるこれエホバとその忿怒をもらす器とともに全國をほろぼさんとて來るなり

なんぢら泣號ぶべしエホバの日ちかづき全能者よりいづる敗亡きたるべければなり この故にすべての手はたれ凡の人のころは消ゆかん かれら憎きおそれ艱難と憂とにせまられ子をうまんとする婦のごとく苦しむ互におどろき相みあひてその面は饑のごとくならん 視よエホバの日奇くして忿怒とはげしき怒とをもて來りこの國をあらしその中よりつみびとを絶滅さん 天のもろもろの星とほしの宿は光をはなれず日はいでてくらく月はその光をかじやかさざるべし われ惡ことのために世をつみし不義のために惡きものをばつし驅れるものの誇をとめ暴ぶるもの傲慢をひくゝせん われ人をして精金よりもすくなくオフルの黄金よりも少なからしめん かくて亦われ萬軍のエホバの忿怒のとき烈しき怒りの日に天をふるはせ地をうてかしてその處をうしなはしむべし かれらは逐るゝ鹿のごとく集むるものなき羊のごとくなりて各自おのれの



民はかへりおのれの國にのがれゆかん すべて其處にあるもの見出さるれば刺れ拘留らるゝものは剣たふされ 彼等の嬰兒はその目前にてなげくだかれその家財はかすめうばはれその妻はけがさるべし 視よわれ白銀をかへりみず黄金をもよろこばざるメデア人をおこして之にむかはしめん かれらは弓をもて若きものを射くだき腹の實をあはれむことなく小子をみてをしむことなし すべて國の中にてうるはしくカルデヤ人がほこり飾となせるバビロンはむかし神にほろぼされたるソドム、ゴモラのごとくならん ここに住むもの永くたえ世々にいたるまで居ものなくアラビヤ人もかしこに幕屋をはらず牧人もまたかしこにはその群をふさすることなく たい猛獸かしこにふし吼るものその家のみち駝鳥かしこにすみ 牡山羊かしこに躍らん 豺狼その城のなかになき野犬えいくわの宮にさけばんその時のいたるは近きにありその日は延ることなかるべし

第一四章

エホバ、ヤコブを憐みイスラエルをふたゝび撰びて之をおのれの地におきたまはん 異邦人これに加りてヤコブの家にもすびつらなるべし もろもろの民はかれらをその處にたづさへいたらん 而してイスラエルの家はエホバの地にてこれを奴婢となし 雲におのれを覆にしたるものを膚にしおのれを隠したるものを治めん

エホバなんちの愛と艱難とをのぞき 亦なんちが勤むるからき役をのぞきて安息をたまふの日 なんちこの歌をとなへバビロン王をせめていはん 虐ぐる者いかにして息みしや 金をはたる者いかにして息みしやと エホバあしきもの管ともろもろの有司の杖とををりたまへり かれらは怒をもてもろもろの民をたえず撃てはうち忿恚をもてもろもろの國ををさむれどその暴虐をとどむる者なかりき 今は全地やすみを得おだやかを得ることとく聲をあげてうたふ 實にまつ樹およびレバノンの香柏さへもなんちの故により歡びていふ 汝すでに仆たれば樵夫のほりきたりてわれらを攻ることなしと 下の陰府はなんちの故により動きて汝の

きたるをむかへ世のもろもろの英雄の亡霊をおこし 國々のもろもろの王をその位より起おこらしむ かれらは皆なんちに告ていはん 汝もわれらのごとく弱くなりしや 汝もわれらと同じくなりしやと なんちの榮華となんちの琴の音はすでに陰府におちたり 蛆なんちの下にしかれ 蚯蚓なんちをおほふ あしたの子明星よいかにして天より隕しや もろもろの國をたふしし者よいかにして斫れて地にたふれしや 汝さきに心中におもへらくわれ天にのほり我くらむを神の星のうへにあげ 北の極なる集會の山にざし たかき雲漢にのほり至上者のごとくなるべしと 然どなんちは陰府におとされ 坑の最下にいれられん なんちを見るものは熱々なんちを視なんちに目をとめていはん この人は地をふるはせ列國をうごかし 世を荒野のごとくし もろもろの邑をこぼち捕へたるものをその家にときかへさざりしものなるかと もろもろの國の王たちはことごとく皆たふとき状にておのおのその家にねぶる 然どなんちは忌きらふべき枝のごとくおのが墓のそとにすてられ 其の周圍には剣にて刺ころされ 坑におろされ 石におほはれたる者ありて 踐つけらるゝ屍にことならず 汝おのれの國をほろぼしおのれの民をころししが故にかれらとおなじく葬らるゝことあたはず それ悪をおこなふものの裔はとこしへに名をよばるゝことなかるべし 先祖のよこしまの故をもてその子孫のために戮場をそなへ 彼等をしてたちて地をとり世界のおもてに邑をみたすことなからしめよ 萬軍のエホバのたまはく 我立てかれらを攻めバビロンよりその名と遺りたるものとを絶滅し その子その孫をたちほろぼさんとこれエホバの聖言なり われバビロンを刺蝟のすみかとし 沼とし且ほろびの筈をもてこれを掃除かん とこれ萬軍のエホバのみことばなり 萬軍のエホバ誓をたてし言給はく わがおもひし事はかならず成 わがさだめし事はかならず立ん われアツスリヤ人をわが地にてうちやぶり わが山々にてふみにじらん ことにおいて彼がおきし 輓はイスラエル人よりはなれ 彼がおはせし重負はイスラエル人の肩よりはなるべし これは全地のことにつきて定めたる謀略



なり是はもろもろの國のうへに伸したる手なり 萬軍のエホバさだめたまへり誰かこれを破ることを得んや  
その手をのばしたまへり誰かこれを押返すことを得んや

アハズ王の死たる年おもにの預言ありき

曰くベリシテの全地よなんちをうちし杖をたればとて喜ぶなかれ蛇の根より蝮いでその果はとびかけ  
る巨蛇となるべければなり いと貧しきものはのくひ乏しきものは安然にふさんわれ飢饉をもてなんちの  
根をしなければ汝がのこれる者をころすべし 門よなげけ邑よさけべ べリシテよなんちの全地きえうせたりそは  
けぶり北よりいできたりその軍兵の列におくるものなし

その國の使者たちに何とこたふべきや 答へていはん エホバ、シオンの基をおきたまへりその民のなかの  
苦しむものは避所をこの中にえん

第一章

モアブにかゝる重負のよげん 曰く

モアブのアルは一夜の間にあらされて亡びうせ 莫アブのキルは一夜の間に荒されてほろびうせ  
ん かれバイテおよびデボンの高所にのぼりて哭き 莫アブはネボ及びメデバの上にてなげきさけぶ おのおの  
その頭を禿にしその鬚をことごとく剃たり かれら鹿服をきてその衝にあり 屋蓋または廣きところにて皆なき  
さけび悲しむこと甚だし へシボンとエレアルと叫びてその聲ヤハズにまで聞ゆ この故にモアブの軍兵こゑを  
あげその靈魂うちにてをのけり わが心モアブのために叫びよばはれりその貴族はゾアルおよびエグラ  
テシリシヤにのがれ哭つゝルヒテの坂をのぼりホロナイムの途にて敗亡の聲をあぐ ニムリムの水はかわき  
草はかれ苗はつきて綠藪あらず このゆゑに彼等は其の獲たる畜とその藏めたる物をたづさへて柳の河をわた  
らん 其の泣號のこゑはモアブの境をめぐり 悲歎のこゑはエグライムにいたり なげきの聲はベエルエリムに  
いたる 其の水は血にて充 われデモンの上にひとしほ禍害をくはへ 莫アブの遁れたる者この地の遺り

たるものにとに獅をおくらん

第二章

なんぢら荒野のセラより羔羊をシオンの女の山におくりて國の首にをさむべし 莫アブの女輩  
はアルノンの津にありてさまよふ鳥のごとく巢をおはれたる雛のごとくなるべし 相謀りて審判

をおこなひ 亭午にもなんちの蔭を夜のごとくならしめ 驅逐人をかくし 遁れきたるものを顯はすなかれ わが  
驅逐人をなんちとともに居しめ 汝モアブの避所となりて之をそこなふ者のまへより脱れしめよ 勅索者はうせ  
害ふものはたえ暴虐者は地より絶れん ひとつの位あはれみをもて堅くたち眞實をおこなふ者そのうへに坐せ  
ん 彼ダビデの幕屋にをりて審判をなし 公平をもとめて義をおこなふに速し

われらモアブの傲慢をきけりその高ぶること甚だし われらその誇とたがふりと忿怒とをきけりその大言  
はむなし この故にモアブはモアブの爲になきさけび民みな哭さけぶべし なんぢら必らず甚だしく心をいた  
めてキルハレセテの乾葡萄のためになげくべし 所はへシボンの畑とシブマのぶだうの樹とは凋みおとろへ  
たりその枝さきにはヤゼルにまでいたりて荒野にはびこりのびて海をわたりしが 國々のもろもろの主その美は

しき枝ををりたり この故にわれヤゼルの哭とひとしくシブマの葡萄の樹のためになかん へシボンよエレ  
アルよわが涙なんちをひたさん 所は閑曠なんちが果物なんちが收穫の實のうへにおちきたればなり 欣喜と  
たのしみとは土肥たる畑より取さられ 葡萄園には譁ふことなく 歡呼ばふことなく 酒樽にはふみて酒をしぼる  
ものなし 我そのよろこびたつる聲をやめしめたり このゆゑにわが心腸はモアブの故をもて琴のごとく鳴ひ  
びきキルハレスの故をもてわが衷もまた然り 莫アブは高處にいでて倦つかれその聖所にきたりて祈る  
べけれど驗あらじ

こはエホバが義にモアブに就てかたりたまへる聖言なり されど今エホバかたりて言たまはく 莫アブ  
の榮はその大なる群衆とともに 備人の期にひとしく三年のうちに恥かしめをうけ 遺れる者はなほだ少なくて



力なからん

第一七章

ダマスコにかゝはる重負の預言いはく

視よダマスコは邑のすがたをうしなひて荒墟となるべし アロエルの諸邑はすてられん

獸畜のむれそにすみてその伏やすめるをおびやかす者もなからん エフライムの城はすたりダマスコの政治はやみスリアの遺れる者はイスラエルの子輩のさかえのごとく消うせん 是は萬軍のエホバの聖言なり

その日ヤコブの榮はおとろへその肥たる肉はやせて あたかも收穫人の麥をかりあつめ腕をもて穂をか

りたる後のごとくレバイムの谷に穂をひろひたるあとの如くならん されど橄欖樹をうつとき二つ三の核を抄

にのこしあるひは四つ五をみのおほき樹の外面のえだに遺せるが如く採のこさるゝものあるべし 是イスラエ

ルの神エホバの聖言なり その日人おのれを造れるものを仰ぎのぞみイスラエルの聖者に目をとめん 斯て

おのれの手工なる祭壇をあふぎ望ます おのれ指のつくりたるアシラの像と日の像とに目をとめじ その日

かれが堅固なるまちは昔イスラエルの子輩をさけてすたりたる森のなか嶺のうへに今のこれる荒跡の

ごとく荒地となるべし 是汝おのがすくひの神をわすれ己がちからとなるべき器を心にとめざりしによる

このゆゑになんち美しくしき植物をうゑ異やうの枝をさし かつ植たる日に籬をまはし朝に芽をいださしむ

れども 患難の日といたましき憂の日ときたりて收穫の果はとびさらん

嗟おほくの民はなりどよめけり海のなりどよめく如くかれらも鳴動めけり もろもろの國はなりひびけり

大水のなりひびくが如くかれらも鳴響けり もろもろの國はおほくの水のなりひびくがごとく鳴響かんされ

ど神かれらを攻たまふべし かれら遠くのがれて風にふきさらるゝ山のうへの根柢のごとくまた旋風にふきさら

るゝ塵のごとくならん 視よゆふぐれに恐怖ありいまだ黎明にいたらずして彼等は亡たりこれ我儕をかすむ

る者のうくべき報われらを奪ふものひくべき罰なり

第一八章

嗟エテオピアの河の彼方なるさやさと羽音のきこゆる地 この地衆のふねを水にうかべ海路

より使者をつかはさんとてその使者にいへらく 疾走る使よなんぢら河々の流のわかるゝ國にゆけ

丈たかく肌なめらかなる始めより今にいたるまで懼るべく繩もてはかり人を踐にじる民にゆけ すべて世に

をるもの地にすむものよ山のうへに旗のたつとき汝等これを見ラツバの鳴響くときなんぢら之をきけ

■ 是はエホバわれに如此いひ給へりいはく 空はれわたり日てり收穫の熟むしてつゆけき雲のたるゝ間われ

わが居所にしづかに居てながめん 收穫のまへにその芽またく生その花ぶだうとなりて熟せんとするときかれ

録をもて憂をかり枝をきり去ん 斯てみな山のたけきとりと地の獸とになげあたへらるべし 猛鳥そのうへ

にて夏をすごし地のけものその上にて冬をわたらん 其のとき河々の流のわかるゝ國の丈たかく肌なめらか

なる始めより今にいたるまで懼るべく繩もてはかり人をふみにじる民より 萬軍のエホバにさゝぐる禮物をたづ

さへて 萬軍のエホバの聖名のところシオンの上にきたるべし

■ エジプトにかゝる重負のよげんいはく

■ 第一九章

エホバははやき雲にのりてエジプトに來りたまふ エジプトのもろもろの偶像はその前にふるひ

をのゝき エジプト人のこゝろはその衷にて消ゆかん 我エジプト人をたけび勇ましめてエジプト人を攻しめ

ん 斯てかれら各自その兄弟をせめおのおのその鄰をせめ 邑は邑をせめ國はくにを攻べし 埃ジプト人の靈魂

うせてその中ひなしくならん われその謀略をほろぼすべし かれらは偶像および呪文をとふるもの巫女魔術者

にもとむることを爲ん われエジプト人を苛酷なる主人の手にわたさん あらあらしき王かれらを治むべし 是

主萬軍のエホバの聖言なり

■ 海の水はつき河もまた涸てかわかん 又河々はくさき臭をはなち エジプトの境はみな漸次にへりて

かわき葦と蘆とかれはてん ナイルのほとりの草原ナイルの岸にほどちかき所すべてナイルの最寄にまきたる



者はことごとく枯てちりうせん 漁者もまた歎き すべてナイルに釣をたるゝ者はかなしみ 網を水のうへに施  
 ものはおとろふべし 練たる麻にて物つくるもの白布を織ものは恥あわて 二〇 其の柱はくだけ一切のやとはれ  
 たる者のこゝろ憂ひかなしまん 二一

誠やゾアンの諸侯は愚なりバロの最もかしこき議員のはかりことは棄絶べし 然ばなんぢら何でバロに  
 むかひて我はかしこきものの子われは古への王の子なりといふを得んや 二二 なんぢの智者いづくにありや 彼ら  
 もし萬軍のエホバの定めたまひしエジプトに係はることを曉得ばこれをなんぢに告るこそよけれ 二二  
 もろもろの諸侯は愚かなりノフの諸侯は惑ひたり かれらはエジプトのもろもろの支派の隅石なるに却てエジプ  
 トをあやまらせたり 二四 エホバ曲れる心をその中にまじへ給ひしにより 彼等はエジプトのすべて作とてを  
 らせ恰かも酔る人の吐きときによろめくが如くならしめたり 二五 エジプトにて或は首あるひは尾あるひは横綱の  
 えだまたは葦すべてその作とて工なかるべし 二六

その日エジプトは婦女のごとくならん 萬軍のエホバの動かしたまふ手の上のうごくが故におそれ  
 をのくべし 二七 ユダの地はエジプトに懼れらる 此事をかたりつぐれば聴くもの皆おそる 此れ萬軍のエホバ、  
 エジプトに對ひて定めたまへる謀略の故によるなり 二八

その日エジプトの地に五の邑あり カナンの方言をかたりまた萬軍のエホバに誓ひをたてん 其の中の一と  
 つは日邑ととなへらるべし 二九

その日エジプトの地の中にエホバをまつる一つの祭壇あり 其の境にエホバをまつる一柱あらん 三〇 此れ  
 エジプトの地にて萬軍のエホバの徴となり證となるなり かれら暴虐者の故によりてエホバに就求むべければエ  
 ホバは救ふもの護るものを遣してこれを助けたまはん 三一 エホバおのれをエジプトに知らせたまはん 其の日エジ  
 プト人はエホバをしり犠牲と祭物とをもて之につかへん 誓願をエホバにたてて成とぐべし 三二 エホバ、エジプト

を撃たまはん エホバこれを撃たしめたまふこの故にかれらエホバに歸らん エホバその懇求をいれて之を  
 いやし給はん 三三

その日エジプトよりアツスリヤにかよふ大路ありてアツスリヤ人はエジプトにきたり エジプト人はアツ  
 スリヤにゆき エジプト人とアツスリヤ人と相共につかふることをせん 三四

その日イスラエルはエジプトとアツスリヤとを共にし 三あひならび地のうへにて福祉をうくる者となる  
 べし 三五 萬軍のエホバこれを祝して言たまはく わが民なるエジプトわが手の工なるアツスリヤわが産業なるイ  
 スラエルは福ひなるかな 三六

第二〇章 アツスリヤのサルゴン王タルタンを遣してアシドドにゆかしむ 彼がアシドドを攻てとりし年に  
 あたり 三七 この時エホバ、アモツの子イザヤに托てかたりたまはく 往なんぢの腰よりあらたへの衣  
 をとき汝の足より履をぬげ 三九 に於てかれその如くなし 赤裸跣足にて歩めり 四〇 エホバ言給く わが僕イザヤは

三年の間はだかはだしにてあゆみ エジプトとエチオピアとの豫兆となり 奇しき標となりたり 四一 斯のごとくエ  
 ジプトの虜とエチオピアの俘囚とはアツスリヤの王にひきゆかれ 其の若きも老たるもみな赤裸跣足にて臂まで  
 もあらはしエジプトの恥をしめすべし 四二 かれらは其の恃とせるエチオピアその誇とせるエジプトのゆゑをもて  
 懼れはぢん 四三 其の日この濱邊の民いはん 視よわれらの恃とせる國われらが通れゆきて助をもとめアツスリヤ  
 王の手より救出されんとせし國すでに斯のごとし 我儕はいかにして脱かるゝを得んやと 四四

第二一章 うみへの荒野にかゝる重負のよげんいはく 四五

荒野よりおそるべき地より南のかたの暴風のふきすぐるが如くきたれり 四六 われ奇き黙示をしめ  
 されたり 欺騙者はあざむき荒すものはあらずべし エラムよ上れメデアよかこめ 我すでにすべての歎息をやめ  
 しめたり 四七 この故にわが腰は甚だしくいたみ 産にのぞめる婦人の如き苦しみ我にせまれり われ悶へ苦しみて







